

【完結】 走れないTS転生
ウマ娘は養護教諭として
ほんのり関わりたい

藤沢大典

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゲームしてるとちよくちよくお世話になる保健室。太り気味が治る保健室って何なんだろう……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：？ って考えたらなんかできた（小並感）

『メルテッドスノウ』……：：？ 彼女はウマ娘でありながら足に障害を持ち、生涯車椅子生活である。更に深く息を吸えないというハンデがあり、どうあってもレースに出ることなど叶わない。そんな彼女がトレセン学園に養護教諭として勤め、生徒たちと交流していくお話。あとなんか転生者らしい。

主人公、メルテッドスノウのイメージ画像をNovelAIにて生成。車椅子とか足に若干の歪みはありますがほぼイメージ通り。

■追記（2023/10/29）

壱丸二三様よりハロウィンイラストを頂きました。

X（Twitter）にて『#笛主寮の日常』というタグでオリ主イラストを投稿されておられ、そちらにメルテッドスノウも参加させて頂きました。

ミンナカワイイ。トテモカワイイ。約1名だけ異色。

どれがスノウちゃんかはBonus01のお話に答えがあるよ。

■追記（2023/11/20）

壱丸二三様よりイラストを頂きました。

窓際に佇んで外の様子を眺め、物憂げに微笑むスノウちゃんです。

Case01でネイチャさんが抱いた印象をイメージしてくれたようです。

目次

Season 1

Case 01 : ナイスネイチャと養護

教論 | 1

Case 02 : 養護教諭とナイスネイ

チャ | 26

Case 03 : 養護教諭とタマモクロ

スたち | 42

Case 04 : 養護教諭とハルウララ

| 60

Case 05 : 養護教諭とナリタブラ

イアンたち | 77

Case 06 : マンハッタンカフェと

養護教諭たち | 98

Case 07 : 養護教諭とアドマイヤ

ベガ | 111

Case 08 : 駿川たづなとシンポリ

ルドルフ | 128

Case 09 : 養護教諭とミホノブル

ボンたち | 143

Case 10 : 養護教諭とアグネスデ

ジタル | 163

Case EX1-1 : メルテッドスノ

ウ | 前編 | 180

Case EX1-2 : メルテッドスノ

ウ | 後編 | 195

Case 11 : 養護教諭とキタサンブ ラックたち	215	Case 16 : 養護教諭の感謝祭 (春)	
Case 12 : 養護教諭とゴールド シップ	233	Case 17 : 養護教諭のゴールド ウィーク — 前編	340
Case 13 : 養護教諭はほんのり関 わりたかった	251	Case 18 : 養護教諭のゴールド ウィーク — 後編	359
Case EX 2 : メルテッドスノウと とあるウマ娘	265	Case 19 : 養護教諭の夏合宿	
Season 2		376	
Case 14 : 養護教諭の初詣		Case 20 : 養護教諭の夏祭りと花 火	396
286		Case 21 : 養護教諭の職場の付き 合い	417
Case 15 : 養護教諭のバレンタ イン	301	Case 22 : 養護教諭の通常業務	

おまけ	Epilogue :	533		
	日	517		
	Case 26 : 養護教諭がいなくなる	493		
	Case 25 : 養護教諭のご破算			
	でもない紹介	486		
	Case EX3 : 登場していない人物			
	後編	469		
	Case 24 : 養護教諭の感謝祭 (秋)			
	前編	453		
	Case 23 : 養護教諭の感謝祭 (秋)	437		
	Bonus 03 : 保健医のクリスマス	575		
	娘たち	555		
	Bonus 02 : 保健医と普通のウマ			
	Bonus 01 : 保健医のハロウィン	539		

Season 1

Case 01 : ナイスネイチャと養護教諭

「ナイスネイチャさん、ちよつといいかしら？」

終業を告げるチャイムの後、チームメンバーたちが待つカフェテリアへ向かうため教室を出ようとしたあたしを呼び止めたのは、先程まで授業をしていていた国語教師だった。

「職員向けの資料を配って回ってるんだけど、ちよつと手が足らなくて。チーム所属の子には担当トレーナーへ配るのを手伝ってもらってるの。申し訳ないんだけどこれ、南坂トレーナーに渡しておいてもらえないかしら」

そういつてホチキス止めされた紙束を差し出される。

紙束には表紙に「トレ 南坂」と書かれた付箋紙が付いている。

「そんなに急ぎの件でもないから今日トレーニングする時に渡してもらえれば大丈夫だから。お願いできる？」

「分かりました、南坂トレーナーに渡しておきます」

「ありがとう、助かるわ。お願いね」

まあそれくらいなら、と引き受ける。

この後、他の職員にも配って回るのだろう。あたしが紙束を受け取ったのを確認すると国語教師は足早に退室していった。

あたし、ナイスネイチャはここ府中にある『日本ウマ娘トレーニングセンター学園』、通称『トレセン学園』に通うウマ娘だ。

『Eclipse first, the rest nowhere.』というスクール motto を掲げ、文武両道でありながらも個性を尊重する自由な校風、潤沢なトレーニング設備というこれ以上無い環境が整った学園だ。

あたしたちウマ娘はここで、トウインクル・シリーズを走りウイニング・ライブで歌うため、勉強に鍛錬にと忙しい毎日を送っている。

今日も今日とて午前の座学が終わり、午後のトレーニングに備えてお昼ご飯を……と
思った矢先の今のやり取りであった。

にしても、このご時世に紙の資料ね……SNSのグループとか使えば早いのに。とも
思うけど、職員全員がスマホ慣れしているわけでもないし仕方ないのかな。

何はともあれ、まずは腹拵えといきましょうか。

わざわざ席まで戻って鞆に紙束を仕舞うのが何となく億劫で、あたしは紙束を持ったまま待ち合わせのカフェテリアへ向かうのだった。

「ずぞぞーっ……。ふえ、ふおえいっはいなんおひおーあんえふ？」

「お行儀悪いから口に物を入れながら喋らない」

ラーメンを口いっぱいほおばりながら質問してくるマチカネタンホイザに苦言を呈す。

ちゃんと口の中のを飲み込んでから喋りなさい全く。

多分「で、それいったい何の資料なんです？」って言ったんだと思う。

「表紙に会議資料ってあるからそうなんじゃない？ 中身は別に見てないから分かんないけど」

「んぐむぐ……んくつ。ねえねえネイチャ、それ2つあるよ？」

オムライスを食べ終わったツインターボが言う。

ちゃんと飲み込んでから喋り出したのは偉いぞターボ。

だけど口の周りがケチャップで真っ赤だぞターボ。

同じことを感じたのか、隣に座っていたイクノデイクタスがティッシュでターボの口を拭う。

「2つ？」

「うん。なんかくつついてる」

よくよく見ると、確かに紙束の厚み、ちようど真ん中辺りの隙間が大きい。その隙間に爪を入れて開いてみると、ペリツとした感触と共に紙束は2つに別れた。

「どうやら中で折れた付箋紙が両面テープのように2つを貼り合わせてしまっていたみたいですね」

イクノは眼鏡を直しながらそう言った。

なるほど、確かに中から折れ曲がった付箋紙が出てきた。

先程トレーナーの名前が書いてあったものと同じものだろう。

ということとは、あたしはトレーナーの分の資料の他にもう一人分渡されてしまっていたらしい。

一体誰のなんだろうと、付箋紙を広げて中を確認する。そこに書かれていたのは

『養護 スノウ』
の文字。

そういえば月初めの朝礼で養護教諭の新任の挨拶をしていたのを思い出した。
トレセン学園チの保健室に常勤の先生が入ることになったのだ。

まあ、あたしたちからしてみれば養護教諭がいてくれるというのはありがたい。

一応トレーナーも応急処置の心得はあるみたいだが、何でもかんでもトレーナー任せでは負担も大きいだろうし。

その人はウマ娘で、車椅子に乗っていたのを覚えている。

着任前に怪我でもしたのかと思ったが、どうやらそれが普段の姿らしいことを言っていた気がする。

「あちゃー……。これは流石にあたしが持つてつてあげた方がいいやつだ」

今から国語教師を探して返すのは二度手間が過ぎる。

配り終わってひと段落、と思ったところにあたしからこれを返されたら向こうもテンションが下がるだろう。お互いにデメリツトしかない。

ここはちゃんと確認していなかったあたしも悪かったし、こちらで届けてしまうのが最善だろう。

急を要するとは言ってなかったし、こちらの予定が終わってから行けば問題ないはずだ。

「どうするの？ 今から持つてくの？」

「ん〜……。急ぎじゃないって言ってたし、トレーニングの後でいいかな」

ターボの問いに答えつつ、とりあえずは目の前の日替わりランチを胃の中に納めてしまふことにした。しっかり食べないと動けなくなっちゃうからね。

その日のトレーニングを終え、着替えたあたしはメンバーに保健室に寄っていくこと

を伝え、一人校舎に戻った。

陽は落ち、空は茜色から暝色に移り変わろうとしており、西の空に漂う雲だけが未だその燃えるような朱に染まっている。

照明が灯り始めたグラウンドからはまだ練習している子がいるのだろう、時おり掛け声やホイッスルの音が聞こえてくる。

先程まで自分も走っていたグラウンドだ。

今日のトレーニンングを思い返す。

三人とも着実にトレーナーの指導の元で実力を上げている。

ターボは未だにすぐへばって逆噴射しちゃうし、タンホイザは周りに気を取られやすい。イクノも考えすぎて二の足を踏むところが見受けられるが、南坂トレーナーはああ見えてしっかりあたしたちのことを見てくれている。各々の癖を理解した上でカリキュラムを組んで、万全の状態でレースに臨めるようにしてくれるに違いない。

そんな3人を見てみると、同じチームとして誇らしくも嬉しい気持ちと共に、心の隅から小さいながらも確実に湧き上がる暗い感情があった。

あたしはどうだろう。ちゃんと力を付けていけているのだろうか。

菊花賞に出るため重ねて出走したレースはG Iでは無かったとは言え、連勝することが出来た。しかし、その後の戦績は芳しくない。

掲示板には入るものの、勝ち切れない。

スポーツ誌によつては、あたしのピークはそこだったとすら書くようなものもあった。そんなことはない。あたしのはあたしが一番分かつてる。横から出てきて勝手に面白半分にあたしの限界を決めつけないで欲しい。

爪が食い込むほど拳を固く握りしめ、必死にトレーニングを重ねた。

朝も夜も疲れ果てるほど自主練を行ったり、吐きそうになりながらもご飯を胃に詰め込んだりした時もあった。身体を休めている間もレース理論を学んだりイメージトレーニングを積んだりもした。

そうでもしないと、あたしを笑顔で学園に送り出してくれた両親に、あたしを勝たせる為に腐心してくれている南坂トレーナーに、いつも笑顔で応援してくれる商店街の皆に申し訳が立たなかった。

何より、そうしていないと誰かに決めつけられた限界の通りになってしまおうとするあたしに、あたし自身が許せなくなってしまうそうだった。

あたしは頑張った。必死に努力したと言って良いだろう。

努力は裏切らない。

が、努力が必ず結果に結び付くとは限らない。

スタートはしくじらなかつた。

位置取りも悪くなかった。

スタミナは十分に残っていた。

スパートをかける位置もイメージ通りに出来た。

その時のあたしに出来る最高の走りだった。

それでも、先頭を駆ける相手には届かなかった。

満面の笑みで観客に大きく両手を降ってアピールする1位の子を見たとき

『ああ、あたしの居場所はあるところじゃないんだな』

って思いが質量を持つてあたしの心の奥底にズシンと落ちてめり込んだ。

それでも応援してくれた皆に応えなきやと、笑って小さく手を振ったが、果たして

ちやんと笑えていたかどうかは今でもよく分からない。

あたしが求めたキラキラは、決して自分の手に届くことはない。

けどタンホイザもターボもイクノもあたしとは違う。

なんであの3人はあんなにキラキラしてるの？

どうしてあたしはきらきらできないの？

あたしだけ、あたしだけ、アタシダケ……

……つといけないいけない！

油断するとダークネイチャさんになってしまう。

あたしはあたし。ナイスネイチャはチームのお姉さんとしてしつかりしなくては。などと考えながら歩いていたら保健室の前まで辿り着いていた。

というかちよつと遅くなってしまった気がする。まだいるかなと思ったが、部屋の灯りがドア窓から漏れるのが見えたので一安心。

もう今日はさっさとこのお使いを済ませて、ご飯食べたらいつともみたいに自主トレしよう。

頭空っぽにして体動かして汗かいて、嫌なあたしは忘れてしまおう。

そうしてまた明日からいつものあたしに戻らなくちゃ。

コンコン

ドアをノックする。

「どうぞ」

部屋から小さな声が返ってくる。

「失礼します」

ドアを開けると、部屋のやや奥に置かれた机で車椅子に座りながらマグカップを手にする女の人がいた。

こちらを向いたその頭部には私たちと同じウマ耳が揺れており、右耳には若草色のシユシユを付けている。

さらりと流れるストレートセミロングは前髪のひと房が白く、それ以外は全体的に濃紺色だが、後ろ髪は毛先付近で色が抜け、澄んだ灰色へとグラデーションがかっている。

こちらを覗く瞳はアクアマリンのように透明感のある水色。

身体の線は細く、ぴったりと身の丈にあった白衣の下にはベージュのワイシャツを纏っているのが見える。

背丈は座った状態のため細かいところまでは分からないが、かなり小さい気がする。中等部の学生だと言われても違和感なく信じてしまいそうだ。

儂い。

その人を見たとき、私が抱いた第一印象だった。

触れるどころか、自分が動いて出来た空気の流れですら崩れてしまいそうな印象。

まるで夜明けの空から薄れ消えゆく星々の光のような、

あるいは踏めばさくりと音を立てて崩れてしまう霜柱のような……

「どうか、した？」

その声にはつととなる。

あたしとしたことが見惚れて我を失っていた。

「絆創膏が、欲しいなら、その引き出しに。名前と個数を、その紙に書いて、ね」

あまりに私の反応が無かったことに、備品を貰いに来たが見当たらず戸惑っている

でも思われたのだろう。彼女は私の近くにあった棚と、その傍にバインダー付きで吊るされている記入用紙を指さしてそう言った。

「あ、いえ。国語の○○先生から頼まれて、これ渡しに来ました」

そう言いながらあたしは彼女のもとに近づき、手に持った紙束を彼女に差し出した。

「ん、ありがと、ナイスネイチャ、さん」

受け取りながら礼を述べる彼女。

いきなり自身の名前を呼ばれ、思わず身体がビクツとなつてしまった。

あれ、あたしこの人と初対面のはず……なんで知ってるの？

「……一応、○○の生徒は、一通り覚えた。

初めまして。養護教諭の、メルテツドスノウ。

今後、よろしく、ね」

まるで心が読まれたかのようにあたしの疑問に答えが返ってきた。

そんなに分かりやすい反応だったかな、だったかも。

とうか一通り……ウチの学園生が何人いると思ってるのこの人!?

「ごめんね、喋るの、上手くなくて。聞きにくくて、ごめんね」

小さな声で辿々しく彼女は謝罪を述べた。

「あいえ、全然そんなことないです！ あたしこそすみません、ちよつと吃驚しちゃつ

て。まさかあたしなんかのを知ってるとは思わなくて」

あたしは慌てて両手を振りつつ相手に非がないことを告げる。

彼女はすつと窓の方を見ながら言った。

「……ね、グラウンド、よく見える。あなたは、いつも遅くまで、走ってるから、特に、覚えてた」

あたしも窓を見やると、確かにグラウンドの様子が見て取れる。

ここに来る最中に聞こえた声の主だろう、遠目ながらジャージ姿で走るウマ娘の姿が分かった。

おおう、あたしいつもこんな感じで見られてたのか。

「あはは、それはお見苦しい所を……」

「青春、だね」

口元にほんのりと笑みを浮かべながらそんなことを言う。

「いや〜……いやあ、そんなんじゃないと言いますか……」

「……？」

浮かべた愛想笑いに陰が射したのが自分でも分かった。

さつきまで考えてたことがフラツシユバツクする。

「……あたし、そんな強くないんで、人より多く練習しないといけないんで」

普段ならそれこそ息をするように自然に張れる予防線も、先程の考えがこびり付いている今ではきこちなさが現れる。仕方ないと割り切ったような笑顔を、いつものように出来た自信は無い。

だから、

「……悩み事、みたいね。よかつたら、聞かせてくれる?」

ほら、こんなことを言わせてしまう。

きつとこの先生もいい人なんだと思う。だからこそそんな人にこんなセリフを言わせてしまった自分が情けなくて、そんなあたしに氣遣ってくれるのが申し訳なくてこの話を切り上げようとした。

「あいや、あんまり人に話すようなものじゃないですし、単なる愚痴といってしまえばそうですね。」

「構わない。メンタルケアも、わたしの仕事。愚痴、大いに歓迎」

「や、でも」

「溜め込むより、出したほうが、いい。解決は、してあげられない、かもだけど」

「あー……」

「ね?」

「……」

な、なんか思ったよりグイグイ来るぞこの先生!?! 第一印象の僂さはどこに行ったか、ウマ耳をぴこぴここと忙しなく動かし、身体も若干前のめりだ。

「コーヒー、紅茶、ココア、緑茶、どれがいい?」

「え、と……じゃあ、紅茶で」

「ん。砂糖は?」

「あ、じゃあアリで」

「ん。じゃここ、座って待ってて」

彼女の隣に用意されていた丸椅子を示され、あたしは素直に座った。

もうここまで来たらなるようになれだ。

彼女もちょうど先程までの飲み物が無くなったのだろう。先程まで使っていたマグカップと、机の引き出し上段から新しいカップを1つ取り出し、机に並べる。

引き出しの中段を開けると、そこにはティーバッグやコーヒー、ココアの缶などが見えた。そこから紅茶のパックとスティックシュガー、プラスチックのマドラーを2つずつ取り出した。

カップにティーバッグを入れ、自分に背を向けたと思ったたら自分と反対側の机の横、先程まではこの人の陰になって見えなかったがそこには立派なウォーターサーバーが鎮座していた。

サーバーからお湯を注ぎ、しばらく待っている間に彼女は引き出しの下段を開ける。今度は色々なお菓子が詰まっております、そこから小分けされたチョコ菓子を取り出して私の近くにおいた。

「……あまりに流麗な動作に唖然としたが、この人ちよつと机に私物入れ過ぎなんじゃない？」

あれほとんどどこいった第一印象!? もしかして、かなり面白い人なんじゃないかこの人。

「どうぞ。熱いから、気をつけて」

「あ、ども」

いつの間にかパックを取り出し、砂糖を入れてかき混ぜ終わるまで済ませたカップが私の前に差し出される。受け取ったカップからはゆらゆらと湯気が立ち上り、琥珀色の液体が満たされている。

ふうふうと、火傷しないように息を吹き込み、紅茶を一口啜る。あつたかい。ほう、と息が漏れる。するとそれに続くようにあたしの口から言葉がポロポロと溢れてきた。

「……あたし、ここのところレースで勝ってないんです」

ああ。

「去年の菊花賞前まで連勝してたのはただ単に運がよかつただけなんじゃないかってく

らしいに」

ああ、もう、駄目だ。もう止まらない。

「あたし、そんな強くないんです。むしろ弱いくらい。選抜レースのときも良くして3着でしたし」

一度口を開いてしまえば、堰を切ったようにとまでは言わないが、底に穴の空いたビール袋のように言葉が漏れ続ける。

「けど、そんなあたしなんかにも目を掛けてくれたトレーナーや一緒に走るチームメンバーがいて、みんな優しく、あったかくて、嬉しくて、もうこれはレースに勝つてみんなに返さなきゃと思って、より一層トレーニングに励んだし、自主トレも思いつく限り色々やっただけです」

「それでも、やっぱり勝てなくて。全然まともな成績残せてなくて、このままじゃ折角拾ってくれたトレーナーにも申し訳なくて、どんどん力をつけてつてるチームメンバーにも置いてかれるような気がして、応援してくれる商店街の人たちにも……だから今よりもっともつと頑張らなきゃって思うんですけど、どう頑張ったらいいんだろかな、って……」

流れに任せて言葉を出し切ると、先程不穏な考えをしていた時に感じた質量がじわじわとその存在感を増してくる。これはきつと言葉で表そうとするとすごく簡単な単語

になつてしまう感情。すなわち、不安と、そして絶望。

「なるほど」

「……」

彼女は自分のマグカップに手をかけ、一口、二口と紅茶を飲む。

5秒、6秒、と沈黙の時間が続く。沈黙されるのが一番辛い。

そもそも、トレーナーでも無い人に話すような内容じゃ無かつたかも知れない。

かといつてトレーナーにもあたしは話せなかつたとは思う。

やつぱりこんなこと、誰にも打ち明けるべきじゃなかつたんだ。

『やつぱりいいです。今言ったことは忘れてください』

そういう言葉が自分の口から出ようとしたその時。

「じゃあ、頑張らなくて、いいんじゃないかな」

「……え」

「十分、頑張つてるのに、それ以上は、よくない」

「……え、この人は今何て言ったの？」

「頑張らなくて、いいと言つたの？」

「……いや、いやいやいや。そんなわけがない。」

「頑張つて頑張つて、勝てなかつたんだから、勝てるようになるまで頑張るしか……」

「けど……けど……これだけ頑張っても駄目だったのに、あたしみたいな平凡ウマ娘が勝つためには、これ以上頑張る以外に、分かんなくて……！」

両手にカップを持ったまま、俯いてしまう。

カップの中にはあたしの泣きそうな、怒りだしそうな情けない顔が映っていた。なんて顔をしてるんだ今のあたし。手の震えにカップの中のあたしの顔が波立つ。

「そうだね。頑張って、勝てないのは、つらいね」

「……はい」

そう、辛い。

力を出し尽くしたあたしがそれでも勝てなかったときは、悔しくて、悲しくて、辛い。外面では、残念だったけどまあこんなもんかとおどけて見せるが、心の内ではいつも叫んでいた。

ふざけるな、納得できるわけがない、こんな結果で胸を張れるわけがない。

そんな未だに顔をあげることが出来ないあたしに、彼女は聞いてきた。

「ナイスネイチャ、さんは、勝ちたい？」

「そりゃ、一応あたしもウマ娘なわけですし……」

レースに出ている以上、勝ちを目指すのは必定だ。

いくら平凡で平均的なウマ娘だからって、負ける前提で走ったりなんかしない。

「どうして、勝ちたい?」

「どうして、って……」

「賞金が、ほしい? ちやほやされたい? 強いって、認めさせたい? 誰かのため?」

「自分のため?」

矢継ぎ早に問われ、あたしは茫然とする。

……あたしは、どうして勝ちたいんだろう?

思えば勝ちたい理由までちゃんと考えたことはなかった。

もしかして、それが無いから勝てないってこと?

立派な理由がなければ勝つことが出来ないってことなの?

「勘違い、しないで欲しい。それが悪い、ということじゃ、ない。ちゃんと、向き合って、欲しい。目的を、見失わないで、欲しい」

「ナイスネイチャ、さん。どうして、勝ちたい?」

「あたしは……」

何故、勝ちを求めらるんだろう?

商店街のみんなのため? もちろんそれもあるが、それが目的じゃない。

チームのみんなのため? もちろんそれもあるが、それが本音じゃない。

あたしは、何で勝ちたい? あたしは、何に勝ちたい?

その時、あたしの脳内に広がったのは去年の菊花賞、その最終直線の風景。あたしの全身全霊を絞り尽くして、絞りカスすら固めて燃やして灰になるまで走った。あたしが抜こうとしていたのは2バ身ほど前を走っていたウマ娘ではなく、そこに出走していなかったはずの、体軀に似合わない剛脚で他者を圧倒する帝王の背中だった。

そうだ、あたしは……

「……あたしは、テイオーに……トウカイテイオーに、勝ちたいです」

「なぜ、トウカイ、テイオーさんに、勝ちたい？」

「それがあたしの、夢だから」

「もう一声。どうして、トウカイ、テイオーさんに、勝つのが、夢？」

「それは……」

あたしが追いかけたテイオーの背中。

テイオーはこちらを見向きもせず、ただひたすらに先を見つめて走っている。

先の見えない、漠然とした光を目指して、突き進んでいく。

ああ、あたしはそんなテイオーの姿に……

「……彼女は、あたしの憧れなんです。その彼女に勝って、彼女を超える。そしたら、少しはあたしも彼女みたいにキラキラできるんじゃないか、って思うから」

顔を上げると、まっすぐこちらを見つめる先生の顔があった。

彼女の瞳にあたしの顔が映るのが分かるくらいに。

アクアマリンの中にいるあたしは、先程までとは違う表情をしていた。

「……って、キラキラが何かって言われるとあたしも上手く言えないんですけどね」

気恥ずかしくなって、肩を竦めつつ、ついそんな風に言ってしまう。

悪い癖だとは思いつつも長年染み付いたそれは簡単に抜けてくれそうにはなかった。

「大丈夫、あなたの、想い、伝わった」

先生は笑うことなく、こちらを見つめてそう言う。あまりにも真っ直ぐな目でそんなことを言うものだから、あたしの頬に段々熱が籠もっていくのは仕方ないことだった。

「わたしが、ナイスネイチャ、さんは、頑張ってる。って言っても、簡単に、納得は、できないと、思う」

「……」

まあ、申し訳ないが、そうだ。昔からあたしに染み付いて、もはや宿業とも呼べるレベルのこの性格は、真っ直ぐすぎる言葉を鵜呑みにできるような造りにはなっていない。

「大事なものは、あなたが、あなたに、頑張ってる、偉いって、言っておける、こと」

「あなたが、あなたを、認めてあげる、こと」

それは……また難問ですなあ。

「簡単な、ことじゃ、ないとは思う。だから、まずはあなたを、良く知ってる、人たちの、言葉に、耳を、傾けてあげて」

「あなたは、身近な人から、『もつと頑張れ』、なんて、言われた覚え、ある?」
「……………え……………」

『ネイチヤ、この間より強くなってる! ターボも負けてらんない!』

『んゝふふ、流石ですなあゝ♪ ジャンジャンバリバリ、ジャンバリネイチヤですなあゝ♪』

『ネイチヤさんのレースに対する真摯な態度、私も見習わなければいけませんね』

『相変わらずですね……………けど無理は禁物ですよ?』

『お、ネイチヤん! ちゃんと美味しい物食ってるか? これ持つてけ!』

『この間は惜しかったねえ。でも大丈夫、こちらはネイチヤんのことこれから応援してるよー!』

『ナイスネイチヤ』

『ネイチヤ!』

『ネイチヤん』

思い返した記憶。チームのみんなや商店街のみんなの姿の中に、そういった言動は見つからなかった。

「ない……かも……」

「自分を、信じるのは、難しい。けど、自分を信じる、周りの人を、信じてあげて」

カップを机に置いたあたしの右手を、先生は両手で包み込んだ。紅茶とはまた違った熱が、あたしの手をじんわりと伝わってくる。

「みんな、ナイスネイチャ、さんのこと、見てる。確かに、努力が、実を結ぶ、とは限らない。けど、あなたの、努力は、間違いなく、あなたを、輝かせてる。あなたの、生き様に、確実な、一步を、刻んでる」

微笑むその姿に感じたのは、第一印象で抱いたあの儂さ。しかしそこに寂しさや物悲しさはなく、柔らかな陽光のような暖かさがあった。

「そう、なのかな」

「そう、なのです」

ゆっくり頷く彼女。

「……そっか……そっか。うん、何かちよつとスッキリしたかも。ありがとうごさいます、メルテッドスノウ先生」

そう答えると、彼女はあたしから手を離す。

しばらく握られていた右手は、手を離されてもまだぼかぼかと暖かい。

「長いから、スノウ、でいいよ」

「じゃあ、スノウ先生。ありがとうございます」

「わたしは、あなたと、お喋りした、だけ。こちらこそ、話してくれて、ありがとうですか。それでも、ありがとうございます」

そう伝えると、先生はふいとあたしから目線を外した。

ちよつと耳が忙しくピコピコしている。

照れてるのかな。この先生可愛いかも。

「……わたしは、ただの養護教諭。トレーナーじゃ、ない。勝てるように、することは、できない。わたしが、出来るのは、ほんのちよつと、顔を上げる、手伝い、くらい。そこから、前を見るのも、進むのも、あなた次第。また、俯くことが、あつたら、いつでも、来て」

そう言つてやや冷めた紅茶をくいつと飲む。

「というか、正直、割と暇、だから、何も、無くても、ダベりに、来てくれると、嬉しい」
「ぶふつ、何ですかそれ。入ったばかりなのに暇つて」

不思議な先生だ。初対面だったのに、いきなり悩み相談までしてしまった。

別にテイオーに勝てるようになったわけでも、必勝法を授かったわけでもない。

なのに、あたしの心に巢食ってたあの質量は、今は大分軽くなっていた。

メルテッドスノウ……『雪解け』、ね。

なんてこの先生にびったりな名前なんだろうと思った。

「えつと……スノウ先生」

「ん」

「また、来ます。今度はチームの皆と」

「ん。大歓迎」

「それじゃ、失礼しました」

ドアを閉めて、その場に留まり考える。

よし、今日の自主トレはお休みしよう。ご飯を食べてお風呂に入ったら、さっさと布団に入ってしまうおう。難しいことは考えないでちゃんと休んで、また明日から心機一転頑張ろう。

胸元で小さくガッツポーズをとり、さて寮に戻ろうと歩みだしたその時。

「……ふう、しゃべり、すぎた」

ドアの向こうからそんな可愛らしいセリフが聞こえてきてしまつて、あたしはまたちよつと笑ってしまった。

Case 02 : 養護教諭とナイスネイチャ

はいっどーもーもーもーもー!!

おはようございますこんにちはあるいはこんばんは。

わたくし、ウマ娘のメルテッドスノウと申します。

ええ、お察しの通りです。

わたくし、俗にいう『転生者』ってやつです。しかも前世は男ときたまもんだ。TSです
すね拗ります。

前世については割かしテンプレな感じなので割愛しましょう。死んで記憶持ったま
ま生まれ変わった。それだけで十分です。

とはいっても、前世の記憶思い出したの結構経ってからなんですよね。今世の中学時
代にちよつと死にかけまして、その時のシヨックで思い出したんですわ。

具体的に何があつたかはおいおい語っていくとしましょう。エピソードゼロ的なと
こです。

そして、転生といえばお約束、チート能力です!

どうやら自分も貰つてたみたいなんですよね、ギフト。いやあ神様ありがとうござい

ます！

子供の頃にちよつと使ったことがあるみたいですが、記憶の覚醒と共に能力の詳細も理解した感じですね。

え、どういう能力か、ですか？

まあそれもおいおい説明していきましょう。少なくともレースで無双できるような類ではありませんので。

というか今まで生きてきた過程でなんかやかんやあつて、わたくし、走れません！

下半身麻痺つてやつですね。生涯車椅子生活です！

それに加えて死にかけて時の後遺症でしょうか、なんかうまく呼吸できないんですねこの身体。ちよつと深めに息を吸うと肺に痛みが走りやがります。おかげで喋りづらいつたらありやしない。

とまあ、足も心肺も障害だらけでレースどころか日常生活すら難易度高めですが、別に絶望とかそういうのはないです。生きてるだけで丸儲けです。

ウマ娘なのに走れないのか、とかも特に思っていないですよ。もともとそんなにスポーツ好きでもないです。どうなつてんだマイウマソウル。仕事してんのかマイウマソウル。いや走れないから仕事しないでくれていいんですけども。

で、そんな走ることはおろかまともに歩くことすら出来ないようなわたくしですが、

今はトレセン学園の養護教諭なんてやらせてもらっております。いやあ、アプリで遊んでる時から気にはなってたんですよね、保健室はあるのに保健の先生って出てこないあ、と。

安心沢さん？ いやあの人はただの不法侵入者ですしおすし。

まあそんな感じで走らなくていいのにアニメやゲームで見たウマ娘ちゃん様達と絡めるという人生勝ち組な感じでございますともええ。

けどTS転生で走れないチート持ちウマ娘の養護教諭とかちよーつと属性盛り過ぎじゃないですかねえ……

さて、脳内テンアゲパーティーピーポーなわたくしですが、外ヅラはそういうわけにはいきません。

相手の話も聞かずに早口で自分の好きなものしか語らないフオカヌポウなコミュニケーション能力は前世でも今世でも、限りなく黒に近いベンタブラックです。

(※ただしデジたんは除く。かわいいは正義。)

原作はアニメ二期までとアプリくらいしか手を出しておらず、原作の原作、競走馬にはさっぱり興味は湧かなかったが、こちとら元々生粋のアニオタ。次元の向こう側にはたウマ娘ちゃん様たちと触れ合えるというオタ渴望ものの現状に狂喜乱舞しないわけには参りませんが、そこを堪えに堪えて、抑えに抑えて、キモがられないように、嫌わ

れないようにと言葉を厳選して、表情も油断するとニチャアするのでポーカーフェイスを心がけて。

というわけで見た目は無表情無口系、中身はテンションやや掛かり気味のキモオタというわたくしが出来上がりしましたとき。めでたしめでたし。

……ふう、オタ歴が長いと説明妄想も捗りますね。

え、誰に説明してるのかって？

自分を見ている第三者様がたに決まってるだろ!?

転生なんぞというフィクションにすでに遭遇してしまってるのですし、どこかの誰かがワタクシの脳内を覗いているとしてもなんら不思議ではないでしょう。

きさま！ 見ているなっ!?

……というわけでいつかは言ってみたいセリフ上位のコイツをつぶやいたところで帰ってきましょうか現実へ。

就任してから約一か月、元々誰もいなかったのも特になかったのだったのにこれといった引き継ぎも無く、じゃあ自分がやりやすいように好き勝手にいじってしまおうと配置換えや備品整備しまくって少しだけ慌ただしかった日々がようやくやくひと段落を見せました。

なんせ車椅子が必要なこの身体、結構ガチ目のバリアフリー仕様にしておかないと移

動もままなりません。一応最新の電動式ではありますが、狭さと段差には弱いですからねえ。

備品も最低限の消毒液とか絆創膏、包帯はあったけどそれ以外なんもないし。

よくこんなんでも今まで問題起きなかつたなと思つて理事長秘書のたづなさんに聞いてみたら、基本的に必要なものはトレーナーが個別購入とかしてららしい。保健室あるんだから活用してやれよ学園。トレーナーの業務増やしてやるなよ。

……いや、というか担当の子の怪我を含む健康管理もトレーナー業務の内なのか。そりゃ活用する必要無いわな保健室……あれ、着任と同時に解雇の可能性出てきた？

まあそこは折角就任したわけですし、何かもつと良い方法を模索していきましよう。

幸いにもトレーナーの手に負えないような怪我を負う子は今のところいないので、ここ保健室は専ら生徒たちの絆創膏保管庫扱い程度です。

つまりは暇なのでございます。

今は午後のトレーニング時間も終わり夜が更けようとしている頃。今後の効率的な保健室の運用計画なんかを考えながらメモ書きを走らせつつ、コーヒーを淹れて一息つけていた時でした。

コンコン

部屋をノックする音。

おや珍しい。だいたいここに来る子たちはノック無しで入ってきて、自分がいることに驚きます。

今まで人がいなかったこの部屋に生徒以外の誰かがいるんだからまあ仕方ない。

けど着任の挨拶は朝礼でやったんだけどなあ……意外とみんなちゃんと聞いてないもんだな。

分かる。自分もそーだった。

「どうぞで」

「失礼します」

カラカラと引き戸を開けて入ってきたのは赤茶色の髪をふわっとしたツインテールにし、赤と緑の耳カバーをつけた学生、ナイスネイチャです。

……おお、生ネイチャ！ マジネイチャ!!

チームカノープスの姉orおかんの存在、かつ地元商店街イチのアイドルウマ娘。

競走馬に詳しくない自分でも聞こえるくらいに、なんかの寄付でウン千万集まったエピソードで有名でした。

うむ、可愛い。なんかこつち見て固まっちゃってるけど。

どうしたのかな？ なんか自分の顔、変なの付いてる？ さつきおやつにつまんだ芋

けんぴでも髪に付いてたかしら？

「どうか、した？」

うっかり思いのままに口にしてしまった場合、ベラベラといらんことまで言いそうなので気をつけながらネイチャに声をかけます。

うーん、今の保健室に来る用事なんて具合悪くて休みに来たか備品を貰いに来たかのどっちかくらいだろうし、見る限りナイスネイチャの調子が悪そうには見えないから多分後者かな。マチカネタンホイザちゃんがまた鼻血でも出しちゃったかしら。もしくはツイインターボちゃんが転んでひざ擦りむいたとか。うーんどっちもありそう。

「絆創膏が、欲しいなら、その引き出しに。名前と個数を、その紙に書いて、ね」

物品の動きはちゃんとログ残しとかなないと後で学園に追加申請するときめんどいからね。下手すりや盗難すら疑われたりもしますんでそこんところはキツチリやりますよ。

「あ、いえ。国語の○○先生から頼まれて、これ渡しに来ました」

そういつてナイスネイチャが差し出したのは一冊の紙束。表紙には会議資料と書かれてるし、まあ直近の会議の何かしらでしょう。

てかSNSとかでデータで送ればいいのに。

「ん、ありがと、ナイスネイチャ、さん」

耳をピンと立て、驚きに目を見開くナイスネイチャ。

……あ、やべ。そら初対面なのに名前知られてたら驚くに決まってるわ。

ど、どうしよう。言い訳考えなきゃ。『アニメで見ました』なんて言えんし言ったら確実に変人扱いだ。

「……一応、ここの生徒は、一通り覚えた。」

初めまして。今月から、ここで、お世話になる、養護教諭の、メルテッドスノウ。

今後、よろしく、ね」

実際には全員とか無理だけど、ここはハツタリかましておくことにしました。

わたくしが知ってるのはせいぜい主要キャラ、あとはゲームでレースに出てくるモブ嬢を少しくらいである。辻褄合わせるために後で本当に覚えておこう、出来るだけ。

にしても、この学園来てから人と会話する機会増えたなわたくし。今までは独り身だし勉強もだいたいオンラインで済ませてたからあんまり会話してなかったんだけど。己の喋りの拙さが際立つ際立つ。まあおかげでボロは出しづらくなってからプラマイゼロってところかしら。

「ごめんね、肺が弱くて、あまり喋るの、上手くなくて。聞きにくくて、ごめんね」

一言断りは入れておこう。実際無駄に句読点多いのは自覚してるし。

なんか両手をパタパタさせてあわあわしながら謝ってくる。可愛い。

ついでにここの窓からグラウンド見てたから知ってたとしても言い訳を補足しとこう。

見てたのは事実だし。

トレーナーは勿論、ここの職員はみんなウマ娘の為になるべく働いている。自分の出来る仕事で、精一杯サポートすることを誇りとしているプロフェッショナル達でございます。

当然わたくしもその一員となつたわけで、滅私奉公することになんの異存もございません。いつ緊急事態が起きても即応できるよう、グラウンドの照明が落ちるまでこの部屋で待機している次第です。

なのでこの部屋からグラウンドを走るウマ娘を眺めるのは仕事の内と言える。夢のような仕事だなこりゃ。

ネイチャさんはここ最近は何日と言つていくらい見かけていた。

結構鬼気迫る表情で延々と走り込んでたのを覚えている。

アニメでも確か1着にはなれてない子だった気がする。

まあ、だから勝つたために一生懸命なんだろうなー青春してんなーと思つてそう言う
と、

「……あたし、そんな強くないんで、人より多く練習しないといけないんで」

なんか笑顔が強張つた。……あれ、地雷踏んじやつたわたくし？ また何かやつちや
いました？

あー……よっしゃ、ここは一つ人生経験多めの元おつちゃんに任せんしゃい。

悩み事なんてのはまず誰かに話すことで半分くらい解決できるものです。

文章に落とし込むことで自分の中で整理できるからね。よく分からないで悩むより、理解した上で悩むほうが建設的なのだ。

で、わたくしはその半分にだけ関わってあげればいい。あくまで解決の糸口になれればいいのです。

軽く拒否されましたが、ここは多少強引にでも話してもらいましょう。うんうん、分かるよ。あんまり知らない人にいきなり悩み事相談するなんて気恥ずかしいよね。けど知り合いに話すよりまだ楽よ？ さあ観念してキリキリ吐いておしまいなさい。

とりあえずなんか飲み物出しましょうか。

移動が不便なこの身体、ならば移動せずにだいたいの事が出来るように環境を整えるのは必須です。元々インドアタイプの気性でもあったし、手の届く範囲に全てを用意するのはお手の物。前世でも自分の部屋は8畳ありましたが、基本活動圏は半径85cm以内に収めておりました。この手のーとーどく距離ー♪ ってね。

幸いにもここ保健室の備品として設置されていたオフィスデスクは両側に3段ずつ、中央に1つの引き出しが付いておりましたので、仕事に関する書類の中で利用頻度が低いものや何かしらの器具などは少し離れた戸棚に、頻度の高い書類だけを引き出しに収

めた結果、半分ほど空気が出来た状態。なのでそちらは寛ぎグッズ、主にコーヒープレイク用品入れとさせてもらっております。

引き出し群からカップ、紅茶、茶請けのお菓子を取り出し手早く準備。机の隣にはウォーターサーバーも置かせてもらいました。冷水もお湯もすぐ出せて便利なのよねこれ。忙しいときにお昼をカップラーメンにしたりする時も。

こういう場での口にする物つて意外と侮れないアイテムだったりするんですよ。さつき悩み事は誰かに話せば半分解決みたいなこと言いましたが、誰かに話すためには文節を組み立てる必要があります。そして組み立てるためには考えなきゃいけません。考えてすぐ出てくればいいのですが、長考することだつてももちろんあります。けど人によつてはその長考することさえ『すぐ言葉が出ないってことは、自分は普段からあまり考えてないと相手に思われているんじゃないだろうか』ってプレッシャーを感じてしまい、そのまま委縮して話せなくなってしまうこともあるのです。糸口を掴むこと自体が困難になってしまふんですね。

そこで何かを食べる、飲むことで多少沈黙しても仕方ない状況を用意しておくことで、プレッシャーを緩和して話しやすくする、というわけです。あと単純にお腹にモノ入れると落ち着きますし。

まあこれはあくまで自分の経験則なので当てはまらないケースも稀によくあるので

すががが。

なーんて考えてるうちに紅茶も出来上がったのでネイチャさんに渡します。

あ、熱いで気をつけてくださいね。

うっかり舌を火傷してしまうドジっ子ネイチャさんもそれはそれで尊みを感じますけども。

あつあつ、ふーふーしてるネイチャさん可愛いヤバイ。

「……あたし、このところレースで勝ってないんです。去年の菊花賞前まで連勝してたのはただ単に運がよかつただけなんじゃないかってくらいに」

お、話し始めてくれました。

要約すると『頑張っても成果が出ない。もつと頑張りたいけど頑張りが分からないう』てとこでしょうか。

にしても、去年の菊花賞、ね……あのネイチャさん屈指の名シーンがあつたの去年か……生で見たかつたなあ……まあテレビでは見たんですけども。

にしても話聞く限り、これちよつと軽く鬱発症しかけてませんか？

真面目で思い悩む子ほど鬱になりやすいですからね。ネイチャさんは表向きこそ気にしない体を保ちますが、内実は超ド真面目ちゃんですからね、仕方ないね。

そしてわたくしはトレーナーではないので、限界まで鍛錬を積んでる相手に対してそ

れ以上の鍛錬法を、なんて問われても分かるはずがありません。それに関して是非トレーナーさんにご相談ください。なので養護教諭のわたくしが言えるのはもちろんこれだけです。

「じゃあ、頑張らなくて、いいんじゃないかな」

「…………え」

「十分、頑張ってるのに、それ以上は、よくない」

わたくしに出来るのは、傷の手当てと心のケアくらい。体側はちゃんと手順を守れば治すのは難しくありませんが、心側は手順とか無いです。ケースバイケースです。とはいえ、鬱の相手にやっちゃいけないことは割と広く知られています。それが『頑張れと言っただけじゃない』ですね。まあこれも厳密に言えば使いどころが難しいだけで絶対言っただけじゃない訳では無いんですが。

「けど…………けど…………これだけ頑張っても駄目だったのに、あたしみたいな平凡ウマ娘が勝つためには、これ以上頑張る以外に、分かんなくて…………！」

カツプを持ったまま俯いてしまうネイチャ。

こりゃー大分追い詰められてますね。なまじ責任感も強いから余計に自分を追い込んでるんじゃないかなあ。

「そうだね。頑張って、勝てないのは、つらいね」

「……はい」

こういう時に必要なのは、解決策ではなく共感すること。

何度も言うようにわたくしはトレーナーではございませんので、この場合の解決策、すなわち『レースに勝つ方法』なんてものはそもそも用意出来ないわけでして。

あなたが大変なのを私も知ってるよ。そうアピールすることでまず孤独感を和らげます。

あとはそうですね……どうして勝ちたいのか、勝つことで何が得られて、それを得ることで何を感じたいのかを突き詰めて、大元の感情を自覚する手伝いでもしておきましょう。

何故、を繰り返し問いかけることで、より深くに隠された本音を引き出します。

「……彼女は、あたしの憧れだから。彼女に勝って、彼女を超える。そしたら、少しはあたしも彼女みたいにキラキラできるんじゃないか、って思うから」

はい頂きましたー！ 『キラキラしたい』、これが彼女の根源であり全てでしょう。

原作知識として知ってはいいましたが、それをわたくしの口から教えたところで無意味です。ちゃんと自分で考えて、捻り出して、辿り着いた答えだからこそ意味があるので。

そしてそれを第三者に明確な言葉で伝えることで、彼女の中でキラキラに対する解像

度が僅かに上がります。実現したい夢は口にしてナンボです。

ここまで来れば後はわたくし以外にも味方は沢山いることを自覚してもらって、自己肯定感を少し上げてもらえれば彼女は持ち直すことが出来るでしょう。

ダメ押しに彼女の手を握りながら全肯定です。

適度な人の温もりは安心感を与えるのに最適です。

……うへへ、ネイチャさんのおててやーらか、おつと心の声が。

「みんな、ナイスネイチャ、さんのこと、見てる。確かに、努力が、実を結ぶ、とは限らない。けど、あなたの、努力は、間違いなく、あなたを、輝かせてる。あなたの、目的に、確実な、一歩を、刻んでる」

しっかりと彼女の顔を見ながら話します。

……彼女はもう大丈夫そうですね。

根本的解決になつてない？

そうですよ？

悩んで苦しんで、尚もそれに抗って突き進む姿勢は、たとえ結果が伴わなくとも必ずその人の糧となり、将来の手助けをしてくれると思つてます。なので悩みなどは悩んで悩んで最後まで悩み抜いて、解決出来るにせよ、出来ないにせよ自分で落としどころを見つけてほしいと願っています。

勿論、そんなまだるっこしいことは要らん、結果が全てだ！ という人もいるでしょうし、それを否定する気はありません。

ただ、私は過程こそを重視しているだけでございます。なので本当に本人にはどうしようもないことでない限りはほんのり関わる程度に留めます。

命短し悩めよ乙女、なのです。

いやあそれにしても喋った喋った。

こんな長く会話したのは久しぶりで、実に有意義な時間を過ごせました。ほんとありがとうネイチャさん。相談も勿論受けますが、何も無くてもダバりに来て下さい。待機はマジ暇なんです。

「ぶふっ、何ですかそれ」

お、良い笑顔。尊い。

表情から険が取れたネイチャさんを送り出し、かなりの久々だった長めの会話に思わず言葉が漏れます。

「……ふう、しゃべり、すぎた」

……ドアの向こうで「くふっ」とか聞こえた。

やべ、聞かれちった。恥ずい。

Case 03 : 養護教諭とタマモクロスたち

「オグリ！ 自分少しペース落としいや！ センセやクリークが食う分のうなつてまうやろ！」

「む、すまない。だが、タマの作るたこ焼きは美味しくて、気が付くといつの間にか食べてしまっているんだ」

「ちっ、しゃーないやつちやな……クリーク！ 確かちっこいたこ焼き器もう一枚どっかにあったやろ、探してきてくれ。必殺の鉄板二刀流でペース上げるで！ 浪速の根性見せたるわ！」

「はーい、分かりましたタマちゃん」

「ならば私もペースを……」

「オグリは上げんなああああ!!」

はい、こちら現場のメルテッドスノウちゃんです！

というわけでして、わたくしは現在、栗東寮の共同キッチンにお邪魔して、オグリキヤップ、スーパークリークと共に、タマモクロスのとこ焼きパーティー、略してたこパを満喫している真っ最中でございます。

やっべえわ、本場のふわふわたこ焼きうつめえわ……とろけるわ……。

さて、何でこんなことになっているかと申しますと、遡ること約2時間ほど前。

いつものように保健室からグラウンド眺めて『はあ……ウマ娘ちゃん様達の懸命に走る姿、萌えるわあ……』と思いながら砂糖乳製品不使用の黒い液体、端的に言えばブラックコーヒーを啜っていたところに。

ドバーン!!

とまあ、豪快に扉を開けて入ってきたジャージ姿のウマ娘。芦毛のロング、菱形を連ねたデザインへのアバンド。怪物オグリンことオグリキャップです。鬼気迫る表情で、顔色も少し血の気が引いてます。

「すまない、急患だ」

よく見ると背中に誰かを背負ってます。

そのまま速足でこちらに歩み寄って来るオグリン。

うひよおあ生オグリンが目の前にいー!? と激しく浮かれたい所ですが、さすがにそんなことをやってる場合ではありません。

「分かった。ベッドに寝かせて」

そう短く指示すると、オグリンは言う通りに背中の子を寝かせます。

オグリンより大分背の低い、こちらもジャージ姿の芦毛ロングヘア。赤い耳カバーに

青いポンポン。そして赤と青のツートンカラーで彩られたヘアバンド&左右の髪飾り。

これは……この娘は、タマモクロス！

白い稲妻、家族思いの浪速のド根性娘タマモクロス!!

そして、前世のわたくし最推しであるタマモクロスが！ 今！ 私の！ 眼前にいいいい!!!

本来なら総勢108名の脳内スノウちゃんズがド派手な衣装でサンバカーニバル開催待ったなしですが、今は状況が状況です。カーニバルは延期してもらいます。中止にはしません。

タマモつちはベッドの上で短く呼吸をしています。意識はあるようです。

わたくしはとりあえず手首で脈を取り、手のひらを額に当てて熱を確認します。

……ふむ、脈拍正常、熱も高くは無い。目立った外傷……無い。そして……。

とりあえず確認した限りでは、急を要する事態では無いっぽいかな？

「オグリ……せやから大げさやって……ちいとばかり眩暈がしただけやんか」

「何を言っている、倒れかけたんだぞ、ランニング中に」

タマモつちの呼吸が徐々に落ち着いてきます。

なるほど、ランニングしてたから呼吸がちよつと荒かったのか。

にしても、バイタルに目立った異常無し、にも関わらず、倒れかける程度の眩暈って

何が……

あ、そういやアプリ版のタマモっちって確か。

「確認。あなた、今日のお昼、何食べた？」

そう聞いてみると、タマモっちは『げっ』と言いつつ、そんな表情で固まる。

「タマは今日、日替わり定食を食べていた。……半分も食べていなかったが」

タマモっちの代わりにオグリリンが答える。これは確定か。

「栄養不足。お昼どころか、ここ最近、あまり食べてない。違う？」

訪ねてみると、タマモっちは無言で先程の表情のままギギイつとこちらから顔を逸らす。これは少なくとも8割方当たつてるとみていいな。

昨日今日でご飯を減らした程度じゃ倒れる程の症状には至らない。数日は続いているとみていいかなーこれは。

「彼女の、トレーナーには、連絡した？」

オグリリンにそう尋ねてみたが、彼女は耳をぺたーんとさせて首を振る。

「彼女のトレーナーは、他の担当している子のレースに付き添つて先週からいないんだ。連絡はしたが、帰ってくるのは3日後らしい」

と悲しそうに答えた。

「理解した。とりあえず、あなたは……えっと、タマさん？」

以前、ネイチャのこといきなりフルネームで呼んじやって失敗しましたからね、今回はちゃんと初対面の体を保ちますよー。私は学習できるウマ娘なのです。えへん。

「ああすんません。ウチはタマモクロス言います。こっちはオグリキャップ」

「わたしは、養護教諭の、メルテッドスノウ。肺が弱くて、こんな話し方、だけど、気にしないで」

お互い軽く自己紹介します。まあ私の方は本当は知ってるんですけど。最推しですけど。

「迷惑かけたな、センス。ウチはもう平気やからぼちぼち」

そう言っただけで起き上がるとうするタマモっち。はいステイ。わたくしはそれを片手で制します。

「タマモクロス、さん。とりあえず、このまま少し、横になって、休んで」

症状が軽いとはいえ眩暈起こしてるんだから急に起き上がるのは許しません。今回は原因が分かっているので大丈夫とは思いますが、しばらく横になって治らないようであれば他の原因も考えられます。下手すると病院行くレベルの可能性もありますので。

「や、ウチはもう……」

「平気じゃ、ない。寝ながらで、いいから、これ食べてて」

そう言いながら、わたくしは机の引き出しからお気に入りのお店のにんじんクッキー

を一袋、タマモつちに渡します。何はともあれ腹に何か入れなさい。

さてと。それじゃタマモつちに餌付けしてる間に。

「オグリキャップ、さん。一応あなたの、脈と、体温も、確認させて」

「私は至って平気だ。今日もお昼ご飯をたくさん食べた」

まあ自分も何もないだろうと思ってる。思っているが。

「本当に、念のため、だから。たまに、怪我人連れて、興奮して、自分の怪我を、忘れる人も、いるから。大丈夫だと、いうことを、確認させて」

いやまあマジでたまにあるんすよ。

アドレナリン出ちやっってるんでしょね。血い流してる人を担いで来た元気な人が、実は骨折れてましたーとか、全く無い事例じゃないんです。前世知識ですけど。

なので基本的にここ保健室を訪れる人の簡単なバイタルは全員測っておくことにしました。

もちろん脈と熱なんぞ測ってもそれで怪我が分かる訳はないですが、一呼吸入れて落ち着いてもらうことで体の違和感があった場合に気付きやすくなってもらうことが主目的です。

べつ、別に『こうすれば合法的にウマ娘ちゃん様達のお手々とお顔に触れることが出来るぞぐへへ』なんて全ぜ……す、少しくらいしか考えてないんだからねっ！

「そういうことなら……分かった」

というわけで、私目線まで屈んでもらったオグリンの手首と額に触れる。

うひよおおおおう、オグリンのお手々すーべすべだー。指も長いしかっこよき。堪能。さてさてバイタルの方はーつと。

ふむ……ふむ？　ふむ……まあ、大丈夫か。

「うん、大丈夫。ありがとう」

とりあえずバイタルに異常は無かったのでヨシ！

どれ、タマモっちとオグリンに何か飲み物でも出すかと思つた矢先。

「タマちゃんが倒れたつて本当ですかっ!？」

先程から開けたまんまだつた扉から誰かが大声で訪れる。

艶やかな鹿毛の超ロングヘアを後ろで一房に編み込み、青いリボンをつけたグラマラス美人が血相を変え、息を切らして入ってきた。

そうよね、オグリ、タマモと来たらこの方もいらつしやいますよね。

ママの中のママ、スーパークリークさん。

ふむ、んーと……とりあえず。

「バイタル、測ろつか」

「え？」

「じゃあ、怪我とかじゃないんですね」

「ああ、すまんかったなクリーク、変な心配させて」

「もう、本当にそうですよ。ちゃんとご飯は食べなきゃメツ、なんですからね」

「そうだぞ、ご飯は大事だぞ、タマ」

「なんやオグリが言うと言得力あるな」

流れでそのままクリークのバイタルも測ったその後。

背部分のリクライニングを少し起こした状態のベッドの上でポリポリとクツキーをつまむタマモつちを囲むように、わたくし、オグリ、クリークが周りに座ってます。

あーちよつとずつクツキー齧るタマモつち超可愛えええええええええええ何これ何でこんな生き物がいるのこんなの無料で観覧させてもらっていいの養護教諭やって良かった生きてて良かった三女神様に大感謝ー！

ちなみにオグリがクツキーを物欲しそうに見ていたので、業務用のポテチ1kg袋を与えている。3分と持たなかったが。

「なにはともあれ、タマモクロス、さんは、ご飯を食べなきゃ、いけない。あなたたちは、アスリート。エネルギー消費は、一般ウマ娘の、比じゃない」

脳汁垂れ流すのは程々にしておいて、ちゃんとお仕事しませんとね。オグリんやスペ

ちゃんの胃袋が常軌を逸しているのは置いとくとして、それでも長距離を尋常でないスピードで駆けるウマ娘なんですからエネルギーはしっかりたつぷり補給しないといけません。

「それは分かかってんねんけどな、ここ最近何でか食われへんねん。……なんやトレセン学園入りたての頃思いい出すなあ。あん時もよう食えんかった。トレーナーに直されて、もう平気やー思ってたんやけど……」

タマモクロスは飢えることで強くなる。食への飢餓すら勝利への渴望に変換して走るウマ娘です。また、実家の弟妹たちを食べさせるために自分の食べる分を減らしていたという描写がアプリ版にはありました。そのため小食どころかやや拒食症気味だった気もします。

ところが、逆にアニメ版では大食い大会に出場したり、オグリンの応援行ったときに大盛り焼きそばを食べたりしてポテ腹を晒すこともありました。

このことから、恐らくタマモつちは表面上は大阪のおばちゃんばりのパワフルさを見せていますが、その内面はおつそろしく神経質でナイーブなんでしょう。故に、ちよつとした環境の変化が食欲減衰に直結してしまう。今回もトレーナーの不在でどこかに不安を覚えてしまったが為に起こってしまったと考えるのが自然な気がします。

すなわち、タマモつちの食欲は精神面を向上させれば回復する。

さて、前世知識に何かヒントは無かったかな。そう言えば屋台のイカ焼きが好きだったよな、サポカもあったし。けど屋台は今日出店してるかどうかが分からんから賭けだよなあ……あ、じゃあアレなら。

「トレーナーが、戻れば、ちゃんとした、対策は、取ってくれる、はず。まずは今を、何とかしよう。そこで、1つ案がある」

「え、何とかなる方法があるんか!? ウチは何したらええんや?」

「れつつ、たこパ」

「へ?」

ちゃんと白米も用意しないかね。

てなわけで、タマモつちに飯を食わせるべくたこパを催したという訳です。

まあ食欲改善が理由の9割で、1割くらいは自分がタマモつちのたこ焼きを食ってみたかった、てのがありますが。

関西のご家庭には一家に一台、必ずたこ焼き器があるらしいです。そちら出身の人に聞くと98%の確率で『そんなわけないじゃん(笑) うちにはあるけど』と返されるらしいです。

鉄板ネタなんですかね、たこ焼き器だけに! (ドヤア)

……こほん。まあそんなわけで恐らく家庭の味に近ければ食べやすいんじゃないかと愚考した上でタマモつちにたこ焼き作ってもらってるんですが、いやあ手つきが鮮やか鮮やか。まるでたこ焼きが自分から勝手に丸くなっていくようにも見えます。

何ですかその鉄板二刀流って技。左右の手が全く別の動きしてるのにそれぞれが鉄板一枚の時とスピード変わんないんだけど。すげ。こわ。

「というか、タマモクロス、さん、焼いてばかりで、食べてない」

うん、そんな感じでまあすごいんだけど両手塞がってるしひつきりなしに焼き続けるから食べる暇なんて無いよね。分かった。

「ん？ ああウチはええねん。気にせんと食うてくれ」

「そういうわけには、いかない。これは、タマモクロス、さんに、食べてもらう、ための催し。それに、みんなで食べる、のが大事」

うん、多分そう答えるだろうなってのも分かった。

けどねタマモつち。あんたが食わなきや意味が無い。

みんなで食べるご飯はおいしーぞー？

「とは言っても、タマちゃんの手を止めさせるわけにもいきませんね。オグリちゃんまだまだ余裕そうですし……」

「上手に、焼けるのが、タマモクロス、さんしか、いないのが、問題だった。うっかり」

それに関しては全くもってクリークの言う通りでマジで失念してた。ちよつと考えれば分かることだったはずなのに。自分のたこ焼き食べたい願望が先行しすぎたようです。おかげで焼き手を代わってあげることが出来ない。

や、わたくしやクリークも焼くだけなら出来るんですよ。けどタマモつちが作るみたいにふわっふわにならない。なんかずっしりみっちりしちゃうんですよねえ……おかしいな、使ってる材料は同じなのに。まあこれが技術の差というやつなのでしよう。

「うん、困ったな」

「原因は自分やって分かってるかオグリ?」

君はもうちよつと遠慮という言葉を覚えてくださいごめんさいやつぱり覚えなくていいですオグリンはオグリンのままできて下さいいっぱい食べる君が好きいい。

タマモつちは焼き手を離れられない。でも食べさせたい。ならば。

「要は、焼きながらも、食べられれば、いい。ならば、こうするまで。はい、あーん」
「!!」

クリークが『その手があったか!』って顔しております。

そう、食べさせてあげれば良いのです。火傷しないように入念にふーふー冷まして、タマモつちの顔の前に持っていきます。

あ、タマモつち動揺してる。かーわいーい（賢さG）

「つちよ、センス、それはさすがに」

「あーん」

「いやだから」

「あーん」

「あー、その、うー……」

もう一押し。食らえ必殺の『小首を傾げての上目遣い』!!!

「わたしから、もらうのは、嫌？」

「……ああああああもう！……あーん！」

よし落ちた（にやり）。

自分の見た目が良いのは自覚してるので最大限に利用します（ゲスイ）。

タマモつちもヤケになったのか、手を止めないまま大きくお口を開けてくれます。

そのままぼいっとたこ焼きを放り込みます。ちよーえきさいていんー。

「んぐ……ん、うま。さすがウチや。……おおきにな、センス」

ちよつと尻尾揺れてます。萌え。

なんやかんやでこの娘つこも素直なんですよね。尊い。

用意した白米がタマモつちのこのセリフだけで食えます。

「せせせ先生、ずるいです！ 私もタマちゃんにあーんしたいです！」

ちよつと掛かり気味のクリーク。あれ、ママスイッチ入っちゃった？

まあ、折角なんでこのままタマモつちのお世話係は任せちゃいましょう。

「ん。してあげて」

「はい！ さきタマちゃん、いっぱい食べましょうね、あーん♪」

「ちよつ、クリーク、やめえ……むぐう」

小さな子ども扱いされているのを言葉尻から理解し拒絶しようとするタマモつちと、お構いなしに口の中にたこ焼きを運ぶクリーク。

すげえ、有無を言わず絶妙なタイミングで食べさせている。

これが、圧倒的ママ力(ちから)か……つよい(つよい)

「いいな。私もタマにあーんしたい。ほら、あーん」

「むがつ!?! おぐい、あがん……」

わたくしやクリークが食べさせているのを見て羨ましくなったのだろう、オグリもタマモつちへの餌付けにかかる。

すげえ、有無を言わず力尽くで強引に、ハイスピードで突っ込んで。

これが、芦毛の怪物か……つよい(つよい)

「もつとか? いいぞ、食べてくれタマ」

「もがむがつ!」

つよいのは分かったので手加減してあげてほしい。

口からたこ焼きがあふれてしまう。それ以上いけない。色んな意味で。

「オグリキャップ、さん、詰め過ぎ。それじゃ、飲み込めない」

「た、タマちゃん!? お水お水!」

クリークが慌ててコップに水を注いでタマモつちに渡します。

もがもがしながらもそれを受け取り勢いよく口の中に流し込む。

吐いたりするのは彼女の染み付いた貧乏性が許さないのでしよう。ほっぺパンパンにさせて必死にもぐもぐするタマモつちがぶりちーすぎる。

「んぐっ、んぐっ、んぐっ……ぶはあーっ……つてころす気かオグリいー!!」

タマモつちのお怒りはごもつともだと思いません。

だからオグリ、怒られてる間くらいはその食べる手を止めなさい。

「ウインナー美味しいな。にんじんも美味しい」

「合うものなんですねえ、ブロッコリーも」

「これは……キムチ? 意外だけど、おいしい」

「もぐ……お、ちくわや。昔たこ買えん時よう入れたなこれ」

途中で具のたこが切れ、それを宣言したときにオグリがこの世の終わりのような顔

をしたが、タマモっちの機転により冷蔵庫からありったけの食材集めて適当にぶち込んでみたら意外や意外、たいがい美味しい。というか最後サラダとタマモっちが悲しいこと言ったら。

「ちいと邪道やねんけど、たこ以外入れても割と美味いんや。これを『たこ焼き』言うんかは微妙なとこやけどな。よう家でもやつとつたわ、はは」

実家暮らしの時のことを思い出しているのでしょう、遠い目をして微笑むタマモっち。うわあ神スチル頂いてしまった眩しい。SSR確定ですわしつかり脳内スクショに保存しなければ。

色々試してたらさすがにみんなの食べるペースも落ち着いてきたので、最後にチョコを入れたデザートたこ焼きでパーティーを締めました。

「ぶはー、食うた食うた。なんやかんやで結構食うたな」

「良かった。タマが食べてくれて本当に良かった」

「ですね。ありがとうございます、スノウ先生」

軽く食休みした後、職員寮まで戻らなければならぬわたくしは3人に栗東寮の入口で見送りを受ける。送って行くのかとも言われたが、学園施設内なので危険も無いだろうと思つて丁寧に断りした。

「私は、ご相伴にあずかった、だけ。こちらこそ、ありがとうございます」

「なんや家で飯食うてる時のこと思い出したわ……おかげで今日はよう食えた気がする。ほんまおおきにな、センセ」

結果的にタマモつちはすげー食ってくれた。主に後半戦で。

具材の適当っぷりが実家感強くて良かったのかも知れない。

まあ、ポテ腹晒しているオグリンには叶わないが。あいつ全体の8割食った上に白米も3升平らげてるんだぜ……怪物め。

「ん。またやる時は、呼んで。タマモクロス、さんの、たこ焼き、ファンになった」

「だっはっはー、たこ焼きだけやのうてウチ自身のファンになってくれてもええねんで？　なんてな。ほな、センセ……あ、せや。ウチのことはタマモでええで。同じ釜の飯食うた仲やろ」

生まれる前からファンです！（事実）

そしてタマモつちが愛称呼びを許してくれたので、わたくしは先程まで延期していた脳内サンバカーニバルをスノウちゃんズ増し増しで満を持して開催し、終始上機嫌のまま寮に戻った。パッションが抑えきれず何度か『オーレッ！』とか呟いてしまった。誰ともすれ違わなかったのでセーフだとは思いたい。

ちなみに嬉しすぎて一睡も出来ず、翌日には真っ赤に充血した水色の瞳から『スノウ先生の目怖っ』と呼ばれることになってしまったことを追記しておく。

だってマジ嬉しかったんだもの。
にしても、腹と、喉かー。脚なら何とでも出来るとは思ってたんだけどなーまあ仕方ないなー。うん、仕方ない。

Case 04 : 養護教諭とハルウララ

徐々に陽も延びて太陽は未だ高い位置におり、まだ今日という日が終わる影すら見せていない。雲は少なく、遙か上空にたなびく一本の飛行機雲が、後ろに伸びるに連れて淡く歪みながらも空を二分割している。学園至るところに溢れる緑も若葉色から新緑へと移り変わり、遠くない夏の訪れを告げてくれる。

どうも皆さん、いかがお過ごしですか。メルテッドスノウです。

あ？ 今『スノウちゃんらしくないぞどうした悪いもん食ったか？』とか思った人、挙手。正直にね、怒らないから。

だって仕方ないじゃない！ 衣替えですよ!?! 夏服ですよ!?! 薄着ですよ!?!

こんなの正気を保つの大変に決まってるじゃないですか!!!

ただでさえ普段からウマ娘ちゃん様達の素敵なお姿を無料で拝謁させて頂いているのに、その上更に肌色割合が増えてるんです。常日頃から冷静になる努力をしていないと、車椅子のままブレイクダンスしてステージをどっかんどっかん沸かせてしまうかも知れません。もちろん沸いてるギャラリーは全員スノウちゃんズです。

服装にあまり代わり映えのないわたくしも、さすがにこの時期に長袖の白衣はあつ

いのですので、袖を何度か折って五分丈くらいにしております。

上着は相変わらずのワイシャツ、下はゆったりめのワイドパンツとサンダルが私の通年のデフォースタイルですね。上は寒くなればもう少し羽織ったりして変化するとは思いますが、下はなー、スカート慣れないんですよね中々。風通し良すぎて不安になっちゃう。履きやすいとは思うんですけどね。

そんなちよつと汗ばむような時期にも関わらず、未だにホットでブラックコーヒー飲んでるわたくしです。

一応、氷枕とかスポドリ類冷やしておく為に冷蔵庫も置かせてもらったのでアイスコーヒーも作れなくはないんですが、まだもうちよつとあつたかいのを堪能したい気分なのです。明日になったら『こんな暑いのにホットなんぞ飲めるかー！』とか言うかも知れませんが。

コーヒーはインスタントのやつはあまり好みではないです。ちよつと酸味が強めなのが多いのでそのまま飲むのは……砂糖ミルク入れれば嫌いじゃないですが。ブラックで飲むならドリップバッグのやつが個人的にはバランス良くて好きですね、味と値段の。

というわけで、いつもはコスパ重視で某大手メーカーのを飲んでますが、今日はほんのちよつぴり奮発してス〇バのやつを飲んでみます。うん、美味しいかも。あんまり

詳しいことは分からないけど薫りがいい気がする。まだ慣れてないのでいつものやつの方が好きではありませんが。

「スノウ先生ー！　こんにちはー！」

そんなこんなで優雅なコーヒーブレイクを楽しんでいたところ、ガラツと勢い良く戸を開けて元気な声が入ってきた。

小柄な体軀、桜色の髪をポニーテール。臙脂色の耳カバーと鉢巻を付け、その瞳に桜花を咲かせ続ける少女……そう、皆さんお待ちかねえ！　ハルウララの登場だあ！！

「はい、こんにちは、ウララさん」

「先生、また擦り剥いちちゃったから絆創膏くーださいー！」

彼女はウチの太客です。2、3日に一度はこうやって絆創膏を求めてここへやって来ます。代わりに溢れんばかりの笑顔と元気を見せ、私の尊み成分を満たしてくれます。ハイオク満タン現金払いです。

絆創膏は入口近くの棚にしまっており普段は必要な人には横に置いてある記入用紙に必要な数を書いて持つてもらってるのですが、彼女だけは利用頻度が高いので例のチェックも行うついでにわたくし自ら処置しています。そのために机の上に100均で買った小さな救急箱、通称『ウララ箱』も用意したりしました。中身は10割絆創膏の特別仕様です。

さてさて、それではお仕事モード発動です。

わたくしはウラランに隣の椅子に座ってもらい、擦り剥いた箇所を見せてもらいます。今日は肘ですね。可動部なので粘性・伸縮性の高いやつ使いましょう。

「傷口は、水で洗った？」

「うん！ 先生の言う通りに水で流したよ」

ならよし。では自分のお手々をアルコールで殺菌してから、絆創膏をぺたり。はい処置完了。

え、簡単すぎるって？ 消毒はしないのかって？ ちっちっち。医療技術及び論理も日々アップデートされているのです。傷口って消毒しない方が良いらしいんですよ。

傷口を消毒すると染みるでしょう？ 痛いでしょう？ あれって体内の常在菌、つまり身体を正常に戻そうとしてくれる菌も一緒に殺しちゃってるらしいんですよ。なので殺菌すると却って悪い菌が侵入しやすくなってしまいうらしいのです。

傷口自体も今までは乾かしてかさぶたを作らせる乾式療法が主流でしたが、現在は湿潤療法のほうが効果が高いことが分かっています。かさぶた作っちゃうと乾いてるから細胞も傷を治しづらくなるんですって。

なので今は『かさぶたを作らせず常に湿った状態で、免疫力に任せて傷を治す』のが新たな常識となってきています。痛くないし早く治るし傷跡も残り辛い、といいことづく

くめです。なので備蓄している絆創膏もわたくしが赴任する前の備蓄を除いて全部湿润式のやつに変えています。

デメリットはコストの割高さではありませんが、会議で有用性をしっかりプレゼンしたので理事長の鶴の一声で承認していただきました。扇子に『承認ッ!』って書いてましたけど会話に合わせて何パターンか用意してたりするんですかそれ？

さてさて閑話休題。

「えへへ、なんかね、先生に絆創膏貼ってもらうと、傷が早く治る気がするんだー」
処置完了したのもういつものテンションに戻ってもいいですよね？

……なんて可愛いことを言うのこの娘はー！ 早く治るのは絆創膏の力だし、こんななんいくらでもしてあげますけど出来れば怪我しないように気を付けて欲しいな先生としてはー！ ウラランの珠のようなお肌に傷が付いてしまうのは先生とても悲しゅうございます。

「はい、出来ました。それじゃ、いつもの、やるよ」

「あ、いつもの……ば、ばいかるちえつく？」

うーん、ロシアにあるバイカル湖には測りたくなるほどの興味は無いかなー。

「惜しい。バイタル、チエック」

「えへへ、惜しかったー。はい、先生！」

そう照れ笑いを浮かべながら右手を差し出してくるウララン。

ほんとこの娘はポジティブマックスウマ娘やわあ。一挙手一投足で幸せ振り撒いてくれますね。

彼女には結構な頻度でチェックを行っているのであまり心配はしていませんが、習慣付いた行為だし念のためということで今日もやっていきます。

左手で彼女の手を取って掌を上に向け、右手の指先を手首にあてて全集中。とくんとくん。ああ、ウラランの鼓動を感じる。ウラランが生きている。生まれてきてくれてありがとう、出会ってくれてありがとう。

「スノウ先生の手ってあったかいね。わたし先生にこうやって手を握ってもらうの好きだよ」

もうやめて！ とつくにスノウが尊みを表現する語彙パターンはゼロよ！

ウラランはフルタイムで尊み成分を供給してくるのでわたくしでもテンションが追いつきませぬ。わんこそばのように間断なくブチ込んで参ります。はーやば、心臓止まりそう。でも心臓止めるのはバイタルを測ってからにしよう。

さてさてと……ん、問題なし。

「はい、ありがとう。ウララさんは、今日も元気、です」

「うん、わたし元気だよ！ あ、それでね先生。相談したいことがあるんだ」

よし心臓止めるかと思つたその時、ウラランが話を切り出しました。

ほう？ ウラランがわたくしに相談とな？ いいぜー乗るぜー超乗るぜー。

あ、ちなみにウラランはわたくしなんぞにも敬語を使わずフレンドリーに話してくれます。わたくし自身も望むところなので何の問題ありません。友達と呼べる相手はほほいなかったのでこの気が置けないやりとりはむしろ新鮮だったりします。

「ん、何かな？」

「わたしね、いつもキングちゃんにたくさんたくさん、『ありがとう』をもらつてるの」
首肯して先を促します。

キングちゃん……キングヘイローのことですね。可愛いと綺麗とかっこいいを高次元で併せ持つ超一流のお嬢様。が、割と肝心なところが抜けてて親しみを持ちやすい、ウラランのルームメイト。GI勝利経験を持つ母親と確執があり本人の資質はそこまですぐに勝利を追い求める誇り高きウマ娘。そういう娘、わたくし大好物でございます。そういう娘でなくても大好物でございます。

「朝起きれないときいつも起こしてくれたり、くるくるぼんつて髪をまとめてくれたり、制服に着替えるの手伝ってくれたり、朝ごはん一緒に食べてくれたり、他にもね、えつとね、えつとね……とにかく、キングちゃんはいーっつぱい、『ありがとう』をくれる

の」

「わたしね、嬉しくて、そんな優しいキングちゃんが好きで、だからわたしもキングちゃんに『ありがとう』を返したいの。けどどうやってキングちゃんに『ありがとう』を返したらいいか分からなくて。スノウ先生なら、どうしたらいいか分かるかなーって思ってる」

「えっと、だから、どうしたらいいと思う?」

天使か。いや天使だったわ。あつ、尊すぎて眼から何か出そう。もうね、言葉をまとめ切れないながらも身振り手振りを交えながら一生懸命伝えようとしてくれるその姿が眩しくて。

「わわわっ、スノウ先生!?!」

「ごめん、大丈夫。ちよっと、寝不足で」

マジでちよっとうるつと来て目頭を押さえてたら心配されてしまった。なんでしよう、実年齢+前世代年齢で割といい歳になるから涙脆いんですかね。

「あー、眠くってあくびすると、ふあーってなって涙でちやうよね!」

ピュアか。精霊だわ。人里離れた森の奥で暮らして汚れを知らないとかそんな類か。あんまり純粹すぎてちよっと将来心配になっちゃうレベルだわ。けど貴重な絶滅危惧種なので是非そのままの君でいてください。

「ウララさんは、そのままで、いいと思う」

「うーん、そうなのかな」

もうね、あなたの存在自体が幸せの塊なんですよホント何この娘。わたくしを尊死させたいの？　させたいんだな？

てか思わず心の声が漏れて結果的に『特に何もしなくていい』って意味の回答になってしまった。このわたくしがせつかくのウラランの想いを否定するなぞあつてなるものか。軌道修正すつぞオラア！

「いいと思う。けど、ウララさんは、キングさんに、何かして、あげたいんだ、よね？」

「うん！　だつてわたし、キングちゃんに『ありがとう』をもらうとぼかぼかーつてなつて、ふわふわーつてなつて、すつごく嬉しいもん。だからキングちゃんにもぼかぼかーつてなつて欲しいんだー。そしたら一緒にぼかぼかーになって、もつともーつとあつたかくなると思うんだー」

その真理に辿り着くとは神か。女神だわ。やべえ、四柱目の女神の誕生に立ち会ってしまったわ。とりあえず拝んどかなきゃ。南無南無ハレルヤ。

「先生、手を擦り合わせてどうしたの？」

「気にしないで。それより、『ありがとう』の、お返し、一緒に、考えよう」

「うん！　ありがとう先生！」

守りたい、この笑顔。やーべえ、ハイオク溢れそう。いやさつき溢れたな。引火して爆発炎上しないよう気を付けなきゃ。

にしても、プレゼントか……結構悩むことが多いんですが、さつきのキングエピソード聞いている時にちよつとピンと来たものがあります。あまり重く受け取られなくて、そこそこ長い期間、形に残ってくれて感謝を伝えられる、そんなプレゼントが。

「たとえば、こんなのは、どうかな？」

「ただいま、キングちゃん！」

午後のトレーニング終わりにトレーナーと少し話し込んでたらやや遅くなったので、今日のところは寄り道もせず真っ直ぐ寮に戻ったのだけれど、いつもは先に部屋に戻っているはずのウララさんの姿が見当たらなかった。どこかに出掛けているのだろうか。と部屋を見回しながら荷物を置いた矢先、彼女は戻ってきた。

「おかえりなさい、ウララさん」

どこかに行っていたの？ と聞こうとした時、彼女はこちらに尻尾を向けて何やらゴソゴソしました。肩から下げていたスクールバッグの中を漁っているみたい。一体どうしたのかしら。

「キングちゃん、あのね……はいこれ！ プレゼント！」

ウララさんは急に振り向くと、バッグの中から取り出した何かを私に差し出した。先端がピンクの白い筒状のもの……見ると一輪の花束だった。

「これは……カーネーション？」

一体何故？

「うん。わたしね、キングちゃんにお返ししたくつて、何をしたらいいのか分からなくて、スノウ先生に相談したの」

「スノウ先生つて……保健室のメルテッドスノウ先生のこと？　　というかお返しつて、何の？」

基本的にウララさんの話は突拍子の無いものが多いけど、今回もやっぱりよく分からなかった。

ウララさんはちよくちよくメルテッドスノウ先生とやらに会っているらしいが、私は会ったことは無い。一流の私は怪我なんかしないので保健室にそもそも用事がない。

そしてお返しと言われても何のことか思い当たらない。誕生日……にはウララさんからプレゼントは貰ったし、私からもウララさんの誕生日にはプレゼントしている。それ以外となると本当に思い当たらない。

「うん。キングちゃんはいつもわたしのこと見ててくれて、わたしがダメなところをちゃんと教えてくれて、優しくつて最高のお友達だつて言ったら、スノウ先生が『まるでお

母さんみたいだね』って言って、カーネーションのこと教えてくれたの。『本当のお母さんではないし、母の日でもないけど感謝を伝えるのに花をプレゼントするのは変なことではない』って。それを聞いて、わたしもキングちゃんにお花をあげたいって思ったんだ」

「だから、いつもありがとう、キングちゃん！ これからもよろしくね！」

……なるほど。日頃の感謝というやつなのね。

彼女から受け取った花束をじつと見る。母の日、感謝、親愛……確かピンクのカーネーションの花言葉には『上品』や『気品』というものもあつたわね……なかなか分かってるじゃない。ウララさんがそこまで考えてこれを選んだとも思えないけれど。

母親みたいと言われるのは少し、いえ正直かなり複雑だけど。私とウララさん、同学年よね……。

「まったくあなたは唐突にこういう事を。そう思うんならせめて普段から自分でキチンと朝起きられるようになりなさい。……けど、ありがとう、ウララさん」

すうつと、香りを吸い込む。青い草の匂いと、花の芳しい香り。
たまには花も悪くないわね。

「スノウ先生ー！ こんにちはー！」

「はい、こんにちは、ウララさん」

ウララんの相談を受けた翌日。今日も彼女はやってきた。

ただしいつもより来る時間がやや遅めですね。普段ならトレーニング直後くらいには来ているのに今は終業のチャイムが鳴ってからそこそこ経つてます。

これはアレですな、わたくしのアドバイスに沿って先程お花を購入して来たんでしよう。そして『今夜キングちゃんに渡したいけどどうやって渡したらいいかなー?』とか聞きに来たつてところでしょうね。くうーいいなあ! アオハルしてんなあ!

「あのね、今日は先生にプレゼント持ってきたの。はい、これあげるー!」

そういつてウラランはわたくしに後ろ手に隠していたものを出した。

それは、一輪の花束。きちんとラッピングまでしてある。

というかこの花……

「カーネー、シオン……? なぜ、わたしに?」

はて。確かにわたくしはカーネーシオンとかいんじやね? とアドバイスはしましたが、それはキングちゃんに対してでございませう。いくら何でも流石にわたくしとキングちゃんを間違えてる可能性は無いよなあ、さつき『スノウ先生』って呼ばれたし。

「昨日ね、スノウ先生に教わったプレゼント、キングちゃんに渡したの。そしたらキングちゃんすつごく喜んでくれて、二人でぽかぽかできて、なんかすつごくすつごく、うま

く言えないんだけど本当にすごかったんだー！」

何とこの娘、相談した昨日のうちにキングちゃんに渡しておりましたか！ 行動早すぎんだろなんだこの流石すぎるバイタリティは。結果大成功みたいですし、本当に幸せそうで何よりなんですけどね。おかげでわたくしも幸せです。今日もご飯が美味しく頂けそうです。

キングウラは正義。もちろんそれ以外も全て正義。異論は聞かぬ。

「でね、その後に気付いたの。こんなにポカポカできたのはスノウ先生のおかげだったんだなーって」

何を仰るやらこの現人神様は。わたくしはせいぜい『花でもあげたら喜ぶんじゃないかね？』位のことしか言ってますよ？ 全てあなたの心から生まれたイノセントなすてきんぐなのですよ。

「……でね、スノウ先生はすつごく柔らかくて、あつたかくて、何でも受け止めてくれて、キングちゃんとは違うけどスノウ先生もママみたいって思ったから、先生にもカーネーションをプレゼントしたかったの」

「だから、ありがとうスノウ先生！」

………

——ほっ

おや？ 何が……

——ぼたっ、ぼたっ

んん？ ふとももあたりに何か垂れてる音が。雨漏りですかね？ おつかしいなー雨も降ってないのに。雨じゃなくて水道の漏れかしら？ 学園って歴史はあるけど建物はそこまで古いものじゃ無いんだけどなあ。なんかウラランが驚いた顔でこっち見てるぞ。わたくしの顔に何かありました？

……ってまあ、鈍感系主人公じゃあるまいし分かってるんだけどさ、わたくしの目から零れ落ちてる涙だっということくらいは。視界歪んでるし。

——ぼたたっ、ぼたっ

『ママみたい』、かあ……

そうですね、久しく忘れてましたがわたくしはTS転生者であると同時に、メルテツドスノウその人でもあるんだった。わたくしが誰かにそう言う分には気にもならないですけど、わたくし自身に対して『ママみたい』は、ちよーつと色々思い出しちゃってプレイヤーに対してダイレクトアタック（物理）って感じになっちゃいますね。

「スノウ先生、どうしたの!? どこか痛いのか？ お花、嫌だった……？」

おつといかないかん。ウラランが不安そうにこちらを見ている。

袖口でゴシゴシと涙を拭おうともしましたが服装が夏仕様で袖が無い。まあそこは

大人ですのでポケットからハンカチを取り出し、そちらで拭き取ります。

「違う、の。嬉しかった、ただだから。大丈夫」

本当は嬉しさ以外にも哀しさとか寂しさとか他にも色々な感情が一気にぶわーっと来ちやつてましたけどね年甲斐もなく。はーまだまだまだ小娘だなわたくしも。

でも、おかげで久々に思い出したな……だから、これは純粹なお礼。

「ありがとう、ウララさん。嬉しかった、から、お礼に、ちよつぴり、魔法を、見せてあげる」

「魔法？」

「ん。でも、他の人、には、内緒ね」

そう言ってわたくしはウラランの手を引き寄せ、昨日絆創膏を貼った肘にそつと手を触れます。そして、小さな声で一言呟きます。いざ、チート能力ちよつと解禁。

「いたいのでいたいのでいけ」

見た目には何も変わりません。わたくしはウラランから手を離します。

「絆創膏、剥がしても、いいよ」

「え？」

「ほら」

「う、うん……？」

突然そんなことを言われて戸惑うウララン。まあ意味分かんないだろうね、何でそんな事言うのか。まあ、剥がしてみれば分かるから。

まだ治りきつてない傷口を晒す痛みを警戒し、おっかなびつくりといった様子で絆創膏を剥がすウララン。しかし剥がしてみても予想していた痛みが無かったのか、首を傾げる。そのまま恐る恐る傷口に触れ……

「あれ、痛くない……傷が、無くなってる……なんで!？」

「魔法、だからね」

両の目をこれでもかと思開き呆然とするウラランの表情に、わたくしは悪戯が成功したが如く笑みを浮かべながら、『内緒だよ』の意味を込めて人差し指を口の前に持つてきて、しいーつとポーズを取ります。ふふふ。

……わたくしは今、あなたに誇れるようなウマ娘になれますか？

あなたとの約束を守りながら、約束を破ってる親不孝者ですけど。

守ってる約束も、多分守れなくなりそうな気がしますけど。

いや、さすがに怒りそうだな。でも出来れば怒って欲しくないなあ。

どうかな、お母さん。

Case 05 : 養護教諭とナリタブライアンたち

季節は遂に夏真っ盛り。ここ中央トレセン学園でも連日の猛暑・酷暑によって、午後のトレーニングは暑さのピークを過ぎた15時以降の開始を推奨される程度には危険な暑さが続いております。

どうもお暑うございます、メルテッドスノウです。

さて、というわけで夏がやって参りました。

夏といえば皆様お分かりですね、そう、夏季合宿でございます!!

本格化を迎え終え、ある程度シリーズのレースにこなれたウマ娘ちゃん様達が、更なる飛躍を目指して挑む強化合宿。普段とは違った環境、違った訓練法で集中的にトレーニングを行うことで大きく力を伸ばす期間です。

またチームメンバー達だけで過ごす長期合宿は、炊事洗濯掃除も含めて全て自分達の方で行うため、チームの結束力を高める絶好のイベントでもあります。

そして、何より最も注目すべきこと。それはもちろん、水着! そう、M I : Z U : G I !! スイムウェア!!! でございます。

学園でもプール訓練時にはその姿になりますが、合宿期間中のトレーニングは基本水

迎えてなかったり基礎が出来上がってなかったりして身体の方が合宿メニューに着いていけず、変な癖がついたり怪我したりしちやいますので基本的に参加出来ません。

アプリで1年目に合宿無いの何でだろーとか思ってたけどそういう理由だったようですね。

そう、つまり夏季合宿は臨海学校のように全員が行くものではないので、学園は夏休みを除いて通常通り開かれているのです。

もちろんわたくしは学園付きの職員ですので、今日も今日とて保健室でのんびりおやつタイムを楽しんでおります。

この間食堂から何か新メニューの案は無いかと聞かれ、適当に提案したところ先程サンプルを持ってきてくれましたので、水出しアイスコーヒーと共に食べております。

周りの声をすぐに取り入れて実行に移すその精神、流石トレセン学園の職員ですねもぐもぐ。そしてやっぱり食堂の料理は美味えでございませすもぐもぐ。

——タツタツタ

そんな時に、スノウちゃんイヤーがここ保健室の方へ走って向かってくる足音を拾います。

急患かな？ いやでも誰かを担いでる感じでは無いから患者のところになたくしを呼びに来たとか？

ガラリと戸を開けたと思いきや、中に入つて来るなり後ろ手ですぐにぴしやりと戸を閉めたのは、艶やかな黒鹿毛を注連縄っぽい紐でポニーテールにまとめ、鼻にテープを貼つた学生です。なんか良く分からない草を高楊枝のように啞えています。

ナリタブライアン。『シャドーロールの怪物』とも呼ばれた彼女。

アプリ版では基本的に他者を寄せ付けない寡黙で不遜な態度を取る一匹狼気質が強い彼女。ですがアニメ版では感謝祭での仕事をなんやかんやでしつかりこなし、子供たちに群がられたりと、要所々々の表情も柔らかく頼れる姉御感満載のウマ娘です。

それなのに妹キャラとか凄すぎない？ 彼女の私服つてお姉ちゃんのセンスとよく似てます。もしかしてお下がりののかも？ たまんねえなあそういうのもつとちようだい。

でも彼女つてチームリギル所属だつたと思いましたが合宿は？ 生徒会優先で学園にいなきやいけないのかなのかしら？

「すまん、何も聞かず匿つてくれ」

開口一番、彼女はそう言います。事態は全く分かりませんが、まあそれは後々彼女が落ち着いて話せる状態になつてからでも良いでしょう。

何よりなんか面白そうなのでとりあえず全力で乗つかります。わたくしはベッド側にある窓に視線を投げながら短く指示します。

「……窓を一つ開けて、そのベッドの下に」

わたくしに言われた通り、窓を開けてベッドの下にさつと滑り込みます。遅れて数秒後、またしてもこの部屋に駆け込んでくる足音が一人分。ただし今度の足音の主は部屋の前で立ち止まった後にノックしてきました。

入室を促して中に入ってきたのは高身長美人さん。ボリユミーな芦毛のウエービーロングに赤いハーフリムの眼鏡を掛けた、『眼鏡が似合うインテリ系ウマ娘』ランキング第1位（スノウちゃん調べ）ビワハヤヒデさんです。

このランキングに関しては何らでも異論を述べるが良い！ わたくしはその全てを受け入れよう!!（突然の魔王ムーヴ）

「失礼する。高等部のビワハヤヒデだ」

凜とした声で名乗る彼女。うむ、良いですな良いですな。可愛い系のウマ娘ちゃん様達には愛でたくなる情動が溢れますが、こういった格好良い系の方々には全てをお任せしてリードしてもらいたい気持ちになっちゃいます。お姉様とお呼びしても？

「突然申し訳ないが、ここにブラ……ナリタプライアンは来なかつただろうか？ 黒髪、鼻にテープを貼った奴なのだが」

そんな脳内欲望駄々漏れのスノウちゃんなどお構いなしに、ハヤヒは言葉を続けます。やはり先程のプライヤんを追っかけて来たみたいですね。

まあここでバラしてしまうのもそれはそれで面白いかもしれませんが、約束通り匿わせていただきます。ごめんねハヤヒー。

「ん、来た」

短くそう言い、目線を開いた窓へ向けます。自然とハヤヒーの目線もそちらに向きます。視線誘導することでベッド下には意識が向かないよう仕向けます。

ここでのポイントは、わたくしが一切嘘を言っていないことです。ブライヤンは確かに来ましたし、その後何処に行つたかを言っていないだけです。開いている窓を見ただけです。

ですが、冷房をかけている部屋の窓が開いている不自然さとわたくしの回答にハヤヒーは僅かに考えを巡らせ、思い至ります。『ブライアンはこの部屋を通り、窓から外に逃げていった』というわたくしが用意した分かりやすい答えに。

良く言えば手品師のテクニクですが、悪く言えば詐欺師の手口です。悪いわースノウちゃん真つ黒だわー。

「くっ、遅かつたか」

悔しそうに眉間に皺を寄せるハヤヒー。うん、ごめんね。多分ブライヤんがこちらに何も言わずおもむろに隠れ出してたら教えたかも知れないけど、先にあつちに頼まれちゃつたからね、仕方ないね。

「邪魔をした、では……さて、何だそれは」

この場から早々に出ていこうとしていたハヤヒーだったが、わたくしが頂いているおやつのがりが気になったのか足を止めます。うーん、しまった。何でよりによつてコレを頂いている時にハヤヒーに遭遇してしまったのか。

致し方ない、ここはコレ以外に意識が向かないよう気を引きつつ乗っかっておきましよう。プライヤん、もうちよつと辛抱しててね。

「これ？ ピサンゴレン」

「ふむ……デザート、なのか？ 何やらバ……甘い香りがするが」

「ん。簡単に、言うと、揚げバナナ」

「……………ほう？」

なんか目の色変わった。ほんと好きなのねバナナ。

「食堂の、新メニュー、開発で、サンプルの、試食を、している」

このピサンゴレンという東南アジア発祥の料理、名前に馴染みは無いと思いますがレシピはびっくりするほど超お手軽です。一口大に刻んだバナナをホットケーキミックスにくぐらせてドーナツのように揚げるだけ。お好みでホイップやチョコをかければそりやもうパクパクですわの絶品スイーツとなります。

「よかつたら、食べてみる？」

皿ごと彼女の前に差し出します。もう彼女の目線はピサンゴレンに釘付けです。完全にロックオンしてます。エース級パイロット並です。いつでもFOX2してきそう。味っ噂お。

「良いのかっ!?! いや、待て、しかし……」

人様の食べ物を横から頂いてしまうことにやや申し訳なさがあるのでしょうか。食べたい欲望と人前ではしたくないという理性が熱い鏝迫り合いを繰り返している模様です。ではその均衡を、崩してしまえホトトギス。

「意見は、多いほうが、いい。是非、感想、聞かせて」

「そ、そそそういうことであれば、仕方ないな。ああ、仕方ない。で、では一つ……」
はい欲望の勝ちー。てかやば、クール系真面目ちゃんが好物を前にして頬を緩めるってギヤップ萌えじゃん。破壊力高いぞこれ。なんかキユンとしちゃう愛しい。

皿を受け取り、数個盛られているピサンゴレンの一つをフォークで突き刺し、ゆつくりと口に運んで行くハヤヒー。

「はむっ……!!?!」

なんか目に星飛んでるぞ大丈夫か? マーベラス空間まで飛んでないか?

ゆつくりと咀嚼し、同じく、ゆつくりと飲み込む。そして漏れる艶めいたため息ひとつ。微かに、んー色っぽい。

「……これは、美味しい。サクサクに揚がった衣と、中の熱が通って柔らかくなったバナナ。この対比が実に素晴らしい。何より、温かいバナナがこんなにも味わい深いものだったなんて初めて知った」

「良ければ、全部、食べて。わたしは、もう食べたし」

「!! すまない、お言葉に甘えよう……!」

すっかり虜になったハヤヒ一、一個だけでは名残惜しそうなので最後まで平らげてもらうことにしました。あのね、仕事出来るOL風美人が眉尻下げて美味しそうに食べる様で、すつごく尊いの。わたくし、この光景だけでもうお腹いっぱい。はー幸せM A X。

「ふう、ごちそうさま。……ときに、これは今後食堂で食べられるようになるのか? いくつかだ? レシピは公開されるのか?」

「すげえ食いつくなこの娘。」

まあ無理もない。わたくしも初めてこの料理に出会った時は感動したもんだ。それが好物とあれば尚更でしょう。

「まだ、選考中。味は、良いけど、見た目が、地味だから、どうしよう、って。レシピも、簡単だから、食堂で、聞いてみて」

「なるほど。ありがとう、いいことを教えてもらった」

「あ、ついでに、バイタル、測らせて」

このまま食堂に向かいそうだったので、とりあえずいつものを。

というかブライヤんのこと忘れすぎじゃね？ いいけど。

「…………もう、行つたよ」

「…………ああ」

ハヤひーの足音が遠ざかっていくのを確認し、目線を向けないままブライヤんに声を掛けます。本人も分かっていたのでしよう、のそのそとベッド下から這い出てきて制服をパンパンと手で払います。

「何故、私を匿つた？」

わたくしの方をじろりと睨み、彼女は尋ねます。いやあんたがそうしてくれって言つたんじゃないかーいとか思いますけど、特に今まで彼女と接点も無かつたわたくしがすんなり匿つたことに疑問の一つも覚えるでしよう。ここは素直に答えておきます。

「理由が、分からない、からね。だから、とりあえず、なんとなく？」

「そうか。あんた変わってるな」

要求に従つたら変人扱いされたでござる。解せぬ。

くそう、逃げた理由如何によつては今からでも引き渡す可能性が微レ存ですぞ。

「で、何で、追われてた、の?」

「あんたには関係ないことだ」

「聞く権利、あると、思うけど?」

「くっ……」

「なんやかんやで匿われた手前、強く拒めず顔をしかめるプライヤン。そんな表情を『逃げられたと知った時のハヤヒーとそっくりだよっぱり姉妹なんだなー滾るなー』と心の中の単気筒エンジンの回転数を上げます。排気量すつくな。」

「……………野菜だ」

「ん?」

「姉貴が野菜を食わせようとしてきたから、逃げた」

「こちらから目を逸らして腕組みして答えてくれます。尻尾もなんだかそわそわと忙しなく揺れています。かーわい。」

「そういえばこの娘、極度の野菜嫌いでしたっけ。ハンバーガーに挟まれた僅かな野菜すら抜いてしまう程の偏食さん。こんなキリッとした見た目で実に可愛らしい。お姉ちゃんが好きな食べ物でギャップ出してきて、妹ちゃんは嫌いな食べ物で、ですか。何だこの仲良し姉妹は推すぞコラ。」

「……………ふむ。野菜、嫌い?」

「肉のほうがいい」

「なるほど。まあ、人による、よね」

わたくしがそう答えると、ブライヤんは意外だと言わんばかりに目を見開く。

「……あんたは言わないのか？　野菜を食えとか。養護教諭だし言いそうだと思うんだが」

「もちろん、食べられる、なら、食べたほうが、いい。けど、嫌々、食べるなら、野菜に、失礼」

食べ物というのは文字通り、食べられる為に用意されるものです。ものすごく脱線しそうなのでかなりざっくりとした話にしておきますが、その食材が当たり前のように食卓に出てくるのは、料理の作り手、販売業者、流通業者、生産者の並々ならぬ日々の努力の賜物です。自分一人でサバイバル生活をしているとかいう人でも無い限り、必ず見知らぬ誰かのおかげで我々はそれを口にすることが出来ています。

そういった経緯で眼前に出された食べ物を、まだその辺の道理が理解できないような子供ならまだしも、分別の付いた人間が嫌々食べるといのはわたくしの性分が許しません。出されたものは感謝し、美味しく頂くのが礼儀だと思っています。

好き嫌いをするなどは言いませんが、ありがたみを知らずにさも不味そうに食べた、捨てたりするのはいけません。わたくしにだって嫌いなものはあります。徹底して

調理前に抜いてもらってるだけです。まかり間違つて出てきてしまったらありがたく頂きますが。

「ふつ、なるほど。野菜に失礼か。やっぱり変わってるなあんだ」

ほんのり口元に笑みが見られます。けどまたわたくしのこと変人扱いしよつた。おかしい。至極まともな一般的意見を述べただけなのに。

「……まあ、野菜は好きじゃ無いが、食つたほうがいいのだろうかと思う時はあるんだ」
ぼそつとそんな事を呟くプライヤん。まあお姉ちゃん以外からも言われてるだろうしね、多少気にしてしまうのも分かります。同じ副会長のエアグルーヴとかからも言われてそうだし。あの娘も世話焼き気質が見え隠れしてるもの。

「なあ、あんた養護教諭だろう？ 何かいい手は無いか」

無茶振ってきたなあこの娘!? 一介の養護教諭を何だと思ってるんだ。わたくしは貴様の専属栄養士では無いのだぞー！

だがしかし、無茶振りとはいえ自分を頼つて相談してきたのは事実！ ならばわたくしはそれに全力で答えるまでである。

「ん。提案なら、いくつか」

「あるのか」

あるんじゃないよ。イヤイヤ期の幼児に食べさせるのは無理ゲーだけど、理屈が分かる相

手への提案くらいなら出来ます。実際にやるかどうかはブライヤん次第だけどね。

わたくしはとりあえず彼女を椅子に座らせ、定番となったバイタルチエツクをサラツと済ませてから話を続けましょうか。

「解決法、その1。サプリ」

「何だその錠剤は」

仕事用引き出しの奥の方から小さなガラス瓶を取り出します。その中には十数粒の錠剤。ただし、色が限りなく黒に近い深緑。何かしらでコーティングされてるのでしょう、ツヤツヤテカテカしてます。ほんと何でしょうねこの毒々しさ。

「この、生徒が、開発した、1錠で、1日分の、栄養が、採れる、サプリ。安全性は、わたしが、保証する」

以前、わたくしと同じように白衣を纏っていたウマ娘が治験協力者を探していたので、面白そうだと思って参加させていただきました。

まあ彼女もトレーナーが相手でも無ければ発光したりするような代物は飲ませてこないだろうと思ひまして。一体何ネスタキオンだったのでしょうか……。

実際に発光はしませんでしたし、数日飲み続けて身体の異常は覚えなかつたのでとりあえず安全ではあるはずです。

「ほう」

割とあっさり解決できそうな方法に興味を惹かれるプライヤン。ええそうでしょうとも。これを飲めば栄養摂取の問題はスツキリ解決、それ以外の食事は食おうと食わなからうと完全に自由。嫌いなものを食べる理由が無くなるのですから。

まあけど、そんな面白い話がそうそうあるわけもなく。

「問題は、副作用。すごく、苦い。1日中、苦い。噛まずに、飲んだ、はずなのに。普通に、野菜を、食べたほうが、1000倍、ましと、思える、くらいには」

「それは勘弁願いたい」

苦味で寝付けないって初めての体験でした。何日か続けて服用したのでしばらく寝不足に苛まれましたとも。

多分これ、あの数々のウマ娘ちゃん様達を無間トレイニング地獄に叩き落とした悪魔の飲み物、ロイヤルビタージュースのプロトタイプみたいなものじゃないですかね。そりゃあやる気下がるわこんなん。

「解決法、その2。野菜ジュース」

プライヤンにお願いして、冷蔵庫から目的の野菜ジュースを取ってきてもらいます。普段飲み用に何本かストックしてましたので。

「野菜の、味が強い、ものもある。けど、フルーツの、味が強い、ものもある。飲んでみる？」

野菜汁100%のやつがわたくしは好きですが、果汁と野菜汁が50%ずつ入ってるやつとかは飲みやすさがかなり向上しています。

繊維感も無いですし、普通にただのジュースとして飲めます。

というわけでブライヤンにはそういった飲みやすいやつを進呈。もしダメだったりして残してもわたくしが責任もって美味しく頂きますのでぐへへへへ。

確かに、これは飲みやすい。まあ、そんなに嫌いじゃない」

「デメリットは、決して、野菜の、代わりには、ならないこと。あくまで、野菜不足の補助。それと、糖分が、多いこと。採り過ぎ、注意」

「かなり現実的な案だな」

砂糖不使用でも果糖が結構ありますんでね。

あ、全部飲んだか。残ねゲフンゲフンいや良かった良かった。

「解決法、その3。発想の、転換」

「発想の転換？」

「嫌いな、ままで、構わない。今は、敢えて、野菜を、食べる。そうする、ことで、肉を、食べたときの、美味しさや、感動に、はずみを、つける」

「つまり、我慢してから肉を食べたほうが美味しく感じるから、肉のために野菜を食う、と？」

「ん」

筋トレ食事制限下におけるチートデイみたいなもんですかね。何か違う気もしますけど。

ね。要はいくら好きなものでも食べ続けると飽きるから、緩急つけようぜってだけです。

「ふむ……悪くない案かも知れん。が、それは野菜に失礼なのではなかったのか？」

「それは、あくまで、わたしの、意見。共感、してくれる、のはいい。けど、強制、する気は、ない」

所詮は一個人の一意見に過ぎませんのでね。

「割と適当なんだなあんた」

「臨機応変、と言って」

なんか呆れられたぞ。つくづく解せぬ。

「解決法、その4。諦めよう」

「解決とは」

スポーツ栄養学的には確かに野菜の栄養素は必須でございます。が、この世界ではあまりそこまで大きな説得力を持たないですよねそんな科学は。

というのも、ウマソウルや根性がなんやかんやしちやう傾向が強いんです困ったことに。計測不能な不確定要素が多分に影響するせいもあって、あくまで参考レベルなんですよね。

適当抜かしてないでちゃんとやれつてんなら誰かオグスぺ胃袋の神秘を科学的に説明してみろやチクショーメツ!

「色々、提案は、したけど、無理に、やる必要は、ない。結局は、自分が、やりたい、ように、やるのが、一番」

「あんた的にそれでいいのか」

なんかすつかり呆れられてしまったみたいですね。まあ特に最後のは日和見な意見ですし致し方のないことと思います。けどね、

「まあ、敢えて、言うなら……」

養護教諭、無礼^{なめ}るなよ?

すうつと心を落ち着けて、冷静に、冷酷に、冷淡に。

まっすぐ彼女を見据え、低めの声で言い放ちます。

「四の五の、言わずに、全部食えよ。苦手が、どうした。酸いも甘いも、全て喰らって、己が血肉に、変えてやれ。野菜、食えなくて、負けましたとか、言い訳、したいのか？」
今までのわたくしの口調とは一転、超々挑発的に上から目線で煽ってやります。

「プライヤん、お目々まんまるで固まつちやつてます。あ、啜えてる草も落ちちやつた。さてさて、これを受けて怒り狂うか、はたまた……」

「……くつくつく、はーっはっはっは！ やっぱりあんたとんでもなく変わってるな！
面白すぎるだろう！」

イエス！ 『ザ・北風と太陽作戦』成功デース！

押ししても駄目なら引いてみな。色々提案してみても反応鈍かったので、なら本人から『出来らあつ！』と言い出してくるように仕向けてみました。

乗るかどうかは兎も角、興味を引いただけで十分成功です。

あ、ちなみにさっきの冷たい声は演技ですので本性見たりとか思っちゃやーよ？

……振りじゃないよ、本当だよ？

てか、成功して良かったわ。怒って出ていく可能性、そんなに低くはなかったの内で心バツクバクでした。はふう。

「お褒めに、預かり、恐悦、至極。まあ、試すも、善し、試さないも、善し。好きにした
ら、いい。投げやり、じゃなく、本心で」

「ああ、好きにしてみるさ。札を言う」

「ブライヤンがニイツ、と笑って見せてくれます。良いですね、目の奥にキラキラした
炎が燃えてるのが分かります。」

「これで野菜を食べるかどうかは本人のみぞ知るところですが、モヤつと感は解消出来
たとみていいでしょう。」

「いやあいい仕事しましたわ。」

——ガラガラッ

「失礼する。先程のピサンゴレンの事なのだ、が……」

「あ」

「あ、ハヤヒー戻ってきちゃったやつべ。会話に集中して周りの音聞こえてなかった
やつべ。」

「じゃあな」

「ノータイムで開けていた窓へダツシユし華麗に飛び越え、今度こそ本当に逃げるブラ
イヤン。颯爽という表現が似合いますね。うわあ速い。もう見えなくなっちゃった。
というか一応解決したんだし、もう逃げなくても良かったんでは？」

「メルテッドスノウ先生……これは一体どういうことなのか、説明してもらえらるだろうか？」

プライヤんのいなくなった窓を見ていたわたくしは背後から聞こえてくる、先程のわたくしの演技なんかとは比べ物にならない、地の底から噴き出すような凍てつく波動と、有無を言わせぬ感情の無い静かな声。怖い。怖くて振り向けない。プレッシャーは
んばない。

移動率にパッシブでデバフ持つてるわたくしは逃げられない。詰んだ。

Case 06 : マンハツタンカフェと養護教諭たち

「〜♪」

学園の廊下を、私は上機嫌で歩いていきます。

前々から発注してあったちよつと珍しいコーヒー豆が、先日ようやく届いたことで私はウキウキしていました。

それを保健室のメルテッドスノウ先生と堪能すべく、私、マンハツタンカフェは彼女の元へ向かっているところなのです。

というのもスノウ先生、この学園ではかなり少数派なブラック党。

何でも、一時期漢方薬を服用したことがあつて苦味に慣れた結果、コーヒーの苦味は美味しいということに気付いたらしいです。

私はどんな飲み方も好きですが、豆自体が持つ深い苦味や爽やかな酸味、仄かな甘みなどといったブラックの良さを語る人は貴重なんです。

彼女は普段、ドリツプバッグでコーヒーを飲んでいるので、ミルクやドリツパーなどの器具も持参して保健室へ向かいます。

豆は三日ほど前に焙煎済み。焙煎したてより数日置いたほうが豆から余分な炭酸ガ

スガ抜けて味に落ち着きが出るんです。

スノウ先生はいつも私のコーヒーを美味しいと言って飲んでくれます。本人曰く、『自分はバ鹿舌だから何を飲んでも美味しいとしか言えない』と言ってますが、ちゃんと風味や薫りの違いは分かっているようなので、そんなことは無いと思うのです。どんな豆にもそれぞれに個性があり、その個性の全てを受け入れてくれる人なのでしょう。

何より、自分の淹れたコーヒーを美味しいと言ってもらって嬉しくない訳がありません。

私はそんな彼女のことを好ましく思い、今日もこうして訪れているのです。

時々、彼女のオーラにタキオンさんと同室のデジタルさんに似た色を感じますが、悪いものではないでしょう。お友だちも警戒している様子は無いですし。

「失礼します。スノウ先生、新しい豆が手に入ったので良かったら……」

カラカラと戸を開けると、そこにはスノウ先生と、二人の学生が三つ巴で向かい合う形で座っていました。

一人は私のルームメイトのユキノビジンさん。

もう一人は学園の至るところで見かける、サクラバクシンオーさん。

どちらかというときスノウ先生とユキノさんが向かい合って、その二人をサクラバクシンオーさんが見ている、と言ったほうが正しいですねこの構図は。

「あ、カフェさん！」

「これはマンハツタンカフェさん！ こんにちは！」

「ん、いらつしやい」

三人がこちらに気付き、挨拶を返してくれます。

ただ、何故かユキノさんの頭の上にはカツパのぬいぐるみが、スノウ先生の頭には鹿の角が生えた獅子舞のお面のようないぐるみが乗っています。

「……これは、何をやってるんですか？」

どういう状況なのか分からず、スノウ先生からいつものバイタルチェックを受けながら声をかけてみます。

するとクラバクシンオーさんが、私の疑問に答えてくれました。

「はい！ これはですね、ユキノさんとスノウ先生による、バクシンの岩手自慢五番勝負を行っているのです！」

「バクシンの岩手自慢五番勝負」

全く聞きなれないどころか、初めて聞く単語に思わずそのまま鸚鵡返しをしてしまいます。

「はい！ 二人にはお題に沿ったバクシンスピリッツ溢れる岩手の名物をアピールしてもらい、私のバクシンジャッジでどちらがよりバクシンのか勝負しているのです！」

「なるほど。よく分からないうことがよく分かりました」

会話の途中に挟まれている『バクシン』という響きが私の常識を掻き乱します。恐らく、二人が地元自慢比べをして遊んでいるのだ、という認識でそんなに大きく間違っていないはずですが。

「ちなみに、現在は1勝1敗1引き分けで第4試合に入るところです!」

「はあ」

私は早くスノウ先生とコーヒー談義がしたいので、ここで茶々を入れると無駄に長引きそうだなと思い、とりあえず黙つてることにします。

「ではお二人とも、よろしいですか? 第4試合のお題は……『岩手の観光地』です!

では先攻ユキノさん、アピールをどうぞ!」

「はい。あたしがオススメする観光地は……『小○井農場まきば園』です!」

ババーン! という効果音がユキノさんの背後に見えた気がしました。

……私は何を言ってるんだらう。効果音が見えるってどういうことでしょうか。

というかこんなにはつちやけたユキノさん見たの初めてかも知れません。

「二日で遊び尽くせないほどの広大な敷地に数々のアクティビティにグルメが満載の観光農場です。あまりに広すぎる敷地を移動する手段として園内周遊バスや昔のバ車鉄道を利用したトロツコバ車などがあり、それでのんびり敷地を散策するも善し、アスレ

チツクやアーチェリー、そして何より見渡す限りの草原を走り回って汗を流すも善し。お腹が空いたらジンギスカンや焼肉、生乳100%のソフトクリームなどがレストランや屋外バーベキュー場で堪能できます。またバターやアクセサリーなどの手作り体験で家族での思い出作りにも最適です。そしてそんな中でも特にイチオシなのが、春に見ることが出来る、雪が残り尾根の形がくつきりと分かる雄大な岩手山を背景に、広い牧草地に佇む一本桜……これがもう最っ高のウマスタ映えスポットなんです！

雄弁に情景を語り尽くすユキノさん。一瞬だが、晴れ渡る空、青々と広がる草原、その中を駆け回る彼女の姿を幻視したような気がしました。

え、まさか、今のは一部のウマ娘が使えるという『領域』では!?

……いやいやいや、レースならまだしも地元自慢の雑談でそんなの展開しないで欲しいのですけど。というか『領域』がそんな事で展開出来るようなものであつて欲しくないのですけど。

「はい、青空の下を楽しそうに走るユキノさんの姿が目に見えたいような素晴らしいプレゼンテーションでした、ありがとうございます！ では続いて後攻スノウ先生、お願いします！」

サクラバクシンオーさんにも私と同じ景色が見えていたみたいです。というかそんなサラッと流せるあたりこの人もかなり強いですね。

「こほん、では、参ります。……神秘。その一言に、尽きる。『岩泉、龍〇洞』」

スノウ先生がそう切り出した瞬間、辺りが暗闇に包まれる。いや、暗いが辺りが見えない程ではない。周囲はつるりとしながらも複雑な波模様で織りなされた岩で囲まれ、奥へと続く道は闇に阻まれ窺い知ることが出来ない。ひやりとした空気が流れ、身体を通り抜けていく。雑音が消え、そこには湧き出づる清水の音だけが響いている。

……だからこんな事に『領域』っぽいものを展開しないで欲しいです。流行ってるんでしょうか（現実逃避気味）

「日本三大、鍾乳洞の、ひとつ。総延長、約4km以上、そのうち、観光用に、700mが、公開、されている。未だに、成長を、続けている、鍾乳洞は、何万年、何十万年と、自然が、手掛けた、悠久の、芸術品。そして、その作品に、色を添えるは、ドラゴンブルーとも、呼ばれる、青く、澄み切った、名水を、湛えし、地底湖。時間の、流れすら、留めて、しまうような、静けさと、冷たさ、それでいて、どことなく、懐かしさも、感じられる、その魅力を、わたしの、語彙では、一割も、表現することが、出来ない。だから、私が、言えるのは、これだけ。……実際に見て、感じて欲しい。以上」

「おおお、空気の温度が実際に下がったとすら思えるご紹介でした！ 何となくスノウ先生の雰囲気にもマッチしている気がしますね、ありがとうございます！」

「またもサクラバクシンオーさんの言葉で現実へ還って来る。私は先程から飲まれつ

ばなしだというのにこの人は一切ブレない。これがこの方の強さの一端なんですか。出来ればレース中に体験したかったです。こんな時でなく。

「とうか、何故スノウ先生はそんなに岩手に詳しいんですか？」

「あー……父方の、祖父母が、ちよつと」

私の質問にやや言い淀むスノウ先生。何でしょう、嘘では無いけど真実でも無い、そんな雰囲気です。結構よく分からないポイントに謎がある先生です。

「それでは、バクシンジャツジに参ります！ 第4試合『岩手の観光地』、このお題の勝利者は……」

ダララララララララ……

ドラムロールが聞こえる。え、まさかこの人も不思議領域の展開を!? と一瞬思ったが口で言っています。何か凄く安心しました。

「ジャカジャン！ ユキノビジンさんです!!」

「やったべ!!!」

「くっ……」

ガッツポーズを掲げ、喜びを表現するユキノさん。対して、ガクツという擬音が聞こえんばかりに首を落とすスノウ先生。

ユキノさんの頭にぬいぐるみが追加されます。金色のお寺のような……金閣寺？

あ、これ勝ち数に合わせてぬいぐるみが乗せられるシステムなんですね。

「あの、ちなみに勝敗のポイントは……」

そもそも何でこんな勝負をしているのか？ という大前提の疑問を置いておけば、どちらのプレゼンもしつかりしたものであった気がします。正直、甲乙つけがたいと思いました。一体、どんな差があったのでしょうか。

「私は屋内より屋外が好きです！ 何故なら走りやすいからです！」

「……は？」

私の脳内に宇宙が広がった気がしました。

私は人智を超えた何かに触れてしまったのでしょうか。理解が及ばないのか、理解することを拒んだのか、ただ固まってしまいます。

お友だちさん、私、開けてはいけない扉でも通ってしまいました？

「なるほど、盲点、だった……」

「納得出来るんですかその理由で?！」

ギリツと手を握りしめ、悔しそうに呟くスノウ先生。

いつも感情が表情に出づらいい人なのに、眉間にちよつと皺が寄っています。そんなになるほど悔しかったんです……？

「では、いよいよ次が最後の試合です！ ユキノさんが勝ち越していますが、まだ決着は分

かりませんよ！ 最後のお題は『岩手の銘菓』です！」

「あたしから行かせてもらいますよ！ 盛岡の地方裁判所前にある、巨大な岩の割れ目から生える桜、『岩咲桜』をモチーフにした、その名もそのまま『岩咲桜』というゴーフルです！ 直径約15cmの薄い円形状のウエハースにクリームをサンドし、パリッとサクツとした食感と、その後にくつくりと訪れる優しいクリームの味は老若男女を問わず愛され続けてるんですが。シンプルだからこそ、誰が食べても美味しい。これが今回あたしが自信を持ってお勧めする岩手銘菓です！ メロン、バナナ、チョコ、3つの味！」

《おおつとユキノビジン、ここで突き放しにかかる》

《掛かってしまっているかもしれない》

息を入れるタイミングがあればいいですが》

……今、私の脳内で実況解説したの誰ですか!?

「なるほどなるほど、単純で想像できる味だからこそ、安心して食べることが出来る、質実剛健な、まさにバクシンのと言えるお菓子ですね！ ありがとうございます！ ではそれを迎え撃つスノウ女史はどんなお菓子を紹介してくれるのか!? よろしくお願いします！」

「わたしが、お勧めする、お菓子……それは『チョコ〇部』」

「な、つつつ!!」

スノウ先生の発言に、あからさまに尋常ではない動揺の声を上げるユキノさん。何でしょう、対決系グルメ漫画の体になってきたような……

「ほほう、それは？」

ユキノさんの反応の理由が気になるのか、先を促すサクラバクシンオーさん。

「岩手銘菓、といえば、確かに、『岩咲桜』は、有名。しかし、県外での、認知度は、『〇部せんべい』の方が、遥かに上。だが見た目や、味などに、華やかさを、欠き、若年層の、人気は、低い。そんなせんべいを、砕いて、一口サイズの、クランチチョコ、として、新たに、生まれ変わらせた、新時代の、銘菓が、この『チョコ〇部』。ただの、クランチチョコと、侮ること、なかれ。サクサクと、ほどよい、歯応えの、〇部せんべいは、お米のパフとも、コーンフレーク、とも違う、独特な、食感を、生み出す。そして、せんべいに、含まれる、ピーナッツが、香ばしさを、プラスし、一度、食べたが最後、無くなるまで、その手を止める、ことは出来ない。応用力も、高く、イチゴ味や、期間限定、バナナ味、プレミアム、仕様や、果てはアイスにと、可能性は、無限大。これこそが、岩手に、新たな、旋風を、巻き起こす、革命児」

「おお、それは是非食べてみたいですね！」

確かに普通に聞く限り美味しそうです。

チヨコですし、コーヒーとの相性も良いでしょう。

「じゃ、邪道だべ！ 伝統ある○部せんべいとチヨコを合わせた菓子なんて……！」

抗議の声を上げるユキノさん。

駄目ですユキノさん。この流れだとそのセリフ、負けフラグです。

「確かに、邪道。が、新たな、道は、正道から、外れなければ、切り拓けない。伝統は、もちろん大事。けど、それに挑む、チャレンジ精神も、同じく大事。あなたたちも、伝統だけで、走るわけでは、ないでしょう？」

「!!」

ピシャーン！ という擬音と、ユキノさんに雷が落ちる背景が見えます。

なんだかそろそろいちいち反応するの疲れてきました。

「では、ジャツジと参ります。最後のお題の勝利者は」

「いえバクシンオーさん。あたしの負けです」

バクシンオーさんのバクシンジャツジを遮り、ユキノさんがそう言います。

そのまま、刑事ドラマのラストシーンで崖に追い詰められ己が罪を懺悔する真犯人の如く、ユキノさんは語り出します。

「あたしは、伝統にこだわり過ぎてました。田舎からチンクルシリーズに出て来て、シチーガールを目指している……常識を破ろうとしているあたしが。それなのに、守りに

入る余り、挑戦する心を忘れてしまいました。ですので、あたしの負けです」

「……ユキノビジン、さん。伝統とは、受け継がれる、心。それを、大事に、思うのは、先人に、敬意を払う、素晴らしい、在り方だと、わたしは、思っている。落ち込むことは、ない。誇りなさい、ユキノビジン。そして、新たな、気持ちで、前に、進みなさい。想いを、受け継ぎ、そして、超えなさい。あなたには、それが出来る」

「スノウ先生……!」

スノウ先生……すごく良いことを言っているはずなのに、いつの間にか彼女の頭に追加されているやしの木のようなぬいぐるみが気になって話が入って来ません。何で他のぬいぐるみは全長10cmも無いのにその木だけ30cmくらいあるんですか。喋る度にみよんみよん揺れてます。

「最後に一つだけ、確認。……冷麺は、小辛、中辛、大辛、どれを選ぶ?」

「……! 別辛、です……っ!!」

「お見事です、ユキノさん」

「先生え!!」

「最高です! これこそ真のバクシンの勝利です!!」

ひっし、と抱き合うユキノさん、スノウ先生、バクシンオーさん。

「なにこれ」

はやくコーヒーがのみたいなあ。

Case 07 : 養護教諭とアドマイヤベガ

天高く、ウマ娘肥ゆる秋。

実りの秋、読書の秋、スポーツの秋。

色々ございますが、みなさまはどんな秋が好きでしょうか？

まあどうでもいいんですが、今、冬ですし。

はいはい、『何で秋の話題振った!?』とか思ってるんでしょう？

そんなもん、特に意味などあるわけではないッ！

はいはいはいはい、『あ、こいつアホの子だ可哀そう』って思った人、挙手ウー!!

否定できない。わたくしもそう思う。

さてさてわたくし、本日の職務を終えて職員寮の自室に戻ってきております。

かなり寒くなってきましたので長時間屋外に居ても耐えられるよう、しっかりと準備いたします。

まずはお着替え。クローゼットから厚手のセーターとフリースパンツ、それから膝まである大きめのダウンコート、別名ベンチコートとも呼ばれる、よく控えのサッカー選手とかが着てるアレを取り出し、ベッドにポイ。

続いて車椅子からベッドの上に移動し、縦横無尽にゴロンゴロン転がりながら白衣と仕事用ズボンを脱ぎ、先程ポイした服に着替えます。

足が動かないこの身、こうしないと着替え出来ないのがちよいと面倒ですが慣れたものです。

うし、おつけ。

あとは手袋と耳当てを装着すれば完璧です。

続いて荷物の用意ですね。

前々から買ってあったアウトドア用のキャリーワゴンに詰め込んでいきます。

えーつと、カイロと、ブランケットと、レジャーマットとあ、こないだ買った新しいクッションも入れましょう。念のためカイロは多めに持つてっておこうかな。

あとは共同キッチンのIHコンロで温めてる飲み物を水筒に入れていけば準備完了でございます！

あれ、そういうえぼどこ行くかとかまだ言ってますでしたっけ？ 言ってますんですけどか。うっかりうっかり。ま、そんな大層なものじゃありません。

これからちよいと流星群鑑賞と洒落込むだけでございます。

流星にくふくふんがって♪ あなたに急ふんふくふんふ♪

車椅子でキャリーワゴンを牽引しながら、鼻歌交じりに夜のトレセン学園の敷地をのんびりと進んでいきます。目指すは校舎の更に奥にある、トレーニングコースです。

市街地で星空鑑賞する際、最大の敵は街明かりです。兎に角視界に出来るだけ光を入れないようにすることで、等級の低い星明かりまで見ることが出来るようになります。

幸いにも、トレセン学園のグラウンドは照明が落ちると真つ暗な平地となる上、学園の周囲は樹木で囲まれています。街明かりつて地平線あたりで拡散して全体が明るく見えてしまうんですけど、このの木々が上手い具合に地平を隠してくれるのと、坂路用に周囲が盛り土で囲われているので、綺麗に空だけを見ることが出来るような環境が出来上がっています。

雲とか出るとそいつも街明かりを映して明るくなってしまうんですが、ありがたいことに今夜は天候に恵まれて快晴です。放射冷却やばそうですけど。

というわけで19時以降に完全に消灯したグラウンドは、決してそれが目的の施設ではないのですが絶好の天体観測スポットとなり得るのです。

まあ、何でいきなり星空を？と思われるでしょうが、わたくしこう見えて趣味と呼べない程度に色々遊んでます。

新しいぱかプチが出たら取り敢えずゲーセン行きますし、行けなかった夏合宿に未練たらたらだったので数時間掛けて鈍行列車で海の近くまで行つて軽く眺めてそのまま

帰ってきたりもします。

普段はそこまでではありませんが、特別な天体ショーとなればわたくしの興味を引くには十分でした。それなりにミーハーなんですよわたくし。

というわけで特に問題なくグラウンドに辿り着きましたが、ここに来て想定外の障害が。

わたくしの乗ってる電動車椅子って普段の使い勝手を優先して、軽量&折り畳み可能なタイプなんです。アニメ2期でテイオーが乗ってたゴルシちゃん号2号の軽量簡易版と言えば伝わるでしょうか。車輪径が手押し式の車椅子と違って小さく、10インチも無いんですよ。

これだけ小さいタイヤだと、芝では沈み込んでしまつて上手く進めないんですよ。いくら軽量とはいえバッテリーを積んだ車椅子はそれなりの重量です。そしていくらか軽量とはいえウマ娘であるわたくしが乗っておりますので、流石に無理そうです。いくら軽量とはいえ！

もう少し中央付近まで進んだ方が視界いっぱいには星空が収められるんですけど……。ふーむ、致し方ありませんね。

わたくしはワゴンを牽引していたロープを車椅子から外し、それを自分の足首に結びます。そこから車椅子からずり落ちるように降りて、腕の力だけでコース中心部を目指

して進んでいきます。

何か小学校の体育で似たようなことしましたね。手押し車とかいう、もう一人に足持ってもらって手で進むやつ。

まあ今のわたくしはそんな微笑ましいものじゃなく、シルエツトだけ見れば井戸を引き連れた貞子です。

明るいところで見ればさぞ滑稽な姿でしょうが、真つ暗な中でこんな姿見られたら悲鳴上げられても文句言えませぬね。

おいつちに、おいつちに。ずる、ずる、ずる。

「そ、そのあなた、何してるの……？」

そういう時に限ってどうして誰かに出会っちゃうんでしようねガツデム！

暗くて誰かはよく分かりませんが、まだ人が残っていたようです。

が、学園関係者なのでどうか通報だけはご勘弁を……

「……スノウ先生？」

懐中電灯の光を向けられます。うおつまぶし。

どうやら相手はわたくしのことを知っているみたいですけど、わたくしの方からは誰かが分かりません。声に聞き覚えはあるんだけども。

「えっと、誰……？」

目を細めて相手を視認しようとはしますが、逆光で分かりません。

声の主は慌てて私に当てていた光を、わたくしに顔を見せるよう自分にかざし直します。

艶やかに腰まで伸びた鹿毛色のロングヘアを白いリボンで束ね、右耳に星形の意匠が入った青い耳カバーを付けたウマ娘。彼女は、そう。

「アヤベ、さん？」

ターフを駆ける一条の箒星、アヤベさんことアドマイヤベガでございました。

「じゃあ、アヤベさんも、星を、見に？」

「ええ。ふたご座流星群……今日の流星群はどうしても見ておきたかったの。あ、ちゃんと寮長から外出許可は取ってあるわ」

アヤベさんに目的の場所までキャリーワゴンを引いてもらいました。わたくしも荷物としてワゴンに載せられた形で。気分はドナドナです。仔ウマを載せて♪ って誰がポニーちゃんやねん！ お手数おかけしてしまつてごめんなさいね。

「あんなの放つておく方が問題でしょ。正直、怖かったわよ」

はい、それはマジすんません。

というかいくら軽量とはいえウマ娘を積んだワゴンを、舗装された道路よりずっと負

荷の高い芝の上でも楽々と引く。パワーは流石ですね。そりや根性トレーニングLv. 5とかに比べれば楽でしょうけど。轍、出来てなければいいですねえ……整備スタツフに怒られちゃう。

ああ、アヤベさんとは初対面ではありませんね。過去に保健室に訪れてきてくれます。

その時、アプリ的に言うのと片頭痛と夜ふかし気味と肌あれを併発してたんですが、夜ふかしするから寝不足で頭痛と肌あれするんですよ分かってますかアヤベさん？

それなりに辛そうでしたのでベッドで横になつてもらつて、その横で良く眠れるように頭ナデナデしてたら懐かれました。

アヤベさんは寝てスツキリして体調回復できて幸せ、わたくしはアヤベさんの安らかな寝顔を拝見できて幸せと、正にWin-Winの素晴らしい経験でした。

もうちょっとアヤベさんの寝顔について詳細に語りたところではありますが、今は過去のアヤベさんより現在のアヤベさんを優先いたしましょう。

「ほら、この辺りならよく空が見えるわ」

「ありがと、アヤベさん」

目的のポイントまで運んでもらったわたくしは、早速持ってきたレジヤーマットを敷いて、その上に腰を落ち着けます。ブランケットを脚に掛け、クッションを背もたれに

して、と。カイロをいくつか開封してポツケと尻の下に。最後に水筒を手元に置けば設営完了です！ 一応ウマホにヒーリングミュージック的なものも用意してますが、そこらは状況に応じて使ったり使わなかったりしましょう。

「すごく準備万端なんだけど、慣れてる？」

感心したようにアヤベさんが聞いてきます。

いえ、昔なんも準備しないで見に行つた時、見上げ続けて首が痛くなつたのとクツソ寒かつたのを教訓にただけですよ？

とうかアヤベさん、あなたが正にその状態なんですけど。一応上着は厚手のボアジャケットを羽織っているようですが、下はジャージーありませんか。ほら、スペースにも装備にも余裕ありますからお隣いらつしやいな。

「私はいい。いつもこうだから」

んーつれない。けど体冷やしちゃうよー？ それは仕事柄ちよーち看過できないなあ。ほらほら、クッションもブランケットも大きいの持ってきたから二人くらい余裕で並んで使えるよー？

そういう意を込めてわたくしはシーートの片側に寄り、クッションを手でポンポンします。

「いえ、だから私は……っ……っ……」

にべもなく断ろうとするアヤベさんだったが、わたくしがポンポンしてるクッションを見た途端、彼女の大きな耳がピンツと立ち、尻尾がビクンツと大きく揺れた。

ん？ どうしました？ 人もウマ娘も駄目にする究極のふわふわ体験、ヨ○ボーのクッションはお嫌いですか？

そんなわけがないよなあ？ (悪い顔)

「す、少しだけ。そこまで言うなら少しだけ、お言葉に甘えようかしら」

さも仕方無さそうなセリフを言ってますが即落ちでした。目線はクッションから離れません。なんか夏にも似たような見たなあ。

ウマ娘って案外欲望を抑え切れないような生態でも持つてるんでしょうか？ わたくしも結構思うがまま自由奔放に生きてる自覚ありますし。

マツトの上に座り、まずはゆっくりとその手をクッションに沈めていくアヤベさん。そのまま何度か手を沈めて感触を確認していたかと思っただらいきなりぱたんクッションに倒れ込み、頭を預けます。

こちら、そこで「ふわあ……」とか小さく声を漏らしながら蕩けた顔をしない。

そんな見せられたら物理的にわたくしが溶けてしまうわ可愛らしい愛くるしい尊い。アツ死ぬ。

このまま召されるのもそれはそれで幸せな気もしますが、せめて今日という日をベツ

ドで終えるときまでは我慢しておきましょう。

傍らに置いた水筒を開けてキャップに中身を注ぎ、アヤベさんに差し出します。

「はっ」

「ん……んれは？」

クツションから起き上がってキャップを受け取り、くんくんと匂いを嗅ぐ彼女。

湯気を立てているそれからはほんのりとスパイスの香りがしているはず。

「わたし、特製の、チャイ。はちみつ、ジンジャー、入り。あつたまる、よ」

インド地方で飲まれる、スパイスを効かせた甘いミルクティーでございます。シナモンやカルダモンなどを控えめにして煮出した紅茶に、あらかじめ作っておいた生姜のはちみつ漬けとミルクを入れたスノウちゃんアレンジです。

「……美味しい」

「ん、よかった」

彼女の口からほうつと吐かれた白い息が、ゆつくりと空に溶けていきます。

そのまましばらくお互い無言で星空を眺めます。

時折アヤベさんがチャイをすする音と街の喧騒以外は何も聞こえない静かな時間が流れます。

「ありがとう、美味しかった」

飲み終ったキャップを受け取った時。

「あ」

「え？」

彼女の肩越しに一条の光がすうっと流れ、消えてゆきます。

「流れた」

「……見れなかった」

ちよつと悔しそうなアヤベさん。お耳ぺたーんしちやつてますます可愛い。

ごめんね、見れるかどうかは流石に運だからね。

「横になって、眺めよう、か」

「そうね」

首も痛くならないしね。

ブランケットを足元に掛けてクッションを枕にし、二人並んで寝転がって空を見上げます。

これやったことない人は一度試してご覧あそばせ。見上げると一面の星っていうのも良いですが、見上げなくても視界全てが星空ってのはそりやもう格別ですので。

「……」

「……」

そこからは、二人とも無言でただただ空を見つめ続けます。

山奥ではないので、周囲の音を良く拾うこの耳には電車や自動車の走行音や何かのアナウンスの声、誰かの笑い声などが音の濁流となって聞こえてきています。

決して静寂とは呼べない喧騒の中で眼前に広がる天然のプラネタリウムは、却って非現実感に溢れています。

時々星が流れるたびに二人で見えた見えないで一喜一憂しながらしばらく過ごしていったそんな時でした。

気付かなければこのままいられたのに、わたくしは気付いてしまったんです。

……あれ、わたくし、今、アヤベさんと一緒に、寝てる？

わたくしと、アヤベさんが、同じ寝床で、並んで寝てる？

お互いの肩と肩が触れ合う距離で、寄り添うようにして寝てる？

……やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいよくよく考えてみたらこれかなりやばいって何がやばいってそりやもういかんでしょこれ同じ布団で寝るとかこれってもしかしてもしかしなくても同衾ってやつなんじゃないのあかんあかんあかんコンプライアンスがどうかさそういことじゃなくていやさういことでもあるんだけどそんなことより何より持たない持たないわたくしの正気が保てないS A N値直葬待ったなし正直こうなるともう星空どころの話じゃない都会の喧騒とか言ってる場

合じゃないアヤベさんの息遣いとか触れてるアヤベさんの肩から伝わる体温とかもう気になって気になって気になって気になって頭がフットーしそうだよおヒイヒイヒイヒイイトエンドオ！

ええよくよく考えたら何と言うラブコメ案件っ！ 違うの、わたくしはちよいちよいち触れ合えれば良かっただけであつて、こんな大接近するつもりは無かつたの！

このままでは抑えが利かなくなつてもう養護教諭云々以前に人として社会的に致命的なことになつてしまひそうな確信がありましたのでアヤベさんに怪しまれない程度にゆつくりと起き上がろうとした時。

「時々ね」

ふいにアヤベさんが言葉を紡ぎます。

「時々、ふと考えるの。私もあの星達のように、ずっと輝いていられるのかな、って」

「いつか私も走れなくなる時が来る。そうなつても私の輝きが皆の心に焼き付くように、あの子が光を失わないように……私の全てを燃やし尽くして走り切つて勝つことが出来たら、私もあの空の光のようになれるのかな、って」

「例えこの身が燃え尽きてしまうことになつたとしても、そうやってトウインクル・シリーズに私の軌跡を残すことが、あの子の為に私が出来ることなのかな、って」

訥々と語りだすアヤベさん。目線は相変わらず星を見たままですが、見ているのはそ

の遙か遠くにある何かのようです。

ンンンンンンぐっじよぶですぞアヤベさん！

おかげでお仕事モードに入れます。色々セーフです。あーぶなかった、危なかった。はいそれでは、いち、にの、さん。

……よし。

「あの子……つて、聞いても、いい？」

「私の妹。生まれるはずだった、双子の」

「……そっか」

前世でもアプリ版でアヤベさんをお迎え出来ていなかったの『天体好きなふわふわマニアの耳デカ娘』くらいにしか彼女のことを知りませんでした。あなたにもいたんですね、もう会えなくなってしまった大事な人が。

「アヤベさんの、考え方、わたしは、好きだよ。誰かの為に、自分を刻む。そういう、考えは、わたし好み。ただ、ちよつとだけ、補足」

覚悟もガン決まってるようすし、わたくしに言えることはほぼありません。せいぜい『怪我しないようにね』くらいです。

「レースで、輝かしい、勝利を、挙げることは、良い。ぜひ、成し遂げて、ほしい。けど、自分を、輝かせるのは、それだけじゃ、ないってことは、心に、留めておいて。戦って、

闘って、勝って、負けて、笑って、泣いて、倒れて、這いつくばって、泥にまみれて。それでも、前に進んで、胸を張って、生きて、生きて、生き抜いて、最後に、『ああ、いい人生、だった』と、胸を張って、言えることが、あなたを、他の、何者でもない、唯一の、綺羅星に、してくれるんだ、ということ、覚えていて。生きられなかった、大切な人に、出来る、一番の、孝行は、生きること、なんだから」

気持ちはずごく分かりますけどね。妹ちゃんに幸せを与えたいならアヤベさん、あなた自身が幸せにならなきゃいけないですよ？

「ふふ、先生って、結構ロマンチストなのね。意外だったわ」

「そう？ 大人はみんな、ロマンチスト、だよ。普段はあんまり、言わないだけ」

「そうなんだ。先生って、可愛いって言われない？」

「よく、言われる。自覚も、してる」

見た目は悪くないですからねわたくし。存分に有効活用する所存であります。ふんすふんす。

「ちよつとそう思えなくなったわ」

ドヤ顔晒してたら何か手のひら返された。

あるえー？

「あ」

そんなことを話していると、空にすうーっと長く、長く尾を引く流れ星が、二条、寄り添うように流れていった。

まるでアヤベさんと妹ちゃん、二人の行く末を祝福するかのよう。

「……すいこ」

「だね」

彼女が目指すものは、レースを走る全ての者たちが目指しているもの。一朝一夕で達成出来るようなものではないだろうし、多くの困難も立ち塞がることでしょう。

けど、それを理解した上で彼女は挑むのです。これ以上わたくしが何か言うのは野暮以外の何ものでもありません。

だからわたくしはせめて祈ることにいたします。

「いつまでもこうして眺めていたいけど、この辺にしときましょう。流石に明日に差し障るわ」

「ん。今日は、ありがとう、ね」

「(こちら)そ。じゃ、戻りましょう」

どうか彼女の未来に、多くの光と幸があらんことを。

もし道を閉ざすようなら全力でぶつとばすからな、運命。

「ああ、ターフが傷つきそうだから帰りは先生のことを荷物扱いして運ぶのはやめとくわ」

「ん。じゃあ、自力で、這い出る」

「させるわけ無いでしょう。普通に抱えて運ぶわ」

「……え」

「ほら、抵抗しないでね先生」

「い、いやその、これ、ちょ、恥ずかし」

「諦めて。誰も見てないわ」

「ほ、ほら、他の荷物、両手、塞がってるから」

「尻尾で運べるわ。そこの車椅子までなんだから観念する。もう大人なんだから我儘言わない」

「や、年下の女の子からお姫様抱っこされるのは、あの、かなり恥ずかしいツス……あつなはこの安心感……トウंकしちゃう。おっふ。」

Case 08 : 駿川たづなとシンボリドルフ

最後の書類に目を通し、内容に不備が無いことを確認。

特に重要でも急用でも無く、学園外の案件かつ私の権限で認可出来そうなものは『駿川』の判を押し、『承認済み』のファイルボックスに入れます。他には『理事長承認待ち』と『生徒会承認待ち』、『差し戻し』や『保留』のボックスがあつて、これで全ての振り分けが完了しました。

とはいってもあくまで今日の分、ではありますけど。

時刻はおよそ午後の3時前後。応接用ソファで書類の仕分け作業をしていた私、駿川たづなは大きく伸びをしてから立ち上がり、紅茶を淹れてお茶請けのスクリーンを用意します。

それらをトレイに乗せて、『理事長承認待ち』に入れた書類たちと共に、大きな机の前で先程までの私と同じように書類と格闘している少女……否、秋川やよい理事長の元へと持っていくきます。

「理事長、こちらで本日分の書類は最後です」

「そうか。ありがとう、たづな」

彼女は積まれた書類に次々と承認印を押しながら、そう短く答えました。

頭の上では相変わらず彼女の猫が四肢を投げ出して寛いでいます。

「確認ッ。今日はこれから会議だったか?」

「はい。この後はUR A上層部との定例会議、その後にメンバー数名との会食。深夜にイギリス開催のコンベンションにWEBでの参加が予定されています」

「ここ中央トレセン学園の理事長を勤める彼女は多忙を極めます。午前は書類に目を通し、午後は各種会議や展示会などのイベント出席と暇がありません。」

更にはそこに別の出張が重なることもあり、出先で同量の職務をこなすこともしばしば。酷い時は寝食を忘れ出すのでそうならないよう私が止めていますけど。」

「どうせ会議と言ってもいつも通りのことしか話さんのだろうに。暇な老人たちの茶飲みに付き合わされるこちらの身にもなって欲しいものだな」

手を止めないまま憂鬱そうに理事長は愚痴をこぼします。

正直、私もあまり意味の無い会議に多忙な理事長を出席させたくないとは思っています。す。

運営母体という性質上仕方が無いのですが、UR Aのお歴々が口にするのは、やれ収益が、やれマスコミが、といったことに終始しています。

とてもではありませんが現役で走るウマ娘たちを慮ったものとは思えない内容に、理

事長はもとより私も辟易気味です。

「私からは何とも。ですが心情的にはとても同意します」

「たづながそう言ってくれるだけでも救われる。すぐにこの書類を片付けて準備しよう」

放っておくと本当にすぐ動きかねないので机の上に紅茶とスコーンを並べながら答えます。

「いえ、これから生徒会に仕分けた書類を持っていくので、私が戻るまで少しお休みください。その子にもこちらを」

そう言つて普段から持ち歩いている、小分けされた猫用のおやつも一緒に渡します。理事長だけ休ませようとしても言うことを聞かずにそのままお仕事を続けてしまうことが多いのですから。

「了解ッ。そうさせてもらおう」

「では少し行つて参ります」

猫が定位置から降りて机の上で理事長におやつをねだり甘え声を出したのと、彼女が書類を一旦脇に避けて猫に構う態勢になったのを確認し、私は理事長室を後にしました。

少々時間を掛けてゆつくり戻ることになりました。

学園の廊下を、生徒会室を目指し普段よりのんびりと歩いて行きます。

午後はトレーニングの時間となつているので、校舎内に生徒は多くありません。教室内に居残り勉強に励んでいたりと、友人と楽しそうに会話している生徒をちらほら見かけるくらいです。外からホイッスルの音や掛け声など、研鑽を積む音が漏れ聞こえてきます。

まだまだ寒い日は多いですが、陽はどんどん伸びてきており、徐々にではありませんが過ごしやすい気候の日も増えて来ています。

来月には入学式。今年も多くのウマ娘達が希望を胸に抱いてやってくるのです。

『すべてのウマ娘にとって最高の環境を。夢に限りなく近く、悲劇に限りなく遠い場所を』

秋川理事長の目指している理想は日々の言動から慮ることが出来ます。そしてその理想郷に、少しずつではありますがこの学園は近づきつつあります。

理事長の連日の多忙は、全てこの理想の為に費やされています。

全てのウマ娘を慈しみ、愛し、手を差し伸べ、時に見守る。一体どれほどの偉業をあの小さな体躯でなし得ようとしているのでしょうか。

私はあの人を支えたい。そしてあの人が見ている未来を、私も共に見てみたい。

だからこそ私はこうして秘書として、あの人の仕事をお手伝いするのです。

というか目を離さないようにしておかないと時々暴走しますし。何ですか温泉施設を作ろうって。温泉掘るのに一体いくらかかると思ってるんですか。

そんな事を考えながら歩いていたら、いつの間にか生徒会室前に辿り着いていました。

理事長室と変わらぬ重厚な作りのドアをノックします。

「駿川です。生徒会に確認して頂きたい書類をお持ちしました」

「どうぞ、お入りください」

落ち着いた低めの声が返ってきます。恐らく副会長のエアグルーヴさんでしょう。

「失礼します」

挨拶をして入ると、中にいたのは二人。

一人はやはりエアグルーヴさん。私を見るなり軽く会釈してくれます。

そして、もう一人。

部屋の奥に位置する荘厳な机に負けぬ程の存在感を放ち座すは、当学園の生徒会長を務める名実共に最高峰のウマ娘、シンボリルドルフさん。

海外遠征時に繋靱帯炎を発症し回復は絶望的と言われるも、決死のリハビリによって奇跡の復活を成し遂げ、翌年に凱旋門賞を制し日本史上初の八冠ウマ娘となった、文字

通りの生きる伝説。

「こちらになります。いつものように承認と否認でお分けください。特に急ぐ案件もありませんのでお時間のある時に理事長室までお持ちいただければ」

「ありがとうございます、たづなさん」

ルドルフさんは目線を隣のエアグルーヴさんに向けると、彼女の意を汲んだエアグルーヴさんが書類を受け取ってくれました。

さて、これで私の要件は完了してしまいましたが、まだ次の予定までそれなりに余裕があります。折角ですので秋川理事長には時間いっぱいまで休息を取って頂きたいところ。

利用する形になってしまい申し訳ありませんが、ルドルフさんにもうちよつとだけ私の時間潰しにお付き合いいただこうかと思えます。

「最近、学園内で何か困ったりした事はありませんか？」

「いえ、特に大きな問題もなく動いていますよ。来月の入学式や感謝祭に向けての準備も滞り無く。ああそうだ。その感謝祭に関する新たな要望が2、3挙がっていますがお預かりした書類と一緒にお待ちしております方が良いでしょうか？」

春になると学園は忙しくなります。

入学式を終えたすぐ後には春のファン感謝祭が控えています。先輩方が新入生にア

ピールする絶好の場でもありますので、生徒達の意気はとても高いものになっていきます。こうやって頻繁に要望が挙がってくるのがその良い証拠ですね。

「いえ、今いたただいて行きます。対応に時間が掛かるものがあるかも知れませんが」

「分かりました。エアグルーヴ、頼めるか」

「はい、会長」

言うや否や、先程私が手渡した書類とは異なるものが既に彼女の手にありました。

所作といい手際の良さといい、秘書以上に秘書らしい彼女からは見習う点も多いです。

エアグルーヴさんから書類を受け取ります。

「確かにお預かりしました」

「それと、問題という訳では無いのですが……個人的に少々気に掛かっていることがあります」

そう言いながら、執務用の椅子から応接用ソファの方へと移動するルドルフさん。対面に座るよう手で案内されます。それに促されるまま、私も座ります。

スツと、エアグルーヴさんが緑茶を出してくれました。本当に隙がありませんね彼女は。

ルドルフさんは同じく眼前に出された緑茶を一口啜り、口を開きます。

「ほぼちょうど一年です、当学園に養護教諭を置いていただいて」

てつきり感謝祭に関する何かの話だろうと想定していた私は、完全に虚を突かれてしまいい目を瞬きました。

「我々ウマ娘としては専門のスタッフが常駐してくれているというのは心平気しんぺいきわの思いで、非常にありがたく感じています。が、学園側としてはどんな印象なのかをお聞きしたく」

そう、去年募集した人材の中に彼女はいました。

メルテッドスノウさん。

トレーナーや整備スタッフの希望者多数の中、ただ一人『養護教諭』という役職での応募者が彼女でした。というか我々は募集すらかけていませんでした。

下半身不随で更に肺にもハンデを負っているという、走ることが本能ともいえるウマ娘にとって絶望以外何物でもない身体を持つ彼女は、書類選考の時点で十分注目に値するものでした。

学園にはウマ娘のスタッフというのは多くありません。いえ、ほぼいないと言って差し支えは無いでしょう。どうしてもウマ娘が持つ本能が邪魔をしてしまうのです。

誰にも負けたくない、先頭を駆け抜きたいという抗い難い欲望が、現役で走る生徒たちに対する嫉妬として現れてしまう傾向がとても強いのです。

それによつて仕事に対して情熱を持たなくなり辞めてしまつたり、最悪の場合は嫌がらせを行つたりしてしまふことも過去に事例がありました。

ですので学園でスタッフとなれるウマ娘は、その本能が弱いのか、またはそれ以上の信念で本能を抑え込めるかのどちらかを持つている人物に限られてしまふのです。

彼女がそのどちらに当てはまるのかと言えば、その両方でした。

面接で出会つた彼女に、私は失礼を承知の上で質問したのです。

『走れなくて辛いと思つたことは無いのですか?』と。

意地の悪い質問なのは自分でも分かつていましたが、彼女がウマ娘である以上、先々の理由もあり聞いておかなければいけない事でした。

そしてそれに対し、彼女は淀むこと無く答えました。

『わたしは、あまり、走ることに、興味を、持てません、でした。辛いと、思つたことは、ありませんし、これからも、無いでしょう。この通り、足は、動きませんが、腕は、動きます。呼吸も、難儀な、身体ですが、辛うじて、言葉は、紡げます。ならば、わたしは、今の、わたしが、出来ることを、するだけです』

華奢とも表現出来そうな体躯と、窺い知ることが難しい表情の彼女でしたが、その奥にある瞳には蒼く透き通る光が宿っていました。それが今にも消えてしまふような弱々しい蛍火だったのか、はたまた激しすぎて赤を通り越してしまつた蒼炎だったのか

は考えるまでもないでしょう。

こうして彼女の内定がほぼ確定したのですが……実は内定者には更に本人に通知するその前に、とある調査機関に依頼して身辺調査を行ってもらっていました。万が一があつてはいけませんので、念には念を入れています。

そしてそこから知った彼女の境遇は、私が想像するものより遥かに凄惨なものでした。なぜあれ程の目に遭いながら、あのような強い炎を宿すことが出来ているのか。

面接で彼女の強さを垣間見ることは出来ましたが、何故その強さを持てるのか理由は分かりませんでした。

「今言ったように我々としては彼女の、メルテツドスノウ女史を雇用していただけのこととは感謝かんおんたいとく戴徳たいとくです。ですがこの一年、彼女にこれといって目に見える功績などがあるわけでも無く、もし学園側が彼女の必要性に疑問を感じているのなら……あまり私としては望ましいものではないな、と思ひまして」

続くドルドフさんの言葉に、ピリリと緊張が走ります。

そういえば、彼女の採用を決定づけたのはドルドフさんによる勸奨でした。『彼女は必ず我々の、そしてこの学園の理想を成し遂げる為に必要になる人材だ』と。

つまりドルドフさんは、我々が彼女を解雇するのでは無いかと心配しているようです。

「そうですね……私見になりますが宜しいですか？」

「構いません。忌憚のない意見をお願いします」

ルドルフさんに促された私はやや思考を巡らせた後、口を開きます。

「では……私は医療と心理に通じるスタッフに常駐してもらうことで、その場で治療行為を行うことは叶わなくとも、適切な応急処置を迅速に行えるようになっただけでも十分な成果であると考えています」

養護教諭という職に医療行為は認められていません。それが可能なのは保健医という役職です。ですがそれには当然ながら医師免許が必要となり、まず教育機関専属のなり手はほぼ居ないのが現状です。よほど大病院に勤めるか、開業した方が現実的ですから。

もちろん養護教諭にも資格が要らない訳ではありませんが、そこまで狭き門というわけでもないようです。よほど学園のトレーナーを目指す方が大変でしょう。

では医療行為の行えない人物は必要無いかと言われるとそんなことは無いのです。例え行えないとしても、その職を全うする為に収めた知識は非常に有益なものです。

例えば誰かが怪我をしてしまったとして、治療を行える医療機関に赴くまでの間、適切な処置が行えるということは回復の可能性が数倍跳ね上がるということなのです。

トレーナーにもベターな処置は施せるでしょうが、ベストな判断を下せる養護教諭は

やはり貴重です。

「それに功績が無いという事はありません。失念していたというのは言い訳にしかありませんが、当学園にしっかりとした衛生観念を教えてくれたのは彼女です。今までになあで行っていた事をマニュアル化し、誰でも実践できるように整備してくれたのは彼女です。そういった点を鑑みても、私は彼女が来てくれて良かったと考えています。むしろ今まで養護教諭を置いていなかったことの方が問題でした」

応急用品の一新、プールの水質管理、学園の衛生指導など、普通の教育機関なら当たり前と言えることかも知れませんが、彼女はこの一年で次々と改善してくれました。本当に何故今まで彼女のような存在が居なかったのでしょうか。

「直接聞いたことはありませんが、恐らく理事長もそうお考えだとは思いますが」

そう締めくくって私はお茶を頂きます。やや冷めて程よい温かさになったそれが、私の喉を潤していきます。

私の話が終わると、その回答に満足したのかドルフさんは緊張を解きました。

「そうですか。それを聞いて安心しました。是非彼女には今後このまま学園に在籍し、貢献して頂ければと願っておりましたので」

そう言つて微笑むドルフさん。先程までの剣呑な空気はすっかり身を潜めていきます。何故ドルフさんはそれほどまで彼女に固執するのでしょうか。……そういえば

心なしか何かを懐かしむような雰囲気が見え隠れしているような？

「……少々気になったのですが、ルドルフさんは過去にメルテツドスノウ先生と面識がおありですか？ 何か彼女の事を話している時の貴女が、追想に耽るようにも見受けられましたので」

私がそう聞くと、ルドルフさんがお茶を口に運んでいた手が一瞬、ピタリと止まりました。ほんの刹那ではありませんでした。

「ふふふ、流石たづなさんはよく見てらっしゃる。まあ以前会ったことがあるのはその通りでして、彼女の話になるとつい、そうなってしまうこともあるかも知れません」

「まあ、そうだったんですね」

なるほど。知人であったというのなら今までの態度にも納得がいきます。

「ええ。その時に彼女に救われた身なんですよ、私は。あの出会いがなければ、今の私……凱旋門での勝利はおろか、走ることすらも諦めて引退していただろうと思うくらいには」

「……それほどまでの事が？」

知人どころの騒ぎではありませんでした。ルドルフさんの言が正しいとするならば、もはやそれは恩人と呼んで差し支えの無いものでしょう。

更には結果的とはいえ、URAへの功労者でもあると言えるかも知れません。もし

あのシンボリドルフが夢半ばで引退してしまつていたら……そんなifの可能性を、間接的とはいえ彼女は消してくれたのですから。

ふと見ると、エアグルーヴさんも耳を真つ直ぐ立てて目を見開いたまま固まつてしまつています。彼女も初耳だったのでしょうか。

「尤も、彼女の方は覚えていないかも知れませんがね。採用面接に同席させて頂いた時もそれらしい反応は見受けられませんでしたし」

そうおどけたように語るドルフさんですが、耳が先程よりやや垂れています。

無理もないでしょう。人生の大恩人から自分のことを覚えている素振りが見られなかったのですから。私だつてそんなことになったら悲しくてしよんぼりしてしまいます。

「あら、気になるのですしたらお会いになられては？」

「こう見えて私は臆病でしてね、たづなさん。面と向かつて覚えていないなどと言われたらどうなつてしまうことか」

「あの先生なら何となく大丈夫だとも思いますけどね」

とはいえ、私も彼女とすっかり話したと言えるのは、それこそ採用面接の時以来な気がします。

普段から会議で顔は合わせていますが、事務的なやりとり以外にした覚えは無いまま

一年も過ぎてしまいましたし、今度理事長も交えてゆっくりお話を伺ってみるのも良いかも知れません。

いえ、それよりもお酒の席に誘った方が胸襟を開きやすくなるでしょうか……ですが彼女がアルコールが駄目な可能性もありますし、そこは追々でしょうね。

やや温くなったお茶を頂きながら時計を見ると、それなりに良い時間でした。そろそろ戻っても良い頃合いでしょう。

軽く雑談するだけのつもりでしたのに、思った以上にとんでもない内容を聞く羽目になってしまいました。

「思ったより話し込んでしまいましたね。理事長をお待たせしていますのでそろそろ失礼します。貴重なお話、ありがとうございます」

「ああ、こちらこそ引き留めてしまつてすみませんでした。書類は出来るだけ早めにお持ちしますよ」

「畏まりました。では」

そのまま二人に見送られ、生徒会室から退室します。

一体、ルドルフさんと彼女との間にどんな邂逅があつたのでしょうか……。

もし聞けるのであれば、是非今度は先生からそのお話をお聞きしたいものですね。

Case 09 : 養護教諭とミホノブルボンたち

新緑の鮮やかさが徐々に力強い青葉に移り変わろうとしている爽やかな気候の中、今日も今日とて暇人してるこのわたくしメルテッドスノウですが、別に本当に何もしてないわけではございません。

備品管理にプールの水質チェック、掲示や配布するための保健だよりの作成などちゃんとお仕事はしております。

まあそんなにやることも多くないんで午後になると暇になるんですけどね。わたくしが暇なほうがウマ娘ちゃん様達が健康であることの証拠なのでとても良いことです。

で、そんな働きの暇人であるこのわたくし、スノウちゃんが今何をしているかという……

トランプタワー絶賛建造中でございます！ ヤーバイですね、もう暇人の極みです。

え？ そこまで暇ならウマホでゲームでもしてろって？ はっはっはご冗談を。お金払うどころかお給金いただきながらウマ娘ちゃん様達と触れ合えるというのに、一体何に課金しろというのですか？

小さな三角をいくつも積んでは崩し、積んでは崩しを何度も何度も何度も繰り返り

返すこと数十分、ようやくやって参りましたこの瞬間。

5段タワーの最上段を残すのみ！

さー落ち着けーわたくし。慎重に、慎重に、そーそーと……

「失礼します！……こちらにメルテッドスノウ先生はいらっしゃいますか！」

スパアンと勢いよく戸を開け元気のいい声が入って来た。

いくら無表情に定評のあるスノウちゃんでも、感情が無いわけではございませんのでいきなりそんな事になったらそりやビクツとしちゃいますよ。

そしてビクツとしちゃえばですよ、当然タワーは崩れるわけですよ。

あと僅かで完成しそうだった大三角形は瓦礫と化してしまいました。

んー残念！ もう少しでしたね。

まあこんなもん崩れるのが当たり前の欠陥住宅ですし仕方ありませんね。

さてそんなものは置いといて。いらっしゃったのはどなたかな？

栗毛のロングに水色の瞳、なんか菱形のアクセントが付いたシルバーなヘアバンドを付けた娘……サイボーグウマ娘、ミホノブルボンでした。

おや、後ろに一回り小柄な黒鹿毛の娘が……ライスシャワーも一緒のようです。

はて、私と同じようにあまり感情を表に出さない彼女がこんな勢い良く来るなんて、何か緊急事態でもありましたかね？

……

……

……

あれ？ ブルるん動かなくね？

「ぶ、ブルボンさん？ ブルボンさん!? ど、どうしたの？ ブルボンさん！ え、えと、ど、どうしよう、どうしたら……」

なんかお米様も慌てちゃってるぞどうしたブルるん。もしかしてアレか？ 自分が勢い良く入って来てトランプタワー崩しちゃったからフリーズしちゃった系？

ただの時間潰しだったし気にしなくて良いんだけど……

まあフリーズっちゃったのは仕方無いのでお米様に何があつたのかお聞きしましょう。

「……落ち着いて。急患？」

「ふえ、いえそういうのではなく、えと、えつと……」

わたわたするお米様かーわいいいなー。

いやそうではなく。ちよつとこちらの娘も落ち着くまで時間かかりそうですし、念の為ブルるんの診察しておきましょうか。

「ふむ……意識は、あるけど、思考して、いない……こういう事、以前には？」

「え、つと、はい、たまに、時々」

「彼女が、苦しんだり、倒れたり、することは？」

「ない、です。普通に戻ります」

ふむ、まあ心配する事態ではなさそうですね。お米様の反応を見る限りは割と平常運転の不具合のようです。

平常運転の不具合って何……？

「……よく、分からないけど、すぐ、どうこうなる、ものでは、無さそうだね。取り敢えず、ベッドに、寝かせて、おこうか。悪いけど、彼女を、運ぶの、手伝って、くれる？」

「は、はいー」

心配は無さそうですが一応ベッドには寝かせておきましょう。再起動した瞬間に倒れたりしても難儀ですし。

「しばらく、様子を見て、起きればよし、起きなかつたら、担当に、連絡して、最悪は、救急搬送、かな。まあ、大丈夫そう、だけど」

万が一があつてはいけませんので、最悪は想定しておきます。これでもデキる養護教諭なんですよ？

「大丈夫、と思います。ごめんなさい」

もー謝ることなんて無いのにい。お米様、何も悪くない。悪いのはトランプタワーなんか作ってたわたくしなんですから。ほーらお米様スマイルアゲイン？

「何も。何か、飲み物、淹れるよ。それで、何か、あった？ あんな、元気に、入って、きたんだし」

「えっと、無いことも無いんですけど、その……」

「？」

言い淀むお米様。急患とかじゃないなら何か相談事かしら？

「どちらかというと、用があったのはブルボンさんなので、いま私が聞いてしまうのも違
うかな、というか……」

「なるほど、理解した。じゃあ、彼女が、起きるまで、何か、してようか」

Serial Code ”MIHONO BOURBON”

System Restart

∴

∴∴

∴∴∴∴

意識、100%回復。

触覚、100%回復。

視覚、45%回復。

聴覚、80%回復。

嗅覚、75%回復。

「……や、だめっ……そんなと……」

回復中の聴覚が音声を拾います。92%の確率でライスの声と判明。

「ふふ、さつきは、さんざん、攻められた、からね、今度は、こつちの番。ほら、こつちも」
57%の確率でメルテッドスノウ養護教諭と推測。確率向上にはサンプルの取得が必要です。

「あつ、そこは……！ そんなとこめくつちや、やだ……」

「ふふふ、ここかな？ もっと、いくよ……」

ライスの声紋からステータス『困惑』及び『焦り』を確認。

「やだ……お、お願いします、もうこれ以上は……」

「だめ。容赦、しないよ」

「あつ、ああつ、あああああつ……！」

WARNING! WARNING!

身体機能、90%回復。通常動作に問題無し。

緊急行動『飛び起きる』を実行!

「何をしているのですか!?!」

「あ、ブルボンさん起きました？」

「ん、良かった」

「そんなことより！ お二人共一体何をし、て……トランプ？」

視覚、100%回復。

トランプでゲームをしているライスとメルテッドスノウ養護教諭を確認。

「ん、神経衰弱」

ブルルンが目を覚ましたようですね。良かった良かった。

でも何であんな慌てたように飛び起きたんでしょう？ 取り敢えず起きたてのブル

ルンには状況を伝えておきます。

「そうでしたか、私が再起動するまで時間潰しでカードゲームを。ご迷惑をおかけして

しまい大変申し訳ありません。このお詫びは後日改めて必ず致します」

「気にする、ことじゃない」

「いえ、そういうわけには参りません」

こんなことでお詫びをされるようならわたくしお礼やお詫びだけで毎日が終わってしまいます。こちらとしては業務をこなしたただけなので畏まられることはしたつもり

もありませんし。

「しかしなかなか引き下がろうとしないブルルん。そんな思い詰めること無いねんで？」

「そ、そうだ。ブルボンさんも一緒にやる？ トランプ」

状況が平行線になってしまったのを察したのか、そこに助け舟を出してくれるお米様。この娘はほんに健気な娘です。庇護欲くすぐられまくりです。

「いえ、私は……」

何か言いかけたブルルんが動きを止めます。あれ、またフリーズ？ ブルボンプチフリーズ？ わたくしはチョコラングドシャが好きです。あ、今は関係無いですねえいせん。

「ブルボンさん？」

再度ベッド行きかと思われましたが単純に考え事してただけみたいです。すぐ動き出します。

「……そうですね、やはり私も混ぜていただいて宜しいでしょうか？」

「何か、聞きたいこと、あるって、聞いたけど？」

「いえ、それはもういいのです」

あれ？ あんな勢い良くここに来たくらいだし、かなり気になる案件かと思つたんですけど……まあ本人が良いって言うなら良いか。無理に聞き出すことも無いでしょう。

「そう？ ならいいけど。それじゃ、ゲームを変えて、遊ぼうか。そうだな……二人とも、大富豪は、分かる？」

お米様がこくこくと頷きます。

対してブルるんはぷるぷると首を振ってます。

ふむ、ルールを説明しても良いですが出来れば二人共馴染みのあるゲームの方が良いでしょうね。

「ん、じゃあ……ブラック、ジャックは？」

今度はブルるんがこくこく、お米様がぷるぷる。

……あれ、これすぐ可愛くね？

「ん……ポーカー、テキサス……」

二人ともぷるぷる。

やっべ、超可愛いんですけど。

何これ。延々と見てたい。

「ふむ。……ババ抜き、しよつか」

二人ともこくこく。

やっべ、超可愛いんですけど。

何これ。延々と見てたい。

「びいつ!？」

「ライス、そんな分かりやすい反応をしてはメルテッドスノウ養護教諭にバレてしまいますよ」

「うん、十分、分かった。引いたね? ババ」

という訳で、ただいまババ抜き真つ最中でございますが、表情の読みづらいわたくしとブルるんに、お米様大苦戦中でございます。

にしても本当にこの仕事就けて良かったわあ。

片や無敗二冠を達成した坂路の鬼、片やその鬼が目指していた三冠を阻止した刺客。そんな超有名ウマ娘とのんびりババ抜き出来るなんて。

「そういえば、ライスシャワー、さん。天皇賞、おめでどう」

「あ、ありがとうございます」

お米様からカードを一枚取りながら雑談です。

先月くらいにこのお米様は春の天皇賞でパクパクさんことメジロマックイーンを制し、更にレコード樹立という偉業を成しています。アニメ2期の8話のアレです。

日曜でしたし、折角なのでわたくしもレース場まで観戦に行きました。京都までくらないなら新幹線で日帰り出来る良い時代です。

にしても、いやあ凄かったですね会場の熱気やら臨場感やらが。テレビで観るのはやはり違います。

何でしょう、走るウマ娘ちゃん様達の気迫でしょうか。ビリビリ来るんですよ。ライブハウスか花火大会みたいな感じ。

きっと普通のウマ娘ならこれに当てられて、自分も走りたい競りたい勝ちたいとかウズウズしちゃうんでしょうね。

わたくしの場合はウマソウルが全く仕事しませんので、『うわーみんなすっげー』くらいにしか思いませんでしたけど。

「でも、あの天皇賞で勝てたのは、ブルボンさんのおかげなんです」

お米様がブルルンからカードを取りながらしみじみと話を始めます。

「私、みんなから嫌われてるんです。ブルボンさんの三冠、止めちゃったから。天皇賞でも、マックイーンさんの連覇、阻止しちゃいましたし」

「ライスは悪い子なんだ、悪役なんだ。誰もライスが勝つことを望んでない、いらぬ子なんだって思っていました。天皇賞も、本当は出るのをやめるつもりでした」

やや俯くお米様。きつとその時の情景を思い返しているのでしょう。

手元もちよつと震えているような気がします。

ん、あれこれ大丈夫？ PTSD気味になってたりしない？

ちよつとその場合はスノウちゃん全力モード解放なんですけど。

「けど……けどブルボンさんが、そうじゃないって教えてくれました」

そう言つて顔を上げるお米様。目には恐怖の色は見えませんが、むしろキラッキラしてあります。

良かった。史実(?)通り、受け止められていたみたいですね。

「こんな私のことを、ヒーローだつて、言つてくれました。みんなの夢と希望を壊したらイスのことを、新しい夢と希望を与えてくれたヒーローだつて。今は違つても、勝ち続けていればいつか、それは歓喜と祝福に変わるんだつて言つてくれたんです」

実際何であそこまでブーイング受けてたんでしょうね？ 勝負の世界に絶対は無いなんて自明の理だというのに。お米様のヒール要素なんて色が黒い以外に何かありますか？

「そしてそう言つてくれたブルボンさんも、私にとつてヒーローなんです。また彼女と一緒に走りたい、前よりも強くなつて戻つて来るブルボンさんと競い合えるような、強い自分でありたい。そう思えたからこそ、私は天皇賞で勝つことが出来たんです」

「ライス……」

そう言つて微笑み合うお米様とブルるん。

ぐわあああああああああつ！

萌えるっ！ 萌え尽きてしまおうっ！

なんとという尊み！ なんとという暖かさ！

バ鹿なっ！ これが、これがミホライだと言うのかああああっ！！ あっ

「ライス、私も同じ気持ちです。ですがそれはそれとして、これであと2枚です」
「えええっ!？」

とても濃厚なミホライ成分を補給させていただいた矢先、なんとも容赦の無いブル
んの一言。あの話の流れで淡々とゲーム進められてたんですかい。パないの！

「勝負の世界は非情です。レースでも、ゲームでも」

「ううう……先生が全然ババ引いてくれないよう……」

お耳ぺたこして涙目のお米様。おっふ、口からレインボーな何かを吐きそうなくらい
可愛すぎるけど手加減はしてあげられませぬ。だってあんまりにも分かり易すぎるん
ですもの。というわけでわたくしもカードを貰いまして、お、揃った。

「勝負の、世界は、非情。私も、あと2枚」

「ひ、ひどいよ二人とも……」

状況はブルるん2枚、わたくし2枚、お米様1枚といった状況でお米様がブルるんか
らカードを引く番。

誰かが上がれば、そこからなし崩し的に勝負は決まるでしょう。

お米様がブルるんからカードを引きますが、片方はババが確定してますので揃うはずもありません。続いてブルるんが私から引いて勝負を決めに来ますが、残念揃わず。

さあ状況変わりましたしてブルるん2枚、わたくし1枚、お米様2枚のうち1枚はババという状態でわたくしがお米様からカードを貰う番です。

「そろそろ、決着と、いこう。ババは、どっちかな？」

「ひうつ！ おおおおしえませんんん……」

そう言うものの、わたくし側から見えてあからさまに引いて欲しそうな右のカードと、手の奥に引っ込めている左のカード。分かり易い。

目線はずつと右のカードを見ている。超分かり易い。

すうつと手を右に持つていくと耳が立ち明るい表情になり、左に持つていくと耳が萎れて泣きそうな顔になる。分かり易すぎるにも程がある。

けどごめんね、勝負の世界は非情なの。

私は左のカードに指をかけ、抜き取ろうとします。するとそれを持つていかれたく無いのでしよう、お米様がカードを持つ指に力を籠め、抵抗します。

が、そんな抵抗むなくカードを抜き取るわたくし。

ふっ、勝った。これで……

ジョーカーだとおおおおうつつつ!?

この土壇場で自分の読まれ易さを逆手に取りよったぞこの娘!! これまで分かり易い反応を敢えて行うことで、最後の最後、この瞬間にブラフを行い、確実に釣り上げる策……それが今、見事に成立した!!!

なにこの娘、天性のギャンプラーなの!?

お米様、恐ろしい娘……!

最後に差し切る、これが黒い刺客と言われた彼女の真の力なのか……

「やった、上がった」

そしてしれっとイチ抜けしておられるぞ!?

やばたにえん。マジ出って感じ。

均衡の崩れた今、もはや決着はすぐでしょう。

ブルルんがわたくしから引く番です。

ぐぬぬ……お米様には完全にしてやられました。流石は大観衆の眼前でレースやラ

イブを行う胆力を持った現役レースウマ娘と言ったところなのでしょう。

「これで決着です。申し訳ありません、メルテッドスノウ養護教諭」

「くっ……せめて、ビリは、回避して、みせる。さあ、引くといい」

まだわたくし達の戦いは終わっていない。さあ、勝負ですぞブルルんよ!

スノウちゃん先生の次回作にご期待ください!!

「楽しかったね、ブルボンさん」

「ええ、ライス」

私とライスはあの後も雑談を交えながら何度かカードゲームを行い、ひとしきり遊んだのち、寮へと戻って歩いていました。

最初のババ抜きは結果的には私の敗北でした。

ライスの見事な戦略によつてダメージを受けていたメルテッドスノウ養護教諭からなら勝ち切れる可能性が高くありましたが、そう上手くはいきませんでした。

「でも、本当に何も聞かなくても良かったの？」

「ええ。そもそも完治はしているのです。その状態で相談してもメルテッドスノウ養護教諭を困惑させるだけだと判断しましたので」

そう、私達が保健室を訪れた本当の目的。

私の脚についての相談をするつもりでした。

去年、ジャパンカップ出場に向けてマスターの指示のもと鍛練を行っていました。

しかし菊花賞でライスに破れた直後だったのもあり、自分でも気づかぬ内に隠しステータス『焦り』を取得していたのでしよう。マスターに指示された以上の負荷を課した結果、大きな怪我を負ってしまいました。

幸いにも怪我は完治しましたが、何か違和感が残ります。具体的には明言出来ませんが、走ると脚のどこかに小さなエラーの発生を感じるのです。

全力で走れないことはありませんが、このエラーを抱えたまま走るのは危険であると判断しました。

私はその旨をマスターに相談し、再度ドクターの診察を受けました。

しかし結果は『異常なし』。ドクター曰く、リハビリを続けていけば自然と回復するのではないかとのことでしたが、何かさういったエラーとは異なるものであると感じます。

天皇賞の後、私はライスに現状を伝えました。

このままではライスと全力で勝負することが出来ません。彼女との再戦を。それを目標にこれまでやって来たというのに。

マスターやライスのアドバイスで、私は色々な手段を試しました。

著名な整体師による施術、温泉による療養、心理カウンセリングなど、思い付く限りの事を試してみましたが改善した様子はありませんでした。

もはや打つ手は無いのかと思われた時、中庭を歩く私とライスの目に入ってきたのは、『表はあっても占い』という看板を掲げたテント……マチカネフクキタルさんの占い小屋です。

占星術などの統計学ならまだしも、水晶占いという非科学的極まりない手法ですが、駄目で元々くらいに気持ちで私達はテントの中へと入って行きました。

そこで占いを行って頂いた結果が『保健室へ』という一言だけ。フクキタルさんもこの結果に訝しんでいました。こんな短くて具体的な結果が出たのは初めてだと。

保健室……去年からメルテッドスノウ養護教諭が在籍している場所。もしかして彼女が何か治療を行うことが出来るとでもいうのでしょうか。

先程までの非科学的云々のことなど忘れ、私は早足で保健室へと赴き、勢い良くドアを開け放ったのでした。

……その後は、結果としてゲームを行っただけでしたが。

冷静に考えれば分かることでした。医療行為を行うことが出来ない養護教諭にこの話をしたところで相手を困惑させるだけであると。

そう、この脚に感じる違和感を……違和感、が……？

「違和感が……エラーが、無い？」

私はその場で立ち止まりません。

恐る恐るその場で足踏みをし、腿上げを何度か行ってみます。最初はゆっくり。徐々に速く。そして全力で。

やはりエラーは発生しません。

「ブルボンさん？」

数歩先を進んでしまっていたライスが気付き、声を掛けてきます。

「ライス。メルテッドスノウ先生は停止中の私に何かしましたか？」

私にメルテッドスノウ先生から特別な処置を施された記録はありません。であれば、私の意識が無い間に何かをされたと考えられます。

ライスならその間の私を見ているでしょうし、何かをしていたなら記憶に残っているはずです。

「え？ うん……特に何かをしたりはしてなかったよ。ベッドに運んだ後、熱と脈を測られたくらいかな。私もされたけど」

しかしライスの話を聞くに、その様子はありません。ですが、少なくとも占いを受け、保健室へ赴くまでは感じていた違和感が今無いということは、確実に彼女が何かをしたということを示しています。

「すみませんライス。私はこれから急遽マスターの元へ向かわねばならなくなりましたので先に寮に戻っていてください」

「え？ うん。わかった」

ライスと別れ、足早にトレーナー室へ向かいます。一刻も早くこの状態を報告しなければ。

しかし最良の結果に辿り着けたというのに、過程が不明すぎます。
メルテツドスノウ養護教諭……あなたは一体、何者なのですか？

Case 10 : 養護教諭とアグネスデジタル

「けっほ、けっほ」

どもつ、メルテッドスノウちゃんどすえ。

先程食堂で本日も美味でありました昼食を摂り終え、のんびりとマイテリトリー保健室に戻ってる最中でございます。

いやあ開幕一発目から咳なんかしちゃって申し訳ないです。なんか昨日あたりからちよつと喉の調子が宜しくないんですよね。

ヴィッツ〇ス舐めてりや治るだろ、と一晚様子見てみたのですが……調子が戻るどころか、ほんのり微熱も出てきてしまった次第であります。こりや一足早い夏風邪でも引いちやったかなと朝から風邪薬キメております。効いてよね、早めのパブ〇ン。

葛〇湯も飲んでますし、まあ夜辺りには治ってるでしょう。あー鼻の奥が痛い。

今日はあんまり動かん方がいいかなーとか思ったんですが、そもそもわたくし普段からそんなに動いて無いですよねH A H A H A !

……これ、もしかして逆に動かなすぎて体調崩しちゃいましたかね？ あんまり運動は好きではありませんが、体調戻ったら健康維持程度にもう少し身体、動かしましょう

か。

というわけで学園の廊下を車椅子で進んでいると、何かが廊下に落ちてるのを発見。おや、何でしょう？ 遠目で見える限りはノートっぽい？

取り敢えず近寄って落とし物を拾い上げてみます。

あ、今『足動かないのに地面に手が伸ばせるのか？』ってツツコみましたね？ ちつちつち心配ご無用、普段から車椅子には100均で買ったマジックハンドを用意してあります。これが無いと周りに誰もいなくて何か落としたりした時、地味に詰むんで。

落ちてたそれをよくよく見ると、厚さはノートくらいですが表紙が特徴的。ツルツルの光沢がある表紙に、背中合わせで描かれたウマ娘が二人。あれ、これって……まさかまさかのウゝス異本!? もとい同人誌です。前世では良く購入させて頂いておりました。えっちいのもえっちくないのも。

つーかコレ学園こんどじにあつて大丈夫なやつなんですかね!? 一応ご丁寧に全年齢マーク付けてるようですしKENZENではありそうですが……てかアートポストのフルカラー表紙じゃないですか出来良いなあ。

念の為内容も軽く拝見。ふむ、漫画形式のウマ娘×ウマ娘でオリ本ですか。ふむ、ふむ? ……ほう。ほお……。

思わず丁寧に描かれている内容にちよつとじっくり目を通し始めてしまった時、遠く

からダダダダダッと激しい足音が近づいて来ました。

「た、確かこの辺りで！ 落としたとしたらこの辺りで！ 誰かに見つかる前に！ 誰かに拾われてしまう前に！ 回いっ！ 収うっ！ しないとおおあああばばばばばばばばばあばばああああああっ！」

ズザザザザーと滑り込んでわたくしの目の前に現れたのは、ピンクのツーサイドアップを赤い大きなリボンで彩ったウマ娘、アグネスデジタルです。

彼女の視線はわたくしを見て固まってしまっており、厳密にはわたくしの手の中にある同人誌に注がれてしまっているようですが。

今さっき叫んでた内容的に、誰かに見られる前に落としてしまったこの本を回収したかったのでしょうか。が、わたくしに拾われていて、時既におすしであつたと。

ん？ てことはこれ彼女の本か。……これ彼女が描いた本かつ！

「けほっ、アグネス、デジタルさん」

「は、はひいっ！ もももも申し訳ありません先生！ 学業に関係ないモノを持ち込んでしまい言い訳のしようもございません以後十分に注意いたしますのでどうかそちらの本は返して頂けませんでしょうか卒業してお願い申し上げますっ！」

早口で一息に謝罪を述べて90°の綺麗なお辞儀をするデジタルさん。放っておくと言葉通り土下座しかねない勢いです。

ま、そりやそうだ。もし他の学生に見つかったとしても素早く回収してしまえば無かった事に出来たかも知れなかったでしょうに。よりにもよって職員側のわたくしに発見されてしまったのですからもう揉み消しは不可能と判断するでしょう。

誠心誠意謝罪して返却してもらおう。本来ならば最善の手段だったと思います。いかがわしい物でもありませんし、口頭注意で済むレベルです。

だがこのスノウちゃん、そんな戯言は聞かぬ！

わたくしは容赦なく彼女に告げます。

「在庫は、ありますか？」

「はいすみませんっ！……はい？」

是非買わせろください。

保健室に戻って来たわたくしは、デジたんの同人誌をじっくり読み耽ります。

——ペラッ

見た目優等生のお転婆娘『ガイアトリアドール』と、外見不良中身純情娘『スリヴオ
ヴィッツ』。

このウマ娘二人がことあるごとに衝突しあい、競争しながら相手の力を認め、唯一無二のライバルとして切磋琢磨しあう中、徐々に相手のことを常に意識するようになり、

その想いは友情からやがて違うものに……と、まあベタつちやあベタなお話なのですが。

これ、フィクションだよな？ ちよつと某チームスピカの二人に似過ぎてない？ トリアドールって確か赤系色の一種だし、スリヴォヴィッツは蒸留酒だったような……。

——ペラッ

にしてもこの絵のタッチ、及び表現技法。ベースは少女漫画風ですが、時折少年漫画で良く使われる手法なども取り入れられて読み手を全く飽きさせません。レースシーンなど臨場感溢れまくりで、まるで隣を走っているような錯覚を覚えるレベルです。

——ペラッ

読めば読むほど先が気になり、ページをめくる手が止まりません。ギャグあり、シリアスあり、間延びし過ぎず、詰め過ぎず。それが40ページという普通に読み切り漫画並のボリュームで描かれています。いや同人でこのページ数はかなり多い部類だぞうげえな。

——ペラッ

……ふう、最後まで一気に読みしまいました。

実にてえてえ。非常に良い成分を補給させて頂きました。

流星はアグネスのやべーやつでございます（褒め言葉）。

「こほん。アグネス、デジタル、先生」

わたくしは同人誌を閉じながら、わたくしの対面に座って下を向きながら終始ブルブル震えっぱなしのデジタンに声を掛けます。

はい、彼女はわたくしが本読んでる間、ずーっと対面におりました。

廊下で拾ったこの同人誌を、買わせる返しての間答をしていた結果、とりあえず他人の目につかないところで、という話になりここ保健室で読んでいたのですが、ちよつと冷静に考えると酷なことをしてしまったかも知れません。

……うん、自分の欲望の塊を眼前でマジマジと見られるってちよつと、いやかなり恥ずかしいかも。羞恥のあまり死にたくなるかも。

「ひよっ！ いいいいいやいやいや先生とか勘弁してくださいあたしの作品程度なんてどこにでも転がってる道端の石ころみたいに取るに足らないものですからして」

あつはつは、ご冗談を。これだけしっかりした作りの本、そうそうお目にかかれません。少なくとも前世でそれなりにお台場夏冬の祭典に行っていました、大手クラスの上等品ですよこれ。

勿論小さいサークルの品が悪いと言っている訳ではありませんが、単純に一個人でここまで綺麗に装丁するのって準備も資金も大変なんです。

そして何より、デジタンが作ったところ、最重要です!! ご本人の手ずから作ら

れたキャラグッズとか、もはや聖遺物ですよ。

わたくし以上にウマ娘愛に溢れて零れまくってる彼女が、どういった目線、どういった想いでウマ娘ちゃん様達を見ているかが間接的に記されたこちらの本は、ある意味バイブルと言っても過言ではありません。

むしろこれはもうほぼデジたん自身と言っても過言では無いかも知れないッ！

……いや流石にそれは過言か。

「そんなこと、無い。続きは、ありますか？　まとめて、買わせて、ください」

「ご、ごめんなさいそれ最新刊なので続きはまだ描いてる途中なんですというかちよつと情緒が持たなそうなので敬語止めてもらえませんか」

「そう？　なら、そうするね。じゃあこれ、買わせて。他には、ある？」

作家先生には敬意を払って丁寧口調にしたいところですが、本人からのご所望とあらばそうしましょう。

それはそれとしてこの本は是非手元に置いておきたい。本棚に入れて薄いながらも確実にそこにあるという存在感を感じてニヤニヤしたい。時々寝る前とかに読んでニヤニヤしたい。

ちよつと車椅子をデジたん近づけて詰め寄ります。続刊はまだでしたか。では他の既刊は？　あるなら速やかに出したまえ。さあハリーハリーハリー。

「アツ、距離近づ、何この美人すぎる先生しゆきい……じゃなくて、いえ、あたしそれ結構確認の為に開きまくっちゃって跡ついてますし、ちよつと汚れてますし、とてもお金を頂けるような代物では無いので、どうしても言うならせめて新品を差し上げますので」

「そういう、わけには、いかない。けほつ、これは、対価を、払うべき、作品。あなたが、表現して、わたしが、共感した、情熱の、塊。ただで、貰うなんて、わたしの、矜持が、許さない」

こういった同人活動にはわたくし、投資を惜しみません。大手壁サークル規模なら兎も角、個人の中小サークルなんかは売上回収なんて夢のまた夢です。せいぜいその日のご飯代や他のとこの作品を購入する資金の足しになる程度。

次も書いてもらいたいからこそお金を出すのです。

「そんな、そこまで評価して頂けるようなものではありませんので……あたし以上に素晴らしい作品を出す方は沢山いらつしやいますし……」

うーん、おデジさんよ、自己評価低めなのは前世から存じてましたが、やり過ぎると相手にも自分にも失礼になつちやいますよ？

「んー……謙虚が、美德とは、言うけど、過ぎたる、謙遜は、止めといた、ほうが、いいよっ？」

「ですが、本当に大したものでは無いので……」

「そうなるよ、この、作品に、価値を、見出だした、わたしの、見る目は、節穴だって、ことに、なるよ？」こほっ

「……っ！ そんなつもりは……」

まあ謙虚が美德なんてモノ自体が前時代的な古い考えらしいですしね。

相手の褒め言葉を否定する、それ即ち相手の想いを否定するのと同義です。素直に受け取るときましよう。

「それに、あなたが、心血を、注いで、作り上げた、本を、あなたが、卑下しては、いけない。あなたの、想いを、あなたが、否定しては、いけない」

「!!!」

自作品のファン第一号は他でもない自分なんですから、そこは最後までちゃんと生み出した作品を愛してあげましょう。数年後に黒歴史と化して悶絶する可能性も微レ存ですけど、そこも含めて。

「自分に、自信が、持てないと、作品にも、自信が、持てなく、なるのは、分からなくも、無いけど、程々に、ね？」

「は、はい。ありがとうございします……」

ちよつと囁んだぞ可愛いなあデジたんは。

自信を持ってなんて言うつもりはありません。そういった自信の無さも含めて彼女の個性です。自ら変わっていく分には良いですが無理に変える必要などありません。極端にならなければおっけーなのです。

「けほつ。で、先生。ここの描写、なんだけど」

「あの、すみませんが先生呼びも止めてもらえると……」

だめかあー。わたくし絵心はさっぱりさっぱりなので描ける人はそれだけで尊敬の対象なんですけど。

いったったか保健だよりに動物のイラスト描こうとしたら名状しがたい何かが出来上がったんですけど。多分、某うたのおねえさんよりヤバいんですけど。

ま、そんな壊滅的なわたくしのデッサン力なんてどうでも良いのです。

折角目の前に作者様がいらつしやいますので、この本の好きポイントを存分に伝えておかねばなりません。感想って大事。

ざつくりと『この本が好きです』と言うよりも『ここの描写がツボです』みたいに話した方が相手も嬉しくなります。

作り手のモチベーションアップに繋がりますし、そうなれば次回作が出る可能性も上がるという、正に一石二鳥！ 下心満載ですね！

「……つまり、そういった過去の想い出から思わずこの動きが出てしまうからこの描写

を入れたというわけなのですよ。気付いて欲しい、けど気付かれない。そんな気持ちがこの指先の動きに表れてしまったという」

興が乗っていただければこのように作者が作品に込めた想いも教えてくれたりする事もあったりします。

今はわたくしとデジたんが1対1なので周りへの配慮は一切ありませんが、イベント会場などでは隣のサークルさんや他のお客さんなどに十分気を配りましょう。客側のマナーが悪いとサークルの悪評に繋がってしまいますので。

「ほほう、なるほど。すごく、納得、した。つまり、この動きが、最後の、けほっ、シーンの、伏線に、なっていると、いうことか」

構成力も高いとかすげえなこの娘。天は彼女に二物を与え給うたか。いや二物じゃ足らんな。どんだけだ。

おや、何かデジたんが驚いたようにこちらを見えておりますぞ？

「メルテッドスノウ先生も良く気付きましたね、そこ。あたし自身、こんなの誰も分からないだろうなって思いながら描いたんですけど」

「そう？ かなり、あなたの、想いが、込もった、コマだと、思ったけど」

商業誌と違って同人誌は作者の気持ちが強くと込もつてることが多いので、『私はコレが面白いと思うんだけどどうよ!』ってポイントをちよいちよ見受けることが出来ま

す。個人の感想ですけども。

前世はそういうところ探すの好きでした。

「……何だか、先生の視点つて一般人の気がしないのですが。もしかしてこちら側の人だったりますか？」

「え、今更？」

「買い専でしたが前世では完全にそちら側でしたし、今世でもそうしましょうかね。サークル参加は……ちよつと絶望的ですが。技術的な意味で。」

「いやあ、意外というか何というか……メルテッドスノウ先生つて保健室にひっそり佇んでいる妖精みたいなイメージだったんで。結構アグレッシブなんですね」

「妖精で。けほっこほ。あ、スノウで、いいよ」

「それどこ情報よー？ わたくし自ら言うのも何ですけどガセネタ過ぎませんかね。もしくは妖怪の間違いかと。」

「というか、デジたんという素の自分がちらほら表に出ちやうのを感じますね。何でしょう、すごく気安くて楽。同好の士だからですかね？」

「……スノウ先生、大丈夫ですか？ ちよいちよ咳してる気がするんですけど」

「ん、多分、風邪気味」

「気になるよねー、わかりみ。」

「つかしーなー、朝だけじゃなくてさつき昼食後にも薬飲んでるんですけどね……全然治まる気配が無いです。」

「えっ!? いやいやいやそれは早退して下さいよホント。早く帰ってゆっくり休んで下さいよ。ウマ娘ちゃんが体調崩してるなんてあたしの精神衛生的に宜しくないんで」

「でも、この本……」

「早上がりしたいのは山々なんだけど、部屋戻って布団で横になってる間の時間潰し用としてもこの同人誌、是非とも入手しておきたいなう。」

「うん、大人しく寝てろと言うのは分かってますよ? けどずっと寝てるの暇じゃない! どうせウマホで動画見たりするでしょうし、見たいの手元に置いときたいじゃないですかあ!」

「わかりました、今から新品をお持ちしますからそれ受け取ったら帰って下さいよ?」

「お金は……後で。後で頂きますから」

「えー、これが、いいのに」

「デジタルの血と汗と涙と手垢が染み付いたデユフフフ……は冗談として。完成品にも予断を許さない努力の証でしょうこの読み込み跡。つくづくすごいな超尊いじゃんか永久保存モノですわ。」

「いやそれはほんとマジで勘弁してください。じゃちよつとすぐ取って来るんで」

「あ、その前に、バイタル、測らせて。一応、ここに来た、人には、全員、やってるの」
立ち上がって、保健室から出て行こうとするデジたんを一旦引き留めます。

「というわけでいつものいつときましょー。」

「はあ。何をするんです？」

「脈と熱、測るだけ」

「まあそれくらいな、ら……え……？」

「失礼」

デジたんの手を取ってくいと引き寄せます。

バランスを崩してこちらに倒れ込んでくるデジたんが、車椅子の手摺り部分を掴んで
わたくしに覆い被さるような体勢に。

「ひゅき。い」

何か面白い声が聞こえたような気がしましたが、お陰で身を乗り出さなくてもバイタル測れます。

まずはおでこに手え当ててーそれからお手々で脈を……ちよつと近すぎて手は取りづらいな。首触って測るか。

「……熱は、多分、無し。脈は……やや早い？」

「くあwせdrftgyふじーlp;@:」

デジたんのお目々とお耳がぐるぐると忙しく動いて、謎言語が口から漏れています。はいもうすぐ終わりますから耐えてて下さいねー。

結果、夢遊病のような状態のデジたんを送り出すこととなってしまいました。やったやったZ E ☆

「けほっ」

にしてもホントどうしたわたくし。

マジで咳が止まらんな……本格的に風邪ひいちゃったかしら。少し体調の見積もりが甘かったかも知れませんか。朝の時点で見切りつけて仕事休んどいた方が良かったかも知れません。

まあおかげでデジたんとのグリーティングイベントが発生しましたのでプラマイゼロどころかプラスな気はしていますけど。

さて、デジたんが戻ってくる前に今の体調をセルフチェックしときましょうか。

熱は微熱のまま、咳止まらん、鼻の奥が痛い、寒気無し、だるさ無し、思考力低下無し。

高熱にならないあたりインフルエンザでは無さそうなので、やはり消去法で風邪でしょう。身に覚えはありませんが、昨日寝てる時にお腹でも出してたんでしょうか。

「けほ、ケホゲホツ、ゴツホツ」

んー、咳がヤバいな。マジヤバい。

というかあんまり何度も咳したくないんですよね、肺も痛くなってくるし。

「ぜー……ぜー……ゲホツ。……ゲプアツ！」

——ビチャアツ

やーだ、豪快につば吐き出しちゃった。一応この身は乙女ですので恥じらい恥じらい。

……ん？ あれこれつばじゃないな、赤い。

え、え？ 血かこれ？

——パタタツ、バタタタバタバタバタツ

ん!? なんかすごい垂れてくる！ 口からじゃない、鼻血だ。

え、ちよ、勢いやばい！ 何じやこりやあ!?

あああああ服が血みどろスプラッタ！ 怖え!!

と、とりあえず止めなきや。えつとえつと、鼻血は、鼻をつまんでそのまま押さえ続

けて、

「がぼっ!? ぐへあっ！ げぼっ！」

出血量多くて逆流した！ ダメだこれ血で溺れる！

あつ、あかん、待って、なんか気が遠く……いかん……

「あ、これ、やば……」

ウマホで……救急、を……からだ、うご、かな……

「スノウ先生！、早速新品をお持ちいた、し……先生！ スノウ先生っ!? どうしたんですかつ！ 先生ツ!!」

……でじ、た……ごめ、きゆうきゆう、よん……

Case EX1-1:メルテツドスノウ — 前編 —

「何も喋らなくて不気味な子だね、気持ち悪い」

私に対して、その人は苛立ちを隠そうともせずそう吐き捨てた。

私の名前はメルテツドスノウ。

脚の動かない役立たずで穀潰しの、生きる価値など無いウマ娘だ。

少なくとも、昔は幸せだったと思える。

物心ついたときは脚も動いたし、お父さんもお母さんも優しかった。たくさんの愛情を受けていたと自覚している。

最初に影が差したのは4歳の頃だった。

私は友達たちと公園で追っかけっこをして遊んでいた。

すると、そのうちの1人が転んでしまった。

その子は声を上げて泣き出した。私は慌ててその子に駆け寄った。

膝を擦りむいたのだろう、血が滲んでいる。

私はその子に泣き止んでほしくて頭を撫でた。

しかし痛みが勝るのだろう、それでもその子は泣き続けた。

困った私は、お母さんの真似をしてみた。

『いたいのいたいのとんでいけ』

よくあるおまじないの言葉だ。

本当に痛みが飛ぶはずは無いのに、その時の私は何故かそれが出来ると思っていた。

その子の頭を撫でながらそう強く念じるとあら不思議、その子の怪我は綺麗さっぱりと無くなった。

その子は泣き止んだが、泣き声を聞きつけてすぐ近くまで来ていたその子の母親が、私を見るなりすごい怖い顔をして私とその子をすごい勢いで引き離れた。そしてその子を抱きとめたまま、その子の母親は自分から逃げるように公園から去っていった。

いきなり友達がいなくなってしまうのと、いつの間にかあの子と同じ所を擦りむいて血を滲ませていたのとで、悲しくて痛くてわんわん泣いた。

私はそのまま家に帰ってお母さんに泣きついた。

一部始終を嗚咽交じりに話し、涙と鼻水と涎でお母さんのエプロンをぐちゃぐちゃにしました。

お母さんはそんな私を宥めながら、多分何か思うところがあつたのだろう。裁縫箱からマチ針を一本取り出し、徐ろにお母さん自身の人差し指を軽く刺した。

針を抜いてしばらく待つていると、指先に小さな赤い点が浮き上がった。お母さんはその指を私の前に差し出し、

「メルちゃん、お母さんにいたいのいたいのとんでいけ、してみて？」
と言ってきた。

私はよく分からなかったが、お母さんが傷付いて痛そうなのが嫌で、言われるがままにおまじないをした。

お母さんがティッシュで赤い点を拭き取ると、そこにはもう赤い点が浮いてくることは無く、なんの傷も付いていない、綺麗なお母さんの指があった。

そしてお母さんがゆっくり私の手を取ると、私の人差し指に小さな赤い点が浮かび上がっていた。

その時に幼い私でも理解した。『いたいのは、私に飛んできていたのだ、と。』

ジンジンする人差し指を見ていると、お母さんは私の指に絆創膏を貼りながらこう言った。

「メルちゃん、このおまじないはもう使っちゃダメよ。お母さんとの約束。ね？」

優しい声で話しかけられている筈なのに、お片付けをちゃんとしなくて怒られた時以上に強く感じるお母さんの言葉に、私はやってはいけないことをしてしまったのだと思った。

同時に、公園のあの子みたいにお母さんがどこかへ行ってしまう恐怖を感じた。もし約束を破ってしまったら、私のお母さんもあの怖い顔で私を見て、私の元から去ってしまふ気がした。

嫌だ、お母さんと会えなくなるのは嫌だ！

「つかわない。ぜったいもうづかわないから、おねがい、おかあさんいなくならないで！！」

必死にしがみつき泣き叫ぶ私を、お母さんの手が抱き留め、撫でてくれる。

お母さんの大きくて柔らかくてあつたかい手。

私が大好きな、優しい手。

「大丈夫、お母さんはメルちゃんの前からいなくなったりしないからね、大丈夫よ」

そう言っつて何度も何度も撫でられているうち、泣き疲れた私はそのまま寝てしまった。

夕方、私が起きた時にはもうお母さんは台所で晩ご飯を用意していた。

テーブルには仕事から帰ってきたお父さんがテレビでニュースを見ていた。

「お、おはようメル。ずいぶんたくさんお昼寝したな？」

いつもの優しいお父さん。

「あら、よく寝たのねメルちゃん。おはよう」

いつもの優しいお母さん。

いつも通り、変わらない。

さっきの出来事は夢だったんじゃないか。

そう思ったけど。

「メル、お母さんとした約束、ちゃんと守るんだぞ」

お父さんがそう言った。

夢なんかじゃなかった。

「まもるもん。やくそくやぶって、おかあさんいなくなっちゃうのやだもん」

「おっと、じゃあお父さんはいなくなっちゃってもいいの？ お父さん悲しい」

お父さんがしくしく泣き出した。泣き真似だと分かってはいた。

お母さんはもちろん好きだけど、お父さんのことも好きだ。

お父さんだつていなくなつて欲しいなんて思わない。

「それもやだもん！ だからぜつたいやぶらないもん！」

「うん、偉いぞメル」

お父さんはさつきまでの泣き真似をあつきり止めて、わしわしと私を撫でた。お父さんの手は大きくてあつたかいけどちよつとゴツゴツしてるし力が強いからお母さんより好きじゃない。

でもお父さんもお母さんも私の大事な二人だから、この約束は絶対に守るんだって決めたんだ。

それからしばらく経ったが、私はお母さんとの約束を守り続けた。

いや、一度だけ破ったことがある。

あれはそう、小学2年生くらいの時だったか。

「きやあつー！」

リビングで宿題をしながら夕飯を待っている時、キッチンからガラランガランと何かが崩れる音とお母さんの悲鳴が聞こえた。

何事かと思つて見に行くと、床に鍋が転がっていて、お母さんがうずくまって頭を押さえていた。

「どうしたのお母さん!？」

「痛たたた……驚かせちゃつてごめんね、上の棚に置いてたお鍋落としちゃつたの。」

そう言つて頭を押さえるお母さんの手の隙間から、たたりと一筋の赤いものが流れた。

「お母さん!!」

無我夢中でお母さんに駆け寄り、お母さんの手の上から頭を押さえた。

使おうなんて考えていなかったのに、私はいつの間にかおまじないをしていたらしい。

私の頭から温かいものが流れるのを感じた。

「め、メルちゃん!!」

今度はお母さんが慌てる。

キツチンペーパーを数枚取り、私の頭にあてがった。

……どうしよう。約束、破っちゃった。

お母さんが血を流してるのを見た瞬間、無意識で使ってしまった。

私の心いっぱい広がったのは、昔約束をしたときに感じた、お母さんがいなくなってしまうんじゃないかという恐怖。

絶望感と悲壮感で、私の開いたままの両目からボロボロと涙がこぼれた。

「おかあ、さ、ごめ、なさい。いなくな、ないで……やだ、やだよ……お母さん、約束、やぶってごめんなさい、ごべんな、ざい……」

ゆつくりとお母さんに抱きつき、必死に許しを乞う。

お母さんはそんな私を抱き締め返して、頭を撫でてくれた。

昔から変わらない、

お母さんの大きくて柔らかくてあったかい手。

私が大好きな、優しい手。

苦しくて悲しくて冷たくて色を失いかけた私の心が、ゆっくりと暖められる。

「大丈夫……大丈夫よメルちゃん。お母さんはあなたを置いていなくなったりしないわ」

お母さんはしばらくそうして私が泣き止むのを待つてくれた。

その後、私の傷の手当てをしながらお母さんは私に優しく語りかけた。

「メルちゃん……メルちゃん。あなたはとても優しい娘。他の人の苦しみや痛みを理解して、分かち合おうとするからこそ、きつとあなたはおまじないが使えるようになったのね」

ちよつと悲しそうな笑顔を浮かべながら、お母さんは手当てし終え、そつと私の左頬に右手を当てながら先を続ける。

「でもね、優しいけどとても悲しいおまじない。だつてメルちゃんがお母さんが傷ついて悲しいように、お母さんもメルちゃんが傷ついたらとつても悲しくなっちゃう。お母さんはメルちゃんのことを大、大、だーい好きだから、メルちゃんが傷ついて痛い思いをするのは嫌だなあ」

お母さんが傷つくのは悲しい。けど、私が傷つくと同じようにお母さんが悲しい。どつちにしろ悲しいを無くすことが出来ないおまじないなんだと思った。私はどうし

たら良かったら。

「けどね、メルちゃんは優しいから、多分今日みたいに、あのおまじないを使つていつか誰かを助けようとしちゃう気がするの。悲しいけれどね」

「そうなのかな。自分では良く分からないけど、お母さんが言うならそうなのかも知れない。」

お母さんの左手が私の右頬に当てられ、両手で顔を包まれる。あつたかい。

「だからちゃんと自分で考えて、考えて、他にどうしようもないな、つて思つたときにだけ、おまじないは使いなさい」

両手で私の頬を包みながら、親指で目元に残つた涙を拭つた。

「でも忘れないでね。誰かが傷ついてメルちゃんがそれを助けてあげたくなるのと同じで、お母さんもメルちゃんを助けてあげたいの。だつてお母さんはメルちゃんのお母さんなんだから」

真つ直ぐに私を見つめる、優しく暖かくてちよつぴり悲しそうなお母さんの顔を、私はその後ずつと忘れることは無かつた。

それから更に何年か経つた。

4月からはいよいよ中学校へ進学するという頃まで私はおまじないを一切使うこと

は無く、平穩で平凡で幸せな時を過ごした。

ウマ娘の割にそんなに競争することに熱を持てなかった私はトレセン学園を目指さず、ヒトと共学できる普通校を選んだ。お父さんもお母さんも『まあ、メルは誰かと競い合うとかって性格じゃないよね』と、特に反対も無かった。

私は本当に良い両親に恵まれたと思う。あんな特異な能力を持った子供なんて恐ろしくて遠ざけるか、メディアなり宗教なりに送られても仕方なかったと今でこそ思う。だが両親はその能力を隠し、至って普通の一人娘として愛情を注いでくれた。

「ちよつと早い、卒業祝いにみんな旅行に行こう」

正月を過ぎたくらいにお父さんがそう提案してくれていて、お母さんも私も大いに乗り気だった。テレビで見る度「いつか行ってみたいね」と話していた山奥の観光地に、二泊三日の家族旅行をすることになった。

明日はお父さんが運転する車に乗って、親子三人でお出掛けだ。

持っていく荷物をそれこそ何度も確認した。自分が覚えてるだけでも5回くらい確認していた気がする。

小さな子供でも無いのに、楽しみ過ぎて寝られなかった。

「メル、そろそろ寝なさい。明日早いんだよ」

「寝たいんだけど、眠くないの」

お母さんが呆れたように私の部屋に来てそう言った。

頭では分かっているけど、中々眠気は訪れてくれなかった。

あ、そうだ。

「お母さん、一緒に寝ても良い？ 何だか一人だとずっと寝られなそう」

「もう中学生になるってのに甘えん坊さんね……お父さんもう寝てるから、静かにね」

「わあい」

枕を持って、お母さんと一緒に両親の寝室へ。

ドライバーのお父さんは既にぐっすり夢の中だ。

お母さんの布団に二人で入る。シングルサイズなのでぴったり寄り添って寝ないと

はみ出てしまう。

「えへへ、お母さん、あつたかい」

くっついてる体があつたかい。

お母さんの体温を感じる。

お母さんの顔がすぐ横にある。

優しい笑顔がすぐ横にある。

「おやすみ、メル」

「おやすみ、お母さん」

本当に、本当に幸せだった。

ずっとずっと、この幸せが続くのだと思った。

翌日の道中、自分たちの目の前にトラックが突っ込んで来るまでは。

……

……

……

「う……………あ……………」

気が付いたのは車の中だったと思う。

車内のはずなのに中に入ってきた雪の冷たさで目を覚ました。

「お、とう、さん、おかあさ、ん……………」

二人の姿を探す。

運転席にいるはずのお父さんは、ハンドルを握って座っていたその運転席ごといなかかった。

助手席にいるはずのお母さんは、そもそも助手席がよく分からない程に潰れていて見つけられなかった。

「……………メル……………だいじょう、ぶ？」

その潰れた席の隙間から、か細いながらお母さんの声が聞こえた。

「わたしは……だ、あぐがうつ!!?」

私は大丈夫、そう答えようとした瞬間、下半身にまるで雷でも落ちたんじやないかと思ふような尋常じやない衝撃が走った。何が、と見ようとしたが身体が言うことを聞かない。それもそのはず、私の下半身は助手席と後部座席、その間に挟まっていたのだ。

「メル、メル……じつとして、うごかないで」

うつすらと見えたお母さんは、全身が赤黒く染まっていた。

「そのまま……うごかないで、たすけをまちなさい。……ああ、メル……メル、ごめんね……ずつといっしょ、に……いて、あげたかつ……」

お母さんの声がだんだん小さくなっていく。

まるでもう一緒にいられないみたいなお母さんが言う。

嫌だ。

「やだ……やだ、お母さん、なにいつてるの、ずつといっしょだよ、お母さん……!」

嫌だ。嫌だ。嫌だ。お母さんがいなくなるのは、嫌だ。

私はどうなっても良い。お母さんを、助けないと。

私の能力で、お母さんを治さないと……!」

「お母さん、わたし、おまじない、する、から。お母さん、治すから」

「駄目よ」

有無を言わせない強い声だった。

お母さんの手が震えながら私の方へ伸びてくる。

血に濡れていたとかそんなことどうでも良かった。

その手が、その場から動けない私の頭を一度、優しく撫でる。

昔から変わらない、

お母さんの大きくて柔らかくてあつたかい手。

私が大好きな、優しい手。

「メル。お願い、生きて。やくそく、ね」

その手が、糸が切れたかのように、ふつと、力無く、落ちた。

「おかあ、さん……?」

返事は、ない。

「おかあさん……おかあ、さん……おか、あ、ざん……!」

もう、二度と。

「いや、やだ、よ……おかあ、さん……おかあ、さん! おかあさん! おかあさん!

おがあさん! おか、あ、ああああああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

Case EX 1—2 :メルテッドスノウ —後編—

——ピッ——ピッ——ピッ——

私が次に目を覚ましたのは、部屋全体が白を基調とした知らない部屋だった。仰向けに寝ている私の両隣に、規則的に音を鳴らしているよく分からない機械がいくつか並んでいるのを見ることが出来た。

「メルテッドスノウさん、聞こえますか？」

いつの間になっていたのか、白い服を着ている人が私に話しかける。答えようとしたけど、口が何かで塞がれて喋ることができない。身体も動いてくれない。伝わるか分からなかったが、瞬きをすることで返事とした。

「先生、3ベッドのメルテッドスノウさん意識覚醒です」

白い服の人が誰かと電話で話をしていた。

しばらくして違う人が来て、私にいくつか質問してきた。寝起きのせいなのかしつかり覚醒していない状態で何を聞かれたかは覚えていないが、何とか視線だけでイエス・ノーを伝えようとしたのは覚えている。

何度かやってるうちに瞼が重くなってくる。おかしいな、さっきまで寝てたんだと思

うのに、まだ眠い……

「いいですよ、眠つてください。いっぱい寝て、また起きましょうね」

誰かがそう言ったのを聞いて、私の意識は静かに暗闇の海へと頭から落ちていった。

……

……

……

再度目覚めた時には口を塞いでいた何かは無くなっていった。周りに並んでいた機械もよく覚えてないけど少なくともなくなってる気がする。

この時、ようやく自分が病院のベッドにいるのだと理解した。

視線は……動く。

首は……動く。

手は……動く。

起き上がれ……ない。

足は……動かないどころか、そこにあるのかも感じる事が出来なかった。

それから何日か経ち、やっと話が出来るようになってきた頃、何度か私を見に来ていた医師と一緒にスーツ姿の男女一組が訪れた。

「警察です」

そう言つて手帳を開いて見せる二人に、本当にテレビドラマみたいにやるんだなあ、なんて呑気なことを考えていた。

彼等は、私に何があつたのかを説明しだした。

積荷を満載したトラックがカーブで曲がり切れず、膨らんで対向車線に出てきて、私達の車と正面衝突したらしい。

その衝撃で私達の車は弾き飛ばされ、そのまま崖下に転落したのだという。

「これからあなたには辛いことを伝えます。どうか強く自分を持って下さい」

そう前置きされて聞かされた内容は、辛いなどという言葉で表せるものではなかつた。

お父さんはトラックとぶつかった衝撃で挟れてしまった運転席ごと車外に投げ出され、全身を強く打つて即死したと言われた。

お母さんは私と一緒に車の中から見つかった。身体の半分が車体に潰され、出血多量で死んだと言われた。見るも無惨な状態だったらしい。

更に医師からは私の身体の状態を告げられた。全身に様々な打撲、裂傷、骨折があり、特に腰のダメージが深刻だと。車体に挟まれた際に脊椎を損傷したらしく、二度と足が動くことは無いらしい。

警察の女性の方が言う。保護者に連絡をしたいが、母親の両親はすでに他界しており、父親も勘当されて親族とは音信不通だったので、誰か頼れる人がいないか教えて欲しい、と。

へえ、そうなんだ。

つまり、私は、

二度と歩くことは出来ず、

二度と両親には会えず、

身寄りも無くなって、

文字通り天涯孤独というわけか。

何だそれは。地獄かな。

「あの子、駄目かも知れんな」

病院の敷地を出て煙草に火を付け、吸い込んだ煙を吐き出してから課長はそう言った。

普段行っている交通整理以外の初めての仕事は、余りにも胸を抉るものだった。

山道バイパスでの大型トラックと乗用車の衝突。その凄惨な事故は連日メディアで取り上げられた程だった。

被害者が意識を取り戻したと連絡を受け、課長と私は事の顛末と今後について話すべく、彼女に会いに来た。が。

「……まさか、開口一番『殺してください』って言われるとは思わなかったです……」

誰か頼れる人はいないか、そう尋ねて返ってきた答えがそれだった。

「無理もないさ。絶望って言葉すら生温いとはよく言ったものだ」

私達の話聞いた彼女からみるみる生気が消え失せていったのが分かった。

顔色のことじゃない、文字通りの生きる気力が、だ。

一介の女兒がその身に受けるには、あまりにも過酷すぎる運命だった。

「何も、出来ないんですかね、私達」

「何も出来んさ。お前に背負えるか？ あの子の人生」

「……」

答えることが出来なかった。

己の不甲斐なさややるせなさから握り締めた拳に爪が強く食い込む。

「すう……はあーっ。ままならねえよなあ、世の中つてのはよ」

大きく吐き出した課長の紫煙が私達の気持ちを代弁するように、ゆつくりとゆつくりと空に溶けていった。

その後の事はよく覚えていない。

警察の人に何も答えられず帰ってしまったような気もするし、その後運送会社の社長が謝罪に來たり弁護士やら市役所の人やらが來たような気がするが、何をどう受け答え出來たのかはまるで覚えていない。

私は無気力で自ら進んで何かをする気にもなれず、言葉も必要最低限のものすら口から出ることはなくなっていた。

それから約二ヶ月、病院を退院した私は、児童養護施設に入れられることで話がまとまっていた。

そこからが第二の地獄の始まりだった。

市役所の職員に車椅子で連れられてやって來た施設の前で、一人の初老の女性が待っていた。

こここの施設長とのことだった。

彼女はにこやかに市役所の人と少し会話した後、その笑顔を浮かべたまま誰かを呼んだ。中庭から他の職員らしい中年の男がやってきて、私の車椅子を押し施設へ向かっていく。受け渡しが無事完了したのだろう、市役所の人はそのまま帰っていった。

入り口のドアを閉めると、彼女と職員の男の人はその場で立ち止まった。

一体どうしたのだろうか？ 後ろを振り向き彼女を見上げると、先ほどまで浮かべてい

た笑顔が全くの嘘であったことが分かる。こちらを険しい表情で見下ろし、まるで隠す様子がないほどに大きな舌打ちを放つ。

「何も喋らなくて不気味な子だね、気持ち悪い」

憎々しげに彼女はそう言い放つ。

「ここでのルールはただ一つ。あたしらに逆らうな。分かったかい」

「飯は食わせてやる。お役所の目があるからね。騒いだり暴れたりするんじゃないよ。もし逆らったりしたらただじゃおかないからね！」

そういえば、ここは児童養護施設のはずだ。だというのに子供の声は一切聞こえない。

部屋から出てきて遊んでいる子供もいない。

あまり、いやかなりまともな場所でないことは子供の私でも感じる事が出来た。

けど、今の私はそんなことすらどうでも良かった。

ご飯は朝と夜の二回。朝はパンとスープのみ、夜は良く分からない野菜くずのシチューといった、昨今の刑務所でもお目にかかれないであろう献立だ。

風呂は基本的に無い。水で濡らしたタオルで拭くだけ。

学校と買い出し以外の外出は厳禁。施設内での私語厳禁。トイレ以外に部屋から出るのも駄目。

行動が遅かったり嫌がる素振りを見せると施設長が暴力を振るうのが日常だった。服で隠せない箇所を決して狙わない辺り、手慣れている。

特に何も無くても『気に入らない』という理由で殴られたりもした。

行く予定だった中学校は休学している。とてもじゃないがそんな状態ではない。そして学校に行くという数少ない自由時間すら持てない私にとって、この場所は最早監獄と言つて差し支えが無かった。

私は日がな一日、薄暗い部屋とトイレを往復するだけの毎日を過ごすこととなった。

本来ならば発狂するなりしてもおかしくはない環境だろう。

しかし、私の心は既に碎け散っていた。

こんなになつてまで何故私は生きているんだろう。

お母さんはいない。お父さんもいない。誰もいない。

どうしてこんな事になつてしまったのだろう。

分からない。分からない。分からない。

もしかして私がおまじないを使わなければ、お母さんもお父さんも死ぬことは無かつたのではないだろうか。私がこんな能力ちからを使つてしまったから、神様が怒つて天罰として二人と引き離されてしまったのではないだろうか。

特に何を見るでもなく、部屋のドアに向かつてぼーっと考える。

もう死んでしまいたい、と考えたのは数え切れない。

このドアノブに服をくくりつけて首が締まる長さに輪を作って、そこに座ればそれで死ぬことは出来る。

しかし、お母さんの言葉、『生きて』という、今となつては最後に交わした約束を、私は蔑ろにすることが出来ない。

けど、こうやって毎日何もせず、何も感じずに過ごしている自分は果たして本当に生きていると言っているのだろうか。

生きるって、なんだっけ。

生きていけないのであれば、死んでも別に変わらないのではないか。

けど、お母さんとの約束が……。

毎日、毎日、毎日毎日毎日毎日、私はこうやってただひたすらに、抜け出ることのない思考ループを繰り返して、いたずらに時間を消費して過ごした。

そういつた日々を何十回か繰り返していたある日、いつも静か過ぎる施設内の雰囲気は僅かに騒がしくなった。何人かまとまった人数が移動しているのが聞こえる。

何かあるのかな。それとも何かあったのかな。

火事でも起きて逃げ遅れることが出来たら良いのにな。

そんな事を考えていたら、部屋のドアが開けられた。

ノックなんて無い。

現れたのはこの職員の男だ。

この人のことは好きじゃない。

どろりと濁った瞳でよく私のことを下卑た目で見てくる。

そいつは私の前に立つと、聞いてもいないのに一人で喋りだした。

「明日はお役所の視察があるからな、お前ら風呂に入れて綺麗にしとかねえと怪しまれちまう。けどお前は一人で入るの大変だよなあ？ だから俺が手伝ってやるよ、へへ」

男は厭らしい笑みを浮かべながら舐め回すような目線で私を見やる。

無くなったと思っていた感情の波がぞわりと立ち上がる。これは、恐らく身の危険を本能で感じたんだと思う。

「へ、へへへ。いつもあのクソババアにコキ使われてんだ、これくらいの役得があつたつて……」

男の手が両肩に触れる。気持ち悪い。

肩から肘、手首へと男は這うように手を滑らせていく。気持ち悪い。

そして男の手が私の腹に当てられ、撫で回される。気持ち悪い。

男の手が、私の服に手をかけ、ゆっくりと腕がせようと……

どれくらい漕いだか分からない。

全身を流れる汗のおかげで悍ましさが少し薄れたのと、限界を超えて動かし続けた腕が言う事を聞かなくなってきた頃。

気付いたらどこかの橋の上にいた。眼下には大量に水を湛えた川が流れている。

橋の上から川を見下ろすと、さわさわと流れる水音は聞こえているが、街灯も少なく何も見えない。どこまでも黒く暗い闇が流れていた。

春になったとはいえまだ冷える夜の寒さに、折角忘れていた先刻の悪寒を思い返した私は、お母さんと別れた日以来すっかり枯れたと思つた涙を両の眼からぼたぼたと零した。

「やだ……もう、やだよ、おかあさん……ごめんなさい、もう、無理だよ……」
限界だった。

苦しみと悲しみと恐怖しか無い世界に、未練なんて微塵も無かった。

これが最後と言わんばかりに、ここに辿り着くまでに力を絞り切つてしまつて震える腕で、橋の手すりをよじ登る。

そしてそのまま身を乗り出し、後は重力に任せるまま、私は落ちた。

「おかあ、さん。ごめんね、私も、そつちに……」

激しく水飛沫を立てて私の身体は水の中へと落ち沈んでゆく。

ごぼりごぼりと肺から抜けていく空気が、沈む私と対称的に水面を目指して上がっていく。

水底に辿り着く私。巻き上がる汚泥。

もう、指先一本動かす気も起きない。

だんだんと薄れていく意識の中で浮かんでは消えていく、両親との思い出。

ああ、これが走馬灯つてやつなのかな。

—小学6年生、サンタの格好をしてプレゼントをくれたお父さん。

—小学4年生、授業参観で振り向いた私に小さく手を振ってくれたお母さん。

—小学1年生、高熱で苦しかった時、夜中に車で病院に連れてってくれたお父さん。

—小学入学前、初めて着けたランドセルが大きくて、整えてくれたお母さん。

楽しかった情景はどんどん記憶を遡っていく。

楽しかった、なあ。本当に……楽しかった。

—4歳、初めておまじないを使っちゃって、お母さんと交わした約束。

—2歳、初めての芝の感触が嬉しくて公園で走り転げた私。

—1歳、初めて立った瞬間を見逃して悔しそうな顔をするお父さん。

—0歳、生まれてくれてありがとう。そう言って私を抱き抱えながら微笑むお母さん。

こんな生まれたての記憶なんて覚えてない。

私の夢なのかな。夢でもいいや。

お父さんとお母さんに会えるなら。

——迫る車の影。道路で轢かれそうな娘を間一髪助ける自分。

……え、なにこれ？

——電車に揺られる自分。妻と娘に見送られる自分。初めて出来た我が子に涙ぐむ自分。

なにこれ。なにこれなにこれなにこれ。知らない。こんな記憶知らない。

——働く自分。遊ぶ自分。学ぶ自分。休む自分。色々な自分。

知らない、知らない……いや、知ってる。これは、自分だ。

私、メルテッドスノウが生まれる前の、俺だったときの、記憶……

そうか、私は、『転生者』だったんだ。

あはは、死ぬ時に生まれる前の記憶を思い出すなんて、へんなの。

でも、もう、いいんだ……もう、この、ま……ま……

……

……

⋮

いものだけを指す)もブルーベリー色の鬼もアラガミも使徒もナービイも壁壊す巨人もモビルスーツもタチコマもドリルもゲッターもイデも無い、転生世界じゃ大当たりの部類だぞ!?

彼女らがレース場で走る姿を生で見えて聞いて感じる事が出来るんだぞ!?

彼女らがライブで歌って踊るのを生で見えて聞いて感じる事が出来るんだぞ!?

ケモ耳ケモ尻尾が当たり前に存在している世界線なんだぞ!?

こんなオタ垂涎もののシチュ、易々と逃せるわけねえだろうがああああああ!!!

動け、動け動け動け動け動け!! 今動かなきゃ、今やらなきゃ、つてこんな時に初号機ごっこか余裕だなわたくしイ!?

と、に、か、く、動きやがれマイボデイいいいいいい!!!

文字通り、必死の思いで念じると火事場のバ鹿力なのかオタクの執念なのか、身体は力強く水を掻き、水面を目指した。

「げふああつ!! おろろろぶふあつ!!! げえーっほ、げっほ、げふうっふー!」

川岸の草を掴み、盛大に水を吐く。女としての尊厳なんぞと言ってる場合ではない。下品に、豪快に吐く。あ、なんか水だけじゃねえなこれ少し血も吐いてるくせえ。鉄味。

「けほっ、けほ、げほっ、はあっ、はあっ……ああ、ー、じぬ、がど、思っだ……

げえーっほあ!」

腕の力だけで必死に川岸を登り、地面を感じたわたくしは仰向けになって寝転んだ。なんかやたら息苦しさが残ってるし口の中も相変わらず鉄味がしてる。けど今は酸素だ。限界を超えて振り切つて無茶してくれた身体に深呼吸して酸素を行き渡らせなければ。

「すうーっあがああ！ ぐっばあ！ げっへあ!!」

痛え！ なんか息吸うと胸痛え!! 水と一緒に川底の砂でも飲んでたか!?

というか咳しても痛えんですけど!?! まだ少し血い吐いてるしわたくし。

あかん仰向け無理だ、吐血で溺れ死ぬ。うつ伏せにならんと。

「がっ、はっ、はっ、はっ、はっ……」

深呼吸できないなら小さく短く早く呼吸を。とにかく酸素!

そうすること数分、ようやく落ち着いてきた。

そうだ落ち着けーわたくし。クールだ、K O O Lになるのだ。冷静に現状の整理をするのだ。

まず、わたくしの名前はメルテッドスノウ。

さつきまでとはまるで性格が変わってしまったが、憑依の類では無い。同一人物だ。今までの記憶に、思い出した前世の記憶をプラスしてブレンドしてみた状態とでも言えは良いだろう。

なので生まれるはずの命を横取りしてしまったとかいうありがちな転生葛藤は不要だ。わたくしは生まれたときからわたくしなので。ちよつと十数年ほど記憶喪失だっただけで。

そして記憶が戻ったことで、幼少期にしか使わなかったあの能力ちからを完全に把握した。何で分かるようになったのかは自分でもよく分からないが、何故かそういうものだと『理解』した。

つべえわ。この能力。痛いのが自分に飛んでくるどころじゃねえわ。マジチートじゃん。

とはいえ、これが分かったところでどう使えるかいまいち分からんけど。

そして現在わたくしを取り巻く環境。

軽くハード越えてルナティックにも思えるが、それはさつきまでの震えるポニーちゃん状態であつた場合の話。

両親と死別して超絶悲しいのは変わらないが、それでも生きていかなきゃいけないのが人生だ。苦境を打開する努力をしない理由にはならない。

酸いも甘いも噛み分けた前世の経験を踏まえて考えれば、ハードルはいくつかあるが挽回は可能である。

こんないたいけな美少女にさんざ好き勝手してくれやがって……転生らしく『ざ

まあ』してやるからな、首洗って待ってるクソババアにエロオヤジイ!

足は動かんし未だに肺は痛くてまともに息が吸えんくて、声も出し辛え。が、両目は見えるし両手も動く。触ってみた限り、顔に大きな傷は無い。社会的ななにかしは何とでもなる。てかする。

以上を踏まえまして。

さつてつと、これからどうすつかね?

Case 11 : 養護教諭とキタサンブラックたち

今朝はなんか随分昔の出来事の夢見たなあ……懐かしい。

もしかして夢の内容とかも見知らぬ第三者様方に筒抜けだったりします？ いやんはずかしい。

おはようからおやすみまで、暮らしを見つめられるメルテッドスノウです。

いやーこの間は焦った焦った。マジ死ぬかと思いましたわ。
気が付いたら病室のベッドの上でしたし。

見た目は派手にヤバい出血量でしたが、発見が早かったお陰で処置も輸血も間に合いました。あれから約一ヶ月半、本日無事退院と相成りました。

うん、もうほんとデジたんには足を向けて寝られませぬね。凄惨な現場を見せちゃったお詫びと助けて頂いたお礼を兼ねて、今度菓子折りの一つや二つ、三つや四つや五つや十は持つていかないいです。

ってかあの鼻血ブー、投薬と内視鏡手術で治るんですね医学の進歩は目覚ましい。

何て病名でしたっけ……？ とにかく風邪ではなかったですね。というかあんな目に遭うなら、まだ風邪のほうがましじゃないですかやだー。

…誰から貰ったのが発症しちゃったんだろうー。脚以外のやつが起爆するとかと不味いですね。今後のためにも何かしら緊急連絡手段は確立しとこう。まだ死ぬ気は無いので。

取り敢えず、搬送直後に緊急手術だったようですがたったの数時間で終わったのとですし、目覚めた後の入院生活も基本的に投薬と経過観察だけだったので割と平和なものでした。

目覚めた時の日付が倒れた時から1週間くらい経過してましたが誤差です。1年のたかだか2%です。

持ち物もポケットに入れてた財布と手に持ってたウマホだけでしたし、既にバッテリーも切れてたので入院中は暇を持て余すんだろうなーと思っていたのですが、意外と色んな人がお見舞いに来てくれてありがたかったです。

まず覚醒直後に休職手続きの書類を持って来てくれたたづなさん。お手数をお掛けしてしまつて申し訳ないです。いや助かりますしありがたいんですけど、わたくしなんぞにかかづらつてないで、もう少し秘書仕事に集中してくれて良いんですよ？ そんな心配そうな顔しなくてもこの通り無事(?)ですし。

それに続いてわたくしの第一発見者であるデジたん。めっちゃ泣かれました。めっちゃ謝りました。マジ見苦しいもの見せちゃつてごめん。ひとしきり彼女の頭を胸に

抱きかかえて撫でてたら泣き声が徐々に笑い声に変わっていったのでひとまず大丈夫であると思いたい。トラウマったりしないよう誠意を尽くす所存。あ、その後二度目のお見舞いに持ってきてくれた数冊の既刊、^{バイブル}とても捗りましたありがとうございます。

そしてその次に来てくれたのがまさかのアヤベさん。なんと学園に許可を取った上で私の部屋に入って着替えを見繕ってきてくれたり、コンビニで歯ブラシやスリッパ、ウマホ充電器を買ってきてくれたりしました。オイなんだこの有能すぎるお姉ちゃん。推すぞ？ 推しちゃうぞ？ 既に推してるけど。

それから色々な人が入れ替わり立ち替わり来てくれたのですが、特に嬉しかったのがルドリンが来てくれたことでした。あ、シンボリルドルフのことです。

お互いなんやかんやで採用面接から会ってませんでしたし、昔初めて会った時に皇帝とバレたくなかったみたいでしたので当時出会っていたことを隠す為に知り合い感を出さずに面接受けましたけど、むしろその態度のせいで自分は覚えられていないんじゃないかって不安になっちゃってみたいですね。

何言ってるんだこの娘は。わたくしが関わったウマ娘を忘れるわけが無いじゃない。というかむしろ君に出会えたからわたくしは養護教諭目指すのも良いんじゃないかって考えたんですから。

そう言った時のルドリンの嬉しそうな顔したら無かったですね。何よ、そんな可愛い

笑顔出来るんじゃない素敵眩しい萌え越えて蕩れ。あー好き。大好き。

という感じであつという間の入院生活が終わりましたので、久々の職員寮へ向かつて帰路についている真つ最中です。入院中の着替えや何やらは前日のうちにほぼ配達済みなのでほぼ手ぶらです。

明日は予備日つてことでお休みを頂いてしまいましたが、明後日からはまたバリバリ働きますよー！ 保健室からグラウンドを眺めるお仕事を。

流石にあんなことがあつたばかりなので一人で帰るのは控えて、介護タクシー使つてます。

車椅子ごと乗れるのつて楽ですね。折りたたみ可能タイプの電動車椅子を使つていますので普通のタクシーにも乗れるつちや乗れるんですが、乗り降りが地味にめんどいんですよ。基本的に乗降介助とかしてくれないですし。

いつも通りゆつくりと風景を楽しみながら帰るのも好きですが、自動車でさつと動いちやうのも良いですね、あつという間に学園が見えてきました。

寮門近くで降ろしてもらい、さー部屋に帰ろうと思つたその時。門柱の陰に誰かが突つ立つてるのに気付きました。

背丈的に学園生では無さそう。というか、子供？

尻尾あるみたいだし、ウマ娘ちゃん様か。すごいぺたこしてるけどお耳もある。

……なんか泣いてるっぼいな？ まさか迷子か？

うーんこれは放っておけませぬ。

とはいえ気を付けて対応しなければ。一歩間違えれば即ブザー鳴らされてしまう事に発展しかねませんので、慎重に声を掛けましょう。頑張れたくし。せーの。

「お嬢、ちゃん、どうしたの？」

わーお我ながらメツチャあつやすいーい！

シンプルゆえに不審感ムンムンですわね！

も少しまともな台詞は無かったのかわたくしよ！

前世ならブザー発動率150%もんですよ。

確実に鳴らされた後に隠し持ってた2つ目に手がかかる状態ですよ。

「うあ……ごめん、なさ、ひぐつ。私……わた、うううつ……」

黒いウェービーショートヘアーに、赤い紐で括られた小さなポニーテール。

黒い長袖ジャージに短パンと快活そうな出で立ち。

紛うこと無くキタサンブラックちゃんですわこの娘。

何とか話そうとしながらも泣き止む気配は無い彼女。

あらあら、ジャージの袖が涙でびっちょりです。

……うん、ちよつとこれはマジなやつですわ。

イエスロリータノータッチとか言つて紳士ぶつてる場合じゃないです。真の紳士たる局面です。

スノウちゃんズ総勢256名によるロリっ娘バンザイだんじり祭りは延期です。中止にはしません。

ポケットからハンカチを取り出し、彼女の目元を拭きます。そのままハンカチを彼女に渡し、今度は職員証を取り出して彼女に見せます。

「私の、名前は、メルテッド、スノウ。この学園の、保健の、先生だよ」

「ひぐっ……せん、せい……？」

「良ければ、お話、聞かせて、くれる？」

……てなことがあります。

寮へ戻るのを一旦止めて、保健室にキタちゃんを連れてやってまいりました。

ココアでも出そうかと思いましたが、流石に夏にあつたかい飲み物は無いなーと、冷蔵庫ストックしてあつたパックのにんじんジュースを進呈。賞味期限は……切れてませんねセーフです。

この世界って凄いですわにんじんのポテンシャル。コンビニとかで売ってる100%ジュースが、りんご、オレンジ、そしてにんじんが並んでるのがデフォなんですも

の。

ウマ娘用に品種改良されまくったとは聞いたことありますがマジ甘くてジューシーで美味えのよ、にんじん。

「落ち着いた？」

ジュースを飲んでちよつと冷静になったのでしよう、取り敢えずもう彼女から涙は流れてません。

お腹が減つてるとそれだけで悲しき増し増しになっちゃいますからね。ついでに適当なお菓子も出しましょう。たんとお食べ。

「まずは、改めて、自己紹介、しておくね。私は、メルテッド、スノウ。見ての、通り、歩けないし、話すの、上手じゃ、無いけど、一応、この学園の、養護教諭。スノウちゃんって、呼んでも、いいよ」

「わ、私は、キタサンブラック、って言います……○○小学校の、生徒です……」

わたくしの対面に座ってもらった彼女は、パックジュースを両手で包むように持って俯いちゃってます。泣き止みはしましたが落ち込み継続中ですね。

お茶の間が鼻で笑う小粋な冗句もスルーです。スノウちゃんって呼んでもいいのよ？

「ん、いい名前。それで、キタサン、ブラックさん。どうして、あんなところで、泣いてた

の?」

キタちゃん、より深く俯いて黙り込んでしまいました。が、しばらくしてゆっくりと話し始めます。

「……私、トウカイテイオーさんに会いに来たんです……テイオーさんは、私の憧れで、私も将来はテイオーさんみたいになりたくて……。テレビでテイオーさんが骨折したって聞いて、元気になって欲しくて、お守り渡したくて……。でも……」

「会えなかった、の?」

「いえ、会えました。けど……お守り、受け取ってもらえ、なくて……。他の人を、目指した方がいい、って、……。うえ……」

あ、キタちゃん思い出し泣きしてしまった。ごめんそんなつもりじゃ無かった。

うん、彼女が突っ立ってる姿を見た時に何となく予感はしてましたが、これは間違いなくアレです。アニメ2期のテイテイが心ポツキリしちゃうアレ。

無敗の夢破れ、三冠も破れ、それでも……と思った矢先の3度目の骨折で、医師から復帰は難しいと告げられ、ファンもテイテイの復活を諦め、あろうことか担当トレーナーの不安がる姿を見てしまった後に、極めつけはパクパク^{メジロマツクイーン}さんの自主練で、もう自分は追い付けないと感じてしまったあのお話。

あ、思い出したらわたくしも泣きそう。あの流れは誰でも心折れますって。

「そっか……辛い、ね」

辛いよねー、それはマジつらたん。

キタちゃんの行動に問題があつたりするわけでも無いので、いつものように舌先三寸で解決とはいきませぬ。

ですが泣いてる子供に何もしないなど大人としてあるまじき行い。せめて精一杯慰めさせて頂きましょう。

車椅子を操作し、彼女の隣に並びます。それからそつと彼女の頭を撫でながら、優しく問い掛けます。

「悲しい？ トウカイ、テイオーさんが、もう走ることを、諦めて、しまつて」

「わかり、ません。テイオーさん、なんで……」

「じゃあ、失望した？ 憧れた、トウカイ、テイオーさんの、そんな、卑屈な、姿を、見せられて」

ぶんぶんと勢いよく首を横に振るキタちゃん。

ふむ、悲しみ△、失望？、と。となれば……

「なら、悔しい？ トウカイ、テイオーさんが、苦しんでる、その姿に、自分が、力に、なれなくて」

やや間を置いて、こくりと首肯するキタちゃん。

「……そう。あなたは、本当に、トウカイ、テイオーさんの、ことが、大好き、なんだね」
ピュアっピュアで萌える。推せる。たまりませぬ。

トウカイテイオーにされた仕打ちに泣いたのではなく、それに対して覚えた無力感に悔しくて泣いたとかどんだけテイテイLOVEなのよ。

わたくし自身が覚えてる悔し泣きの経験なんてアレですよ、昔お父さんにオセロで何度もコテンパンに負かされた時くらいですよ。うちのパンも勝負事には容赦無かつたからなあ……。まあその後腕相撲で凹ませてやりましたけども。

ま、そんなことはさておき。

悔しさを覚えて泣いたり落ち込んだりするのは何も悪いことではありません。むしろこれをバネとして更に前に進むための推進剤となります。

ただし『何故悔しいのか』『こんな思いをしない為にどうしたらいいのか』という方向性を見失ってしまうと、ものに当たったり、いつまでも落ち込んでしまったりと逆効果になりかねないので、彼女の場合はその心配は無さそうです。

恐らく彼女の中でどうしたらいいのかの答えはもう出かかっているでしょう。なのでわたくしはそれをそつと後押ししてあげるだけでございます。

「彼女も、きつと、すごく、ものすごく、苦しんで、落ち込んで、悩んで、出した、結論、なんだと、思う。彼女の、気持ち、を、尊重して、受け止める、ことも、ファンとしての、

在り方の、一つでは、あるんじゃないかな」

キタちゃん肩と尻尾がビクツと揺れます。

あー待つて待つて大丈夫。そうしろって待つてるんじゃないですよ？

「けど、あなたは、それでは、納得、出来ないん、だよな？ トウカイ、テイオーさんが、こんな、終わり方を、するはずが、無いって。また、走る姿を、見せてくれるって、思ってるん、だよな？」

そつと肩を抱いてぽんぽんします。本当はハグとかしてあげたいんですけどね、座つた体勢だと難しいので。こういう時は脚が動かないのがちよつと悔しみ。

「なら、信じて、あげて。あなたが、憧れた、誰よりも、強くて、誰よりも、かっこいい、ウマ娘の、ことを。どんなに、辛く、苦しい、逆境にも、負けないで、必ず、復活を、果たすのだと、いうことを。あなたが、その気持ち、持ち続けて、いれば、その想いが、届いた時、奇跡は、起こるんだって、わたしは、思うよ」

相変わらず顔は俯いたままですが、徐々に萎びていたお耳に力が戻り、ぴんと立ち上がってきました。よしよし。

「以上を、踏まえて。お守り、わたしから、代わりに、渡すことは、出来るけど、どうする？」

そう訪ねてみれば、キタちゃんは顔を上げて答えてくれます。

「いえ……これはいつか私がテイオーさんに渡します。私がそうしたいんです」
イヨシ！ よく言った！

ちよつと強めに頭をわしわしと撫でくりまわしちやいます。偉いぞキタちゃん、お前がナンバーワンだ。

「あなたは、強いね、キタサン、ブラックさん。さすが、トウカイ、テイオーさんを、目指すだけ、あるね」

最大限に褒めたった時のキタちゃんの誇らしそうな溢れんばかりの笑顔ったら無かったですね。本日のSSRスチル頂きましたありがとうございます！

空も薄暗くなってきましたので流石にぼちぼち……と、学園門までキタちゃんを送っている、向かいの寮入り口にまたしても小さな人影が。

なんか超キヨロキヨロしております。お、こっちに気付いた。

キタちゃんと同じくらいの背丈のロングヘアの娘が走り寄ってきました。おつとこ
れは……

「キタちゃん！」

「あ、ダイヤちゃん」

やはりキタちゃんの永遠の相方、サトノダイヤモンドちゃんでしたか。

うむ、元気いっぱいなキタちゃんの感じも好きですが、ダイヤちゃんのようと清楚な感じのも大好きです。良いですね可愛いですねたまりませんね。

「お友達？」

「はい！ 大親友です！」

「キタちゃん、この人は？」

こちらを向くダイヤちゃん。あら、背筋とウマ耳がピンと真っ直ぐ伸びてますね、警戒されておりませう。まあ是非もないヨネ！ 見知らぬ大人が友人を連れ回してたら警戒して当たり前です。開幕ブザーされなかつただけ有情です。

ぷるぷる、わたくし、わるいウマ娘じゃないよ？

「メルテッドスノウ先生。学園の保健の先生なんだって。先生、友達のスイトノダイヤモンドちゃんです」

キタちゃんがお互いを紹介してくれ、ダイヤちゃんは警戒を解いてくれたみたいです。良かった。

多分さつきのキョロキョロ具合から、帰りが遅いキタちゃんのことを心配して探しに来たんでしょうね。

「初めまして、サトノ、ダイヤモンド、さん。養護教諭の、メルテッド、スノウです。ごめんね。キタサン、ブラックさんと、少し、おしゃべり、してたら、こんな、時間に、なつ

ちやつて」

「初めまして、サトノダイヤモンドです。そうだったんですね。キタちゃんがお世話になりました」

「いえいえ、こちらこそ」

ペこりと音が聞こえてきそうな綺麗なお辞儀です。スマートにこういつた挨拶が出来るところ、やはり良い教育を受けてらっしゃいますね。あらやだわたくしの言葉遣いまで丁寧におほほ。

「駅まで、送ろうかと、思ったけど、大丈夫、そうかな？」

「大丈夫です。近くまで迎えが来ますから。ありがとうございます」

いくら陽が伸びてきたとはいえ、あまり遅い時間に小学生だけで出歩かせるのもいかんと思つてたのですが、そこは流石サトノ家のご令嬢。

見当たらないので分かりませんが、多分どつかのロイヤルな殿下みたいに護衛なり何なりが近くで見守つてたりするのもかも知れません。

最後に二人の頭をぽんぽんしながら別れを告げます。

「ん。じゃあ、二人共、気を付けて、帰つてね」

「ありがとうございます！ えと、スノウちゃん先生！ さようならー！」

キタちゃんが元気良く返事をしてくれました。もう大丈夫そうですね。このタイミ

ングで最初の冗句を拾うとか中々高度なテクニクです。

やはりウマ娘ちゃん様達には笑顔がよく似合いますね。あらら、二人で仲良く手を繋いで帰っておりますよてえ。

……さて、お待たせしてしまつてごめんなさいね脳内スノウちゃんズたちよ。

ロリっ娘バンザイだんじり祭り、開催と参りましょうかあ!!!

あつはつは、スノウちゃんズたちがハイスピードで山車を曳いております……おいおい何ですかそのビッグサイズなキタちゃん&Dイヤちゃんの形をしている山車は。ねぶた祭と混じつてませんかうわははははははー、わーっしよい、わーっしよい。

それからしばらく公道を爆走するスノウちゃんズたちを眺める妄想に耽つていましたが、交差点を曲がつた時に山車から何人かのスノウちゃんズが転げ落ちたあたりで我に返りました。

あー楽しかった。

さて……キタちゃんは良いとして、気になるのはテイテイの方ですねえ。

いや普通にあんだけ周りから言われたら疑心暗鬼の自信喪失に裏ドラ乗つて跳満確定ですつて。全く、最初のトリガーはあの医者 of 台詞か？ テイテイをあんなに曇らせやがってヤブ医者め。

……はあ。

勿論、分かってるんですよ。

3回どころか1回の骨折すらウマ娘ちゃん様達には致命的です。それを繰り返している以上、医師としては『また骨折する確率は低くない』と判断するのが当然で、それなのにまた走れますよなんて無責任なことは決して言えません。

だから勿論、分かってるんですよ。

今わたくしが感じている怒りは完全にただの八つ当たりであることを。

あーどうしましょう。めっちゃモヤります。

前世知識が余計だったと感じるのは初めてです。

テイテイの脚を治すのは簡単です。チヨチヨイのパです。

けどメンタルの方は正直、『アニメの流れ』という最適解を知っている以上、あれを超えられる自信がありません。

一時的に持ち直してもらうことは可能でしょうが、根本の解決には至れない、そんな気がします。

ちくせう、己の不甲斐なさにイライラしますね。

チート持つてようとも所詮ただのいちウマ娘に過ぎないって分からせられちゃいます。

あー……あーもう！

やるせなーいーい！

叫びたあい！ 叫べなあい！！

お酒飲んで寝たあい！ でもあんまりお酒強くなあい！

こんな話、相談出来る人がいなあい！ そもそも友達少なあい！

ちつくしよーいーいーうう！！！！

……ふう。

はい、落ち込み終了です！

出来ないことをいつまでもグググチ言つてたつて仕方ありません。キタちゃんに悔しさを糧に前を向くように話した手前、わたくしがそれを行えないなどあつてはいけません。さつさと切り替えて今出来ることをしませんと。

致し方ありません、テイテイのメンタル救助はアニメの流れ通りターボ師匠を頼りましょう。もしアニメ準拠の流れにならなかつたらまたその時考えましょう。

その代わり、いつもはキリが無くなつちゃうから『こちらから会いに行つて能力を使用する』ことはしないようにしていたのですが、ちよつとわたくしの精神安定の為、どこまでもわたくしのエゴの為に、例外としてテイテイの脚、治しに行きましよう。

それこそ今後テイオーの脚が壊れる心配も無いくらい完璧に。

テイテイ今はギプスしてるし、バレへんやろ多分。

ギブス外した時も経過良好で済まされるやろ多分。
ですので、その後の事はお任せましたターボ師匠。

師匠の決死の走りときたちやんの叫びが、彼女のメンタル復活のキーなんですから。

Case 12 : 養護教諭とゴールドシッパ

「ほらよ、先生の方だ。カスタードで良かったんだよね？」

「ん、ありがとう」

駅前のベンチ脇で待たされたわたくしは、停まっていたキッチンカーで売っていたたい焼きをゴルシちゃんから受け取ります。

ちよつと熱くてちゃんと持っていてられないそれにぱくりと食いつけば、パリふわもちりな衣とあつたかくて甘いクリームの味。うん、美味しい。

ゴルシちゃんもベンチに座り、自分の分にかぶりつきました。

「ゴルシちゃん、のは、何味？」

「あたし？ シークレット。からし」

……そっぴあつたなそんなん。

顔色変えずにモリモリ食べ進めてるけど、辛くないの？

てか食べ終わって2個目に突入しとるし。

「美味しい、の？ それ」

「食ってみつか？」

差し出された食べかけの断面から黄色い中身が見えています。

多分これ、からし風味とかじゃなくて純度100%のからしだよなあ……。

ちよつと好奇心より警戒心のほうが上回るわ流石に。

「……うん」

「そか」

特に気にした様子も無く再度食べ始めるゴルシちゃん。

あ、皆様どうもお疲れさまです、メルテッドスノウです。

現在、ゴルシちゃんことゴールドシツプと二人でデートしています。

はい、もう一度言います。

お休みの日にゴルシちゃんと二人っきりでデートしております。

どうしてこうなった！ どうしてこうなった！

はい回想スタートゥー!!

「じゃね、スノウ先生。また来るから」

「またな、先生!」

職場復帰してから2ヶ月ちよいほど経過しましたが、以前にも増してここ保健室には頻繁にウマ娘ちゃん様達が遊びに来てくれるようになりました。

ありがたい事なんです、足が折れた時に付けていたシーネがバレないかヒヤヒヤしました。ゆったりめのズボンと膝掛けで何とか隠し通しましたけど。

というかこれ、間違いなく病弱認定されちゃってますよねわたくし。

目を離れた途端にまた倒れてるんじゃないかと思われてますよねわたくし。

んまあ、完全に自業自得なんで甘んじて受け入れますけれども。

放課後ティータイムの充実っぷりにウハウハしておりますけれども。

本日はネイチャさんとそれに付いてきたターボ師匠がお茶しに来てくれました。

ネイチャさんは初めて出会ってから1、2ヶ月に1度のペースでよく来てくれました。ですが、ここ最近は何週1度は顔を出してきています。密です。尊みの供給が。

時々こうやってチームメンバーも一緒に連れてきてくれますし、メンバー全員で来てくれた時もありましたっけ。

そうそう、ターボ師匠と言えば例のオールカマー戦ですが、見事やってくれました。

後続を大きく引き離しての大逃げから終盤の決して止まることなく気力だけで進み続けるその姿にはわたくしも目頭が熱くなりましたよ。ゴールした瞬間『っしや』って小さくガッツポーズ取っちゃいましたもの。

当日は秋の感謝祭でしたので、わたくしは救護テントで待機しておりました。そのためレースもミニライブも観に行けなかつたんですが、ライブ配信で見てたレースでター

ボ師匠がゴールして暫くしてから、ミニライブ会場の方から聞こえた大きな歓声には喜びの感情が感じられたので、テイテイも無事復帰宣言してくれたのでしよう。

いやー良かった。マジで良かった……。

さてさて本日も実に平和な一日でございました。

グラウンドの照明も落ちたみたいですし、ぼちぼちこつちも電気消してドア閉めて寮に戻りましょうかねー。

——カッ、カッ、コロン

保健室のドアに鍵を掛けたその時。

学園内の照明は既に落ちており、静かな闇と静寂が広がっている中、十数m先で何か転がる音が聞こえました。

辺りを見回しますが、誰かがいる様子はありません。

窓から差し込む外明かりが、廊下の先に落ちていている何かを照らしています。

何でしょうね？ 何だかちよつぱりホラーちつく。

恐る恐るその落ちてている物に近付きます。

見たところ手に収まる程度に小さそう。

その物体まであと3m程まで近づいて、ようやくその正体が分かります。

……ルービックキューブ？

何でこんな所に？ そう思った瞬間、頭にバサツと何かが被さり、視界が遮られました。

お、おお？ おおお!!?

何かは見えませんが頬に当たる感触が麻っぽい。

気配を消して誰かがわたくしの視界を遮ったようで、そのままあれよあれよという内に上半身まで包まれる状態にされました。が、そこから先に手こずっているようです。まあ座ってる相手の全身を包むのって、難しいですよねそりや。

下手人は諦めたのか、上半身だけを袋に納めた状態のまま、ゆっくり丁寧に車椅子からわたくしを降ろします。そしてそのまま俵担ぎされてどこかに運ばれていくわたくし。

「えっほ、えっほ」

お腹辺りにリズムよく感じる軽い圧迫感と共に、そんな掛け声が聞こえてきます。周囲の音的に、学園から外に出てる感じでしょうか。

ふむ……わたくし今、紛うことなく拉致られますね？

特に危機感を感じることなく、なすがままに運ばれております。

何でそんなに余裕かましてるのか？　つて、ねえ……。

この手口と漏れ聞こえた声で犯人が一体誰なのかは特定余裕ですし。

ただ何故わたくしを？　というところが分かりません。今までも特に彼女と接点があつた訳でも無いんですが。

そうこう考えている内に目的地に着いたようです。

ガチャリとドアを開け、室内に運ばれたような音がします。

「よつと」

袋を被せられたまま、そうつと慎重に椅子らしき場所に降ろされました。意外と丁寧に扱われてるなあわたくし。運び方だけは割と雑だったのに。

「わりーな先生。ちよつとあんたとサシで話したくてさ」

相手はそう言いながら袋を外してくれました。

ストレートロングなサラツサラの芦毛、頭にちよこんと乗った帽子、ヘッドホンのような髪飾りの高身長ないすばでーウマ娘、ゴールドシップです。

まあ見るまでも無く分かつてましたが。

グラサンとマスク付けてますけどモロバレですから。あ、あつさり取つた。

そういえばどこに連れて来られたんでしょう？

パツと目に付くのは、テーブル、ホワイトボード、ロッカー、でかでかと『スピカ』と

書かれた布……おお、チームスピカの部室かここ。

「にしても、全く抵抗しなかったな先生。あたしが言うのも何だけど」

「変に、抵抗、すると、却って、危ないから」

「お、おお。無駄に肝据わってんな先生」

こらそこ。『こいつ実はヤバい奴では？』みたいな顔するんじゃないやありません。いきなり人を拉致する方がどうかと思いますよ？ 普通の娘はいきなり拉致られたら怖がるんですから。

え、わたくし？ べ、別に『こんな事するのゴルシ以外無いだろ』と早々に勘づいてむしろアニメ内描写を体験できたやつたぜわっほーいとか内心喜んでたりしてませんけど？

「で、話って、何？ ゴールド、シップさん」

「やだなあ、あたしと先生の仲じゃん。親しみを込めてゴルシちゃんって呼んでくれよ」
「初対面」

ゴルシちゃんとは初顔合わせですが、他の娘からちよくちよく話題には上がって来るので知ってる体で言ってやりましたが流石ゴルシちゃん、その程度では動じない。

「まあ落ち着けて。話をする前にやらなくちやいけないことがある」

「……」

そう言うゴルシちゃんの眼が妖しく光り、流石のわたくしもちよつと身構えます。

この娘は先程、わたくしと一対一で話が出来たと言いました。体面とか大して気にしなそうなのこのウマ娘がそう言うということは、誰かに聞かれてはあまりよろしくないお話なのでしょう。けどこの娘が他人に聞かれたくないって一体どんな話なのか皆目見当が付きません。

そんなよく分からない話をする前準備とか言われても、推測すら出来ません。最悪『南斗人間大砲やろうぜ！ 先生砲弾役な』と言われる可能性すらあります。こわつ。

内心戦々恐々としながらもゴルシちゃんの言葉を待ちます。そしてそんな彼女が放った言葉は。

「ちよつと車椅子取って来るわ」

そう言つて部屋を出て行ってしまいました。

遠ざかる駆け足の音。

んーつとお……？

今回、わたくしの拉致行為を行ったのはゴルシちゃん単独。チームメンバーは居ないから車椅子ごとわたくしを拉致するのは不可能と考えて、まずわたくしだけを運んでから置いてきた車椅子を持ってくる、と。

まあ合理的つちやあ合理的なんですが。

「…………え、放置?」

ただし初めて入る部室に一人で取り残されてしまったスノウちゃんの心境は無視するものとする。

ほわんほわんほわーん

はい回想終了! 現実逃避終了!

とまあそんな流れがありました。

その後、戻ってきたゴルシちゃんが話した内容つてのが、

『今度の休みにあたしとデートしようぜ』

つて事で、現在に至る訳でございます。

え、要約し過ぎですつて? やマジでそれだけだったんですよ。

車椅子持つてきて乗せ換えられて、お誘い受けてハイ終了、解放されたんですよ。

…………いやこれ拉致する必要ありました?

今日はいつもの電動タイプではなく、予備で持つてる手動タイプのオーソドックスな車椅子に乗っております。

なんかゴルシちゃんが『今日はあたしにエスコートさせてくれよ』とか言つて終始わたくしを押しつけてくれます。

「先生はよお、もうちよいオシャレしても良いと思うぜ。せつかく素材良いんだからよ。ほら、この服なんてどうよ？」

適当に街をブラついて、何となく目に留まったレディースブランドのショップでウィンドウショッピングしております。エスコートとか言いながらノープランです。でもわたくしそういう行き当たりばったりなの大好き。

それはそれとして、先生こういうお店あまり入ったこと無いので気後れしまくりです。

服なんぞ着られれば良し、着回して長持ちすれば尚良しくらいにしか考えたことありませんので、○ニクロ、もしくはし○むらくらいしか入ったことが無いのですよ。

そして素材の良さについてはお前が言うな状態ですね。見れば見るほどハンパねえグッドルッキンググウマ娘だなゴルシちゃんって。服装は至ってシンプルなのに、どこかの海外セレブのような雰囲気醸し出しております。

黙れば美人、喋れば奇人、走る姿は不沈艦と言われるだけのことはありますね。はーファビュラスファビュラス。

わたくし自身も顔は良いのは自覚してますけど、スタイルの方は……幼児体型も甚だしいですよ？　ロリは好きですが……こう、自分がロリになるのは何というか、違うでしょう？

「着替えの、しやすさ、重視だから。どうしても、ね」

「だとしてもだ。1着くらいはあってもいいだろ。今日は全部ゴルシちゃんが奢ってやるぜ」

手持ちの服が業務上そんなに汚れても問題ないものばかりになっちゃってるんです。ゴルシちゃんが言うことも一理あります。余所行きの一張羅くらいは持つても良いかも知れません。こういう『いきなりデートに誘われたりした時』用に。

そんな機会が今後あるかは定かではありませんけど。

「生徒に、奢られる、先生も、どうなの？」

「いーだろお。今日はあたしがそうしたい気分なんだから、そうさせてくれよおー」

ダダこねるポイントおかしくない？

つかしーな、わたくしの前世知識を思い返してみても、買って貰いたくてゴネられた経験ならあるんですが、逆に奢りたくてゴネられた事は無いなあ……対処に困るう。

けどまあゴルシちゃんなら下心とか心配無さそうだし、いっか。

「……まあ、そこまで、言うなら、素直に、受け取らせて、もらうよ」

「さっすが先生、話が早くて良いぜ！ じゃこれと、これとそれと、あとあっちも」
「多い多い」

気後れが加速するからやめておくれ。

流石に全部は受け取れないので、ゴルシちゃんズベストチョイスとやらのスカーチョを1着だけプレゼントして頂きました。これなら既存の上着とも割と合わせやすくしていい感じですよ。

そういうや特に記念日とか関係無い時に誰かからプレゼント貰ったのなんて初めてじゃないでしょうか。やだ、嬉しい。

店を出たわたくしとゴルシちゃんは再度ブラさんぽを開始し、今度はゲーセンを見かけたので入っていきます。

ばかプチ新作が出るたびに來てるゲーセンですが、プライズ以外を見るのはご無沙汰です。

「このゲーセン、プライズ、以外も、結構、色々、あるね」

「だなあ。お、音ゲーも結構あんじゃん」

「ゴルシちゃんは、音ゲー、何が、得意？」

「パラパラパラダイス」

「まじか」

チョイスがやべえ。

知らない人が大半だろうなので説明しよう！

パラパラパラダイスとは、K O O A M I のビーマニシリーズで2000年くらいに出た音ゲーです。

当時ディスコやクラブで流行してたダンス『パラパラ』を音ゲー化したもので、5つのセンサーにタイミング良く腕の振りを反応させるゲームなのですが、譜面通りにタイミング狙ってセンサーを反応させるより単純に踊った方が高得点が出やすいという不思議ゲーでした。

残念ながらパラパラの衰退と共にあっさり消えていった悲しき筐体でございます！

「お、ギターフリとドラマニも置いてんじゃんつつ」

「ゴルシちゃん、ギターフリ、いける？ わたし、ドラマニ、いけるから、セッション、しない？」

なーつかしーなー。今の仕事就く前は良くこれで遊んでました。当時近くにあったゲーセンで500円で1時間フリープレイという破格設定だったので、勉強でストレス溜まった時なんかは2〜3時間ぶっ通しでプレイして汗だくになったりしてましたとも。

「マジかよ！ 意外と先生も遊んでんのな」

「バスドラムは、さすがに、オート、だけどね」

フットペダルは踏めませんので。

さてさて、腕が落ちてなきや良いですが。

「おっしや、んじややってみつか！ ……先生、スティック持てよ、始まるぜ？」

ゴルシちゃんがギター型コントローラーを構えます。様になってますね、カッコ良
き。

どれわたくしの方も。指でセンサーパッドを軽く叩き、反応を確かめます。うむ、良
好ですね。

「このまま、でいい」

「……は？」

なんかね、ハイスコア目指してた時に気付いたんですよ。

曲に反応して指が動いてスティックが動いてパッドを叩くまで微妙なラグがある
なあって。

で、それを打開すべくわたくしが辿り着いたプレイスタイルがこれだ。

「見せて、あげよう。わたしの、ボンゴマニアを」

目指せオールパーフェクト。

わたくしの鮮やかなボンゴ捌きにほつほつとギャラリイが出来、それに対抗しようと
ゴルシちゃんが背面弾きしたり歯で弾いたりしてたらえらい人数に囲まれてしまいま

したので逃げるようにその場から退出しました。やりすぎたか。

それからも色々なお店に適當に入って冷やかして、お腹が空いたらこれまた適當なお店で食べてと、無計画に無作為に連れ回されました。

よく自分一人で出歩く時はこんな感じですが、二人で動くのも楽しいものですね。

「いやー遊んだ遊んだ」

気が付けば辺りはすっかり茜色。

てなわけで、本日の締めということでも小高い丘になっている公園へ。

街が一望出来るとても気持ちの良い場所です。

「今日は、ありがとね、ゴルシちゃん」

「良いってことよ。あたしも楽しかったしよ」

お陰でとても充実した休日をごすことが出来ました。

けど、何でもこんなに良くしてくれるんでしょう。

「でも、何で、わたしと?」

「ん? まあ、なんつーか、礼、かな?」

「礼って……。わたし、ゴルシちゃん、に、お礼される、ようなこと、したっけ?」

今回のお誘いを受けたのが初対面だったのにな?

いつの間にかゴルシ焼きそばの売り上げに貢献してたり……いや買った覚え無いな。

どうしよう、本当に分かりませぬ。

「あたしにじゃねーよ。テイオーだ」

「……………」

「あんただろ、テイオーの脚、治してくれたの。あん時のあいつ、だいぶ参ってたからな。マジサンキュな、先生。足、大丈夫だったか？」

わたくしのウマ耳がびくりと反応します。

「……………なんの、ことかな？」

「ああ、知ってるから別にとぼけなくていいぜ。あんたが昔の記憶と、トンデモ能力を
持っていることも」

……………うおおおおおおおおおおい!!

さも当たり前のようにメガトン級の爆弾ぶっ込んで来やがりましたよ!?

いやいやいや何で知ってるのよ。能力の方はちよいちよい使ってますから多少バレル可能性はありましたが、前世持ちだなんてそれこそ誰にも言ったこと無いですよ!?

「……………なぜ、それを？」

「そりやあたしがゴルシちゃんだからに決まってるんだろ。それ以上の理由があるか？」

全く理由になつてない気もしますが、納得出来るのは何なんでしよう。

どんな事しても『まあ、ゴルシだし』で片付くの強すぎませんか？

「……これ以上、無い、説得力、だね」

「だろ。安心しろよ、誰にも言わねえ。言えるわけねーわ」

「……そう」

そうしてもらえると助かります。

こんな能力持つてるのが公になったらメディアのオモチャか、あるいは教祖か、はたまた解剖か、最悪消されるか。いずれにしろロクでもない事になりそうなんで。そいつは流石に勘弁願いたいですし。

「けどあんたは、それでいいんだな？」

わたくしの顔をじつと覗き込んでゴルシちゃんが聞いてきます。一切の冗談を許さない、そんな真剣な表情です。

なるほど。わたくしの能力を知っているなら、今までわたくしがやってきた事も、いずれ訪れる結末も分かっているのでしょう。

だからこそわたくしは自信を持って答えます。

「もちろん。わたしが、ここにいて、のは、出来る限り、出来ることを、するため、なんだから」

「そか。ならあたしから言うことは無えな」

いつもの飄々としたふいんき（なぜか変換できない）に戻るゴルシちゃん。

「思うところが無いわけじゃ無いが、先生は先生の信念に従ってやってんだろ？　なら思う存分やっていいんじゃないか。先生の人生だ、好きに生きようぜ」

ありがとね。何だかちよつと救われた気分。

お陰で進む足取りが軽くなりそうです。がんばろう。

「やだ、ゴルシちゃん、かつこいい」

「だろ？」

笑い合うわたくし達を照らす夕日は、眩しかった。

Case 13 : 養護教諭はほんのり関わりたかった

鳥達の楽しげな鳴き声が聞こえてきて、目を覚ました。

窓から見える外はとても良く晴れている。

割と傾いた太陽が、結構長いこと寝てしまっていたことを教えてくれた。

「あ、起きました？ いっぱいお昼寝出来ましたね」

部屋に入ってきた女の人がわたしにそう声を掛けた。はて、この人は誰だろう？

知っているような、知らないような……？

そもそもここは何処でしょう？ わたしの部屋じゃなさそうですけど。

「今日もいいお天気ですねー。でもその分、朝寒くつて。なかなかお布団から出られなくて大変だったんですよ私」

あの、一体ここは何処であなたはどなた？

そう聞こうと思ったがうまく声が出ない。

女の人は言葉を返さないわたしを気にした様子もなく、わたしの手を取って、指先に洗濯バサミのような何かを付ける。

「お布団入ってる時の『あと5分』って気持ちいいんですよねー。やりすぎて危うく遅刻

しそうになっちゃいましたけど。どれ、バイタル……正常つと。あ、テレビ付けましようか？ もうすぐ始まりますよ、有馬記念」

有馬記念。

……そうだ、有馬だ。テイテイの復帰戦だ。アニメ最終回の屈指の泣き回だ。

そんなの見ないなんて選択肢、あるわけが無い。

女の人がわたしが寝ているベッドのリクライニングを起こし、テレビの電源を入れる。

「そういうえば、トレセン学園で働かれてらしたんですよ。もしかして知り合いのウマ娘、出たりしますか？ ふふっ。じゃあ少し他の部屋も見てきますね。テレビ、このまま点けておきますから」

女の人はそう言い残して去って行った。

テレビに映されているレースの様子は既にパドックでのお披露目は終わっており、出走ウマ娘達がバ場入場している所だった。

いつもの実況と解説の人が興奮気味に話すのが聞こえてくる。

《今年のトウインクル・シリーズを締め括ります有馬記念、今回はURR A史上最も注目度の高いレースとも巷で言われています》

《無理ありませんね。数々の宿命の対決が一堂に会した形となる今回の有馬記念

は間違い無く大波乱となるでしょう》

数々の宿命の対決？

あれ、そんな流れだったっけ。

《順に紹介していきましよう。まずは史上4人目の重賞6連勝、そして全てのレースで連対率100%の実績でグランプリ制覇なるか!? ヒシアマゾンです》

《底知れない強さを感じますね。最終直線での末脚は間違いなく一級品です。今回も気合十分といった様子で非常に期待が持てます》

……ヒシアマゾン、レースに出てたっけ？

なんかアニメとだいぶ変わっちゃった？

ってか知らなかったけど姐さん、そんな強かったのか。

がんばれ、ヒシアマゾン。

《続いて今年の最優秀ウマ娘候補と名高い3冠ウマ娘、ナリタブライアン》

《彼女も今年のレースでの連対率は100%で、しかもその内2着は1回だけという脅威の強さを持っています。今回も間違いなく上位に食い込んでくるのが期待出来ます》

あ、ブライヤんだ。

彼女もアニメじゃ出走してなかった気がするんだけど……まあいいか。すっかり立

派なアスリートの顔つきだね。ちゃんとバランス良くご飯食べてるかな。

がんばれ、ナリタブライアン。

《さあそしてやって来た、昨年の有馬では惜しくも2着、しかしその後も着々と勝数を重ねております、ビワハヤヒデです!》

《昨年也十分強い彼女でしたが、今年は更に一回り大きくなったように感じますね》
お、ハヤヒーお姉ちゃん。

すげえ、ブライヤんと一緒に走るの？ 姉妹対決じゃん。

この娘もアニメで見たときよりオーラ出てるように感じるけど、実際に見てるからなのかな。

がんばれ、ビワハヤヒデ。

《おっとどうしたビワハヤヒデ。観客席側をじっと睨みつけるように動かなくなってしまったぞ》

《……観客席というか、実況席こちらを見ていませんか?》

《その後ろから彼女に先を促すようにウイニングチケットとナリタタイシンが入って来ました》

《昨年の菊花賞以来となるBNWの3人が揃いましたね。こちらの因縁の対決にも注目ですね》

あら、チケゾーとタタちゃんまで。

相変わらずあの3人は良い関係を続けてるみたいですね。どこまでも元気なチケゾー、かつこいのお姉ちゃんなハヤひー、つつけんどんだけど本当は優しいタタちゃん。3人ともいつまでも変わらずそうあって欲しいな。

がんばれ、ウイニングチケット。

がんばれ、ナリタタイシン。

《GI2勝の実績、闘争心に火がつけば9ヶ月のブランクも気になりません。漆黒の花嫁衣装を思わせる勝負服に身を包んだレコードブレイカー、ライスシャワーです》

《黒い刺客の異名を持つ彼女、今回も魅せてくれるのでしょうか》

お米様だあ。

普段はどつかのメイドロボか駆逐艦みたいにはわわとか言うのが似合いそうなのに、レースに出るとめっちゃ格好良くなるのナイスギャップです。完全にスイッチ入ってます。

がんばれ、ライスシャワー。

《そのライスシャワーに雪辱を果たす事が出来るのか!? 坂路の申し子、ミホノブル

ボンが登場です》

《長い闘病生活から見事に舞い戻って来てくれました。前回、前々回のレースから

徐々にはありますが確実に仕上げて来ています。持ち味の力強い逃げ足に期待です
》

え、ブルルンも出るの？

わー、これは確かに数々の対決が勢揃いっていうの、納得。誰よりも待ち望んでましたもんね、お米様との対決。実現して良かった。悔いの残らないよう、しっかりと競い合ってね。

がんばれ、ミホノブルボン。

《去年は3着、今回はもっと少ない数字が欲しい。ブロンズコレクターの名を返上出来るか、ナイスネイチヤ》

《高松宮杯では見事な勝利を見せられました。今回も気合は十分です。》

きやー、ネイチヤさんだ。

曇りの無い表情だ。出会った頃の迷いは完全に晴れたみたいだね。そうだよ、ネイチヤさんは凄いだから、自信持って走ってね。

がんばれ、ナイスネイチヤ。

《そのナイスネイチヤと同チーム、小さな逃亡者ツインターボも入ってきました》

《決して勝率は高くない彼女ですが、その大逃げスタイルは多くのファンを魅了して止みません。今回も期待したいですね》

うっそ師匠？

またあの爆逃げしてくれるの？ うわあ凄い楽しみ。あなたの走りは間違い無く誰かの勇気になってるよ。みんながあなたの走りを見てるよ。

がんばれ、ツインターボ。

《更に同チームのマチカネタンホイザですが、蕁麻疹発症のため出走取消となつていきます》

《何があつたのか心配ですね。ナイスネイチャとツインターボには是非彼女の分も頑張つて欲しいです》

あれ、カネタン出走取消？

おかしいな、わたしの覚えてるアニメではしっかり走つてたはずなのに……。

やはりこのレース、わたしの知ってるものとは完全に異なるみたい。

いやそれより蕁麻疹とかつて大丈夫なのかなカネタン。

ちよつとウマホで調べてみようかな。

あれ、ウマホどこだろ。……というか、手、動かないな。身体も、動かせない。困つたな。どうしちやつたんだらうわたし。

《さあそして、さあそして！ 会場の大きな歓声が聞こえますでしょう！ 昨年の有馬記念の覇者、奇跡の復活劇を見事に成し得ました、トウカイテイオーが出て参りま

した!》

《3度の骨折から不死鳥の如き復活を果たしたトウカイテイオー、その後の戦績も安定して上位を取っています。今回も彼女から目が離せませんね》

身体の不具合に気を取られている間に2、3人聞き逃してしまいました、ワアツと盛り上がる音が聞こえてわたしの意識は再びテレビへ。

おつ、テイテイだ。すっかり元気そうで良かった。

でもテイテイって、去年の有馬はボロボロじゃなかったっけ……記憶違いかな。

《ああーっと出た! 出たぞテイオーステップ! 今日のテイオーは絶好調です!

》

《会場に向けてアピールする余裕すらありますね。非常に良い仕上がりと考えられます》

まあいいか。

彼女はいつも一際楽しそうにレースを走る。幾度の挫折を乗り越えて、それでもまた走ってくれる。その雄姿をまた見ることが出来るんだ。

がんばれ、トウカイテイオー。

《おおっ?!》そして先程の歓声に負けない程の、会場が正に割れんばかりの大歓声

! そうです、満を持しての登場です! 昨年末に彼女を襲った病、繫靱帯炎。ウマ娘

にとつて不治の病とも言われる大病を患ってしまった時、引退の話も上がっていました。が、しかし！ しかし彼女は帰って来ました！ 1年という雌伏の時を経て、我々の前に、この有馬記念という大舞台に、戻って来たぞメジロマックイーン!!》

《昨年期待されていたトウカイテイオーとの対決が、今回ついに実現です。私も冷静に解説を続けられるか自信がありません。本当に、本当に良く戻って、来てくれました……》

わあ……わあ、パクパクさんだ！

脚、良くなったのかな。良かった、走れるんだ。テイテイと対決、出来るんだ。

本当に、良かった。良かったねえ。

がんばれ、がんばれ、メジロマックイーン。

《細江さん、涙はまだ早いですよ。私達にはまだこの闘いを最後まで皆さんにお伝えする使命があります。頑張りましょう》

《はい……はい。その通りですね。失礼しました》

《さあ、ゆつくりとスターターがスタート台に向かいます。誰もが待ち望んだ夢を詰め詰め込んだ今回の有馬記念、今年最後のGIのファンファーレです》

うふふ、解説さん泣いちゃってる。

嬉しいよね、わかる。楽しみだよ、わかる。

ブラアマ対決、姉妹対決、BNW対決、ブルライ対決、テイマク対決……あ、テイネイとテイタボ対決もだ。これは確かにとんでもないレースだ。てんこ盛りだ。誰が勝つても不思議じゃないよ。

《15万人近いファンが埋め尽くしております、中山レース場です。さあ各ウマ娘がゲートインしていきます》

……あれ？

なんだか、急に瞼が重くなってきた……。

おかしいな、いっぱい寝たはずなのに、まだ眠い……。

レース、見たいのに……。

《順調ですね。ナリタブライアンがちょっと立ち止まってそれから入りました》

《さあ13人、ゲートイン完了しました。間もなくです。間もなく今世紀最大の有馬が、今……》

目、開けてらんないや。

見たい、なあ。みんなが、走る、姿が。

見たい、けど……まあ、いいかな。

みんなが、無事に、走れる。それだけで、十分。

——ガシャン!!

《いま、スタートしました!!》

わたしは、わたしに、出来ることを、やり遂げた。

ああ、

いい、人生、だったなあ……

走れないTS転生ウマ娘は養護教諭としてほんのり関わりたい：了

目次

<< 前の話

次の話 >>

「……って夢を、見たんだけど、ゴルシちゃん、どう思う？」
「うん、とりあえず笑えねえわ」

ってなわけで、やたらリアルすぎる初夢を見ました。

あなたの傍に這い寄るメルテッドスノウちゃんです。

新年を迎えて最初のお仕事デーです。

いやいや死んでたまるかよ。何満足しちやっぺんのよ夢の中のわたくし。

わたくしはまだまだウマ娘ちゃん様達が幸せそうに学園生活を謳歌する様を拝みつつ時折一緒にキャツキャウフフするといふこの上ない欲望丸出しの人生を満喫しなきゃいけないんですから。

あんまりにもあんまりな夢だったので、両手にゴーヤー、口にピロピロ笛を装備したまま相撲の摺り足してたゴルシちゃんが窓の外から丁度通りかかるのが見えましたので、彼女を捕まえて話してみたのですが、心底呆れられてそのまま摺り足再開してどっかに行ってしまった。

いやむしろゴルシちゃんが何してるんですか意味が分からない過ぎる。

何でしょう、年末の有馬記念でテイテイの大復活を目の当たりにしちゃったから気持ち先走って ” 次の有馬 ” を思い描いちゃったりしたんですかね？ いやあだつてすんごいレースでしたもの。未だに実況さんの『トウカイテイオーが来たあ！ え……えトウカイテイオーが来たあ!?!』が耳にこびりついて離れません。

もし本当にあんな激熱なレースが未来で待っているとしたら、意地でも夢の内容を、

そして夢の続きを見ないと死んでも死に切れませんねこりや。

さあ、今日も張り切ってウマ娘ちゃん様達の心身の健康の為に身を粉にして働きますよー！

足は動かないしまとも息が吸えなくて、声も出し辛い。

けど、両目は見えるし両手も動く。顔は素敵なべつぴんさん。

足やら何やらに爆弾はあるけど、とりあえず生きている。

以上を踏まえまして。

さつてつと、今日はこれから何しましょうかね？

走れないTS転生ウマ娘は養護教諭としてほんのり関わりたい：続

Case EX 2 : メルテッドスノウとあるウマ娘

わたくしの名前はメルテッドスノウ。

どこにでもいる、普通の転生チート持ちのウマ娘です。

足と肺に障害が残っていますが誤差の範囲内です。

入水自殺未遂して救急搬送されましたが誤差の範囲内ですともええ。

死ぬ一歩手前までいったお陰かどうかは知りませんが、無事に前世記憶とチートを思い出してようやく転生人生スタートといったところでございます。

で、その後の顛末をざっくりとまとめると、わたくしは無事にざまあを達成し、違う児童養護施設へと移されました。

川から這い上がった後、誰かが呼んでくれた救急車で搬送&即入院となったのですが、その入院してヤツらの目が届かない間に、ある人にコッソリと連絡を取りボイスレコーダーとデジカメをお借りしまして。

退院してから約1ヶ月間、施設に戻されたわたくしは以前のように無感情っぽく振る舞いつつ、ソレらを使って虐待やセクハラの証拠を集めに集め、晴れてババアとエロオヤジに鉄槌を下してやる事が出来ました。

ざまあ。ざーまあー!!

ババアには役所から定期的な行政指導を行ってもらうことで手打ちとしました。

暴力行為は言語道断ではありますが、わたくしみたいな要介護者は介護する方される方、お互い歩み寄って協力する必要があります。それをわたくし側から拒絶してたのでそりやあババアもストレスが溜まることでしょう。極々僅かですが情状酌量の余地あります。

元々悪いことしてたつぽいですがわたくしも良くなかったというところで、まあ今後に期待の意味を含めてお役所さんには監査厳しめの指導を毎週やってもらうことにしました。処分食らって施設無くなったりするのはそれはそれで問題あるしね、市の受入人数的に。

だがなエロオヤジ、てめえはダメだ。

セクハラは断固として許されぬ！ ウマ娘をセンチティブな感じにしようなど問答無用である。

サ○ゲ法務部が存在しない世界線で助かったなオヤジイ！ だがわたくしが許さん。セクハラ野郎は惨めに這いつくばって叩かれて砕かれて丹念に擦り潰されてバクテリアに分解されて畑の肥やしにでもなればいい。

そりやもう徹底的にやってもらおうようにした。警察の方にも話をだいぶ盛って訴え

た。知ってるか？ セクハラってのは被害者がそうだと感じたらセクハラなんだぜ？

(悪い顔)

『この子に暴力を振るわれた。押さえつけるために触ってしまったかもしれない』と悪あがきの自己弁護をしてましたが、良いぞもつとやれ。反省の余地なしってことで罪状が重くなりやすいからなあ！ 既にヤツを殴ってしまった時の経緯とそういう言い訳をするかも知れないって事は警察の方には伝えてあるし。

かくして無事にエロオヤジはお縄となりました。森へお帰り。もう戻って来るなよ。

今回の大捕物には事故った時に来てくれてた女性警察官も担当してくれて、そりやあもう親身に対応してくれました。レコーダーとデジカメ貸してくれたのもこの人。なんか出会った時のことをずつと気に掛けてくれていたらしく、現状を話したら一も二も無く協力しまくってくれました。

……まあ、あんなファーストインプレッションじゃなあ……うん、正直すまんかったと思ってる。いきなり「殺してください」とか我ながら無いわ。トラウマるわ。

立場上どうしようも無かったでしょお姉さん、仕方ないって。今回こうしてその立場を使っただけでちゃんと助けてくれたわけです。ありがとうございます。

というわけでざまあ展開が無事終了した後、新しく入ることになった施設はそりやもうまともな場所でした。加えて自分もまともになった(?)ので、お互いにコミュニケーション

シヨンもしつかり取ることで同じ轍を踏まないよう報連相はしつかり行いましたとも。おかげで新しい施設の長——身長2 m強のスキンヘッド、髭にグラサンと、どう見ても何人かヤツちやつてそうなコワモテのくせにエプロンが似合うとか、某XYZの海な坊主っぽいガチムチオヤジ——からも、わたくしの自由奔放さに呆れられながらもしつかり面倒見てもらえました。

そうしてなんやかんやあつて何年か経過しまして。

通う予定だった中学はとてもしゃないが通学出来る状態じゃないということとで学校側と相談し、定期的に課題を提出してたまに学校で補習っぽいのを受けることで基本的に出席しないまま卒業。クラスメイト出来なかつたです。ぴえん超えてばおん。

高校には入らず、さっさと高卒認定試験だけ受けて自由気ままに過ごしております。すつかり失念していたのですが、なんか遺産やら賠償金やら補助金やらが割と良い額で入つてまして、細々と生きてく位なら余裕で出来るんですわ。夢のニート生活ですよひやつほい。

なので18歳過ぎて施設出る時に、少し余分かなあとと思った額を『寄付すつから宜しくね』つて施設長に渡そうとしたら『将来のためにとつとけバ鹿モン』と脳天にカラテチョップされました。DVでございます。かなりイラツと来たのでその後小分けして匿名で定期的に振り込んでやっています。ざまあ。

というわけで転生ライフ満喫開始じゃーいとか思いながらわたくしは通い慣れたゲーセンから家路についている最中です。

あいにく本日は雨天なり。片手が塞がってしまうため手押し式車椅子に乗ってるわたくしにはとても困った雨さんですが、車椅子の背に傘の柄を固定してやれば両手フリーで雨に濡れません。そこに雨合羽をひぎかけ状に掛けておけばバッチリです。いやあ、全身雨合羽は蒸れるんですよ……。あと早いとこ電動の車椅子買お。

そういえば覚醒時に痛めた肺ですが、水と一緒に砂も飲んじやったんでしょうね、医師にお手上げされました。

なんか肺組織と砂が癒着しちやってるから肺まるごと全とつかえしない限り治せないってさ。

現代医学じゃ根治難易度高そうなので、一応カイロプラクティックとか漢方薬とかの東洋医学系も頼ってみたけど、あかんかった。

移植手術とか怖いし、息しづらいだけで死ぬわけじゃないし、まあヨシ!

道中、近所のちよっと大きめの公園へ入っていきます。道なりに行くより公園内を通った方が少しだけ近道ですの。

時刻的には夕暮れくらいですが、結構厚めの雨雲なんですかね、だいぶ真つ暗です。幸いにも街灯が既に点いてるので道が見えないとかは無いですけど。

そうして車椅子を中程まで進めていたところ、なんか芝生んところにぼつんと誰かがいるのが見えました。この雨の中、傘も差さずに。まじか、根性入ってんな。いやいやこんなの絶対訳ありでしょ素通りとか出来るはずありませんって。

んー、もつと近くに行きたいけど芝生だとわたくし入り辛い。仕方ないので周りの通路から出来るだけ近寄って声を掛けます。

「お姉さん、風邪、ひいちゃうよ?」

「放っておいてくれ」

しっとり濡れウマ娘さんはこちらを見ること無く、抑揚の無い声で返します。はい、ウマ娘さんでした。濡れた髪が顔を覆い隠して表情を窺い知ることが出来ません。

緑の七分袖シャツにぴったりパンツルック、鮮やかな鹿毛色のロングヘアで少し濃色の前髪の中に白毛が一房。

……どつかで見た事ある気がするぞこのウマ娘?

最近テレビで見た事ある気がするぞ?

前世知識でも見た事ある気がするぞ?

「でも」

「いいから、頼む」

いやあ、流石にまだ春先の雨は冷たいっすよ?

身体はあるうちが華なんですから労ってあげませんと。

とはいえ、このままでは押し問答が続くだけでしょね……仕方ない。

「……ん、分かった」

このままでは説得出来ないと言うことが分かりましたとも。

ならば分かせてやる。

雨でぬかるんで進みづらい芝の上をちよつと頑張つて彼女の隣まで進みます。

そして傘を脇に捨て、彼女の隣に佇みます。うつひやーやっぱ冷たいじゃん雨。

「……何を、している?」

やや困惑気味な問い掛けが聞こえて来ますが素気なく返します。

「放つて、おいて」

「いや、しかし」

「そういう、ことだよ?」

「……」

な? 放つておけなかるう?

何か辛いことがあつたんなら、おいちゃんが聞いてあげますからとりあえずこれ以上

雨に濡れないようにしようぜ。寒いし。

「近くに、いいところ、あるから、身体、だけでも、拭いて、いかない?」

「……分かった、君を送っていいこう」

「ん」

近所にわたくしの元家がありますんで。

「オヤジ、風呂貸してー」

はい、海な坊主がいる養護施設に突撃隣の晩御飯もといお風呂借りに来ました。既に施設を出て一人暮らしをしている身ですが、時々こうやつてお風呂借りに来ております。複数人同時に入れる大きさの風呂って楽なんですよね。

「……ああ？ スノウか……お前今度は何拾いやがった」

「濡れウマ娘」

なんかオヤジ、盛大に溜息ついてますね。何かいいことでもありました？

「はああああ……もう沸かしてあるからジャリ共に乱入される前にさつさと入って来い。……何ボサツと突っ立ってる。あんたもだ、嬢ちゃん」

「いや、私は」

「やかましい、ガキが一丁前に遠慮なんかしてんじゃねえ。着替え用意してやるから風邪引く前にあつたまつて来い」

もー、なんやかんやで優しいんだからオヤジいー。

勝手知ったるなんとやら、車椅子を玄関に置いたわたくしは、わたくし用に用意された屋内移動用の台車に乗り込んで浴室へ向かいます。

「ほら、こつち」

「あ、ああ……」

早くあつたまろーぜー、まじ風邪引いちやう。

一緒に入っても女の子同士だから何も問題は無いぜ！

何も問題は無いぜ！（大事2回）

「ふう、いい湯、だった」

はい、キングクリムゾンさん良いお仕事です。

気が付けば湯上がりぽかぽかスノウちゃん一丁上がり。そしてそんなわたくしの隣には同じく湯上がりぽかぽかウマ娘ちゃんも。

お風呂から上がったわたくし達は、以前までわたくしの部屋だった、現在は客間にて二人で寛いでおります。

テーブルにはいつの間にか用意されてる麦茶のピッチャーとコップが2つ。やはり内面イケメンだなオヤジいー。

「君は……何というか、特殊な入り方をするんだな」

「まあ、足が、動かない、からね」

さつきまでの入浴スタイルを思い出し、ウマ娘ちゃんがそんなことを眩きました。

バスタオルを体に巻いて腹ばいになって、浴室を腕の力だけで滑って行って、湯船に辿り着いたらそのまま頭からぬるんとダイブ。

『スノウアザラシ』の異名で昔は一緒に入ってた子供達にも評判でした。

まあここみたいなタイル貼りの広めの風呂だから出来る技なんですけどね。一般的なユニットバスじゃ無理かな。

「そういう場合は誰かの介助を必要とするものだと思っていたよ」

「本来は、そうなんだ、ろうけど、ここじゃ、出来るだけ、自分らで、やるのが、ルール、だから。出来るから、やってる。それだけの、話だよ」

職員がオヤジしかいないんですねこの施設。ですので炊事洗濯掃除買い物に至るまで子供達主体でやりました。年上の子が年下の面倒を見る感じで。オヤジは子供じやどうしようもない事のみ担当。こんなんでよく回ってんなココ。

「そうか……時に、君は何というか、独特な話し方をするんだな」

あ、やっぱり気になるよね。

なんかね、肺が駄目になってからまともな呼吸が出来ませんでして。少し浅めにしか吸えないので、会話がどうしても途切れ途切れになっちゃうんですね。

「あー……肺に、問題が、あつてね。聞き苦しくて、ごめんね」

「！ いや、そういう訳じゃないんだ。こちらこそ不躰なことを聞いてしまつてすまなかつた」

「ん、特に、気にして、ない。問題ない」

聞き苦しいのはこちらの過失なんでね。むしろ無駄に気にさせてしまつて申し訳ない。

「……」

「や、ほんとに、気にして、ないんだけど？」

「しかし……」

もう、真面目さんなんですから。そんなにシヨンボリしなくていいのに。

ならば強引に気にしなくさせちゃいましょう。

「んー、じゃあ、不躰、返し」

「なにふおつ!？」

彼女の両ほっぺを人差し指でぷにゅと。

うわーお、わたくしがやつといて何ですけど、顔がいい人つて変顔でも顔がいい。ギザカワユス。

「はい、これで、おあいこ」

異論は聞かぬ。はい終了!

「さて、ぼちぼち、自己、紹介。わたしは、メルテッド、スノウ。以前、この施設で、暮らしてた、ウマ娘。今は、ただの、ニート。あなたは?」

「私は、シン……」

「?」

「……すまない。とある事情で名乗る訳にはいかなくてね。仮に……そうだな、ルナとでも呼んでくれ」

あーそういうことね完全に理解した。

まあ、7冠ウマ娘ですなんて名乗ったらこの場がパニックになる可能性もあるでしょうし。多少素性を隠すのは有名人の嗜みなのでしょう。

「ん。承知」

「……私が言うのも何だが、納得するのは、早過ぎやしないか? 怪しいとは思わないのか?」

「別に、気にしない。名前、なんて、個人を、特定、認識、するための、記号の、一つ。今、目の前に、あなたが、いるなら、この場では、そこまで、重要、じゃない」

見た目でモロバレな気もしますが本人だと名乗らなければそっくりさんで誤魔化せる範囲内でしょうし。

彼女が彼女であるとわたくしが認識していれば呼び方なんぞ何でも良いのです。

「そう、か……中々ユニークな考え方だな」

「変人、って、言っているよ。何故か、よく言われるし。解せない、けど」

「くふっ……失礼。確かに、変わっている」

あれー？ 否定してくれない。何故だ。

「で、ルナ。あんな、ところで、何してた、の？」

「……」

落ち着いたところで本題に切り込みます。

ま、言い淀むところまでは想定内。

「話して、みた方が、気持ち、楽に、なるかもよ？ ほら、行きずりの、女、相手なら、

後腐れも、無いでしょ？」

「すこぶる聞こえが悪いな。だが、そうだな……少し長くなるが、聞いてもらえるだろうか？」

「ん。」

「ん。どんとこい」

居住まいを正してルナちゃんが話し始めます。

「……私には、夢があるんだ。『全てのウマ娘を幸福にする』という、最早生きる理由と
言っても過言では無い夢が。その為に信頼と実績を得るべく、私は頂点を目指し走って

きた。先日、大きなレースがあつて、それに勝利すれば私は夢に向かつて大きな一歩を歩めるはずだった。はずだった、のだが……」

「調整に失敗してね、その大きなレースに出る前に脚を痛めてしまったんだ。医師から告げられた病名は、繫靭帯炎……そう、ウマ娘にとって不治の病とも言われているそれだ」

そう言いながら左脚をさするルナちゃん。

「そういう風呂入った時に包帯巻いてるの見ましたね。」

「私は結局、そのレースに出ること無く帰国した。大きな一歩を踏み出すどころか、果てしなく後退してしまつたんだ。あと数ハロンというところまで見え始めていたゴールが、遥か遠くに行つてしまつたんだ……」

「私がこれまで努力して来たものは何だつたのかという絶望感と虚無感、そして今まで私を支えてくれた皆に対する罪悪感で自暴自棄になつてしまつてね……もういつそ、綺麗に全てを諦めてしまつた方が良いのではないかと考えると、いたたまれなくなつてしまつた。空港を出た後、戻るべき場所に戻ることも出来ずふらふらとしていたら、いつの間にかあの場に佇んでいた……という訳さ」

なるほど遠征帰りの途中だったか。この地域、別に学園の近くつてわけじゃないのに何でこんな所に彼女がいるんだろうと思つたけどそういうことか。

ていうか前世知識でもアプリでお迎え出来てなかったから知らなかったけど、彼女ってそういう経緯持つてるウマ娘だったんだ。

アニメ1期ラストのWDTでしか走ってる姿を見たことが無かった理由がこれか。

……くっそ重っ。

「どうだい、まるで道化の演じる喜劇のようで笑えるだろう?」

「笑えない、よ。笑わない」

「そうか……どうも私にはユーモアのセンスが足りていないらしい」

自嘲気味に笑みを浮かべるルナちゃん。

なるほどね。大義も走りたい気持ちも持たないわたしには気持ちが分かるとは言

えませんが、気落ちしたくなる理由としては理解出来ます。

「ルナの、事情は、理解、した。その上で、言わせて、もらう」

理解は出来ませんが、納得は出来ません。

全く。頭良い娘は頭でっかちになりがちですネ。

自分の中だけで結論を出すんじゃないやありませんよ。

「あほか」

あ、ルナちゃん固まった。

「……あ、阿呆!?!」

笑いながら憑き物が落ちたように語り出す彼女。

届いた、と見ていいかな？

「ああ、ああ！ 確かに私の理想は綺麗事だ。実現には多くの障害が立ちはだかる夢物語なのかも知れない。けれど、それがどうした。それが夢を追ってはいけない理由にはなり得ない。ならば確かに、怪我をして満足に走れなくなった程度で、諦めていい理由にはならないな！」

「近道は失われたかも知れない。長い長い遠回りになってしまったかも知れない。けれど目指すゴールは確かに存在している。ならば私はそれを目指して走るだけのことだった！ 君に言われるまでそれを忘れてしまうと、私もまだまだ精進が足りないな！ ははははははははっ」

お腹を抱えてテーブルに突っ伏し、肩を震わせながら笑い続けます。

それからしばらくして。

一頻り笑ったルナちゃんがり、こちらにスツと手を伸ばしてきます。

「メルテッドスノウ、ありがとう。君のお陰で私はまだ前を向いていけそうだ」

おや、これは握手を求められています？

ふむ……ならば丁度いい。しっかりと握り返して、えいやっ。

「ん。それと、わたしからの、予言。あなたの、脚は、治るよ。そして、必ず、また走れ

る。迷わず、行けよ。行けば、わかるさ」

あなたの進む軌跡よ、道となれ。

「君は……本当に凄いな。今の私が欲しい言葉をくれる。まるで年下とは思えないよ」

今度はわたくしがテーブルに突っ伏す番でした。ゴンつと小気味いい音が響きます。

あー……やっぱりそう思われてたか。

幼児体型でごめんなさいねえ！

「……あー……ごめん。多分、年上」

「んんっ!? て、てつきり小学生かと……それは、すまなかつた……」

言うに事欠いて小学生だとお!?

それは言い過ぎだろこの恵体ウマ娘めえ！（血涙）

「とつとつと、特に、気にし、気にして、ない。問題ない、ない」

「気にしまくつてるな」

「ぐぬあー」

見上げると彼女と目が合つて、何だか可笑しくなつてお互いに笑いが込み上げる。

「……ふふふっ」

何よ、そんな可愛い笑顔出来るんじゃない。

しばらくして、オヤジが部屋にやって来ました。

ちやんとノックして入るなんて良く出来た紳士ですね。

「おい、雨上がったぞ。いい時間だ、帰るか泊まるか選べ」

「あらま。どうする？」

「帰ることにしよう。先程マルズ……知り合いから連絡があつた。あまり心配を掛けるのも良くないからな。……本当に、ありがとう、メルテッドスノウさん。貴方は私の迷いを払ってくれた。正に六根清浄の心持ちだ。貴方のことは決して忘れない。施設長もお世話になりました」

ルナちゃんは立ち上がってこちらを向いた後、オヤジに頭を下げました。

うん、今の彼女ならこのまま帰らせても心配無いかな。

「気にするな。服は洗濯してこの袋に入れてある、持ってけ。今着てるのもくれてやる」

「おおげさ。まあ、またどこかで、会ったら、よろしくね、ルナ」

「ああ、またどこかで。では」

玄関でルナちゃんが遠ざかって行くのを見送ります。いつまでもいつまでも見送って、見えなくなつた頃合いでオヤジに声を掛けました。

「んじゃ、わたしも、帰る。オヤジ、ありがと、ね」

「礼なんざいらん。親が子の面倒を見るのは当たり前だ」

「ん」

マジ良い人。聖人だわ。

わたくしに対することもそうだし、彼女のこと事情を聞かないでくれた。頭が上がらんわ。

「あとな、最近匿名で振り込まれてるが、お前だろアレ。まとめて振り込み返すからな」
「なぜバレたし」

勝てねえ。素直に受け取ってくれよオヤジい……。

さて、チート使っちゃった。ごめんお母さん。

だって彼女の落ち込みっぷり、見てられなかつたんですもの。あんなに夢に向かって頑張ってる娘っ子、報われて欲しいって思うじゃん？

脚の怪我だったから、わたくし麻痺ってて痛くないからギリセーフってことで。

……ところでこれ、アリじゃね？

ウマ娘にとって悩みの種の脚の故障、わたくしなら引き受けてもノーリスクじゃね？
因果のうちに貰っちゃえば走るところか歩けないわたくしなら発動の心配も無いし。
怪我の状態で貰っても痛くないし。

けどどうやってアニメのウマ娘ちゃん様達とお近づきになろうかねー？

学園近くでカフェでも営んでみようかしら。んで軽くお話ししながらカウンセリン

グっぼいのしながらこっさり因果貫つてみたり。いやそれだと客として来てくれた娘しか対応出来ないな。しかもよく考えたら客にベタベタ触るとかセクハラだわ終了わたくし自身があんなウジ虫に成り下がるとか冗談じゃないわ。

んー、ウマ娘ちゃん様達を自然な流れで健康に、健やかにする何か上手い方法は……あ。

そういうえば学園に養護教諭とかいねえな？

Season 2

Case 14 : 養護教諭の初詣

■今までのあらすじっ！

足と肺にハンデを持つウマ娘、メルテッドスノウは転生者である！

更に『他人の傷病及びその因果を自己に転嫁出来る』というチートを備え、関わったウマ娘達からこっそりと、そしてがっつりとそれらを己が身に引き移し、怪我による曇らせを取り除くことに余念が無く、既に抱えた爆弾は数知れず。

そんな状態で本当にウマ娘達の曇らせを完全回避出来てんのかスノウちゃん？

お前さん既に結構色んな娘から慕われてるからまた倒れたりしたら洒落にならんぞ
!?

あけましておめでとうございます、メルテッドスノウでございます。

仕事初めを迎えてから初の普通の休日、ザ・日曜日でございます。

今日は学園から程近く、府中レース場からだいぶ近いかなり大きめの神社へやってきました。
ております。

まあ何でか、つて言えばベタなんです。三が日は人混みがえげつないのでこうやって屋台もいなくなつた頃にゆつたりお参りするのです。

昨今の神社仏閣であれば割かしバリアフリー対応してくれてはいますので不便は無いのですが、だからといって無理に混んでる時に行くことも無いかなあ、と。

年始に折角とんでもない初夢も見せられた事ですし、ウマ娘ちゃん様達の健康と安全と益々の発展を祈願しておきませんと。

というわけでまずは手水舎でお清めとまいりましょう。

お清めにも手順とかあるんですけどそういう細かいところは別途おググリ下さい。一応知ってるマナーや手順は遵守しますが、基本的に気持ち籠つてりやオツケーでしよとか思つてる質なので。

———と想つた矢先に聞こえてきたのは賑やかで姦しい声。

「わあつ、これが日本の神社なのね！ この建物の曲線美、彫り物の緻密さ、そして一切釘を使つていないという、とんでもない建築技術！ これが全て木造だなんて本当に信じられない！ あ、シヤカ、あつちに水飲み場があるわ。ちよつと喉が渴いたから飲んでいきましよう！」

「うるつせエ、騒ぐな。そしてアレは水飲み場じゃねエ。カミサマを拜む前に身を清める場所だ」

「そうなのね！ 日本の信仰もしつかり神様に敬意を払っているのね、とても素敵！でも初詣には参道に屋台が並ぶって聞いていたのだけれど、全然無かったね、噂に過ぎなかったのかしら？ 人もまばらだし、ちよつと残念」

「三が日過ぎたら普段はこんなモンだ。てかお前のSPが屋台が並ぶほど混ンでる時期には絶ッ対エ出さなかつた許可を今日は出したんだ、人も減つてとつくに居なくなつてるのはロジック組むまでもねエ自明の理だろうがよ……」

ふむ、見てみればどこか気品溢れるウマ娘ちゃん様とザンバラ髪のウマ娘ちゃん様。

もう皆様お分かりですね？ ファインモーションとエアシャカールのお二人です。公式カップリング来たこれえ!!!

ファイインちゃんは神社に来るのは初めてですかね？ とにかく周りをキョロキョロと忙しく眺めては何かしら見つけてはしゃいでいます。今は手水舎の水口、二匹の向かい合つた龍に興味津々です。なかなかマニアックなところを突いてきますね。

シャカさんはげんなりしたローテンションながらもしつかりとファイインちゃんに付き添っています。

数字やデータを信仰する彼女にとってこの場所は真逆で合わないでしょうに、付き合いの良い娘ですね。とてもとても素敵ですので是非そのままです。

「あ、ア？ てめエ何見てんだコラ見せモンじゃねエぞコラ……つて、学園で見たこと

ある顔だなコラ」

おっと、ちよいと見つめすぎてしまいましたかね。わたくしに気付いたシヤカさんからお叱りの言葉を頂いてしまいました。お目汚し失礼、今すぐ消えますのでご容赦をば。

「もう、シヤカったら。こちらはメルテッドスノウ先生。学園の養護教諭の方よ。あけましておめでとうございます、先生。こんなところで会うなんて奇遇ですね」
と思つたらまさかのロイヤルフォロー。

んまあ学園ですれ違つたら挨拶する程度にはお互い顔見知りでしたし。

「ん。あけまして、おめでとう、ファイン、モーシヨンさん、それと、エアシヤカール、さん。二人も、初詣？」

「ええ。折角日本に留学に来ているんですもの、日本文化を体験しておかないと勿体なくて。色々と教えてもらう為にシヤカールにも来てもらったんです」

とにかく明るいファインちゃん。安心してください、普段着ですよ！ ……何を当たり前のことを言っているんでしょうね私は。

「ん。それは、良いね」

「何が『来てもらった』だよ無理矢理連れ出したんだろうが。おいそれとアンタ、何だつてそんなまどろっこしい喋り方してんだウザツてえな。もつとハキハキしゃべ」

「シャカール」

ファイインちゃんがちよつと強めの口調でシャカさんの言葉を遮ります。虚を突かれたシャカさん、ファイインちゃんが滅多に出さない声色に軽く身を引きました。

「……………ンだよ」

あら、やや険悪な空気。気にしなくていいんですのよ殿下。実際わたくしの喋り方が聞き苦しいのはわたくし自身が誰よりそう思ってますし、シャカさんは事実を言っただけに過ぎませんし。どうぞ、お二人はわたくしなぞに気を揉んだりすることなく引き続き初詣をご堪能くださいな。

「ごめんね、肺が、弱くて、こんな風に、しか、喋れなくて。聞き苦しい、だろうから、わたしは、失礼するね。また、学園で」

いやほんとごめんねごめんねー。わたくし二人の間に挟まったりするような野暮なことは致しませんので。

ちよつと今回は場が悪そうなので遠目から見ることもし叶いませんが、次の機会があったらまたよろしくお願ひしますので。さき、お二人は初詣の続きを——と、この場からそつと消えようとしてましたが、シャカさんに呼び止められます。

「ッ、待て。……………悪かった。知らなかったとはいえ無神経だった」

斜め下を向きながらばつが悪そうにしながらもシャカさんが謝ってきました。

いやあ、変に気を使われるよりハッキリと言ってもらった方が分かり易くて助かりますので、わたくし自身はマジで気を落としたりはしてないんですけどね。

「もう！ 本当にもうだよシャカール！ 申し訳ありません先生。彼女も悪気は無いのです。どうか私に免じて許してはいただけませんでしょうか」

ぶんすかといった擬音が見えそうな怒り方をしているファインちゃん。いえいえ普通に事情を知らなければ突っ込みたくもなるでしょうこの喋り方は。そしてそこからこちらを向いて深々と頭を下げるファインちゃん。つてちよつ、国際問題に発展しかねないからお止め下さい！ ほ、ほら、周りのSPさん達もわたわたしちやつてますよ？

「免ずるも、何も、事実だし、そもそも、気にして、ない。けど、謝罪は、受け取った。ありがとう、エアシャカール、さん」

「いや何でそこで礼が出ンだよ」

なんやかんやでちゃんと悪いと思つて謝罪してくるあなたの心根の優しさに対してですよ？ もう、ほんと皆して素敵な娘達なんですから。

「許していただいてありがとうございます、先生。……そうだ！ 良かったら先生も一緒に参りして頂けませんか？ 皆で回った方が、きっと楽しいと思いますし！」

「んと、わたしは、かまわない、けど……いいの？」

わたくしはちらりとシヤカさんを見ます。

謝ってくれたとはいえ聞き苦しいのは変わらないので。

「……ア？ 別にわざとじや無エなら思うところは無エよ。以前、そんな喋り方で媚を売ってきた奴がいてその類かと思つたんだが、俺の早とちりだつたみてエだし。つくそ、十分なデータが取れて無エ段階で推測、いや邪推しちまつたな、俺としたことが……」

なにやらブツブツと独り言を言うシヤカさん。

以前何かあつたんでしようけど……この喋り方、媚売れるのか？

「まあ、そういう、ことなら、是非に」

「良かった！ 私はもとより、シヤカールもあまりこういつたことはしない方らしくて。作法とかマナーとかちよつと不安だつたんです。先生はこういつたことは？」

「詳しいとは、言えないけど、あくまで、一般的な、レベルなら」

「まあまあまあ！ 聞いたシヤカール？ 心強い味方がついたよ！」

両手をぱちんと合わせておおげさに喜ぶフラインちゃん。

こちらとしてもこうやってふれあい体験させていただけるのであれば願つたり叶つたりでございませう。

さつき間に挟まるつもりは無いと言つた矢先ですが、挟まらずに横か後ろに付き従う

程度ならセーフです。

「何でもいいから、早く済ませて早く帰らせろ。こちとら帰ってやりてエことがあるんだからよ」

「はいはい、分かりましたよシャカール。じゃあ先生、まず手水舎てみづぐさでは何をしたらいいの？」

「せっかくフアインちゃんが初詣を満喫しようとしてるのですし、分かる範囲でガイドさせていただけますよ。れつつら異文化交流」。

「まずは、この、柄杓を、右手で、持って……」

「詳細はおググリ下さい。」

「で、ここが、拜殿。神様に、お祈り、するところ」

「比較的人が少ないとはいえ、多少順番待ちする程度には混んでいきます。」

「列に並びながらフアインちゃんに簡単に説明をしていきます。」

「なるほど、礼拝堂ということね！ 奥の方には何かあるのかしら？」

「一般的には、この奥に、本殿……神様の、お社が、ある。そこに、向かって、お参りを、する」

「……ちっ」

はいはいシヤカさん、神様の存在が気に入らないのは分かりますが露骨に舌打ちしない。

貴方だつて2年目3年目の4月上旬とかにはお世話になつてるでしょう？（メタい）

「お参りの、仕方は、鈴が、あれば、それを、鳴らして、神様に、アピール、する。無ければ、省略」

ファインちゃんにお参りの仕方をレクチャーしていきます。

「そして、お賽銭を、入れて、二拝、二拍手、一拝。最後の、一拝で、祈る。まずは、わたしは、やるから、真似して、みて」

というわけで、お賽銭を入れましょうねー。

去年も大変実りある出会いに恵まれましたのできちんとお礼はしておきませんと。

懐からお賽銭を取り出し、賽銭箱目掛けてほいつと投げ入れます。

——ぽいつ、ドンッ、ゴロゴロ、ゴトン。

ええ、とてもとてもお世話になりましたので、5円玉1枚などと言わず50枚入りの棒金で奉納です。もちろんそれを1本とは申しません。

——ぽいつ、ドンッ、ゴロゴロ、ゴトン。

——ぽいつ、ドンッ、ゴロゴロ、ゴトン。

——ぽいつ、ドンッ、ゴロゴロ、ゴトン。

立て続けに懐から棒金を取り出しては投げ入れ、取り出しては投げ入れます。

シャカさんや他の参拝客から信じられないものを見るような視線を感じますが気にしない。

たくさんのご縁にはたくさんの5円でお礼しませんと。

10束の棒金を入れたところで二拝二拍手一拝。

昨年は大変お世話になりました、今年もウマ娘ちゃん様達が笑顔で平和に過ごせますように……つと。

「願いは、口にする、叶わない、らしいから、心の中で。じゃ、どうぞ」

「なるほど！ でもその硬貨の束は用意してなかったなあ」

「予備が、ある。これ、使って」

「準備が良いのね！ ありがとう先生。じゃあこれを」

「待て。待て待て待て待て待て待て」

「c。」

なんかシャカさんがお参りにストップをかけてきた。

至って普通の手順だったと思いますが、何か？

「あまりの事態に思考停止してたわ。何だそれ。何で棒金しこたま持つてんだというか普通は賽銭つてのはコイン1枚とかじゃねエのかそしてファインもありのまま受け入

れんなこの先生も意外とかつ飛んでんぞ」

「金額は、気持ち、次第。決まりは、無い」

お賽銭は奉納品ですのぞ。

日々ウマ娘ちゃん様達と過ごせるといふ日常を賜れたんですから、それ相応のお返しはさせていただきますと……ふむ、つまりこの程度ではまだ感謝が足りないかと？ 倍
ブツシユしろと？

「それ普通は出し渋るヤツ側のセリフだったの。おらファイン、5円玉1枚やるからこれを入れろこれで十分だ。そのトンチキの色に染まるな帰って来い」

「ねえシヤカール、さっき『この先生も』って言った？ 『も』って言った？ まるで他の誰かがかつ飛んでるようなこと言った？」

「うるせエ今そこを拾うな。いいから黙ってこれを使え」

「なんで、スツと、5円玉、出るの？ もしかして、準備、してたの？ 彼女に、渡す、ために、あらかじめ、用意、してたの？ 彼女の、為に？」

てえてえポイントいただきましたあ!!

「うぜエ！ あんたも今そこを拾うな！ てかお前ら事前打ち合わせでもしてたのか仲
良いなア!!」

「いえーい」

「えええ」

わたくしとファイインちゃん、ハイタッチ。

よく分かりませんが、なんとなくノリで。

あつ、シヤカさんが汚物を見るような目を向けてますごめんなさい悪ノリしちゃいましたすみませんもう止めます申し訳ありませんでもありがとうございます。

その後、おみくじ引いたりファイインちゃんがお守りや御朱印やらに興味を示して片っ端から頂きまくり、シヤカさんもなんやかんやで非合理的だとか非効率だとか言いながらも付き添ってくれ、無事にお参り完了したわけでございます。

おみやげ満載でにつこにこのファイインちゃん、表情の難しい無表情なわたくし、まるで乗り物酔いしたかのようにぐったりしてるシヤカさん。なんだこの対比は。信号機か何かか。

休憩がてら、参道入り口そばにあったお団子屋さんで一服と洒落込みます。

木造で創業江戸とか言われても不思議じゃないくらい年季の入ったお店の入り口にはこれまた年季の入った長椅子が置かれて、イトイン可能な素敵なお店です。わたくしも時々利用させてもらってます。

このお店、イトインするとお店のおばちゃんが緑茶をサービスしてくれるんです

が、今日は正月特別期間ということで甘酒サービスでした。

普段はみたらし団子と緑茶なのですが『甘酒にはしょっぱいものが合うよ』とのこと
で、海苔を巻いた醤油団子をいただいております。もっちもちでうつまうま。

塩つ気が強くなった口の中にアツアツの甘酒をふーふーしながら啜りこみます。ほんのりと上品な甘さが広がります。ほわあ、こいつはいいですね。

しょっぱい、甘い、しょっぱい、甘い。マリアージュ。うおオン。

ふと隣を見れば、フラインちゃんもわたくしと同じようなペースで食べては飲んでます。

そしてあんなにげんなりしていたシヤカさん、大人しく食べ進めています。というかシヤカさんはお団子より甘酒に御執心のご様子。おかわり求めてますよこの娘。かわいいね。

「甘酒はコスパが高エ。疲労回復、血行促進、抗酸化作用もあつて『飲む点滴』って言われるほどだ。ブドウ糖も豊富で頭脳労働にや欠かせねエ」

それな（語彙力）……いやもちろん知ってますよ？

酒麴より米麴のやつの方がいいとか、実は体温を下げる効果があるから冬場はホットで飲まないと逆効果だったりとか。江戸時代は夏の飲み物でしたし。

養護教諭でも栄養指導の真似事ができる程度には賢いんですよ？

……ホントダヨ？

「何で日本の食べ物ってこんな美味しいものばっかりなの！ ラーメンもそうだったけど、このお団子の柔らかさ！ 甘酒の優しい温かさ！ お店の雰囲気も相まってより一層美味しく感じられるわ！」

「みんなで、食べると、より、おいしい。そういうもの」

お団子を食べ進めてる最中もハイテンションでニコニコしてたファイインちゃんでしたが、わたくしが何気なくそう言うと、ハツとした表情に変わり、小さく『……そっか』と言ったかと思ったら、両手で甘酒を持ってじつと眺め出しました。

あれ、そんな黙つちやうようなこと、わたくし言いました？ また何かやつちやいましました？ いや彼女の表情は柔らかく微笑んでるから決して嫌な思いはさせていないと思いますけど。

「……先生、今日はありがとうございました。私、絶対今日のこと忘れません。シャカールと先生と、神社とお団子が私にくれた素敵なキラキラの宝物が、私の一部となつてくれたこの日の事を。私に宝物をくれた素敵な友人が、先生とシャカールだったことを」

……あー、そっか。『みんなまで』ってとこに反応してましたか。

彼女は将来が予定どころか決定付けられている娘です。学園での生活を終えたら母国へ戻り、王族としての責務やら何やらに追われる日々を過ごすのでしょうか。

当然、そこには今日の『みんな』が居るとは限りません。そのことを思つてちよつとおセンチになつてしまつたのでしょうか。

大丈夫ですよ。あなたの言う通り、今日という思い出がきつとあなたを支えてくれるはずです。今日この日、楽しかつたという気持ちを持つて、先の未来でも日々を楽しんでくれれば、毎日がよりあなたを輝かせてくれるはずですから。

ファインちゃんを待つ未来に、多くの幸あれ。

そんな思いを込めて、わたくしは残つた甘酒を軽く空に掲げて飲み干すのでした、まる。

「……アー、ファイン。とりあえずな、恥ずかしいセリフ禁止だ」

「えー」

甘酒吹きそうになるからやめてえシヤカさんん!!

あ、ちなみにファインちゃんは至つて健康でした。

シヤカさんはなんか脚にやばいのがあつたので遠慮なく頂いておきました。色々とごちそうさまです。

Case 15 : 養護教諭のバレンタイン

■Case 15—1: ゴールドシチー

いつもは保健室で外を眺めながらコーヒーを飲んでいる先生が、今日はいなかった。机の上には

『外出中 急患はO X O—X X X X—X X X Xへ 養護教諭』

と書かれた札が置いてある。

特に戻る時間も記されておらず、それならばと珍しく時間の空いたアタシは先生を探してみることにした。

学園内をうろうろ探していたら、あっさりと中庭でスノウ先生を見つけた。

何人かの生徒が嬉しそうに、手に小さな袋を持ったまま先生の元を離れていく所だった。

「スノウ先生、どこに行ったかと思つたらここにいた」

「ん、ゴールド、シチーさん。なにか、用事？」

スノウ先生はいつもの車椅子の後ろに大きな荷台をけん引していた。荷物が満載されているが中身は白い袋で覆われていて隠されている。

更に先生の手には抽選会とかでくじを入れてるような箱が。

「まあ、用事つて言えばそうなんだけど……先生、その荷物なに？」

「バレンタイン、くじ。ハズレなし。完全、無料」

……この先生、物静かそうな見た目の割に時々アグレッシブになるから行動が読み切れない。

今だって、普段はずっと保健室に居るのにこうして探し回る羽目になってしまっているし。すぐ見つけたけど。

そしてバレンタインくじって何。

何でそんな商店街のイベントみたいなことやってるのこの先生。

「……相変わらず変なことしてるね、先生」

「えへん」

ちらり。

「褒めてないよ」

何故か得意気に胸を張る先生。

そして手に持っていた箱を私の方に差し出して来る。

「それは、ともかく、シチーさんも、一回、引いてって」

正直、現状を理解しきっているとは言えないけど、こういう時はとりあえず乗っかつ

て満足してもらうのが早い。

「まあ、いいけど。ちなみに1等は?」

「某有名、遊園地、ペアチケット」

それ、ちゃんとイベントとして成立する内容になってない?

個人で用意する内容じゃなくない?

「割としっかりとくじ引きしてるね先生」

「えへん」

「だから褒めてない……4等だつて」

あまり深く考えても仕方ないので、箱に手を突っ込んで適当にくじを一枚引く。

三角に折りたたまれたくじを開くと、『4等』の文字がそこにあつた。

「ん。じゃこれ、進呈。シヨコラ、アソート」

そう言つて先生は荷台の袋から小箱を取り出してアタシにくれた。

手の平サイズの濃いピンクの箱に白いリボンが掛かつており、箱には『Happy

Valentine's Day』と金文字でプリントされている。あれ、これつて

……。

「駅前の美味しいお店のじゃん。本当にいいのこれ?」

どっかの有名なシヨコラティエが独立して作つたお店のやつだ。

たまたまCATV番組の地元紹介でゲストに呼ばれて行ったから覚えている。その時に試食して相当美味しかった気がする。

「バレンタイン、だからね」

「理由になつてない気がするけど……ありがとう先生」

意外と私にチョコを贈ってくれた相手は少ない。トレーナーとマネージャー、それとバンブー先輩とユキノくらいだ。

だからこれは、素直に嬉しい。

「で、用事って、なに？」

「あ、そだ。はいこれ。ハッピーバレンタイン」

そう言つてアタシはカバンから用意してあつた小袋を先生に差し出した。

先程の4人に加えて、スノウ先生に渡すものはあらかじめ用意しておいた。

この先生には時々世話になつてるし。どうしてもレースとモデル業とのスケジュールが調整し切れずギッチギチだった時に、体調不良つて名目で少し授業サボつて保健室で仮眠させてもらつたり、偏りがちな食生活を改善するアドバイスをもらつたり。

「おやま」

「先生にもお世話になつてるからね。日頃の感謝つてことで、あたしも良く使つてるメーカーのリップ。もう少し自分磨きな先生。折角素材良いんだから」

「ん。ありがとうね、シチーさん」

全く、本当に分かってるのかな。

確かに幼めの顔立ちだけどすごく整ってるんだから。

ナチュラルと無頓着は違うんだよ先生。

「こちらこそ。それじゃね、先生」

何はともあれスノウ先生にプレゼントを渡すという目的を達成したアタシは、その場を後にした。

……けど先生、もしかしてその荷物全部無くなるまでやるつもりとかじゃないよね？
なんか荷台に山積みになるほどチョコ積んでるっぽいんだけど……

■ Case 15-2 : ヒシアマゾン

本日の学業とトレーニングを無事終えて、アタシは早々に寮へと急ぐ。

寮長というものを任されている手前、アタシには色々やることが多い。

とりあえず寮生数名のメシの世話。アイネスフウジンやサクラチョコノオーが時々手伝ってくれたりもするが、生憎と今日はアタシしかない。

各々自炊くらい出来て欲しいと思わなくもないが、そう思っただ一度サクラバクシンオーにさせてみた結果、アタシが用意した方が被害が少ないという結論に辿り着いた。

そしてそれが終わったら寮内の見回りやら備品の補充・請求やらと目白押しだ。

そんな今夜のスケジュールを頭の中で確認しながら戻っていると、寮門のあたりに誰かがいるのが見える。

「ご協力、お願い、しまーす」

なんか手元に箱を抱えたメルテッドスノウ先生がいた。後ろには荷物満載の荷台を牽引している。何してるんだあの人は。

「……寮門前での募金活動は許可してないよスノウ先生」

「募金じゃ、ない。バレンタイン、活動？」

「何で疑問形なんだい」

「くじが、割と、減らなくて。お願い、引いてつて。貰ってつて」

そう言いながら、アタシの前に箱を突き出した。

よく見れば募金箱じゃなく抽選箱だ。

というかバレンタインでくじつてどういう事なんだい。

「……よく分からないけど、要約するとくじ引きでチョコを配ってる、つてことかい？」

「ぐつつらい。ハズレなし。完全、無料」

なるほど。

この先生、完全に遊んでいるね。

「はあ……この時期は浮かれる学生も多いから気を付けてはいたけど、まさか先生から浮かれまくっているとは想定外だよ」

「えへん」

「褒めてないよ。まあ協力してあげるからチャチャツと終わらせちゃいな……と、5等だつて」

適当に引いたくじを開けば、中央に書かれていたのは『5等』の文字。

「はい、5等、チョコ○部、アソート。どうせだし、2つくらい、持つてつて」

個包装された一口サイズのチョコが数個、ラッピングされている。それを2袋渡された。

茶色いのとピンク色のとが入り混じっている。恐らく普通のと苺味とかかね。

「……地味に美味しそうじゃないか。ありがとよ、先生。それじゃお返しにアタシからも」

そう言い、アタシは鞆から義理用に複数作ったものを取り出してスノウ先生に渡す。

「これは、マフィン？ 手作り？ すごい。ちよーすごい」

「別に凄かないよ。アタシも配るのに沢山焼いたからね。貰つてくれ」

量を作るのは慣れている。先生に渡したのもそんな量産品の一つに過ぎないんだが、何だろう、そんなに目をキラキラさせて素直に褒められると少々こそばゆい。

「ん。ありがとう、ヒシアマ、姐さん」

「先生にまで姐さん呼びされるのは何か妙な気持ちだね……暗くなる前には帰りなよ」

「はーい、姐さん」

ちらりちらり。

「ま、程々にね」

どれ、折角だし食後のデザートにでも頂こうかね。

■Case 15-3: グラスワンダー

「ん？ グラス、何か寮の前でフリーハグやってマスよ」

「何言ってるのエル。駅前じゃ無いんですからそんな訳が」

薄暗くなつて来た空の中、寮門を注視してみると確かに誰かがいます。

暗くてよく見えませんが、大きな立看板に『FREE ○○○』と書かれているようです。

何事かと思い近付いてみると、相手は学園では良く見知った人、メルテッドスノウ養護教諭でした。

「……何やってるんですかメルテッドスノウ先生」

「ん。バレンタイン、活動」

「まあ、確かに今日はバレンタインですけど……」

「ささ、くじ、引いてって」

そう言つて先生は私達に抽選箱を差し出します。

立看板もよくよく見たら『FREE チョコ』と書かれていました。

文体、英語か日本語かどちらかに統一しません？

「何だかよく分かりませんが楽しんでそうデスね！ これを引けば良いんデスか？」

そう言うや否や、すかさずくじに手を伸ばすエル。

「あ、ちよつとエル」

「お、2等デス！ やつたー！」

エルの手には、対角線に折り目が付いた正方形の小さな紙が握られている。

中央には確かに『2等』の文字が大きく印刷されていた。

「おめでとう。2等、都内、ホテルの、ランチ、ピュッフエ、無料券、ペア」

そう言いながら先生は袋から封筒を取り出してエルに渡した。

ちよつと待つて。学園主催イベントとかじゃないですよねこれ？ 多分メルテッド

スノウ先生が個人的にやってますよねこれ？

「ケ!?! え、これホントに貰えるやつデス……う？」

豪華過ぎる景品にさしものエルもやや引き気味です。

「ちよつと豪華過ぎませんか先生!？」

「そう? ささ、グラス、ワンドー、さんも、引いて」

何てことをしてるんでしようかこの先生は……

あまり豪華過ぎるものを頂いても困惑してしまいます。

「うう……あまり気後れしない物でお願いしますね……えつと、3等です」

私が引いた紙には『三等』の文字が。

数字体、アラビアか漢字か統一しません?

「3等、はちみー屋の、回数券、5枚綴り」

エルに比べれば控えめな気はします。

十分豪華だと思いますが。

えへ。ピース。

「えつと、あの、ありがとうございます」

「あ、じゃあ! ワタシからもいつもお世話になつてる先生にバレンタインデー」

ベリーホットなので気を付けて下サーイ」

「では、私からも。いつもありがとうございます、先生」

私もエルも、普段からお世話になつてるのは本当です。

トレーニングで相手や内ラチに当たってしまったて痣や擦り傷を作ることもしばしば。

治療を受けてバイタルを測られながら雑談し、そのままティータイムになったりもします。

「あらま。ありがとう、二人とも」

「それじゃエル達は寮に戻りマース。チャオ、先生！」

「とうか、これはバレンタイン、なの……？」

親愛を示すイベントとしては間違つて無い気はするけど……。

■Case 15-4 : アイネスフウジン

「ふう、今日もいっぱい働いたの。早くお風呂済ませて明日の用意をしないと……つと、なんか寮の前に怪しい小山があるの。一体何事なの」

すつかり日が落ちた空の中、バイト帰りの私は寮門脇で妙なものを見つけた。小さな箱やら袋やらが無造作に積まれている。

「あ、アイネス、フウジンさん」

「つて、スノウ先生？ どうしたのこれ？」

その小山の陰に隠れるように、養護教諭のメルテッドスノウ先生がいた。小山の他にもカートに大きな袋が積まれている。

「バレンタイン、チョコを、配つてたら、お返し、みんななくて。最初より、荷物が、多

くなって、動けなく、なった」

「何してるのホント……」

私を通らなかつたらどうするつもりだったんだらうこの先生。

「後生だから、わたしの、全部、貰って、くれない？ わたしが、貰った、分だけなら、持っていける、から」

そう言つてスノウ先生はカートの袋を指差す。

え、その大きな袋、全部先生が用意したものなの？

「私もそんなに食べ切れないの……けどまあ、スーちゃんたちにも上げればいいか」
画面端から辻写りです。

「スーちゃん？」

「妹たち。スーちゃんとルーちゃん、双子なの」

「ん、是非、上げて」

「この荷台の袋でいいの？ ……ホント多いの」

腕が回り切らないくらいに大きい袋だ。中身がチョコだけあつて重量もそこそこある。

「念の為、全生徒、全職員、分、用意した」

ふんすと胸を張るスノウ先生。

得意げになつてゐるんじゃないの先生。そんなに用意したせいで移動出来なくなつちやつたんでしょ。ほら、空になったカートに貰い物積むの手伝つてあげるから。

「明らかに見積もり過剰なの。一日で全員に会えるわけじゃないんだから持ち歩くのは少しだけにしなさい」

「ん。次回の、教訓に、しとく」

「まったく。あ、ちよつと待つて……はい、折角荷物減つたとこまた増やして悪いんだけど、ハッピーバレンタイン」

私は鞆からラッピングされたそれを取り出して先生に渡す。

明日渡そうと思つてたけど丁度良いので今渡してしまおう。

「カップケーキ？ 美味しそう」

「家族やトレーナー、バイト先でも好評だったから味は保証するの」

「ありがとう、アイネス、フウジンさん」

先生には普段お世話になつてゐるから、こういう時くらいお返ししておかないとね。

「もう暗いから気を付けて帰つてね先生」

「ん。じゃ」

小山となつてゐた貰い物達を回収し終わつて帰つていく先生を見送り、私も先生から貰つた袋を抱えて部屋へと帰つていく。

「ただいまーなのー」

「お帰りアイネス……ってどうしたのその荷物？」

ルームメイドのメジロライアンが怪訝そうに尋ねてくる。

ま、そういう反応になるよね。

「さつき寮の前でスノウ先生に貰ったの」

「あー、あれか。あたしも貰ったよ、チョココ○部」

「いくらなんでも用意し過ぎなのあの先生……ん？ チョココに紛れて封筒が入ってるの」

袋の中身はほとんどが透明な小袋でラッピングされたクランチチョコ。たまに箱入りのちよっと高そうなものが紛れている。それと端の方に輪ゴムで纏められたいくつかの封筒が入っていた。

ライアンが中身を改める。

「何だこれ……わ、はちみー回数券と、ビュツフェ無料券……それとこれ、遊園地のチケット!？」

「ちよおおおおつとスノウ先生えええええええ！ これは流石に貰い過ぎなおおおおおおおおお!!」

封筒は翌日返した。

■ Case 15-5 メルテッドスノウ

ふいー。なにはともあれ取り敢えず用意したものの全部配布完了です。

最後はアイちゃんに押し付けた感ありますけど。

帰り道の道中、植え込みの陰で（☒ω☒）スヤアしていた同志を見かけたのですが、恐らく高濃度の尊みにでも触れてしまったのでしよう。彼女にもチョコを用意していたのですが驚かさないようにそつと置いてきました。

あと、たまたま袋から漏れ出ていたらしいチョコ部が1個だけ残っちゃってましたが、それを除いて完パケです。まあこの残りは自分で食べちゃいましょうかね。

スタートした時より若干重くなったカートを引きつつ職員寮へ戻っていると、外灯の下に一人の娘つ子が。制服着てるし間違いない生徒のようですが。

「こんばんは。マーちゃんです、よー」

ふいに挨拶をしてくる娘っ子。

……ふおおお、マーちゃんやないか！ アストンマーチャンやないか！

前世で見た目で魅かれて貯めてた無料石を使い切って課金して倍プッシュしてもう少して天井だーってところで妻にバレてしばらく課金封印されて結局お迎えすること

が叶わなかったアストンマーチャンだ！

後日登場した新衣装タマモがどうしても引きたくてこっそり課金して更に怒られた原因となったアストンマーチャンだ!! (逆恨み)

思い返せばなんか今日ちらほら見かけたなこの娘。

「ん。こんばんは、アストン、マーチャン、さん」

「!!」

そう挨拶を返すと、目を見開いて何か驚いたような表情をするマーちゃん。

ん、どしたん？ あ、そだ。丁度良いから残ってた最後のチョコ〇部はこの娘にあげてしまおう。

「ハッピー、バレンタイン」

「……」

そう言いながら袋を差し出しますが、先程の状態から微動だにしないマーちゃん。んん？ 無視ですか？ ガン無視ですか？

わたくしみたいな得体の知れない相手からチョコなんか貰えるか、って感じですか？ うるせえ！ チョコに罪は無いから貰っておくれ！

わたくしのは嫌いで、チョコ〇部のは嫌いにならないでください！

全然動く気配が無いので、近寄って彼女の手を取ってチョコを握らせました。

……うおつ、この娘結構ヤバいの持つてるな。ついでに頂いてしまえ。

「なぜ……」

マーちゃんがぼそつと呟きますが、何故つてそりやバレンタインだからチョコ贈るでしよ。

「……なるほど、なるほど」

何かを納得したようです。わたくし特に何も言つてませんけど。

「あなたは、流れてきた人なんですネ。上流から下流、海へ流れて、そしてあなたのまま雲になって、雪になって舞い戻つて来たんですネ。流れに逆らうのではなく、自然の流れのまま。そんな人もいるんですネ」

んー、よくわかんないっぴ。

詳しく性格知りませんが、彼女って妖精さんとか見えるタイプでした？

よく分かんないですけど、まあ納得したみたいですしっか。

「ん。それじゃ、またね」

「……はい、またお会いしましょう。マーちゃんでした」

微笑みながら手を軽くふりふりしてくれるマーちゃん。可愛い。

さて、それじゃそろそろ寮に戻りましょうか。

少し遅くなってしまいましたでしたが戻つてその後おでかけしましょう。

わたくしの将来の野望の為に、ちよいとコネをこねこねしてきましょう。

■Case 15 | 6 : アグネスデジタル

「……ハッ！」

「時間は……最後に気を失ってからそんなに経ってませんね。くひひ……今回も実に素晴らしいウマ娘ちゃんたちの仲睦まじい素晴らしくスウィート&ピター&ミルクイナチョコ交換イベントを拝むことが出来ましたありがたや」

「さて、この熱いパトスが冷めないうちに、いや冷めませんが、後世に残すべく書き記さねば、そしてイベントで頒布してウマ娘ちゃん達の素晴らしさを布教しなければ……おや、何か手元に紙袋が……手紙が添えられていますね、なにになに……」

『アグネスデジタルさんへ ハッピーバレンタイン メルテッドスノウより』

「ん、ん、ん、っ!!! スノウ同志先生っ!? 私なんかにまさか、まさかチョコを……!?

しかも普段の私なら紙袋を見た瞬間『おや、これは誰かから誰かへの贈り物の落とし物ですね、いけません届けてあげねば!』とか思いそうなことも考慮した上で贈り主と相手の名前まで丁寧に記載して決して勘違いを許さない心遣いの細やかさとか気を失った私を無理に起こさないようにこつそりと紙袋を置いていく気遣いMAXなところとか私が気後れしないようにと考え抜かれて用意されたプレゼントのサイズ感とか随所

に本当に相手のことを考えての優しい行動が散りばめられていてつていうかその相手ってのが今回は私であつても確か先生はくじ引き形式で無造作に配っていたのは確認したしということとはこれはまさかまさかまさか私のために別個に用意してあつたということでは恐れ多くも木っ端同然な私なぞにも心を砕いてくれるその天使が如く慈愛に溢れるああああああ脳がこわれりゅうううもうもう尊い尊いとうといしゆつきいいいいいいいいつエンツ!!」

ばたん

■Case 15—7 : ????

「……良いでしょう。もし本当に治せるというのであれば、あなたの要求を飲みましよう。ですが、もし冗談だった時は覚悟してくださいね」

目の前の相手が願った報酬は当家にとって容易いものでした。

遅い時間に私に面会依頼をしてやって来たこの女。

実に非常識な相手だとは思いましたが、何か妙な胸騒ぎがして無視することが出来ませんでした。

「無論。あ、他言、無用で、お願い、します」

「分かりました。じいや、あの子をここへ。主治医も呼んでください」

「畏まりました」

嘘であればこの女が自滅するだけ、本当であればこれ以上無い僥倖。

ゼロかプラスかで当家に損は無い。

前者だった場合はあの子には申し訳ないが、犬に噛まれたとでも思ってもらおう。

でももし、本当に後者であれば……お願い……マックイーンを……。

Case 16 : 養護教諭の感謝祭（春）

「ぎゃああああああああああああああああああ!!!」

あ、どうも。メルテッドスノウです。

スギ花粉が毎年『去年の〇倍』とか言つてそれなんてボジョレーとか思つたり思わなかつたりする今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。

こちらは現在、トレセン学園春のファン感謝祭の真つただ中でございます。

「のおおおおおおおおおおああああああああああ!!!」

今年も出合いの春の季節がやってきましたね。

希望を胸に抱いた初々しいウマ娘ちゃん様達が多く入学してまいりました。

そんな彼女らも含め多くの人達と交流を深めるべく毎年春と秋で2度開催されている感謝祭ですが、わたくしは養護教諭という立場上、救護用テントに待機しているのが常でした。

「ええええええええええええええええええええええ!!!」

ですが今回、生徒会から『教員側も何か出し物をしてくれないか?』と打診があり、そういうことならば習得した技能でもお披露目しようかと、職員用ブースの一角をお借り

してお客様のお相手をしているところでございます。

「ギブギブマジでマジで無し寄りの無し寄りの無しいい!!」

どうですか、先程から聞こえてくるお客様の喜びの声。涙を流し、首を振り回し、場合によっては腕や脚すらも振り回して歓喜の表現をされています。そんなお客様の期待に応えるべく、お客様をがちりホールドして逃がさないようにサービスを続けるわたくし。

「あがばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばががが」

あ、気を失いかけてますねじゃあこの辺で。

何してるかですか？ そんなの一介の養護教諭程度が出来ることなんて限られてるでしょう。

至って一般的な、ごく普通のマッサージですよ。

ウマ娘のパワーで、足つぼの。

んまあ、普通のマッサージも出来なくも無いんですが、それだと本格的に揉み解す為には足腰の力が必要なんですよねえ……結構踏ん張らないといけなくて。

で、じゃあ下半身の力が無くても出来そうなものつてなると、こうなっちゃうわけで。

あ、普通のやつも足つぼの方も資格はちゃんと持っていますのでご安心をば。ちゃんと相手によって力加減変えていますので。

「へ、ヘリオス、大丈夫……？」

「無理ぴ……パマちゃん、ウチが死んだら、骨は中山のゴール板下に、埋めて、ね……ガク
リ」

「ず、ズツ友おおおお！ それは流石に関係者各位に怒られるよおおお!!!」

「マツサージで、死ぬなし」

安らかな死に顔(?)を浮かべ横たわるダイタクヘリオスを抱え、悲しみの雄叫びを上げるメジロパーマー。

そしてその茶番に冷静な突っ込みを入れるわたくし。

「さて、それじゃ、次は、あなたの、番だよ」

「え」

「それな」

「あれ、ズツ友!? 死んだはずじゃ……」

スツと起き上がるヘリリゆう。

判断が早い。やはりギヤルは強いな。

そして彼女のテンションに付いていきながらもこうやって時々振り回されているパ
マちゃん。

はい、今公式カプの尊みを頂きましたー。こんななんぼあっても良いですからね。

「ウチは何度でも蘇るっしょ！ てかぶつちやけマジ痛み鬼エグTBSだったけど何か疲れが取れてスッキリ？ て感じ？ スノぴっぴマジ卍じゃんねウエ〜イ☆」

「うえーい」

よくわからないまま取り敢えず求められたのでハイタッチ。うえーい。

「や、やあ〜、私は遠慮しておこうかなあ……ってズツ友!？」

先程までのヘリリゆーの惨状を目の当たりにしてか、軽く後ずさっていたパマちゃんを後ろからがつしりと羽交い締めにする笑顔のヘリリゆー。

太陽のように輝く笑顔にほんのり黒いものが見え隠れしております。

「まあまあそう仰りなさるなパマちゃんよ。同じ痛みを分かち合うのもまたズツ友だぜ？」

大丈夫大丈夫、痛いのは最初だけだから。後からだんだん気持ち良くなってくるから。

ちよつとその痛みが尋常じゃないだけで。

両手をわきわきさせ……たい所ですが、片手は車椅子操作をしながら、空いた手をわきわきさせて近付き、そしてパマちゃんの脚を掴むわたくし。

「ひ……」

とりま、施術開始。

「ひいいいいいいいいきいいいやあああああああ!!」

こうしてわたくしのブースに何人目になるか分からない叫声が立ち昇った。てかパマちゃんの悲鳴かつわ。

「じゃ、回って、きます。急患が、いたら、ウマホで、呼んで、ください」

幾人かの悲鳴を聞いているうちにいつの間にもやらお昼になっており、休憩がてらしばしの自由時間が与えられたわたくしは、折角なので他の出し物をしている職員にそう伝言して感謝祭を見て回ることに致しました。

例年は救護テントに詰めっぱなしでしたので、実際にお祭りを見て回れる数少ないチャンスタイムです。

うふふ、さーでどこに行こうかなー?

取り敢えずゴルシ焼きそばは食べておきたいな、まだ食べることで出来てないし。

春の感謝祭は体育祭の体が強いので模擬レースとかトークショーがメインですが、そちらをじっくり観戦してるほど時間的余裕は無さそうなので諦めざるを得ませんね。出店エリアをうろうろしてみましようか。

とか考えながらぶらぶらしていた時。

「スーちゃん先生見つけたーっ! FOX3ー!」

元気な声が聞こえてきたと思っただらそのままダダダッとこちらに駆けてくる音。そのまま、

「ドーン!!」

わたくしの後ろから車椅子に掴まりふんわり激突。

叫び声の割に衝撃はありません。上手く力を逃がしたようです。

あらま、撃墜キルされてしまいました。

「どうしたの、マヤノさん」

振り返るとそこにはオレンジのややくせ毛気味なロングヘア、その小柄な体軀から繰り出される変幻自在の脚質を持つ戦闘機、マヤノトツプガンがおりました。

髪の一部を小さなサイドツインテールにしているのがカナード翼みたいでとてもプリティでお似合いです。

おや、制服姿ではなくジャージ姿ですね。

「マヤノよくやった!」

「何で職員ブースにいないのよ! 無駄に探させるんじゃないわよ!」

「こ、こんにはスノウ先生」

立て続けにわたくしの周りに3人のジャージウマ娘ちゃん様達が集ってきます。

順にビコーペガサス、スイープトウショウ、ニシノフラワーです。

みんな小柄さが特徴的な娘たちです。おや、これはもしかしてロリっ娘バンザイだんじり祭り再開の予感ですか？

「先生、ちよつとだけマヤたちに付き合つてね」

ふいにマヤノんがそう言うのと、4人は前後左右にわたくしを取り囲んでしゃがみま
す。

お？ お？ 何事？

「「「せーの」」」

掛け声とともに浮遊感に襲われるわたくし。

おおおっ!?

4人で車椅子を担ぎ上げました。わたくしを乗せたまま。

「「「わっせ、わっせ」」」

そしてどこかを目指してそのまま運ばれていくわたくし。

オイオイオイ、確かにロリっ娘バンザイだんじり祭りを開催予定ではありましたがど、わたくし自身が神輿になるなんて予定は無かったですよ？

どうやらグラウンドの方に運ばれている模様です。これは何かの催しですかね？

「うわっ」と

ビコペンが軽く躓いて神輿が大きく傾きますが、どうにか持ち直した模様。ちよつと

したアトラクション気分です楽しいかもー。

「ビコー、気を付けなさい！ スノウ先生は割れ物なんだから落としたり死ぬわよ！」

「ごめーん！」

スイープちゃんが楯を飛ばします。

割れ物で。流石にそこまで脆くは……いやこの高さで頭から落ちたらワンチャンあるな。いやまあ本当に落ちても受け身とか取りますけども。

その後は危なげ無く担がれたままコースの方へ。

会場からワアツと歓声が聞こえてきます。

・さあチーム対抗借り物競争、帰ってきたのは『魔法ヒーローお花ジェット』チームだ！ 車椅子の女性を担いでいるぞ、一体お題は何だったのでしょうか、ゴールまであと僅か、他のチームの影は見えない、独走です！ 独走のまま、そのまま、ゴール！

なんだそのチーム名。

にしても借り物競争ですか。なるほど。

でもどんなお題があつたらわたくしが神輿になるんでしょう？

あ、ようやく降ろされました。

・しかしまだ分かりません。係員がお題を確認します。確認して……今、マルを出しました！ 確定です！ 『魔法ヒーローお花ジェット』チーム、優勝です！！

係の人が手で大きな丸を作った瞬間、一際大きくなった歓声が会場一杯に広がりました。

観客席に向かって大きく手を振って応える4人。萌える。

観客に返礼を終えたニシノフがわたくしの方に向き直ります。

「ごめんなさい先生。私達、競技に出てて、その」

「ん、状況は、理解した。問題、ない」

まあお祭りイベントですしこういう突発的なこともあるでしょう。特に気にしてませんので無問題です。

「けど、どんなお題、だったの?」

「はい、それはですね……」

・チーム『魔法ヒーローお花ジェット』のお題は『学園で最も人気のあるスタッフ』でした・

わたくしがそう聞いたタイミングで実況の方が会場の観客に向けて説明しだしました。

うえっ! 何そのお題!?

・会場の皆様にご説明致します。彼女、メルテッドスノウ先生は当学院で養護教諭を務めていらっしゃいます。日々学生達の心と体の健康をケアするために尽力してくれ

ている方で、生徒からの信頼も篤く、彼女を連れてきたのは納得の結果と言えるものです。かく言う私もひっそりと彼女のファンだったりします・

待て待て待て待て恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい。

あんまり持ち上げないでくださいよ。

養護教諭なんですから仕事としてそういう事をするのは当たり前なんですし。

というか実況さん、あなたもこっそりカミングアウトしてるんじゃないですよ。

・彼女のように、ウマ娘たちを誠心誠意サポートするスタッフが当学園には大勢おります。皆様、この競技にご協力いただいたメルテッドスノウ先生に拍手をお願いします

》

……あ、これわたくしの紹介にかこつけた学園のアピールだ。

『良いスタッフが揃っているので安心して学園に生徒を預けてくださいね』っていう営業だ。

まあ優秀なスタッフばかりなのは事実ですので対外向けアピールの場としては確かに正しいな。

そういう事情となれば恥ずかしいが仕方ない。観客の皆様にも手を振っておきましよう。

けど恥ずかしいのでさっさとドロシちやいましょう。はい、顔あつつい。

「ん。おもしろ、かった。4人とも、ありがとね。じゃ、戻るね」

「スーちゃん先生まったねー!」

「ありがとうスノウ先生。また今度遊びに行くよ!」

「アタシも行つてあげなくも無いから、ちゃんとまたお茶とあんみつ用意しときなさい!」

「説明足らずでいきなりすみませんでした。ありがとうございます」

マヤノン、ピコペン、スイープ、ニシノフから挨拶を返されつつ、会場からも温かい拍手に送られつつ、わたくしはその場を後にしました。

はー、顔あつつい。

さて、急な召喚でしたがまだもうちよつと時間に余裕がありそうですね。今度こそゴルス焼きそば食べに行きましょう。

というわけでグラウンドから中庭の出店エリア方面に向かっていますと。

「おや、メルテッドスノウ先生。いかがです、良ければ占つていきませんか? 今なら待つこと無くすぐに占えますよ!」

体中に開運グッズを纏ったシヨートヘアのウマ娘、マチカネフクキタルちゃんです。

ほう、彼女の占い小屋も出店してるんですね。

占いですか……そういうのもアリだな。

基本的にコールドリーディングで当たり障りの無い無難な答えを返すのが占いだと思っているわたくしではございますが、彼女の占いはアニメやアプリで見る限りはそういう感じでは無さそうです。

本物のシラオキ様かどうかは定かではありませんが、間違い無くこの世のものではない何者かと交信している模様。

まあ彼女の占いで救われてる娘もちらほらいるみたいですし、悪いものではないのでしよう。

特に相談したいことはありませんが今後の運勢とか見てもらうのも面白そうですね。

これも原作体験の一つですし、ここは一丁お願いしてみましようか。

「ん。それじゃ、お願い、しようかな」

「はいっ！ ありがとうございます！ 1名様ご案内ですー！」

「はあああい喜んでえええええ！」

テントの中から聞こえてきた元気な掛け声。

つちよ、ドットさん何ですかそのキャラは!?

そんな感じの娘でしたっけ？

フクちゃんに案内されるがままテントの中に入ると、先程の声の主、ドットさんこと

メイショウドトウが迎えてくれました。

薄暗い中でも分かるくらい顔真っ赤です。

あ、やっぱ無理してたんですねさっきの。

中は紫色のライトでやや薄暗く、所々に意味ありげなお札やら飾りやらが散りばめられており、ミステリアスな雰囲気を出しております。

そして中央のテーブルにはお馴染みの水晶玉が。

部屋全体にふんわりと漂うこの香りはラベンダーですね。どうやらお香を焚いているようです。

さすが普段からこの占い小屋を営んでいるだけあって雰囲気作りは完璧です。設営に隙がありませんね。

フクちゃんがテーブルを挟んでわたくしの正面に座ります。

「ではでは、今後の総合的な運勢とのことでしたね」

「ん」

「お任せあれ。それでは参ります。ふんにやかく、はんにやかく……むむむむむ……」
「救いはあるのですか……?」

後ろから覗き込むドットさんを従えて彼女の占いが始まりました。

水晶玉に向かって手をかざし、何やらゴニョゴニョと唱え始めます。

いい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、知らなかったんです。許してください。もう勘弁してください。あ、はい、分かりました。ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

謝罪以外のセリフが聞こえたと思った途端、フクちゃんの顔が上がりこつちを見た。いや、顔はこちらを向いているし目も開いているが、焦点が合っていない。

俯いてブツブツ言われるのも怖いけど、これはこれで怖えなあ!?

「30分後に〇〇総合病院で内視鏡検査を予約してください。明日に空きが出来るので受けて下さい」

相変わらず見た目は怖いままだが、彼女の口から紡ぎ出された言葉に思わず毒気を抜かれる。

「……またえらく、具体的な、占いだね」

「救い……なのですか？ 私もこんなの初めて聞きますう」

え、と……占いの結果って、もうちよっとフワツとしたものじゃないんです？

横断歩道は右足から渡ると良いことあるかもとか、ラッキーカラーは土留色とか、嫌な上司にラリアットかますと吉とか。

こんな風に日時とか固有の病院名とか指定してくるようなものでしたっけ？

「いいですね、絶対ですよ？ 30分後ですよ!?!」

フクちゃん（？）が目の焦点が合わないまま、ずずいっとこちらに身を乗り出してきます。見た目だけは怖いですけど、心なしか焦ってるような……てか切羽詰まってるようないかな？

「あ、はい」

「ごめんなさい、お願いします。ごめんなさい」

果たしてこの今の状況って怖いかどうなのか？ よく分からない情緒のまま勢いに押されてつい同意してしまっただたくし。

その答えに満足したのか、フクちゃん（？）の体の力が再び抜けてがくと首を落としました。

呆気にとられているわたくしとドットさん。

そのまま時間が過ぎること数秒。

「……あえ？ 私は一体……？」

寝ぼけ眼で再び顔を上げるフクちゃん。

今度は……目に光が戻ってます。ちゃんとフクちゃんのようにです。

……一体何だったんでしょう。

取り敢えず、我に返ったであろうフクちゃんに何が起こったのか状況の説明をば。

「……ふむ、なるほどなるほど。これはつまり……ついに私にもイタコの能力が!? こ

の身にシラオキ様を宿して御神託を授けることが出来る巫女として覚醒した、ということでしょうか！」

そう言つてテントを飛び出したかと思えば、空に向かつて両手を広げて叫びだした。

「ありがとうございます、シラオキ様！ このフクキタル、益々精進して参りますよー！」
お客さんの幾人かが何事かとこちらに注目します。

いや、びつくりさせてしまつてすみません。

でもこつちも良く分かつてないんです。

ほんと何だつたんでしょう……。

そしてこの件で休憩時間はタイムオーバー、焼きそば買いに行きませんでした。つらみ。

Case 17 : 養護教諭のゴールデンウィーク — 前編

こんにちは、メルテツドスノウです。

春の大型連休、皆様どんなご予定でしょうか？

家族とご旅行？ 実に良いですね。

友達や彼氏彼女と遊びに？ とても良いですね。

部屋でダラダラ？ それもまた良いですね。

あ、わたくしですか？

いつもだったら人混みはめんどいんで出掛けることも無く、保健室からトレーニングに励んでる娘達の声や姿を愛でつつコーヒーブレイク、即ち普段と全く変わらんことしてたりするんですが。

なんと今回のゴールデンウィークは一人でちよつとした大型施設にてお泊まり旅行の予定となっております。

まあ、手術入院とも言い換えられるんですけども。

あー、ご心配無く。

以前のような流血からの救急搬送とかでは無いです。

ほら、先日にも占いで妙な結果が出ましたでしょう？

病院に電話して検査を予約しろ、とかって。

半信半疑ながらも一応あれに従って病院に電話したら、マジで『ちようど明日、キャンセル空気が出来たところですよ』とのことでして……内視鏡検査、受けてきました。

そしたらなんか胃壁に血流障害が見られたとのことで、放っておいて悪化すると胃パーンするらしくて。

まだ緊急性は無いけど早いうちに処置しないといたほうが良いということなんですが入院期間が1週間くらいあるらしいので、どうせなら出来るだけ業務に穴を開けないように連休中に済ませてしまおうかと思ひまして。

ですので一旦帰って、ちゃんと各所に連絡して持ち物準備して後日入院して、という流れに至った次第でございます。

ではまず入院が予定されましたので学園に相談ですね。

そんなわけでやって参りました学園長室。この部屋に来るのは去年キタちゃんに会った翌日に、ご迷惑をかけてしまったことを謝罪をしに来た時以来ですね。

では、ノックしてもしもおくくし。

「おこ」

澄んだ大人の女性の声が返ってきます。とうるかたづなさんの声ですね。

「メルテッド、スノウです。少し、ご相談が」

「どうぞ、お入りください」

入室を許されましたので失礼しますよつと。

「失礼、します」

中にいたのは当然、先程の声の主であるたづなさんと、立派な執務机に座って書類と格闘中の秋川理事長の二人。

……誰もツツコみませんが、理事長幼すぎでは？

下手するとわたくしよりも若そうなんですけど。

「謝罪っ！ こんな状態で失礼。中々片付かなくてな」

「どうされました、メルテッドスノウ先生？」

「はい。実は、このたび、入院、することに
なりました。

そう続けようとした時、ガタンと音を立てて理事長が急に立ち上がります。

「緊急っ!?!」

「どうされたんですかっ!?! 大丈夫ですか！ どこか痛みますか！ 救急車呼びますかっ!?!」

慌ててわたくしに駆け寄るたづなさん&理事長。

おうけい、落ち着け二人とも。

そんな緊急事態ならこうやって訪問とか出来ないから。

「待って、待って」

ちやんと順を追ってご説明させていただきますから。

——メルテッドスノウ説明中——

「……なるほど。緊急性は無いけれど手術を受ける必要はある、と。分かりました。わざわざ入院期間を長期連休に合わせて頂いたみたいですし、学園側としては何も問題ありません。しっかりと治療してちやんと復帰してきてくださいね。また前みたいなのは嫌ですから」

とりあえずわたくしの説明を聞いて平静を取り戻してくれたお二人。

そして最後に困ったような笑顔を浮かべるたづなさん。

いや、その節は本当に申し訳なかったとです。

ただでさえお忙しいでしょうに、わたくしなんぞに時間を取られてしまつてさぞ大変でしたでしょう。今後は倒れても迷惑かけないように上手くやつときますので。

「提案っ！ 治療費は学園が支払おうっ！ ○○総合病院だったな？ 貴方は何も気兼

ねすることなく治療に専念してきてくれたまえっ！ 期間中の出費はジューズー本に

至るまで全て学園で賄おう！」

バツと扇子を広げ、そんなことを言ってくる理事長。

扇子にも『提案』の文字が無駄に達筆で書かれている。

「つてかこんな状況にも対応出来る文字書いてあるんですかその扇子。何パターン持つてんですか。」

「え、いや、就業、中の、怪我でも、ないのに、それは」

お気持ちは嬉しいですけど、流石に労災とかじゃ賄えなくない？

「というかわたくしこれでもちゃんとお給金頂いてますし、貯えもありますんでちゃんと自分で払えますよ？」

「代案っ！ であるなら私が個人的に支払おう！」

「いや待って、なぜ」

イチ職員に高待遇しすぎではありませんか？

自分で言うのも何ですけど、学園の一施設を借り受けてコーヒー飲みながらウマ娘ちゃん様達を眺めるくらいしかしてませんか？ つくづく仕事とは思えない優雅さじゃんね。

「愚問っ！ メルテッドスノウ養護教諭、あなたは自分の功績をまるで理解していない。学園の衛生環境は大きく改善されたし、不調に悩む生徒を見ることも大分少なくなっ

た。数字に表せるものでは無いかも知れないが、それでも『悲しい思いをしている生徒が明らかに減った』と実感出来るものだ。どんな手練手管を用いているのかは分からないが、間違いなくあなたが来てくれたからこの学園はより良い方向に向かっている」

いや、学園がより良い方向に向かっているのはわたくしではなくむしろ理事長含む皆さんの尽力のおかげだと思っうんですが。それに手練手管って……わたくしがしてる事なんてウマ娘ちゃん様達と一緒に戯れてるくらいですけど。

たまーにヤバそうな因果^{もん}貰つたりはしてまずけど、たまーにですし、それは仕事つてわけでも無いですし。

「我々としては是非今後養護教諭を勤めて欲しい。他の誰でもない、メルテツドスノウ先生、貴方にだ。であれば多少の出費なぞ問題にならず、貴方が早々に学園に戻って来れるようサポートするのは何もおかしい話ではない。違うか？ たづな」

「ええ、全く以てその通りです理事長。彼女がこの学園からいなくなるからこそが学園の損失です。確かに労災認定は難しいかもしれませんが、理事長が個人的に出費すると言うのであれば話は別です。普段であれば私財を投入するのは考えものですが、今回に限り特例ということ。もしくはむしろ学園内から治療費の寄付を集うのも有りかと」

「いやいや、いやいやいや」
うん、何はともあれ職を失う心配は無さそうなのはありがたいお話です。

ですがスノウちゃん的には流石にそこまでおおごとにするには無いと思うんです。あからさまにやり過ぎですって。

「寄付の話は置いておくにしてもだ。学園にとつて貴方は無くてはならない存在だ。休暇でも思つてじつくりと養生してきてくれたまえ」

重ね重ねそこまで言つて頂けるとは、恐縮ですね。

「過分では？」と思わなくてもいいですが、固辞しすぎると『理事長は職員の評価もまともにも出来ない愚か者である』と言つてしまうのと同義です。素直に受け取つておきましよう。

「……なんか時々こうやつてウマ娘ちゃん様達に説教した内容がブーメランしてくるなあ。」

「質問っ！ 入院はいつからだ？」

「え、つと……明後日の、午前から、です」

「了解っ！ たづなっ！」

「はい。メルテッドスノウ先生、休職手続きの書類を後ほど寮までお持ちします。また当日は介護タクシーを手配しておきますし、入院までしばらく私が付き添いますのでご安心ください。他にも不安なことがあればいつでも連絡してください」

「うむっ！ 頼むぞたづな！」

至れり尽くせり過ぎる。

あつれえ、いつの間にこんななこの二人の好感度稼いでたんだわたくし？

「え、ええ……お手数を、お掛けします」

「問題無いっ！ では、準備もあるだろう。他に何かあつたら遠慮無く申し出てくれたまえ！」

「あの……ありがとうございます。ごさいます。では、失礼、します」

「うむっ！」

なんかいればいるほど話が大きくなりそうな気がしましたので、確かに準備もありますしこの場は退室させて頂くことにしました。

……うん、本当ありがとうございます。

さて次は念の為に生徒達への連絡ですね。ゴールデンウィーク中で学園もお休みですがトレーニングは休まず行うでしょうし、もし何かあつても入院中は対応出来なくありませんのでその周知をば。

生徒への連絡なら、妥当に考えれば生徒会ですかね。

というわけで生徒会室前オプザスノウちゃんでございます。

——コンコンコン

「はい」

落ち着いた感じの女性の声が返ってきます。とういかグルーヴちゃんの声ですね。

「養護、教諭の、メルテッド、スノウです。生徒会に、ご連絡が」

「お入りください」

「失礼、します」

中にいたのはもちろん先程の声の主であるグルーヴちゃん、立派な執務机に座って優雅に紅茶を嗜んでいるルドりん。おや、ブライヤンもソファで寝転がっておりますね。

「メルテッドスノウ先生、生徒会へようこそ。一体どうされましたか？」

ルドりんが紅茶を置き、微笑みながら尋ねます。

うーん、これは実にカリスマ溢れた立ち居振舞い。どっかのスカーレットデビルと違ってブレイクする隙すら無い程です。

「実は、入院、するこ」

——ガタタンッ！

勢い良く椅子を倒しつつ立ち上がるルドりん。鬼気迫った表情です。

おや、ブライヤンも起き上がって険しい顔でこちらを見ておりますぞ。

「メルテッドスノウ先生！ 大丈夫なのかっ!? どこか痛みはあるか!? 具合は!? 救

急車……いやそれでは遅い、マルゼンスキーに頼んで車を……!」

わたわたしながら慌てて駆け寄ってくるルドリィン。

おい早速ブレイクしてんじやんかカリスマよ。

全くもう……落ち着きたまえよ生徒会長様。さつき理事長室でも同じやり取りしましたけど、そんな緊急事態ならそれこそココ来てる場合じゃないですから。

あ、でもマルさんの車はちよつと乗ってみたいかも。

「待って、待って」

それは兎も角、ちゃんと説明しとかなきゃ。

おいグルーヴちゃん気を利かせてるつもりでどこかに電話してるみたいですけど早まんなあ!

——メルテッドスノウ説明中——

「……なるほど、今すぐどうなるものではない、と。承知しました。生徒達への周知は任せておいて下さい。先生は後顧之憂なく、万全の状態で治療に臨んで頂ければ」

どうか平靜を取り戻してくれたルドリィン。

……いや表面上は、だな。耳は忙しなく動きつばなしだし、紅茶を傾ける回数も多い。

そんな心配する程のことでも無いですよ? てか今の時点では特に体の不調は感じませんし、こうやって事前告知出来る程度には余裕ですって大丈夫大丈夫(盛大なフラ

グ)。

「ん。いない、間は、迷惑、かけるけど、よろしくね」

休み期間とはいえその間は緊急対応出来なくなってしまうので、その点は申し訳無い。

「迷惑などともんでもない。いつもお世話になってるんです、多少いない間くらい先生に頼らずとも何とかやっていきますよ。それより何か入院するにあたって用意しておきたいものとかはありますか？ そうだ、治療費とかは大丈夫ですか？ シンボリ家から全面負担させてもらっても構いません」

なんか今さらりと実家を巻き込んだぞこの8冠ウマ娘。

ていうか理事長といいこの生徒会長といい、わたくしってそんなに貧しそうに見えますか？ ちゃんと稼いでますし貯えも十分ですので手術入院費用くらい、なんならおかわりしたって平気ですぜ？ (盛大なフラグその2)

「会長、それも悪くありませんが全生徒から寄付を募るのはいかがでしょう。メルテツドスノウ先生の人となりを鑑みれば、十分な額が集まる可能性が」

「いやいや、いやいやいや」

はいストップ。全学園生を巻き込むなその副会長。

いつの間にグルーヴちゃんの好感度まで上がってやがった。ルドりんを介しての接

点しか無いはずなのに……いや、それがあるからこそか。

ルドりん大好きっ娘なグルーヴちゃん。そのルドりんがこんな状態なんだから自ずとわたくしへの評価も上がるんですかね。恋愛SLGで狙ってるヒロインの親友ポジの娘みたいな感じで。

「お前から少しは落ち着け」

わたくしについてルドりんとグルーヴちゃんがあーだこーだと話し始めたところを横からソファにいたブライヤんがぼつきり切りします。先程のように寝転がるのではなく普通に座った状態で、キリツとした目つきで二人に注意しました。

おお、どうやら現時点で一番冷静なのはこの娘のようですね。いいぞ言ってやれ言ってやれ。軽く暴走気味なこの二人を諫めておやりなさいブライヤん。

「まずは激励の横断幕の用意だろう。そして全生徒で見送りをする必要があるだろうか。その通達だ」

お前が落ち着けえええ！　なんだその体育会系のノリはよおおお！

わたくしは何かの全国大会出場選手ですか!?

てか真面目な顔して一番錯乱したままなのブライヤんでしたかい。

「やりすぎ、やりすぎ」

お願いしますからそんなに大きな話にしないで。出来るだけ影響無いように連休に

合わせたんですから。

「まあ寄付の話は後ほど詰めるとして、だ。メルテッドスノウ先生、入院はいつからですか？」

あ、その話まだ生きてたんですね詰めなくて良いですから。というか話の流れが先程の理事長室でのやりとりと完全に一致してるんですが。

ルドりん、事前に理事長と打ち合わせでもしてました？

「ん、明後日の、午前から」

「エアグルーヴ」

「畏まりました。明後日の会長の予定は全て延期もしくはキャンセルし、お時間を作っておきます。授業の欠席も申請しておきますので、しっかりと先生をお送り下さい」

「うむ」

……名前呼んだだけですよね？ 何ですかその事前察知して行動するスキル。たづなさんは秘書ですからまだ分かるとして、何でグルーヴちゃんまでそのスキル持つてらっしゃるんですか？

それですけれどルドりん、予定があるんなら無理に時間空けようとしなくても。ちょっと入院してくるだけなんですから。

「ええ……そんなに、するほど？」

「そんなにするほどですよ。前回どうだったか、忘れたとは言わせませんよ先生」

アツハイ。前回のアレはマジすいませんでした。

流血はまだしも、気絶して自己解決出来なくなるなんて失態はもうしたくないですね。

その節は大変ご迷惑をお掛けしました。今は気を失っても何とかなるように準備しますのでご心配なく。

「う、それを、言われると、弱い」

「そういうわけで、今回はしっかりとお世話させて下さい」

……んまあ特に拒む理由もありませんし、本人がそうしたいってんならそこは尊重しましょう。何か皆優しいなあ。

「……ありがとうございます。じゃ、当日は、よろしくね」

「ええ」

長居していると今から付いてきそうな勢いですし、連絡も完了したので取り敢えず退室しましょう。

重ね重ね、ありがとうございます。

さて、んじゃあ通達も完了しましたし、お部屋戻って軽く荷造りしようかな。けど前

回が余りに突発的で何も準備出来ない状態だった所にアヤベさんが一通り買い揃えてくれた入院セット一式がそのまま纏めてありますので、あとは着替えを用意するくらいだしなあ……いいや、荷造りは夜やることにして今は仕事戻ろつと。

「……………ええええ」

とか考えながら車椅子で校内を進んでいきますと、スノウちゃんイヤーが何かを拾います。

何事です？

「……………んせええええええ」

先程よりよく聞こえてきます。足音も聞こえてきましたし、これは駆け寄ってきてますね。

「スノウ同志先生ええええええ!!」

廊下の向こうからこちらに超ダツシユしてくるウマ娘ちゃん発見。

うん、同志だ。デジたん おうどうした、急患か？

「ん、どうしたの？ 急患？」

「何言ってるんですか急患は貴方でしょうスノウ同志先生っ！ 大丈夫ですか！ 痛みはありませんか！ 眩暈は！ 熱は！ 吐き気は！ 出血は！ 酸素吸いますか!? AED使いますか!? 救急車呼びますかそれとも担いで走りましょうかあ!?!」

わたくしの正面で急停止するデジたん。

両手で車椅子の手すりに掴まり、軽くゼーはー言いながらわたくしの顔を覗き込みます。

うーん、近いな。てか普段のデジたんなら本人の方が耐えられない距離感なんだけど。

「待って、待って」

とうか何でわたくしが急患？ 見ての通り特に問題無く通常稼働しておりますよ。

けどこの反応、さっきまで理事長室と生徒会室での冒頭のやり取りと酷似しております。

……もしかしてデジたん、わたくしが入院するつて話をどこかで聞いたんですかね？
恐ろしく情報早くないですかこの娘。

あーあー、お顔真つ青だし涙目だし鼻水まで。そんなになるほど慌てて駆けつけるなんて……これは完全にわたくしのせいですね。トラウマ気味っちゃってますね。

おーけい、まずは落ち着いてもらいましょうか。

かなりお顔が近かったので、そのままギョツとデジたんをハグします。そのまま後頭部をなでりなでり。いーち、にーい、さーん……

「ずびつ、せんせ、そんな場合じゃ………ふひ………」

はいココお!!

尊死しない程度のところまでデジたんをパージしてまずは落ち着いてもらて。本日3度目になってしましますが、ちゃんと説明させていただきましよう。

———メルテッドスノウ説明中———

「じゃあ、痛くないんですね? 気持ち悪くないんですね? 倒れたりしないんですね

!?!? ……はああああああ、良かったあああああ」

「ごめんね、心配、させて」

通常モードに戻って来れたデジたん、大きく安堵の息を吐きます。いやマジごめん。まさかここまで取り乱すとは。そしてここまで情報早いとは。

ちよつとおデジさんのポテンシャル舐めてましたね。流石ダートと芝の双方を駆けるオールラウンダー、情報収集能力においても隙がありません。

「で、いつから入院ですか? お手伝いさせて下さいスノウ同志先生」

スツと顔を上げて尋ねてくるデジたん同志。瞳には有無を言わせぬ強い炎が灯っています。鋼の意思が発動しちゃってます。え、そこまでなる程のこと?!

というか連休直前日ですから普通に授業ありますよ?!

「明後日の、午前だけど、授業、あるでしょ?」

「休みます」

即答ですよこの娘。

「いやいや、いやいやいや」

気持ちとはとてもとても嬉しいですけどね、わざわざ授業を休んでまで……いや既に休む予定組んでた生徒会長もいたな。くっ、強く言えない。

「あたしお勧めの作家さんの本も持って行きます」

いや、そういう、事じゃなく。

「是非来て」

……本音と建前が逆転してしまった！

まさかのわたくし即落ちです。

ええい、言ってしまった以上は仕方無い。こうなったら二人でも三人でも付いてきやがれー！

というかこの時点で付き添いが3人も確定してしまいました。ちよつとしたハーレム状態ですよこれ。当日は賑やかになりそうですね。いやほんとありがたい事なんですけども。

すみません、当日は皆様にお世話になります。

その後保健室に戻ってお仕事してたら、書類を持って寮に行ったらまだ帰って来ていないわたくしを慌てて探してたたづなさんに強者のオーラ撒き散らされながらにこや

かにお説教されました。

はい、保健室を片付けたら寮に戻りますすみませんでした。

……それはさておき。

多分今回の病気も誰かから貰ったやつなんだろうなあ。んでも胃パーンする前に見つかって良かった良かった……おや？

ということはですよ、早期発見出来れば発動前に対処が可能ということ……？

ほほう、ほうほう……それはそれは。

いいこと気付いちやいましたね。

Case 18 : 養護教諭のゴールデンウィーク —後編—

「さて、スノウ先生。弁明の余地を上げるわ。私が納得出来るような説明をして頂戴」

「不可、抗力。わたしは、悪くない」

「ギルティね」

おいっすう！

声が小さいもう一度おいっすう！

メルテッドスノウさんでございます。

えーわたくし現在、無事2回目の手術を終えまして、病室のベッドで安静にしつつ退院を待つという状態で、アヤベさんから説教を貰ってるところでございます。

いやあ、実はですね……入院初日に精密検査受けたんですけど、そこで腸捻転やら何やらの兆候が見つかったそうでした。

まあこちららも緊急性は無いけど放つて置くといずれ腸パーンしちゃうからついでに治しちゃおうぜ？ って担当医が言うんで、胃の手術を受けた数日後にそちらの手術も受けたという次第であつたのですよ。

それにしても昨今の医療技術はすごいですね。胃も腸も症状としては軽いものだということで内視鏡手術で治せちゃうんですって。どちらも手術時間が1時間もかかりませんでした。

双方共に手術も無事成功したのですが、流石に当初の予定よりは数日入院が延びまして、本日お見舞いに来てくれたアヤベさんにそのことを冗談交じりに話したところ、深い溜息から懇々とオハナシされるといふ事態に陥ったのでございます。

「軽く話すような内容じゃ無いでしょう。何で私にあんな話をした貴方が早々に人生リタイアしようとしてるのよ冗談じゃないわよ」

「人生、リタイアなんて、大袈裟な。ちよつと、入院、期間が、伸びた、ただだよ」

別に燃え尽きたり死んだりするつもりは一切ありませんよ。そのつもりが無いからこそこの今回の入院ですし。まあ万が一、完全に詰んだら笑いながら『わりい、おれ死んだ』とか言うかもしれないけど。

アヤベさん、心底呆れたように今日何度目かの溜息をつきました。

「はああああ……要はもつと身体を労りなさいってことよ。予定とはいえ入院する事態だっただけでも穏やかじゃないのに、違う病気が見つかって更に入院するとか。心配するこつちの身にもなりなさい」

「はーい、善処、します」

「徹底しなさい」

と、そんなやり取りをしていたところ、アヤベさんと一緒に来ていた二人のウマ娘ちゃん様達がようやくといった感じで口を開きます。

はい、実はいたんですねアヤベさん以外にも他の娘達が。

「メルテッドスノウ先生、先生とアヤベさんについていつもこんな感じなんですか？　こんなアヤベさん見るの初めてでビックリしちゃったんですけど」

「はーっはっは、普段の他者を寄せ付けないクールな強さを見せるアヤベさんも素敵だが、こういった一面も持ち合わせていたとは。こちらはこちらで実に興味深いね！　流石は終生のライバルとしてふさわしい相手だよ！」

そう言うのは金髪セミロングのデコ娘ナリタトップロードちゃんと、王冠がよく似合う世紀末霸王ティエムオペラオーちゃんです。この二人にアヤベさんを交えた三人で、わたくしの病室を訪れてくれました。

トプちゃんは前世じゃあまりよく知らない娘でしたが、こうやって見る限りは真面目さんかつコミュ強……正統派な委員長キャラっぽいですね。

なんかどつかの学級委員長が『ちよわっ!』とか言って張り合ってきてそうですけど。……いやどつちかと言えば仲間認定してきそうだな。

ラオーちゃんは……アプリじや正月ver. をお迎えして育成出来てなかったから

本当によく分からないんですよねえ。宝船から空飛んで『無茶しやがって……』してるイメージしか無くて。役に立たねえなあ前世知識。

でもアヤベさんに付いてきて大して交流が無かったわたくしのお見舞いに来てくれるあたり、二人とも実に優しい心根をお持ちな素敵娘には違いありません。

あゝ心がびよびよいするんじやあゝ。

「うるさい。病院では静かにしなさい」

険しい目つきでびしやりとそんなことを言い放つアヤベさんですが尻尾がゆらゆら揺れています。

照れてますね。お可愛いこと。

「ところで……アヤベさん」

ふいにトプちゃん口を開きます。

「何よ」

「何でメルテッドスノウ先生と手、繋いでるんですか？」

言われてみれば手を繋いでいるというか、わたくしがアヤベさんの手を掴んでいるみたいな状態です。

そういえばなんか病院の雰囲気がちよいと保健室と似てるので、条件反射的にいつものバイタルチェックをしちゃっておりました。なんかアヤベさんも同じだったのか、自

然と手え出してきましたし。

習慣づいた行動つてやつですね。

「ああ、これは」

「ん。その場の、雰囲気？」

「ぶっ」

ん？ アヤベさんがわたくしの発言に対して噴き出したぞ。え、何で？ 間違つたこと言つてないと思うんですけど。

何だかトプちゃんトラオーちゃんがキョトンとしたかと思つたら今度はにやーつとしておりますぞ？ 何で？

「……へえええええええ」

「ちっ、違、これは、その、普段の」

「なるほど、普段から手を繋いでいると。これは凄く……凄いですね！」

「いやはや、今日は付いてきて良かった。アヤベさんも中々隅に置けないね」

「~~~~~!!」

わたくしに掴まれていた手をバツと離しながら、軽く俯いて二人を睨みながら声にならない唸り声を上げるアヤベさん。すげえ、耳めっちゃ動いてるし尻尾がわっさわっさ揺れてる。

ふむ……ふむ。こういう照れ方をしているアヤベさんも良いものですね。SSRSチル認定です。

良く分かりませんがよくぞこの表情を引き出してくれましたトプちゃんにラオーちゃん。これで白米三杯は余裕で食べられます。術後なのでもうしばらく固形物食べられないんですけれども。

それからしばらく雑談した後、アヤトプロオペのお三方もお帰りになりました若干暇を持って余し気味となったわたくし。ちよいとお散歩がてら、病院内にある売店でお買い物です。

固形物じゃなければ間食しても良いらしいので、ゼリーかプリンでもおやつに欲しいなと思ひまして。どっちも食べたいから両方買いましたけど。

本当はそろそろコーヒーが恋しいんですが、流石にカフェインはNGでした。残念。

さて病室に戻って、冷蔵庫にプリンしまつて、さっきの三人のやり取りを思い返しながらゼリー食べて、と考えながら進んでいたら、気が付いたらわたくしなんか見知らぬ廊下を通っていました。

あれ、迷いました？ 病院内で遭難しました？ あつれえ、何処だココ？

取り敢えず看護師なり他の患者なりに出会えれば道を聞けますのでキョロキョロと

辺りを見回しますが、何でこういう時に限って近くに誰もいないんですかねえ？

途方に暮れかけたその時、スノウちゃんイヤーが拾ったのは少し離れた所から聞こえてくる沢山の子供の声でした。

お？ あっちの方から聞こえてきたぞ。子供がいるなら、保護者なり何なりもいるでしょう。ちよつと行ってみましようかね。

声のする方へ近づけば近づくほど、楽しい声やハツキリと聞こえてきます。声といふか、歌ってるのかな。一緒にピアノの音も聞こえてきました。

ふむ、曲はよく知りませんが上手な演奏ですね。これは小さな子供が弾いてるとは考えづらいです。よし、これなら無事に道を尋ねられそうです良かった。

辿り着いた部屋への入口には『プレイルーム』と書かれておりました。どうやら小児患者向けの施設の様子ですね。

戸は開け放たれており、部屋の壁は空や森、動物の絵などが描かれています。周囲にはボールプールや積み木、絵本などがありました。中にいたパジャマ姿の子供たちはそれらをそつちのけで部屋の一か所、窓側の壁のほうに固まって楽しそうに歌っています。

その一団の中心にあるピアノを弾いていたのは、薄い水色のショートヘアの上にぴよこんと伸びたウマ耳を持つ君。後ろ姿かつ子どもたちにもたれに囲まれておられますのでそれし

か見えませんが、曲に合わせて軽く左右にゆらゆらしております。

良いですね、みんな楽しそうですね。

おや、歌い終わったみたいですね。お歌もピアノも大変良く出来ました。拍手！。

「あれ、おねえちゃんだれー？」

入り口からこつそりパチパチしてたら、わたくしに気付いた子が声を掛けてきます。

それに気付いてこちらを振り返った奏者の姿は。

「あれ、メルテッドスノウ先生？」

この娘は……確か、ケイエスミラクルちゃんではないですか。こんなところでお会いするなんて偶然ですね？

「そういえば入院してるって聞きましたね。この病院だったんですね」

子供たちが各々好きな遊びに散開し、ケイエスミラクルちゃん……あだ名はスミちゃんだな。スミちゃんとわたくしは部屋の端で座りながら雑談タイムです。

にしてもスミちゃんの意外な特技発見ですね。

「ん。ピアノ、上手いんだね」

「あはは……ちゃんと習ったわけじゃないんですけどね」

そう笑いながら、ピアノを見つめるスミちゃん。

少し遠い目をしてますね。昔何かあったんですかね。

「おれ、体が弱くてずっと病院暮らしだったんです。似たような子供達と遊んでいたら、独学で覚えたんです」

そう考えていたら丁度話し始めてくれました。

「病院に入院してる子って、どこか寂しそうにしてるんですよ。それで何か出来ないかなって考えたら自然とこうなった、っていうか」

なるほど、そうだったんですね。

確かに小さな子供にとっては多感な時期。自分の家という子供にとっては数少ない『他人が介在しない安全なテリトリー』に長いこと居られないというのは非常にストレスを感じるものでしょう。

加えて学校にも行けず、勉強などで友達に置いていかれるような恐怖で不安も覚えるでしょうし納得です。

わたくしも子供の頃に一時期入院してましたけどあんまり参考にならないひねくれ方してましたからすぐ思い至れませんでした。

「今もこうして、時々来るんです。おれが出来ることって、走ることとこれくらいだから」

あらすつごい良い娘。自分が感じたことのある哀しさや寂しさを他の子に同じ思い

をして欲しくないと、自分が出来ることで緩和してあげようなんて中々出来ることではありませぬ。偉いわあ。

「今、おれが走れるのはここにいる子供達やドクター、看護師やリハビリの人達、それ以外にもいろんな人達に支えられて助けられて授かることが出来た奇跡なんです。だから、こんなおれでも誰かの力になればなって思つて、こうやって子供達と演奏会してゐるんです」

やだめちやめちや良い娘。涙腺緩んじやうわたくし。

「おれの奇跡は、いつか終わる時が来るから。だからおれは、出来るうちに出来ることをしておきたいんです」

……………んー？

んー……………後半部分似たようなことをわたくしも言った覚えがありますのでそつちは良いんですが、前半部分がちよーつと引つ掛かりますねえ。

似てるからこそ異なる部分に気付き易くなってるのかな。

「……………メルテッドスノウ先生？」

「とても、素晴らしい、心構え。でもね」

お前、なあんか勘違いしとりやせんか？

奇跡つてのは別にシンデレラの魔法と違うんですよ？ 色々な人達の想いが同じ方

向を向いて重なって、その思い達が相乗効果で大きくなって起こるものなんです。願いが集まって起きる必然的なものなんです。持論ですけど。

だからあなたが授かった奇跡は、あなたの幸せを願った人達みんなの気持ちなんですから簡単に無くなる程度のものだと思いなさるな。胸張って幸せにおなりなさい。

「奇跡は、あなただけの、ものじゃない。みんなで、勝ち取った、奇跡が、そう簡単に、無くなる、訳がない」

念のため、ダメ押しでわたくしも奇跡を後押し。とは言ってもこっちは正真正銘の魔法ですけど。

彼女の肩をポンと軽く叩きながらえいしやおらー。

「そう、ですかね……」

「そういう、ものだよ」

大丈夫。大丈夫ですよ。

あなたがこうやって走ったり演奏会をしたりと、笑って過ごしてる姿を見せることがみんなに対する最大限のお返しですから。既にそれを行ってるあなたには輝かしい未来がお似合いです。

「そっか……そっか。確かにそうかも知れませんが。みんながいたから、今のおれがいる。みんなに望まれたから、今のおれがいる。みんなで勝ち取った奇跡、ですか……そう考

えると、なんか、良いかも。ありがとうございます、先生」

「ん」
柔らかに微笑むスミちゃん。

うつひよう、可愛い。格好良い。なんか背景がキラキラして見える。惚れそう。いや惚れた。こんな娘を推さない訳があるだろうかいやない（反語）。

「あ、そうだ。良かったら先生も一緒にピアノ、弾きませんか？」

ふいにスミちゃんがそんなことを言ってきた。

え、つと……わたくし、演奏の経験は無いツスよ？

一時期、音ゲーでキーマニとかをやったことはありますが難易度高すぎてまともにプレイ出来ませんでしたし。

「わたし、弾けない、よ？」

「大丈夫です。ほら、行きましょう」

そう言っただたくしをピアノの前に誘導するスミちゃん。二人で横に並んで座ります。

え、ソロプレイも出来るかどうか分からないのに連弾とかハードル上げまくってますん？

「ほらここ、ここがドです。2つ隣がミ、更に2つ隣がソです。4拍子……タンタンタン

タンのリズムで、ド、ミ、ソ、ド、って弾いて下さい。ずっとそれを繰り返して下さい」
横からそつとわたくしの手を取って鍵盤に触れさせるスミちゃん。

オイオイオイお止めなさいなそんなイケメンムーヴは。

ここはもしかして顔の良いウマ娘と楽しくお喋りしながらお酒を頂くようなお店ですか？ あれあれ？ いいんですか？ 入れますよ。ドンペリタワー。

どうしてこう、ウマ娘ちゃん様達はみんなして積極的にわたくしの心臓を止めようとしてくるんでしょう。望むところですが。

「ん……それなら、なんとか」

心臓止めるのは病室に戻ってからにするかと考えながらも答えます。

リズム感だけなら音ゲー遊んでたおかげで何とかかなりますので。

「良かった。みんな、これからおれとお姉さんでピアノ弾くから、一緒に歌ってくれる？」

「わーい！」「なになに、なにうたうのー？」「おねーさん、きれいーい」「あたし、うたうー！」「わたし、みらおねーちゃんのだいすきー」「くるまいすのおねえさんおなまえなんていうの」「はい！ ぼくもうたいます！」

おおー、子供パワー激しいな。というかお姉さん扱いしてくれるんですか嬉しみ。子供視点ですとオバサンって言われても仕方ない年頃です。

童顔が幸いしましたかね。身長もスミちゃんより小さいですし。胸ぺったんですし。あれ、何だか切なくなってきたぞ？

さつき教わった通り、一定のリズムで3つの鍵盤を奏でます。ド、ミ、ソ、ド。ド、ミ、ソ、ド。

「良いですよ、先生。じゃ、いきますよ。いつせーのーで」

わたくしがドの音を弾くタイミングに合わせてスミちゃんがピアノを弾き鳴らしま
す。

めっちゃ上手え！ほんとに独学？曲はよく知りませんが、何かの子供向け番組のものだったような。イントロの時点で子供達には何の曲か分かったようで、わーきゃー飛び跳ねて大盛り上がりしています。

にしてもわたくしの弾いてる部分の旋律、邪魔になってない。ちゃんと曲の一部になってる。どうなってんだこれ。あまり詳しくないですけどコード進行とかあるんじゃないの普通？

わたくしとスミちゃんの演奏に合わせて大合唱の子供たち。ねえほんとに独学？

子供達に囲まれて、嬉しそうな笑顔でピアノを弾くスミちゃん。

そんなスミちゃんを見て、歌いながら飛び跳ねて喜ぶ子供達。

そしてその様子を微笑ましそうに眺める看護師や保護者の方々。

無表情ながらも口角がほんのり上がってるわたくし。

和やか幸せ空間。いいね。

それからちよつとして、子供パワーに圧倒されたわたくしは部屋の端でみんなを眺める作業に。

スミちゃんの子供達に手やズボンの裾を引つ張られながら一緒に遊んでいます。

みんな元気だなー。良き良き。

ふと見ると、そんな一団から離れたところに一人、そんな様子を見ている子がおります。

車椅子に乗ったウマ娘の子だ。あらわたくしとお揃い。

ははーん、恐らく引つ込み思案系の子なんでしょう。みんなと一緒に遊びたいけどなかなか自分から輪に加わりに行けないとかそんな感じの恥ずかしがり屋さんだなきつと。

そういうのは任しとけ。わたくしからきつかけ作っちゃるから。

そう思つてその子に近寄ります。

「あなたも、一緒に、遊ぼうっ！」

そう言つてその子の手を取ります。

場所柄仕方ないかも知れませんが、細くて小さな手です。

「ありがたい。でもボクはいいんです。ちよつと彼女のことを心配で様子を見に来ただけだから」

そう言つて子供達に揉みくちやにされているスミちゃんを愛おしそうに見る車椅子の子。

ふむ、お知り合いかしら？　ちよつとスミちゃんに似てる気がしますし。

「でももう大丈夫そうだ。ありがたい、メルテッドスノウさん」

笑顔でわたくしに向き直る彼女。

……あれ、わたくし子供達に名乗ったつけ？

「くるまいすのおねーちゃん！　おねーちゃんもいつしよにあそんでー！」

車椅子の彼女と反対側から声がして、そちらを向くとさつきまで輪に加わっていた子がわたくしを誘います。

お、丁度いいじゃん。

「待つて。この子も、一緒に……」

そう言つて再度振り向くと、その子の姿はありませんでした。わたくし、その子の手を握つてたはずなのに。

まるで初めからいなかっただかのように。

え……。
え、なに。
こわあ。

Case 19 : 養護教諭の夏合宿

肌を焼く陽射し。

視界一杯に広がる海。

寄せては返す波。

白い砂浜。

そして水着。

ウマ娘ちゃん様の水着姿。

皆様どうもこんにちは。メルテッドスノウでございます。

さてさて、ゴールデンウィークの入院騒ぎから特に何があつたわけでもなく至つて普通に退院し、至つて普通に学園生活に舞い戻つて来ておりましたわたくしなんです、冒頭のモノローグでお気付きの聡明な方もいらつしやることでしよう。

わたくし現在、とあるチームの夏合宿に同伴させていただいております。

夢かな？

わたくしはそもそも学園付きの職員ですので、本来ならば合宿に行くなぞ夢のまた夢。

特にそれを不満と思うわけでもなかったので気にも留めていなかったんですけど、今回は学園&生徒会共同による査察とやらで、わたくしがご一緒させていただくことになりました。

どうにも普段と異なるトレーニング環境とメニューなせいか、生徒達の怪我の発生率が高いようだとのことでした。

とは言ってもトレーナーも無茶させてるわけでは無いので軽度熱中症や打ち身、軽く足首を捻るといった『休んでいれば当日中に治るレベル』らしいのですが、学園としても無視する訳にもいかないらしく。

何かしら対策を立てるために現場を見てきて欲しいと言う話になり、たづなさんからわたくしに白羽の矢が立ったわけでございます。

そういう事ならばこちらとしては願ったり叶ったり。もし脚部不安とかがあるのならそんなことを感じることもなくトレーニングに専念できるよう微力を尽くすのがわたくしの使命おしとです。

1週間ごとに各チームを回っていくとのことでした、トップバッターはてつきり最大手のチームリギルあたりだろうと思いきやまさかのチームスピカでございます。

うつひょう、主人公チームついにキマシタワー！

というわけで前日からワクワクして寝られない小学生状態だったわたくしですが、い

ざ合宿の練習風景を見ていると別の意味で興奮が冷めません。

肌を焼く陽射し。

視界一杯に広がる海。

寄せては返す波。

白い砂浜。

そして水着。

ウマ娘ちゃん様の水着姿。

ウマ娘ちゃん様の水着姿。

ウマ娘ちゃん様の水着姿。

あーーーーー!!

あーーーーー!!

覚悟はしていましたが、やっぱりかなり心にクるものがあります。

タンキニ型と呼ばれる、下がハーフパンツ状で鼠径部のラインを隠して各方面に配慮されたデザインのスクール水着でございますが、それでも肩を大幅に露出させ、水の抵抗を小さくするために極力肌に張り付くような作りのそれは、アスリートとして引き締まった肉体美を余すところ無くさらけ出し、とてとてもダイレクトに視覚から精神を攻撃してまいります。

24時間とは言いませんが、トレーニング中はずっとそんな格好をしているウマ娘ちゃん様達に囲まれるわけで。しかも借り切った同敷地内に複数チームが同時に合宿しているらしく、トレーナーという一部例外を除いてどこを見てもウマ娘ちゃん様達しかいないわけで。

なんと……なんと素晴らしい……。

天国、極楽、ニルヴァーナ。

もうね、いけません。出来る限り冷静になろうと出来る限りテンション上げずに淡々と語ったにも関わらず、溢れるリビドーが全く抑えられていません。

このままではとても正気を保っていられそうにありませんので、一度海に向かって叫んで発散しときましょう。

ただし心の中で。大声出せませんし、何より声に出せるようなシロモノではありませんので。

せーの。

ちちしりふとももー

!!!!!!!

……ふう、ちよつぴり落ち着いた。危うかった。

わたくしが色香に負けて正気を失うなど唾棄すべきことです。あつてはいけないことです。万が一そうなってしまった時はこの腹かつ捌いて自ら畑の肥やしになりに行く所存です。

出来ればやりたくないなので頑張れマイ鋼の意志。

というわけで毎日S A N値がゴリンゴリンと鬼おろしで削られているわけなんです。が、さてお仕事の方はどうなのかというと、とてもありがたいことにメツチャクチャ暇です。

統計的に発生率が高いとはいえ、実際に怪我なんてそうそうあるものでも無いようです。それにチームスピカの面々はベテランなだけあつて自己管理もしっかりしていますので尚更です。

……あれ、これもしかしてたづなさんとルドりんに担がれた可能性ありません？ 実
は怪我が多いとか言うの、建前だったりしません？ 単純に夏休みを貰ったような感じ
なんですけど。

そういつた訳で特にやることも無いわたくしは暇潰しを兼ねて、メンバーのトレーニ
ングのお手伝いなんかをさせてもらっています。

今日はスタミナ強化ということで長距離ランニングです。スタート&ゴール地点に
トレーナー、折り返し地点にわたくしを配置して時折休憩しながらそこを何度も走り込

む、といったものとの事です。

わたくしに課せられたのは、ビーチパラソルの下でドリンクと濡れタオルを詰め込んだ大きなクーラーボックスを脇に、ビーチチェアに腰かけながら水分摂りつつ、時折やってくるみんなを激励するお仕事です。

……ほぼぼぼただのバカンスじゃねこれ。

まあ泳ぐ予定も走る予定も無いのでわたくし自身は当たり前のように普段着ですけど。

いつもと違うと言えば白衣を着てないことと帽子を被ってることですかね。髪の色が暗色系なので熱溜めやすいんで。

それと流石に砂浜じゃ移動不可なので車椅子は近くにありません。ここまでの移動も設営も全てチームのみんながやってくれました。

わたくしを運ぶために何故かゴルシちゃんか麻袋を被せようとしてきましたけどみんなに止められました。

で、ウオすけにおんぶしてもらって運ばれてきたんですが、わたくしの身体前半分と彼女の身体後ろ半分が激しく密着して歩く度に擦り付けられてそれはそれでS A N値直葬一番搾りでしたので、結果としては俵担ぎされてた方が精神的にはマシだったのかも知れません。絵面的には最悪ですけれど。

まあそんなわけでした、身を焦がす直射からパラソルと帽子で身を守りつつ、キラキラ光る水面を眺め、さざめく波の音を聞きながらみんなが来るのを待っているわたくし。

少し前にスタートしたとトレーナーさんから連絡も頂きましたし、そろそろ誰か来るんじゃないかな。

・ ・ ・ ・ ・

「っだああああああつしやあああああ!!」

「まああけええるううかあああああ!!」

最初に聞こえてきたのは言わずもがな、格好良さを求めるくせに可愛さが天元突破してるウオすけことウオツカちゃん、ティアラがとても良くお似合いのツイントツンデレないすばでー、実質ギヤルゲヒロインのダイワスカーレットちゃん二人の叫び声アーンド激しく砂を巻き上げる走行音。

おい二人とも、まだトレーニング始まったばかりなのにいきなりそんな飛ばしてて大丈夫なのか。

「二人とも、お疲れ」

「はあつ、はあつ、スカー、レット、俺の、勝ちだ……!」

「ふうつ、ふうつ、まだ、まだ、これから、よ……!」

ねえ、長距離トレーニングって分かってる？

あつダスカさん、ごめんなさいその膝に手をつけて前屈みになって息する体勢止めてください。ダスカさんのダブルダスカさんが息する度にゆっさゆっさしてるの強調されちゃってますので眼福です待って違うちゃんと仕事しろソツチに行くな帰って来いわたくし。

「ほら、水分、摂って。がんば」

「サンキュ、先生……んぐつ、んぐつ」

「……ぶはっ！ こっから先は全部アタシが勝つんだからね！」

二人にクーラーボックスから冷えたスポドリを差し出します。

まだ始まったばかりなのにそんなに汗かいて。水分と塩分はしっかり摂れよ二人ともー。

「ハッ、そのセリフそっくりそのまま返してやるぜ！」

「わー声が大きーい。ビッグマウスも程々にしときなさいよ、後で恥かくのはあんたなんだから」

「ぐぬぬぬ……」

睨み合う二人。わー、どうして公式カプってこう尊さに満ちてるんでしょう。

お互いに相手を上回ろうと切磋琢磨し合う理想的なライバル関係。こんな推す

なって方が無理です。仲良く喧嘩しな。

「どりやああああああああ……」

「たああああああああ……」

どちらが合図したわけでもないのに同時に再びダッシュする二人。

頼むから倒れるなよー？

・
・
・
・

「スカーレットもウオッカも元気だなあ……本当に長距離トレーニングだって分かってるのかなー？」

「お二人とも、相変わらずですねー」

先程の二人が豆粒くらいに遠ざかった頃に来たのが、長いポニーテールが萌え可愛いはちみー狂のテイテイ、トウカイテイオーちゃんに、三つ編みハーファップの似合い方が尋常ではない、異次元の腹を持つ日本総大将のスペシャルウィークちゃんです。

アニメ一期と二期の主人公が揃ってやってきましたよ、と。

あーもうこの絵面が見ただけで死んでもいい。死にませんけど。

「お疲れ、テイオー、さん、スぺちゃん」

「やっほセンセー」

「スノウ先生、どうもです」

この二人は駈歩といったペースで無理なく走っています。

ちゃんとトレニングの趣旨を理解したペースですね。いやそれが普通なんですけど。先の二人がアカンのですけど。

「水分、摂つとく？」

「ボクはまだいいかな。まだ身体あつたためてるレベルだし」

「私も大丈夫です。ありがとうございます」

「ん」

実際、二人ともまだまだ大して汗もかかず余裕がある感じですよ。

まあ長距離トレニングですしキツくなってくるのはこれからでしょう。がんばえー。

「さつ、そろそろ行こうかな。マックイーンも脚が治ってからどんどん調子戻してきてるし、ボクもうかうかしてられないモンニ」

「私も早くスズカさんに追いつけるようにならなくちゃ。じゃ、行ってきます先生」

「行って、らっしやい」

嬉しそうに二人はそう語って再度走って行きました。

仲間の復帰を素直に喜ぶその姿、実に眩しいですね。はあ尊い、尊すぎる。良いぞー。その表情を拝むためにこの仕事に就いたんで、もっと供給お願いします。

「よつす先生。景気はどうだい？」

その後にやって来たのが解説さんに悲鳴を上げさせた伝説のウマ娘、すなわちゴルシちゃん。

彼女らしいスロースタートで、息を切らせてる様子は全くありません。

なんだかんだ言つて長距離レースでロングスパート出来る力を持つ娘だけあって、スタミナ管理はバツチリなのでしょう。お見事ですな。

「ぼちぼち、でんなー」

「そっか。何かあったらすぐ呼べよ。かつ飛んで来てやつから」

そう言い、シュツシュツと口で言いながらシャドウボクシングを披露するゴルシちゃん。

結構サマになつてゐるんですけど、何でパンチの時じやなくスウエーする時にシュツツと言うんです？

つてか動きがだんだんデンプシーロールになつてきてるぞこいつ。ええい無視だ無視。ツツコんでいたら切りが無い。

「ん。ゴルシちゃん、飲み物、いる？」

「いや、まだいらねーわ。この後しんどくなつてくるだろうしな」

確かにトレーニングはまだ始まったばかり。この夏の暑さと、砂浜という足場の悪さがどんどん体力を削っていくでしょう。倒れないように気をつけて下さいね。

「ん。がんばって」

「おう、今年こそゴルシちゃんの年だつて分かせてやるぜ。それと遅くなつちまったが先生には今度、マックイーンのお礼参り計画中だから楽しみにしとけ」

そう言い残してゴルシちゃんは再び走っていききました。

……まあ、ゴルシちゃんにはバレてますよねそりや。

・ ・ ・ ・ ・

「ふっ、ふっ……ふう」

ゴルシちゃんとすれ違う形でやって来ましたのはすみれ色の艶やかなロングヘアを靡かせるウマ娘、メジロマックイーンちゃんです。

正真正銘、生粋のステイヤー。こちらも全然疲れた様子は見えません。

ペースはややゆつくり目ですが、ここ最近までは療養期間で衰えてしまっていた筋力や体力を取り戻すことに重点を置いていたようですし、妥当なペースと言えるでしょう。

普段から主治医監修のもとで無理のない自主トレーニングも続けているようですし、恐らくこの夏合宿で本来の力を完全に取り戻すと思われれます。

素晴らしい。実に素晴らしい。

「マックイーン、さん。お疲れ様」

「まだまだ、この程度は準備運動ですわ」

実際全く呼吸は乱れてませんし、フィジカル面はほぼ全盛期の力を取り戻しているようですね。

フアサツと髪をかき上げるパクパクさん。実にお美しい。

水着姿でも溢れる気品と優雅さを損なっておりません。

あ、水着姿やば……萌える。たまらん。

いかんいかん、お仕事モード側に意識を集中させませんと。

煩惱退散、どーまんせーまん。

「あれから、脚は、大丈夫？」

「ええ、むしろ以前より調子が良いくらいですわ」

「それは、良かった」

約半年前、バレンタインの時にメジロの方々にはわたくしの能力をバラしています。

ただし、転嫁能力としてではなく治癒能力として。そして一切の他言を許さないという条件で。

そしてその上で、とある要望をメジロ家に後押ししてもらおう代わりとしてパクパクさ

んの繫鞴帯炎を回収なさせて頂いております。

本当はこういった使い方はしたくは無かったのですが、ちよいとわたくしの野望達成には独力での限界がありましたので、権力やら何やらに頼るため止むを得ませんでした。

「本当にありがとうございます、スノウ先生。こうして練習に打ち込めるのも、先生のお陰です」

良い良い、気にすんな。お礼なら当時に死ぬほど貰いましたよ。

治した時に真顔のままポロポロ泣かれた時は超焦りましたわ。

助けを求めようと周りを見たら主治医さんも執事さんも同じように真顔で泣いてるんですもの。

え、ご当主様はどうだったかって？ それを聞くのは野暮つてもんですよ。

「いいって。それより、まだ先は、長いよ？」

「そうですわね。それではまた」

「ん」

軽く足首をほぐした後、再び走り出すパクパクさん。その表情はととてもとても晴れやかです。

真夏の陽射しの下、清々しい面持ちで真っ直ぐに前を見据え、波打ち際で水飛沫を上

げながら砂浜を走る、スクール水着姿のパクパクさん。

うーんこれはSRスチルものですね。あざまーす！

・ ・ ・ ・ ・

さて、これでメンバーが一通り1巡しましたね。正確には0.5巡ですけど。

けどこれ、何往復するつもりなんでしょかトレーナーさん。特に終わらせるタイミング聞いてないんですけど。

……んえ？ メンバーが足りないですって？

そうですね、もう1人のスピカメンバーであるサイレンススズカちゃんも去年のテイテイが勝った有馬記念を観戦後、再び海外遠征に戻ってしまったんです。年末には戻ってくるらしいですが。

アニメでヤバげな骨折してたので念の為に状態確認しておきたかったのですが、未だに直接はお会いできていません。

その後の戦績を見る限り不安は無さそうですけど念の為にね。

え、もし何か見つかったらどうするのかって？ 言わせんな恥ずかしい。

「お、あんなところに超可愛いコいるジャン」

「な？ マジヤバイだろココ。超穴場なんだって」

あれ？ 男の人の声？

そちらを見ると、黒く焼けた肌に染めた髪、トランクスタイプの水着にピアスやネックレスと、さも遊んでますといった風貌の男性が二人。誰だこやつら？

スノウちゃんブレインが学園関係者リストから検索しますがヒットしませんでした。部外者かな。

一応、合宿を行うにあたって周囲一帯は学園の貸し切りになっているはず。マスコミ対策や一般人対策の為に。

「だな。お嬢ちゃん一人？ お兄さん達と遊ばない？」

「マジ退屈させないから、一緒に遊ぼうぜー？」

わたくしに近寄りながらそう言ってくる二人。

ふむ。この場所に勝手に入っているという現状だけでもブラック判定ですが、貸し切りだとは知らずに迷い込んだ可能性も若干残っています。

とはいえウマ嬢ちゃん様でも知り合いでも無いこやつらに優しくする理由はありませんので、強めに退去勧告させてもらいましょう。

「……ここは、関係者、以外、立ち入り、禁止。今なら、咎めない、から、すぐ、出ていき、なさい」

「おーこわつ。お嬢ちゃんもトレセン学園の生徒？ 超可愛いネー！」

「ちよつとくらいサボっちゃってもマジバレないって。てかLANEやってる？ マジ

交換しよ？」

ぐぬ、声量が出せないなので大して効いていない。

うざいですねえ……。てか話聞けよ。

世間一般ではイケメンに分類されそうな二人ですが、こちとらヒト息子に興味はこれっぽっちもナツシングなのでゲスよ。

「だから、あなたたち」

「ほらほら、せつかく海来てるんだし遊ばなきや勿体ないって」

だから話を聞けつてのナンパ野郎ども。

「うわ、マジ手え細つ、白つ。綺麗な手えしてんねマジで」

「ちよつ」

一人がいきなりわたくしの手を掴んで立ち上がらせようとグイツと引きました。

当然立つことの出来ないわたくしは急に接触されて身体が強張ってしまったのと、頭が軽くパニックってしまったせいで受け身を取ることも叶わず。

「ぶべふつ」

砂浜に顔面ダイブ。

……おかげで冷静になりパニックからは復帰しましたが、何してくれてんねんコラ。

「ちよつ、足痺れてた？ ウケんね」

「マジ大丈夫？ 一緒に休めるとこ行く？」

人が倒れてるのを見て『ウケる』だと？ 貴様らがやったことに対して悪びれる様子も無いだと？ あまつさえご休憩できるような場所に誘い込んであんなことやこんなことをしようとするだと？

その上これ、無差別なナンパだよな？ もし当事者がわたくしじゃなかったら他の娘にこういうやりとりしようとしてたつてことだよなあ？

可愛いくて愛しくて尊い存在であるウマ娘ちゃん様達にこんな下衆なナンパしようとしてたつてことでファイナルアンサーなんだよなあアア!?

ゆるぎさん!!

「……警告は、したよ」

そう短く言つて、わたくしは首から下げていたアクセサリーの紐を引き抜きます。

・ビビビビビビビビビビビビビビビビビビビビビビビビ!!

大音量で響く電子的なアラーム音。

ええ、防犯ブザー発動です。

もともとわたくしが倒れてしまった時に誰かに発見してもらう為の爆弾対策として身に着けていたのですが、まさかこういつた本来の使い方をする事になるとは。

「え、いやちよつ、そういうの無しだつて」

「それ止めてマジで。マジヤバいからマジで」

ふはははもう遅いわー、そうれ誰かが来るぞ、捕まりたくなければ今の内に尻尾を巻いて逃げ去るがよいわー。

「おう、マジヤバいぞ。まあもう既に手遅れだけどな」

「貴方がた……ウチの先生に何をしていますの……？」

……あ、ゴルシちゃんとパクパクさん来ちやつた。

よりによつてこの二人とは……かわいそうなナンパ君達。

声のトーン低いっすよお二方。こええ。

「えっ、うおお、超絶美人が二人増えた！ 超。パねえ、激烈。パねえ!!」

「やつべ、マジやつべ。ねえねえ三人ともマジ一緒に遊ぼうぜ？ マジ絶対楽しいからマジで」

この状況でまだナンパ続けるのかよメンタルすげえなあこやつら。まあもしかしたら現実逃避かも知れないけれども。

「あい分かった。辞世の句はそれでいいんだな？」

バキリバキリと指を鳴らすゴルシちゃん。

「……ええ、そのように。宜しくお願い致します」

どっかに電話してるパクパクさん。

「……ファツ？」

南無。だが同情はせん。

その夜。砂浜の一角にて。

——ザザーン

「昼間の娘たち、メツチャ美人だったな」

「マジヤバかったな」

——ザザーン

「ところでさあ……首から下、砂に埋もれて完全に動けなくね？」

「マジヤバいな」

——ザッパシヤーン

「……さつきより海の水、近寄ってきてね？」

「マジヤバいな」

——ザザーン

Case 20 : 養護教諭の夏祭りと花火

日本の夏は暑さよりも湿度が極悪です。

汗が蒸発しづらいから体温下がりにくいのが問題なんですよね。

つまり、あつつつつい!!! (語彙力う)

最近は9月末くらいまで30℃超えの残暑になったりするのが割と珍しく無くなってきましたが、みなさま熱中症で倒れたりしてませんかよね？

部屋の中に居たとしても水分補給はこまめに行いましょう。

特にウマ娘はヒトより平熱が高めなので暑さ対策はしっかり講じましょう。

というわけで文明の利器は積極的に使っていこうぜ？メルテッドスノウです。

そうそう、まだ視察の途中ではありませんが、やはり怪我などをする娘はほほおりません。全くないというわけでは無いですが、学園にいる頃と変わらない程度です。一安心ですね。

中間報告でたづなさんに電話でその旨を話した際、もののついでに例のナンパーズの件も報告したところ……翌日から警備が大幅強化されました。何でもメジロ家とシンボリ家の方から協力を申し出てくれたらしいです。

動きが早いですね。流石はウマ娘ちゃん様達を思いやる素晴らしい方々です。幼気いたいけで可憐なウマ娘ちゃん様達が心の傷を負う事態になる前に対策して頂けて、スノウちゃん大変満足です。ありがたやありがたや。

そんなこんなで合宿期間も残り僅かとなって参りました本日、午後のトレーニングを終えたウマ娘ちゃん様達がここ合宿所に戻って来るのを冷房の効いた室内から眺めているわたくしです。

チームスピカへの同行は最初の1週間で終わっておりまして、その後も7日毎に他のチームに回されているわたくしですが、おかげで水着姿のウマ娘ちゃん様達を拝見してもすぐさま我を忘れるような事態には陥らない程度には慣れてきました。

ただし左手の指の間に鉛筆挟んでそれを右手で握りながらですけど。痛い痛い痛い。でも何かしらこうやって己を律していないと危ないんですってマジで。

お仕事モードになって集中していれば問題無いですけど、リラックスマードの時はまだまだ油断出来ません。それもこれもウマ娘ちゃん様達が可愛過ぎる萌え過ぎる尊過ぎるのがいけないんです。

本日は同行しているチームのトレーニングメニュー的に、動けないわたくしは邪魔以外の何者でも無い状態ですので合宿所でお留守番です。

いつもの保健室であればコーヒをドリップしちゃうところですが、生憎ここにそう

いった設備はございません。ですので箱で買い溜めしておいた缶コーヒーを傾けていたところでございます。鉛筆が邪魔で飲みづらいですが我慢です。

あ、もちろんメーカーは例の1万字怪文書を生み出したり感謝の1万缶並べしたりしたとこのやつですよ。あの熱意には正直頭が下がります。

次々に合宿所へ戻って来る水着姿のウマ娘ちゃん様達。シャワールームと更衣室が合宿所内にありますので、皆そこで汗を流してからジャージもしくは私服にお着替えいたします。

つまり、部屋から眺めているだけで汗や海水にまみれた濡れ感MAXウマ娘ちゃん様達が自動的に次から次へとやって来るといいうわけですね。もうほんとこの状況に課金出来ないのバグじゃないですか？

ところで心なしかウマ娘ちゃん様達の表情に笑顔が多い気がします。浮足立っているような？

ま、理由は分かっているんですけども。

今夜は近所で夏祭りが開催されます。

花火大会もセットとなった、結構な規模のお祭りです。

アスリートではありませんが同時に学生なウマ娘ちゃん様達、こんな楽しそうなイベントに食いつかない訳がありません。

わたくしはちよつと人混みが得意ではありませんので、お祭り会場まで行くつもりはありません。

少し離れた所から締めの花火さえ見られれば満足です。

ということでは、お祭り会場方面が良く見えそうな場所を探しにでも出掛けようとしたところで、現在同行を許されているチームの娘に見つかり、声を掛けられました。

「あ、スノウ先生」

「先生こんなところでどうしたんだ？ お祭り、行かないのか？」

「へいへーいスノウちゃん先生、こんなここにいたって祭りは待つてくれないんだぜ！

どうせなら一緒にゴートゥーヘルだぜ！」

「地獄に行つてどうするんですか。お疲れ様です、メルテッドスノウ先生」

イエス、チームカノープスの面々です。

私服に着替えたネイチャさん、ターボ師匠、カネタン、イクノんの4名がわたくしに近寄ってきます。みなさん普段の格好も素敵ですが私服姿もとてもお似合いですね。

学園ではネイチャさんを始めとして週1ペースで誰かしらが保健室に遊びに来てくれていましたが合宿が始まってからは中々そうもいかず、今回の同行が久々のご対面だったります。

「ん、わたしは、花火が、見られれば、良いから、お祭りは、行かない、つもり」

「えー……!! 先生行かないの!? やだやだ行こうよ、ターボたちとお祭り一緒にいーこーおーよー!」

抗議の声を上げた師匠がわたくしの後ろに回り込み、車椅子の手押しハンドル部分に掴まって左右に大きく身体を揺らします。こらこら師匠、そんなことするとこうですよ。

車椅子を操作してその場でくるくる回転します。ハンドルを掴んでる師匠を振り回しながら。秘技、セルフメリーゴーラウンドー。

「お、え、わは、うわははははははは、いーやつほー……!」

「ほらほら、二人とも遊んでるんじゃないやありません」

あ、ネイチャさんに嗜められた。ごめんちやい。

「で、本当にスノウ先生は行かないの?」
「ん」

ええ。先程も言った通りわたくし、人混みがやや苦手です。大勢の人と関わるのが嫌いってわけではなく、単純に人混みを避けるために車椅子の操作に気を張り続けてなきやいけなくなるんで少し疲れるんですよ。

わたくし的には花火は確実に見ておきたいんですが、それさえ出来ればそれで良かったので無理に会場まで行くことも無いかなあと。

「うーん、そっかあ……いや、まあね？　あまり乗り気でない人を無理に誘うのもアレだし、仕方無いんだろうけどさ……」

おや、ネイチャさん微妙に菌切れが悪い。

「んーと、出来ればネイチャさんとしても保護者がいてくれると助かるというか。ほら、ターボとおマチは見ての通りだし、イクノは割とまじだけど時々流されてるし、あたしだけでテンション上がってるみんなを抑えられるか不安だし、南坂トレーナーはちよーつと忙しそうで誘えなかつたし、他に誰かもう一人くらいいると安心かなーというか。……あー、というかですね、あたしも、先生とお祭り、行きたいなーと言いますか……」

こちらから視線を外し、されどもチラチラとこちらを伺いつつ、ツインテールの片方を指でくるくるといじりながらそんなことを言ってくるネイチャさん。

うーーわーーあーあーいじらしい！　めんこい！　萌え苦しいー！！

本日のわたくしの心臓を止めに来た刺客はあなたでしたかネイチャさん！

ゲイ・ボルク（必中）、相手は死ぬ。その攻撃はわたくしに良く効くぞもつとやれ。

普段そんなに自己主張してこないネイチャさんにここまで言わせてしまったんです、この心意気を拾わずしては養護教諭の名が廃ります。

車椅子の操作で疲れる？　そんなもん今のこのネイチャさんの表情を拝見すること

で分泌された脳内麻薬で微塵も感じる気がせんわあ！

「ふむ、そういう、ことなら、付き合うよ」

元より『疲れるから』以上の理由ありませんので、固辞するほどのことでもありませんし。

折角お誘いいただいたことですし、みんなと回ってみるのもまた一興でしょう。

「え、ほんと？ やたつ、言ってみるもんだ」

小さくガッツポーズをするネイチャさんがわたくしの心臓に追い打ちを掛けてきます。もうとつくにライフはゼロです。あと2時間ほど耐え切れスノウちゃんハート。

「あ、確認しなかったけどターボとおマチは兎も角、イクノ。先生も一緒でいい？」

「ええ、何も問題ありません。ご同行、宜しく願います先生」

ではでは少し予定を変更しまして、カノープスの面々と共にお祭り会場へ向かうことと致しましょうか。

■Case 20-1: 焼きそば

はい、というわけでやって参りましたよお祭りへ！

会場では奥にある広場の中央で櫓が組まれ、その上で和太鼓を軽快に叩いております。そしてそれを囲むように盆踊りを楽しむ人々がたくさんおりました。そしてそこ

まで通ずる道の両端には所狭しと色々な屋台が並んでいます。

陽も落ちて西の空にわずかな茜色を残してはいるものの、全体的にはほぼ藍色の星空。電球色の温かみのある色を使った提灯や屋台の照明。聞こえてくる祭囃子。賑わう人々の群。

ンンンンン良いですねえ！ これぞ夏の風物詩といった感じですよ。

はいそこ『さつきまで行かないつもりでいた癖に』とか言わない。

日本にはこういう時に使う素敵な諺、アリマース。

『それはそれ。これはこれ』

結果オーライなら良いんです。

「へーいらつしやい！ 焼きそばいかがつすかー！」

ほーら、屋台の呼び込みとかも実に威勢が良くて祭りの雰囲気盛り上げてくれてるじゃないですか。いつまでも細かいことを気にしないで楽しんでいきまっしょい。

……というかですね、焼きそば、合宿所の近所。このコンボが成立していて先程の声に聞き覚えがあるということですよ。

「やはり、いたな、ゴルシちゃん」

登場が早いんだよゴルシちゃんよお!?

のぼりに『やきそば』と書かれた屋台では、法被を着てねじり鉢巻きをつけたゴルシ

ちゃんか金属ヘラを両手に、大きな鉄板を前にソース香るやきそばを大量に炒めていました。

法被姿とかが余りにも馴染みすぎてるんですよこの場の空気に。

「お、先生じゃんか。そりや近くにこんな稼ぎ時がありやあたしが出張らないワケが無いんだよなあ」

「それは、納得」

まあ特にあなたの場合はどこにいても不思議じゃないですけど。

どこにでもいて、どこにもいない。どっかの戦争好きの人の部下みたいなやつめ。

「兎も角だ。ほらよ先生、食ってけ食ってけ。こいつはあたしの奢りだ」

そう言つてゴルシちゃんが、わたくしの前にパック詰めされたやきそばを差し出しました。

雑に詰められた焼きそばはパックの口からやややみ出しており、出来立てのそれから立ち上る湯気が、ふりかけられたかつおぶしをゆらゆらと踊らせています。

青のりと焼けたソースの香りが減り気味のお腹にダイレクトアタックを仕掛けてきます。ほーいいじゃないか。

「あら。ありがと、ゴルシちゃん」

感謝祭で食べられなかったというフラグ回収、雑う。いや頂きますけど。

けど今はまだみんなと動き回りながらなので持ち帰りをお願いします。他にも色々食べ歩きしたいです。

「あー！先生、抜け駆けはすっこいですよー！」

おやカネタンに見つかった。まあそうだねすっこいね。

「ゴルシちゃん、あと5つ、頂戴。流石に、お金は、払うよ」

「あいよつ。ま、先生もしかり遊んできな。言うまでもねーかも知れねーけどさ」

ビニール袋に入れられたパック焼きそば計6つを持たせてくれたゴルシちゃん。

人数に対して1つ多くないかって？ 南坂トレーナーへのお土産ですよそりゃ。こんな日でもウマ娘ちゃん第一で残業している素晴らしい超有能トレーナーにも差し入れしないとでしょう。

「ん。ありがとね」

「おう」

どれ、確かに折角ですんで全力で遊んじやいませうかー！

■Case 20-2 : お面

ずらつと並んだ様々なキャラクターのお面に、師匠が興味を惹かれております。一個々々見ては『おー』とか『はー』とか言ってます。ぷりちーだなこの師匠。

「なあ先生、これ何のお面なんだ？」

オレンジ色のフルフェイスマスクに黒いゴーグル、緑のモヒカンを生やしたようなお面を指さして師匠が尋ねます。

「それは、キャロット、マン」

こいつはビコペンが好きな特撮ヒーローでしたね。人参がモチーフのフォルムで、基本的には子供向けの勧善懲悪で分かりやすいお話なのですが、動画配信サービスのほうでやってた同シリーズの「キャロットマン・ブラックさん」とかは子供完全置いてけぼりのむっちゃ泥臭いお話でした。この作品も息が長いので支持年齢層が幅広いんですよ。

「これは？」

「爆走、猛姫☆、プリンセス、ファイター」

キャロットマンが男の子向けだとするならば、こちらは女の子向けのアニメ作品です。闇から生まれ、勝利の為に悪逆非道の限りを尽くすダークウマ娘と、正義の心で正々堂々と立ち向かう姫戦士ウマ娘がレースで戦うお話ですね。こちらも小さいお友達から大きなお友達まで支持されています。こちらもシリーズ化されていますね。初代はプリファイにて最強。

「こっちのは？」

「美少女、ソルジャー・ブレザー、ルーナ」

あら懐かしい。こちらの歴史はやや古く、お母さん世代がハマったアニメですね。月のお姫様の生まれ変わりとか思い込んでるJCが、やたらと何かの契約を迫って来る白猫と、仮面を付けた怪しいロリコン紳士に付き纏われるという……あれ、そんな話だったかな？ 違ったかな？

「へー、先生詳しいな。あれ、じゃこれは？」

「ん……んん!!」

マニアックう！ こんなお面も売ってるの、てか作られてたの!?

師匠が指示した先にあつたのは、白い猫耳と両耳下に大きな鈴をつけた緑髪の女の子のお面。これは……。

「ベ・ジ・キャロット、通称、ベジ子」

すこーし(?)前に深夜アニメでやっていた、完全ドタバタギャグコメディアニメじゃないですか。世間に『萌え』という文化を根付かせた内の一柱。

うわあ、隣にはミニ・キャロット、通称ミニ美の。更に隣にはラビリンズ・ローズ、本名うさだのお面もあるぞ。

主人公から放たれる『耳からホーミング(レーザー)』は当時衝撃的だったなあ。

そういえば最近、動画で復活したんだっけ。

「どれか、欲しいの、ある?」

ええぞー、気に入ったのがあればおいちやんが買うたるでー。

きらきらしたお目々で端から端まで満遍なく物色する師匠が選んだものは。

「うーん、そうだなー……じゃあ、これ!」

うわーお、そいつを選びますか。

分かって選んだわけじゃないよなあ。絶対知らないはずだよなあ。

彼女が選んだのは、全体が青色でツンツン髪、ウマ娘のように頭の上の方から耳を生やした、何故か眼球が繋がってるデザインの、通称『冒険好きの青いハリネズミ』でした。

「さすがだね。こいつは、速いよ」

「速いのか!」

めちやくちや速いぜ。道は彼が走った後に出来ませ。

師匠も彼のように運命をスピードで振り切つてやろうぜ。

障害になりそうな因果もんはわたくしが貰つておきましたんで。

■Case 20—3：射的

「こういうものは軌道計算が重要です。このように……弾丸の重量、形状、銃のパワーか

ら射出速度を算出し、現在の気温から空気抵抗率を代入、そして景品の重心から最大限に揺さぶるポイントを見出して……ここです！」

——パンッ

ちよいと縁日の射的相手に本気で計算して最大効率を叩きだそうとしているイクノん。

脇を締めて、照準を覗くときに片目を瞑ったりせず、両肘を台の上でしつかりと骨で支える形について射線がブレないようにする、お手本のような射撃姿勢です。

加えて狙っている景品も無理なく、下の段の方にある軽めのお菓子とかなんですが。

「……お嬢ちゃんは可哀想になるくらいかすりもしないなあ……」

「な、っ！ な、何故……」

屋台のおっちゃんからすら同情され始めておりました。

まあ、屋台のコルク銃（ぶ）ごときに理論値通りの性能を引き出せる精密性はありませんわなあ。

わ、茫然として眼鏡が斜めにずり落ちちゃってますよ。けどそんな姿もお可愛らしい。流石は『眼鏡が似合うインテリ系ウマ娘』ランキング第3位（スノウちゃん調べ）です。異論は認める。

——パンッ、コンッ

「つくあゝゝゝ、惜しいっ！ 揺れたんだけどなあ」

「お、こつちのお嬢ちゃんは筋が良いねえ。もうひと押しっ！」

ネイチャさんが狙ったものは、一番上の段にある一抱えもあるような大きいぬいぐるみ……ではなく、その下の段にある純和風の茶運び人形……渋いつすね、ネイチャさん。先程から割とヒットはしてるんですが、頭がゆらゆら揺れるだけで倒れたり落ちたりはしてくれません。重心の上の方に当ててるので狙いも良いのですが。

さてもう一手、何が足りないか分かるかなネイチャさん？

「大きい、景品は、重くて、倒れづらく、出来ている。必要、なのは、それを、圧倒する、パワー。よって、こう」

景品が倒れない？ ならば倒れる威力で撃てば良い。

コルク銃を右手に持ち銃口は景品に向けたまま、出来るだけ身体より後ろに引きます。逆に左手は照準を定めるように真っ直ぐ前に。狙いは勿論上の段、一番大きいニンジン型のぬいぐるみっ！

まるで銃を矢として番えて弓を引き絞るような体勢から、右手を素早く前に突き出し、反対の手を同時に引き、更に腰の捻りも交えながら腕が伸び切るその直前でトリガーを引きます。

難しいこと言いましたが、要は突きながら撃つ！

そう、銃単体で足りないパワーは他の運動エネルギーで補えば良いのです。

これぞわたくしが編み出した必殺の射法、名付けて『ガトチュエロスタイ（略）』。

——ズパァンツ！ コンツカンツ、バチイツ！

「ぐあああぁーっ！」

ま、マチカネコダイナー！！

何故か後ろにいたカネタンのおでこにヒットした。

ごめん、この撃ち方ってパワーは兎も角、狙いはブレブレだから命中率は目も当てられなくて。

カネタンが倒れてしまったホントごめんよ。

……これ、カネタンゲットしたことになる？ あ、ならない。デスヨネー。

■Case 20—4 : 花火

——ドドオン！

「たままや——！！」

「なんか違うくないターボ？」

——ドンツパァン！

「なかむらや——！！」

「それはもう完全に違うよねおマチ？」

——ドンドンドンドンドオン！

「……フアー……！」

「最早分かつてて言ってるよねイクノ!？」

あれから花火が始まるちよつと前に見晴らしの良い場所にみんなで移動し、屋台で買
い込んだ食べ物をかき込みながら、打ち上がる花火に一喜一憂しております。

そして律儀に全員にツツコミ入れているネイチャさん、流石です。さすネイ。

「はあ全く……あー、もうすぐ夏も終わるなあ。合宿も終わるなあ。残り数日、頑張りま
しよつか」

ふいにしみじみと呟くネイチャさん。

出逢った頃のように『頑張る』という台詞に変な影は差していないようです。ちゃん
と自分なりの頑張り方を見つけられたようですね。さすネイ。

——ドンツドンツ！

「ん……あ、そろそろ、かな」

プログラムの花火も後半戦に移ってきた頃です。

ぼちぼちわたくしが花火を見ることには固執していた理由が出て来るはず。

「ん？ どしたの先生？」

「みんな、次の、花火、注目」

ネイチヤさんの問いにわたくしはそう答え、みんなの注意を空に向けさせます。わたくしの言葉に従い、見上げる4人。

さあ、刮目せよー。

——ポンッ、ポンッ、ポンッ

まずは横並びに小さい花火が3発。

……プログラム後半の割には小振りじゃない？

そう誰もが思いかけたタイミングで高く伸びていく、5条の光。そして。

——ドドドドオンッドパアアン！

横一列に並んで視界いっぱいに広がる、一尺玉の菊花火が4発。

そして更にやや遅れてその中間に先の4発に負けないサイズの、蹄鉄を象った型物花火が黒い夜空に鮮やかに描き出されました。

周囲からどよめきが起こります。

「おおおーっ！ 今の蹄鉄の形？ すごいっ！ すごいすごいっ！」

びよんびよん跳ねて感動を表す師匠。

「へええ、蝶とか星の形は見たことあったけど蹄鉄型は初めて見たなあ」

「その蹄鉄を彩った左右の花火もなかなか大きい見事なものでしたね」

「ほはー、面白い、綺麗、凄いつすわー」

ネイチヤさん、イクノん、カネタンもそれぞれ感嘆の声を漏らします。お気に召して
いただけたようで何よりです。

「ん。特注」

「「……え？」」

「え？」

ん？ いやそりやそうでしょう。蹄鉄型花火なんて頼んで作ってもらわなきゃ出来
ませんって。

《ただいまの花火は、中央トレセン学園からの協賛でした》

会場に花火の協賛者の名前がアナウンスされます。

こうやって大会に協賛金を納めることで花火を上げてもらうことが出来る場合があ
ります。

金額によつては今回のように大きいサイズやオリジナルの花火を打ち上げてもらえ
たりもするんですよ。

「え、ああ、今の学園^{ウチ}が出資^だしてるんだ。だから先生知ってたのか」

「な、なるほど。納得しました」

ネイチヤさんとイクノんが先程までのやりとりとアナウンスの内容から解答を導き

出したようです。おおよそ正解です。

「ん。ボーナス、ほとんど、突っ込んだ」

「「え、っ!?!」」

「え?」

いや、アナウンスされるのは知ってましたので個人名出すのは流石に恥ずかしいです
ので学園の名前で登録しましたって流石に。

ネイチャさんが恐る恐るといった具合に聞いてきます。

「……先生、ちよーつと確認なんだけどさ、さっきの花火はもしかして、学園が出資した
ものじゃ無くって、先生が個人で……?」

「ん。良いものに、仕上がって、良かった。綺麗だった、ね」

ウマ娘ちゃん様達の健康と発展の祈願と、みんなのひと夏の思い出作りの為に、バレン
タインからこれまで大して課金出来なかったフラストレーションとお金を込めて、盛
大なのを打ち上げてもらいました。

大きくてメジャーな花火大会とかで打ち上げるような3尺玉とかと比べると流石に
やや小振りですが、それでも十分に大会最大サイズです。

特に型物花火は広がり方が球ではなく面ですので、逆さまになってしまったり運が悪
いと縦線にしか見えないこともあるので今回は実にラッキーでした。

やあく、それにしても間接的にとはいえこうやって推しの為に課金するのはやつぱり
気ん持ち良いイーローツ!!

わたくしの課金欲も解消されてスッキリです。

「「うわあ……」」

あれえ……なぜこんな反応？

なんかターボ師匠までドン引いてるんですけど。

いや、いまだき個人で花火協賛するなんてそんなに珍しくもないと思うんですけど？

まあ勝手に学園の名前使っちゃいはしましたけど、わたくし関係者ですし特に問題無
いでしょう。メイビー。

ちなみに後日、カレンチャンがアップしてた花火の動画がバズり、それがたづなさん
にバレーオハナシされた。ぐぬぬ。

Case 21 : 養護教諭の職場の付き合い

「うふふふふ、うふふふふ」

——なでなでなで

どうも、ドーもドーも。

メルテッドスノウでございます。

さてわたくしは今、何処にいるでしょうか？

「えへへへ、えへへへへへ」

——なでくりなでくり

正解は、ココです、こっここっこ。

トレセン学園からも程近い、駅前の居酒屋にやって来ております。

そして、現在の状況なのですが。

「スノウ先生は可愛いですねえ、可愛くて……可愛いですねえええ。えへへへへへへ」

——なでりんこなでりんこ

なんかとってもご機嫌な桐生院葵トレーナーに先程から激しく撫でられまくってお

ります。

うーん、これは状況説明の為に、一旦回想シーンに飛んでおくべきですかね？

というわけでこちらのVTRをご覧下さい。どうぞ。

「壮行会？」

「そうです。理事長が秋から冬のレースに向けてサポートするトレーナー達の慰労と激励を兼ねて酒席を設けたとの事でした。で、メルテッドスノウ先生も是非に、と理事長が」

9月に入り、まだまだ暑い外気にやられないようにクーラーでがつつり冷やしている保健室にやってきたのは、黒いウエービーロングをなびかせ、これまた黒いスーツをビシッと着こなしたヒト娘、榎本理子トレーナーです。

「有り難いお話なのですが、私はあまりアルコールは得意ではなく。出来れば担当の事を考える為の時間を割きたくはないのですが……他のスタッフ達との横の繋がりを持つという意味ではそこまで悪い話というわけでもありませんし、費用は全て理事長持ちとの事なので、時間以外のマイナスもありません。総合的にプラスが多いと判断し、今回は一応参加しようかと」

「なるほど。で、それに、わたしも、誘われてる、と」

まあ学園と言ってもそこにスタッフとして勤めるのは当然成人の社会人でありまして。成人した社会人となると、こういった酒の席はまま避けられない事態として発生することもありました。

けど先程の理由なら、わたくしが誘われるのは場違いな気もしなくもないんですけど。トレーナーじゃないですし。

「ええ。理事長と、それと駿川女史が強く推薦されていましたよ。私としても同性が増えるのは心強いので参加して頂けるとありがたいのですが」

あの二人か。ここんとこなんかやたら甘やかされているような気がしますねえ。

もしかして飴と鞭です？ 今後は不眠不休で働かされたりするんです？

体力仕事じゃなければ構わんぞんと来い。実際、24時間365日担当の事を考えているトレーナーに比べれば今のわたくしのやってる事なぞぬるま湯もいいところでしょうし。

「なるほど。そういう、ことなら、参加で。わたしも、お酒は、そんなに、強くは、ないですけど」

お酒は前世も今世も好きなんですけど、好きだからと言っても強いとは限らんですよ。

お酒単体より何かを食べながら飲むのが好きなので、すぐお腹いっぱいになっちゃい

ますし。

ですがまあ折角お誘いいただけただ訳ですし、親睦を深めるのも大事ですし、古来より『他人の金で飲む酒と焼肉は美味しい』と言われておりますし、ここは是非わたくしもご相伴にあずからせていただきましょう。

「ありがとうございます。では参加……と。当日は現地集合ですが大丈夫ですか？」

「ん、問題、ありません。ナビで、行けます」

榎本トレーナーが出席簿的なものに私の参加を書き込みながら聞いてきますが、問題無いでしょう。会場は駅前のお店のようなのでとりあえず駅を目指せば良いでしょうし、今のご時世ウマホがあれば何とでもなります。

「そうですか。……皆さんは凄いですね。私はどうもそういう機械の操作は疎くて。念の為に印刷した地図を貰いましたが、それでも辿り着けるかどうかは神のみぞ知る、といったところでしょうか……」

……おいおいマジか。駅前に行くだけでそんな一か八かなのか。

確か彼女、前世のアプリでは凜とした見た目に対して目も当てられない運動性能とのギャップで一時期ネットで話題になりましたけど、運動以外も駄目なのか。

やだわたくしこの子の事がとても心配。

「ん、と。良かったら、一緒に、行きますか？」

どうせ出発位置も到着位置も同じなら大した手間でもありませんし、おいちゃんが連れて行ってあげますから。どうか連れて行かせて下さい。

一人で向かわせた結果、会場でああなたの到着をハラハラしながら待つことになる飲み会なんて落ち着いて飲めぬーですよ。

ていうか理子ぴん、アプリよりちよつとポンコツさに磨きがかかってませんか？

「……宜しいのですか？」

「まあ、折角、ですし」

おかしい。ことウマ娘ちゃん様達の育成に関しては厳しいなんて言葉すら生温いほどガツガツに個を縛るような訓練を課しながらも、その教え子から慕われるだけの手腕と愛を持っていて、更には理事長代理を兼任出来るという、超が3つくらい付きそうなほど有能な人のはずなのですが……それ以外がひどすぎる。

「……ありがとうございます。では、当日こちらに伺います。どうぞ宜しくお願いします」

「これは、こ丁寧に。こちらこそ、お願いします」

んまあ、それでも他のスタッフと交流を持つと奮闘する姿勢、嫌いじゃないぜ。当日は普段は話せないようなガールズトークが聞けるかもしれないし楽しみにしておきましょうか。

……てな感じで予定の都合がついた幾人かのトレーナー達が集い、駅前のお店を貸し切りで盛り上がっているといった具合でございます。

今回の主催者である理事長とその秘書も元々参加する予定だったらしいのですが、急用で敢え無く欠席。結果、わたくしを除いて数名のトレーナーのみという面子での開催と相成りました。

そしてわたくしですが、何度も言う通りお酒は好きな部類ではあるものの決して得意ではありませんので、最初に頼んだグラス一杯をゆつくりと楽しんでいるといった次第です。

「スノウ先生はお肌もちもちですねえ、スベスベですねえ。えへへへへへへえ」

それでまあ、場の雰囲気とアルコールに早々にやられた桐生院トレーナーがめっちゃわたくしに絡んできてるところでございまして。

彼女もまだサワー一杯くらいしか飲んでなかったような気がしますけど、わたくし以上にお酒には弱いご様子。ほらほら、人のほつぺたムニムニして遊んでないでちゃんとチエイサー飲んどきなさい。

「桐生院、さん、とりあえず、お水飲んで。こんな姿、担当の娘に、見せられ、ないでしょ？」

アルコール摂取時はいつも以上に水分が大事です。少し飲んだら間に水を挟む、といった飲み方が翌日の胃のムカつきや頭痛を防ぐ賢い飲み方なのです。

『酒も水分じゃない?』と思った貴方はアル中認定です。アルコールには利尿作用があり、摂取量より排出量の方が増えるので結果的に水分補給になり得ないのです。

はいじゃあここでスノウちゃんによるアルコールの分解に関するミニ授業です。

アルコールは分解過程でアセトアルデヒドという物質が生成されるのですが、これが最終的に二酸化炭素と水に分解されます。で、このアセトアルデヒドが分解し切れず血中濃度が上がると身体が不快感を訴えるのです。

また、利尿作用によって体内の水分が減ると、その分血液がドロドロします。そうなれば当然脳内の血流が悪くなり、それを何とかしようと血管が拡張するのですが、その時に周囲の神経を刺激するので頭痛が起きるといったメカニズムです。

ですの間水を挟みながら飲むことで飲酒量をセーブしアセトアルデヒドの生成量を減らしつつ、血液のサラサラをキープして頭痛を予防しておくというわけです。

ちなみにいくら水分を摂ってもアルコールの分解速度が上がったりする訳では無いのでそこは注意しましょう。ここテストに出ますよ。

「えへ、お水、飲みます。んくつ、んくつ……はあー。スノウ先生は気配り上手ですねえ優しいですねえ可愛いですねええええ。けどうちのミークもおおおおおつても

可愛いんですよ♪ 私なんかには勿体無いくらい良い子なんですよお〜」

だいぶ正体を無くしてますねえ桐生院さん。わたくし甘やかしモードから担当ベタ褒めモードに切り替わってきました。

まあ確かにハッピーミーク、ミーちゃんも可愛いですけどね。あの一見やる気があるんだか無いんだか分からないような言動の奥底に秘めた強く静かに燃える闘志、わたくしでなきや見逃しちゃうね。いや桐生院トレーナーも見逃さなかったのか。

というかですね、正体を無くしても担当娘へのラ आव (いい発音) は忘れないその精神、とてもとても素晴らしいでございます。なので褒めます。

「はいはい、桐生院、さんも、可愛いですよ。頑張つて、ますよ。偉いですね」

「ううう、可愛くないですよー、格好良くて頼られるトレーナーになりたいんですよー」

机に突つ伏しながらぶーたれる桐生院さん。

全くもう……可愛いってお得ですね。こんなウザ絡みすら愛しく思えます。

「そうですね、格好良い、ですよ、偉いですよ、よしよし」

「……えへへへえ……すう……」

ちよろい (ちよろい)。

先程のお返しと言わんばかりにしばし撫でていると、にへらと破顔したまま寝息を立て始めてしまいました。

ま、無理に引き続き飲んで続ける必要も無いんです、しばらくこのまま休ませてあげましょう。

というわけで撃沈2人目です。

え、1人目が誰か？

そんなんわたくしの隣にいる、開始早々にウーロンハイを一口飲んだだけで沈んでしまった理子ぴんに決まってるでしょういい加減にしろ。

.....

「お疲れ様です、メルテッドスノウ先生」

「お疲れ様、です、南坂、さん」

すやすや寝ている2名の敏腕トレーナー達の寝顔を着にちびりちびりと舐めるようにロックグラスでお酒を味わっていると、チームカノープスの南坂トレーナーが声を掛けてきてくれました。手に持つてるジョッキはハイボールっぽいですね。

お顔はだいぶ赤いですが普段通りの受け答えです。顔に出やすいタイプなんですかね。

「合宿ではお世話になりました。うちの担当の子達と夏祭りにもお付き合い頂いたよう
で。ありがとうございます」

「いえ、わたしも、楽しかった、ですよ。こちらこそ、ありがとうございます」

「そう言っていたけると助かります。うちの子達、結構個性が強いので」
仕方無さそうに苦笑いを浮かべる南坂トレーナー。

『気性難で大変だったでしょう?』と言外に聞かれています、そうかなあ?

カノープスに限らずみんな個性豊かで眩しい素敵な娘達ばかりだと思えますけど。

つていうか彼女らはこんなわたくしに声を掛けて、わざわざ夏祭りに一緒に連れてつてくれた心優しいあつたかい娘達ですよ。

「でも、みんな、良い娘たち、ですね」

「そうー、良い子達なんですよー、流石先生、分かっていただけですか!」

いきなり大声になる南坂トレーナー。

お、おお? これはアレか、自分の好きな話になると勢いが止まらない系の感じか。
酔った勢いもあるんだろうな、普段のこの人ならこうはなるまいて。

やはりこの人も担当の娘達のこと大好きな黄金の精神を持つトレーナーの一人です
すね、感服です、尊敬します。

「ええ。とても良い、チームだと、思いますよ」

「嬉しいですね、学園の雪妖精にそう言っていただけなんて」

そう言つて手持ちのグラスの中身を一気に呷る南坂トレーナー。わああ、豪快。

けど今なんだか聴き逃がせない単語があつたんですけど。

「え、と。その、雪妖精って?」

「ふはっ。おや、ご存知ない? 巷で言われていますよ。保健室にひっそりと佇み、訪れた子に癒やしと安らぎを与えてくれる、白き衣に身を包んだ雪の妖精がいると」

なんかまた本人の預かり知らぬところで噂話が一人歩きどころかターフをほぼ独走状態で駆け抜けてやがるぞお!! 最終コーナーから一気に抜けてきた! 中山の直線は短いつつてんだろがあ!! (意味不明)

わたくしみたいな欲望にまみれた妖精が存在しているわけが無いでしょうがよ。だから絶対にその噂、どつかで悪霊とかと間違えますってば。夜の学園とかで無表情で白衣の車椅子ウマ娘なんかに近寄られてご覧なさい。わたくしなら怖くて粗相してしまふ自信がありませんぞ。

「……一体、誰が、そんなことを?」

それはさておき噂の出処を抑えて締めておきませんと。

せめてこれ以上の拡大は阻止しておきませんと。

「ええと確か、がくえ」

空になったジョッキを持ったまま、会話の途中で唐突にバツタリと机に突っ伏す南坂トレーナー。

ん? あれ? おーい。

「南坂、さん？」

「くかー……くかー……」

落ちやがった！ 肝心な情報を吐く前に落ちやがった！ この人の酔い方、1か0かのタイプか！ 『がくえ』ってことは『学園の』誰かなんだろううけど範囲が広すぎて絞り込めなさすぎる！ 犯人は一体誰なんだちくせう。

ぐぬぬぬ、撃沈、3人目エ……。

・ ・ ・ ・ ・

「……」

「……」

「……何だ」

「あ、いえ。お疲れ様、です」

「ああ」

わたくしが陣取ってたテーブルが最早ただの寝床と化してきていたので移動です。

お店の端の方で延々と熱燗を手酌で飲み続けていた方がおりましたのでご挨拶をば。

こちらの御仁は黒沼トレーナー、ブルるんを担当されている方ですね。

テーブルにはつまみの冷奴も乗ってましたが、そちらは一切手を付けられていませ

ん。すげえ、酒単体で飲み続けられる人だ。かつくいい。

「……」

「……」

あまり他人と会話をすることの無い黒沼トレーナーと、表ヅラは無表情無口系のわたし。まるでスライムを使って卓球してるんじゃないかってくらいに弾まない会話。

ただ黙々とお互いに盃を傾げるだけという、居酒屋にあるまじき緊迫した雰囲気が生まれてしまいました。

とはいえこの御仁、意外と飲むペースが早くてそれに付き合つてると酔い潰れてしまいそうでしたので、わたくしはお酒のグラスは横に置いというてチェイサーの烏龍茶を飲んでますけども。

「……ブルボンが」

「？」

黒沼トレーナーが何度目かの空になったお猪口をテーブルに置いた時にふいに口を開きました。

「ブルボンが、あんたに感謝していた」

「……」

ブルボンが感謝、ですか？ 何かしたっけわたくし。

最初の出会いの時に何か言いかけてましたけどそれ以降も特にその話題になつたこ

ともありませんし。あれからお米様と共にたまに遊びに来てくれますけど本当に遊んでるだけですし。

「俺からも、感謝する」

んー……ブルると遊んでくれてありがとう、ってことで良いのかな？ 親目線的な。それならむしろわたくしの暇潰しに付き合ってもらっちゃってるので私のほうがお礼を言わなきゃなくらいです。

「いえ、こちらこそ、ありがとう、ございます」

「……ふつ、変わったヤツだなあんた」

……ありや？ 回答間違えたかな？

．．．．．

その後、黒沼トレーナーとはまた延々と盃を酌み交わすだけのサイレント飲み会になってしまっていたたまれなくなったのと、つまみ無しに飲み続けていられなくなったので再度テーブル移動です。

「おおつ、噂をすれば妖精さんご本人の登場だあ」

こちらではスピカの沖野トレーナーと、リギルの東条トレーナーが向かい合って飲んでました。

おっほお、バーではありませんがアニメ劇中再現が目の前で繰り広げられるとは……

やっぱりテンションぶち上がりますね。アニヲタやってて良かったなあ前世のわたし。し。

ってかどこまで広がってるんです？ その妖精扱い。

「噂？」

「合宿、防犯ブザー」

すかさず東条トレーナーが答えてくれました。

ああ、あれか……。

「ああ、あれか……」

いやあ、あのナンパ野郎ズには適度に痛い目を見てもらって今後の教訓としてもらえれば良いかなーと思ってはいましたけど、ちよいと相手が悪すぎた。パクパクさんが社会的に、ゴルシちゃんが精神超えて魂魄的に制裁を加えましたので、そりやあもう……此処から先は思い返すことすら恐ろしい。ガクブル。

「いやいや、あの時は迷惑を掛けてしまっただけで申し訳なかった。けど正直助かった。あんたがいてくれるとゴルシがいつもより素直に言う事聞いてくれる気がするんだよ」
「へえ、あのゴールドシップが。彼女と何かあるの、先生？」

東条トレーナーが興味深げに尋ねてきます。

足を組んで頬杖をついて、ちよつと小首を傾げて。

うーわーお、アダルティーな魅力もりもりつつたまんねえつす。

ウマ娘ちゃん様ではありませんが『眼鏡（以下略）ランキングにも食い込んできそうだなこの知的美人さんめ。』

「まあ、ちよつと、ね」

「ゴルシちゃんとの関係ですと？」

「一方的に秘密を握られてるだなんて言えるか恥ずかしい。

「ふうん、訳あり、ね……まあ何にせよ助かつてるのはウチもそうよ。ルドルフやグラス達からまああなたの事は聞いてるわ。いつもありがとうね」

「いやいや、むしろいつも、お世話に、なってますので」

「リギルは大所帯だけあって知り合いの娘も多いですし。こちらはいつもいつも拂る思いをさせていただいておりますので、ほんとお世話になってます。」

「ふふ、じゃあお互い様っていうことで。これからも宜しくね、メルテッドスノウ先生」
「（ちらちら）そ」

「お互いに微笑みながらグラスをカチンと合わせます。わたくし、表情筋の微調整は苦手なのでちゃんと微笑めたかは分かりませんけれど。」

「おつと、女性二人だけで親睦を深めてるんじゃないぞお。俺も混ぜ、つとと、水、水……」

ちよいとふらつき気味の沖野トレーナー。そこそこ飲んでいるのか、だいぶ酔いが回ってるようですね。

水を求めて彼の手がテーブルの上を走り、わたくしの手からグラスを搔つ攫います。つちよ。

「あ」

「……(ぎ)ヴァツハア!!」

ぐいつと飲んだかと思う間もなく、即座に吹き出す沖野トレーナー。

黒沼トレーナーの席でチェイサーは飲み切ってしまったわたくし。今奪われたグラスは開始時から飲んでいたお酒のグラスです。まだ7割くらい残ってました。

気管からアルコールの臭気が回ったのか、そのまま目を回して後ろ向きに倒れました。つてうおい大丈夫か!?

慌てるわたくしを横に、『またか』と言わんばかりにため息をつく東条トレーナー。

「ま、コイツは大丈夫よ。それよりあなた、これ何飲んでたの?」

え、酒の席ですし、そりゃあ酒ですよ。

「『天〇の、誘惑』つて、焼酎。ストレート」

これ、それなりに強いお酒ですからそんな呷るような飲み方しちや駄目ですつて。

「……よく平気ね、あなた」

「まだ、一杯目、だから」

というかこの一杯しか飲むつもりありませんでしたし、しかも結局半分も飲んでませんでしたし。わたくしお酒はそんなに強くありませんので。

撃沈、4人目入りやしたー。

・ ・ ・ ・ ・

さて、宴もたけなわ、お開きです。

起きなかつた桐生院トレーナーは東条トレーナーが、南坂トレーナーは黒沼トレーナーが寮まで連れ帰ることとなりました。

あ、沖野トレーナーは東条トレーナーから水を吸わせたおしぼりを顔にかけられて強制的に起こされてました。この扱いの差よ……てか最悪死ぬぞそれ。

「榎本さん、榎本さん」

「んう……」

「起きて。帰るよ」

そして残るは理子ぴん。お願い起きて。キャリーカートを装備していない今のわたくしでは貴女を運んであげることが出来ませぬ。

彼女の肩を揺らして起こそうとしているのですが、中々起きてくれません。頼むから起きて。

「んう……やーあー、ねんねするのー」

……このタイミングでその不意打ち攻撃は反則だろうがよお！

完全に夢の中なのでしょいか、幼児退行しちゃうってんじやんか。ギャップ萌え狙い過ぎてて胸焼けするわ。大好物ですけどね!!

てかウマ娘ちゃん様じゃないのにわたくしの心臓ハートブレイク止めようとしてくるとかやるじゃない！

急遽SSR認定！ お前がナンバーワンだ!!

「ほらほら、帰って、着替えてから、お布団で、寝ましようね」

とりあえず心臓止めるのは寮に帰るまで我慢するとして。

この気持ち、なんでしょう……これは、まさかあの噂に名高い『でちゆね遊び』の片鱗なのでしょうか……お世話したい。甘やかしたくて仕方がない……。

「んう……はあー、い……め、メルテッドスノウ先生、今、私何か言っていましたか？」

お、覚醒した。色々とセーフ。セーフ？

「やー、寝るのーって」

わたくしのそんなセリフを聞いて、夢の中で言っていたことが実際に声に出てしまっていたことを察したのでしょうか。りこぴんが眉間に寄った皺を手で押さえます。

「……すみません、その件は忘れていただけです」

「ん。わたしの、中で、留めておく」

具体的にはわたくしの心の中のサポカ一覧に。

誰にも言わないけど忘れない、そんなことを言えば理子びんの眉間の皺が益々深くなります。

「出来ればそれも勘弁していただければ」

「どうしよう、かな」

「ええ……」

「ふふふ」

いやあ、実に楽しい飲みの席でした。

Case 22 : 養護教諭の通常業務

天高く、ウマ娘肥ゆる秋。

具体的にはオグリんとかスベちゃんとかパクパクさんとか。

いや彼女は隙あらば肥ゆるか。

秋の味覚は良いものですね、メルテッドスノウです。

きのこやサツマイモに栗、サンマや秋鮭に戻り鰹なども捨て難いですが、わたくし的にはフルーツ類が好きですかね。

特にブドウは実はコーヒーと相性の良い果物で、ポリフェノールを多く含んでいますのでコーヒーにも含まれるそれと相乗効果を起こし、がん予防や抗酸化作用による老化防止などに効果的らしいです。

世間的にはシャインマスカットが流行っていますが、個人的には巨峰が好きですね。ちなみにわたくし、種とか出すのめんどいのでそのまま噛み砕いて食べちゃう派です。てなわけで、今日は巨峰を付け合わせに毎度毎度のコーヒータイムでございます。

うーん、巨峰の甘酸っぱさの後に来る僅かな渋みをコーヒーの苦味がさっぱりと洗い流し、その苦味が次に口に含んだ巨峰の甘みを引き立てます。パターン入った。あーた

まらん。

だいぶ陽も短くなってきて茜色が強くなってきた夕日。遠くから聞こえてくる掛け声、ホイッスル。グラウンドから時折見える、練習に汗を流すウマ娘ちゃん様達のジャージ姿。

平和だなあ。幸せだなあ。

——コンコン

ふいにノックされ、はいと返事する間もなくガラリと開けられるドア。

やってきたのは小柄な体躯に、ややくせっ毛気味のショートヘアから覗くおでここと、キリツとした吊り目がまた可愛らしいウマ娘ちゃん様、ナリタタイシンです。タタちゃんです。

「……ベッド貸して」

短くそう言う彼女は俯いていて、こちらと目を合わせようとしてくれません。声のトーンも低めです。具合が悪いと言うより機嫌がめっちゃ悪そうです。

おや、どうしたタタちゃん？

ま、使いたいと言うなら使うといいゾ。

「ん」

わたくしが首肯するとタタちゃん、そのままツカツカと中に入って来て、ガバツと乱

暴に布団を頭まで被ってベッドに潜ってしまいました。

「……」

うーんと、ふむ。

何かありましたね。何があつたかは分かりませんが。

ちよつと気になるので事情を問いたいところではありますが……タタちゃんが相手の場合ここで無理に話を切り出したりするのは悪手でございます。

彼女の気難しさはまるで思春期を迎えた娘の父親に対するもののようなので、ウザがられて終わりです。そして完全シャットアウトされてこの場では本当に何も出来なくなつてしまいます。

前世にアプリで彼女をお迎えすることは叶わなかつたのですが、サポカは入手したので辛うじて前情報を仕入れることが出来ています。良くやつた前世知識。

アプリトレーナーのようにくじけぬ心を持つていけば、それでも押せ押せでいずれ突破できるかも知れませんが、そのやり方は時間を掛けなければいけないのと、わたくしのメンタルが耐えられるかが問題です。

ならばどうするかですが、それはもちろん、こうします。

「……」

ベッドサイドのテーブルの上に備蓄のお菓子を数個置いてから、彼女の足元側で佇み

ます。こちらからは声を掛けること無く、横目で彼女の状態に変化があれば反応出来るように待機して、彼女自身には触れないようにベッドの上に片手を置き、彼女のことをじつと見つめたりしないようにウマホでもいじっておきます。

話すのがアカンのなら話さなければいいよ。

こちらから彼女に近寄り過ぎると警戒されて逃げられてしまいますが、かといつて離れ過ぎていると無関心なのかと思われ、それはそれで機嫌を損ねて心を閉ざします。

ですので彼女の警戒範囲ギリギリに腰を落ち着けて何もせず、彼女に自分が無害な存在であること、その上で彼女を気にしていることをさり気なくアピールしておきます。

対応方法が完全に拾った野良猫に対するそれなんよ。可愛さハンパねえつて。タタちゃんハンパねえつて！

さて、警戒が解けるまで何してようかしら。あんまり音を立てるのもNGですので、知り合い特権で貰っていたデータ版の同志の^{デジたん}新刊でも読んでみましょうかね。

はーはー尊い。すんばらしい。やはりデジタル先生の漫画は何度読んでも最高やでえ。

以前に廊下で拾った同人誌の続きとなる最終話を前回のイベントで出してきていて何度目かになる読み返しを終えたところですが、相変わらずの緻密かつ大胆な情景描

写に我を忘れて引き込まれてしまいました。いやあ落ちとしてはベタな王道なのですが、そこに至るまでがハラドキワクキyunしまくりました。いつもいつも素敵なお時間をありがとうございますございますデジタル先生。おっとそういうえば時間は……ふむ、あれから30分くらいしか経ってませんね。

「……ねえ」

お、タタちゃんがかつちに興味を示しました。布団からちよろつと顔を出してこちらを見ています。

ここから一気に距離を詰め……たりはしません。ここで焦ってズカズカと踏み入ってしまつては折角解けた警戒がより強まってしまう。ステンバーイです。

「ん、どうした、の?」

「……聞かないの?」

恐る恐ると言つた具合に聞いてくるタタちゃん。

少し冷静になつたのか、特に説明もせずにはベッドを占領しちゃつたことにバツの悪さがあるのでしょうか。こちらを睨みつけるような目線の奥には申し訳なさが見え隠れしています。

気にしなくていいのに。やっぱりただの良い子じゃん。

「話して、くれるなら、聞かせて?」

「……」

ハイまだステンバーイです。こちらは受け身の姿勢を維持しましょう。

手の平を鼻の前まで差し出してファンファン嗅がれても頭を撫でようとしてはいけません。手の平を上に向けたまま人差し指だけをやや伸ばして、顎の下を優しくコシヨコシヨしてあげm……これは完全に猫の話だったわ。

「とりあえず、お菓子、食べて。甘いので、食べて、それから、聞かせて？」

サイドテーブルに置いたお菓子を示して、それが彼女のものであることを伝えます。

何はともあれお腹に何か入れましょう。お腹が減っているとそれだけでムカムカイライラしちゃいますし。

「……うん」

もそもそと布団から起き出すタタちゃん。

テーブルに並べたお菓子の中から表面にザラメのかかったハート型のパイを選んでさくさくと食べ始めてくれました。お、お耳がちよつと横にへにやりましたよ。気に入っていただけたようで何より。

そんな様子をわたくし、じーつと見過ぎてしまっていたでしょうか。タタちゃんがわたくしの目線に気付いて俯いてしまいました。ああつ、ごめんよ。邪魔するつもりは無かったんだよ。

「……チケットと、喧嘩したんだ」

ぼつりとタタちゃんがそう零しました。

それから、ゆっくり、ゆっくりと。彼女は話し始めてくれます。

「あいつ、脚の調子がちよつとおかしいって言ってる。なのに今月末の天皇賞に出るとか言ってる」

「普段ならさ、『怪我に気を付けて』って言うんだけど……あたし、なんかものすごく嫌な予感がしてさ……チケットに『走るな』って言っちゃったんだ」

「そしたらあいつ、絶対走るとか言ってる駄々こねて、言い合いになって」

「ハヤヒデが落ち着くように言ってくれたんだけど、あたしが悪いのか、って思ってたえって熱くなっちゃって」

「それで、こっぴごなつた」

そう言ってるタタちゃんは再び俯いたまま黙りこくってしまいました。

チケット……まあ間違いなくBNWの一角、ウイニングチケットの事でしょう。なるほど、意見の相違からの仲違いってとこですか。

うふふふ、青春してますねえ、愛いのう、愛いのう。

「……あたしだってチケットに走っていて欲しい、ハヤヒデと3人でいつまでも走っていたい。だから今回は無理するなって言っただつたのに……なんか、上手く言え

なくて」

ギョツと拳を握るタタちゃん。

肩も小刻みに震えています。

「走って欲しくなくて、でも走って欲しくて、頭ん中ぐちゃぐちゃになって、あたしがどうしたいのか、どうしたらいいのか分かんなくなつて……なあ先生、あたし、どうしたら良かったのかなあ」

不安そうにこちらを見るタタちゃん。ちよつと目が潤んでるじやありませんか。

基本的につっけんどんな彼女ですが、別に一人でいるのが好きで周りを遠ざける娘ではありません。

むしろその逆で極度の怖がり屋さん&寂しがり屋さんで、他人から嫌われたり失望されたりすることを心底恐れています。

失望されるくらいなら深く関わりたくない。そんな思考をお持ちなのです。

そんな彼女が心を許せる数少ない友人がチケゾーとハヤビーです。残念ながら公式怪文書発行元となるトレーナーさんは居ないようなので、あとは同室のクリークママつてどこでしょうか。

見ず知らずの他人の目ですら怖がるような繊細ウマ娘ちゃんが、親しい人から嫌われてしまうかもと考えた時のストレスが如何ほどかは想像に難くありません。

少なくとも、ちよつと警戒を弱めてくれたわたくし相手にこんな相談してくる程度には余裕が無くなっています。

全くもう、ある意味チヨロくて心配になっちゃいますよタタちゃん。頼ってくれるのは嬉しいですけども。

嬉しいのでいつものようにお仕事モード全開で後押しさせて頂きましょうか。

「うん、悩ましい、ね」

こういつた事柄に絶対的な正解なんて存在しません。恋愛シミュレーションじゃあるまいし、プラスマイナスで好感度が測れるわけでも無いんですから。

「けどまずは、ごめんなさい、だね」

今のままでと流石に言葉足らずで誤解されちゃってるでしょうし。『走るな』だけじゃあ、ねえ……。

「タイシンさんは、チケットさんが、大事。だから、心配で、走るなって、言った。けど、ちゃんと、そういつた、理由は、話した？」

そう聞けば、言葉に詰まってしまいうタタちゃん。

言っていないよね。まあそんな予感はしていました。

「言わなくても、伝わる、ものもあれば、言わないと、伝わらない、ものもある。ちゃんと、チケットさんを、思っ、言っ、言葉だつて、まずは、説明、しよう」

仲が良いからこそ、ちゃんと言ってあげなきゃいけない時もあるんですよ。何もかも以心伝心だなんて中々有り得ないんですから。

なので上手く伝えられなくても、言葉足らずでも構わないんです。まずは自分の気持ちを相手にしっかり伝えましょう。伝えようとすると姿勢こそが大事なので。

「そして、一緒に、考えて。どうするのが、一番、いいのか。ハヤヒデさんも、一緒に、3人で」

ゆつくりとタタちゃんに近寄り、固く握りしめた彼女の手の上にそっと乗せる程度の力でわたくしの手を重ねます。ちっちゃくて可愛いお手々の感触にスノウちゃんズが祭りの準備を始めますが延期してもらいます。

「正解なんて、無いかも、知れないけど、ちゃんと、3人で、考えて、3人で、納得できる、答えを、見つけ出して」

繰り返しますが、生きてて『これで間違い無い』なんて思えることなんてそうそうありません。悩んで、試して、上手く行かなくて、落ち込んで、考えて、相談したりして、また試して。そうやってじわじわ歩いていくしか無いんですよ厄介なことに。

勿論、悔しい思いもするでしょう。後悔もするでしょう。けどそうして地道に進んで進んで進み続けて、最終的にふと振り返った時に『ああ、これが自分の歩んできた道だったんだ』と誇れるようになるんです。

「あなたたちは、お互いに、競い合って、きた。同時に、お互いに、支えあって、きた。だからきつと、今回も、乗り越えられる、と、思うよ」

喧嘩するほど仲が良いとも言いますが、更に言い換えれば『喧嘩した程度でお互いの関係が壊れることは無いと相手を信じている』ってことですからね、いと尊き。

「出来るかな、あたしなんか」

「大丈夫。1人じゃ、無理でも、3人なら」

1本の矢は簡単に折れてもくって逸話の通り、1人じゃ限界でも3人で分かち合えば何とかなつちやいますから。悲しいことや辛いことは3等分、楽しいことや嬉しいことは3倍ですから。

「……ん。わかった。上手く出来るか分かんないけど、やってみる。……ありがとう」

わたくしとは反対側の窓の方を向きながら小さな声でそう言うタタちゃん。可愛い
が過ぎる。

そつぽを向いちやつたタタちゃんのお顔が少し赤かったのは西日のせいですかね。

・
・
・
・

「……あいいいいん」

その後ベッドから出て来たタタちゃんと一緒にココアを啜っていたところ、誰かの声

……そんなに嫌そうにはしてませんね。仕方無さそうに微笑みながら優しく抱き返してます。

「何でチケツトが謝ってんの……あたしこそ、ごめん。ちゃんと心配だつて言えば良かったのに、あんな言い方しちやつて」

うむ、どうやらわたくしが何かするまでもなく仲直り出来たようですね。

二人の元にハヤヒデが近づき、抱き合う二人を更に上からまとめて抱きしめます。

「タイシン、お前がチケツトの身を案じて言ったということは分かってた。だが私も出走する手前、お前のようにチケツトを強く止めてやることは出来なかった。ありがとうタイシン。そしてすまなかった。どちらの味方をすることも出来なかった中途半端な私を許してくれ」

「ハヤヒデも何水臭いこと言っちゃってんのさ。あたしはさ……あたしはただ、怖かったんだ。万が一、チケツトが怪我しちやつて、ハヤヒデもあたしもダメになっちゃつて、もう二度と3人で走ることが出来なくなっちゃうんじゃないかって……。もちろん、そうならない可能性の方が高いのは分かっているのに、どんなに否定しても心の奥で否定しきれなくて、ずっとそんな不安が消えなくて、怖くて……嫌だったんだ……」

ふああああ、タタちゃんの独白入りました、頂きましたー！ お三方の湿度の高いやりとり、非常に至近距離で拝見させていただいておりまああす！ やっぱりほっと出の

うつつつくしいっ!! お互いの事を考えてすれ違って、そしてまた繋がりが合う、混じりつけ無し純度100%の友情です。嗚呼、BNWが行く……。

涙が出そうなくらい美しい。おっとわたくしの目からも漏水が。いかんいかん、ハンカチハンカチ。

「雨降って、地固まる、ってとこかな?」

そんな美しい光景はちゃんとハッピーエンドを迎えてもらいませんとね。というわけです。で仕上げと参りましょう。

タタちゃんとかケゾーの肩をぽんぽんつと。

……うわあー、タタちゃんの予感的中じゃん。爆発寸前じゃんケゾーの脚。そしてタタちゃん、君もちよつと脚の調子良くないでしょ。じゃそういうわけで、いただきます。

「ま、天皇賞、まで、もう少し、時間はあるし、走るか、どうかは、すぐに結論、出さなくても、良いんじゃないかな? 直前まで、保留しても、アリだとは、思うよ」

ゲートに入るまでは出走取消を申し出ることも出来ずし、もうちよつと様子見してから決めても全然遅くないと思いますよわたくし。

抱き合ってた態勢からやや離れて、お互いに顔を見合わせるお三方。

「……うん。チケット、ハヤビデ、どう思う?」

「私はそれで問題無いと思うぞ。当の本人はお前だ、チケット。どうだ？」

「うん……天皇賞は絶対出る。絶対出るけど、もし脚の調子が悪いままなら、走るの諦める。あたしは、タイシンに悲しんでもらいたくて走るんじゃないから」

「バツ、バ鹿。けど……うん。絶対に3人でまた走ろう。お互いに全力で、無事に走り切ろう。次もまた3人で走る為に」

そう言つて拳を前に突き出すタタちゃん。

「もちろんだ。勝つのは私だがな」

同じく拳を伸ばすハヤヒー。こつんとタタちゃんの拳と合わさります。

「何をおー！ あたしだって負けないんだからああ!!」

がつんと拳を合わせるチケゾー。

「それこそ何言つてんの、勝つのはあたしだろ」

3人が3人共、不敵に笑い合います。はああああ、ライバル同士のぶつかり合いって格好良くて熱くて素晴らつすいーい!!

ちよつと、さつきSSR頂いたばかりなのに今の構図もめつちや素敵じゃないですか。まさかの別ver.ですか？ 10連SSR2枚抜きですか？ ほんつとありがとうございます！ 助かります！

これはもう今夜はBNWよさこい祭りです決定ですね。

Case 23 : 養護教諭の感謝祭（秋） —前編—

ウマ娘が

聖蹄祭で

やたら食う!!

説明!

……いや、オグリんがボテ腹晒して屋台荒らしをしていただけなんですけどね。

マジでどうなってんの彼女の腹。明らかにお腹の膨れ方に対して摂取量がおかしいんですけど。

さーというわけで始まりましたトレセン学園秋のファン感謝祭、正式名『聖蹄祭』。

学園のウマ娘ちゃん様達が日頃お世話になっているファン達のために一時開放された学園で、レース以外の催し物メインで交流を図ろうと毎年行われるイベント、ぶっちゃけ文化祭です。

春の感謝祭では職員企画ブースで足つぽマッサージを行わせて頂きましたわたくしメルテッドスノウですが、今回は従来通り救護テントで待機している次第であります。

とは言っても、転んで膝を擦り剥いた子供くらいしか来ないので普段の業務並に暇で

す。

で、とある企画というのがですね、このテントにもチラシが貼られておりますハイコレ！

『喫茶対抗戦 ― カフェ・ロワイヤル ―』!!

アニメやアプリでも描写のありました執事喫茶。あれが毎年催されているのですが、人氣が毎年尋常じゃないようで余裕でキャパオーバーするらしいんですよ。

で、それを少しでも分散させる為に他のコンセプト喫茶も企画募集したらしいのですが、まあみんな色んなアイデアが出るわ出るわで執事喫茶を含めて8企画くらい集まったように。

けど1つの学園祭に8つの喫茶は流石にバランスが悪過ぎるぞさあどうしようとなり熟考した結果、企画の数を減らしてバランス調整するんじゃないかとむしろそういうイベントにしてみました！ となったように。

公平を期す為に学園公式のウマスタとウマツターのアカウントで写真と動画、眩きを各店毎に同数投稿し、そこに集まった『ウマイね』の数で勝敗を決するというなかなか面白そうな催しになったという次第です。

で、その中に『トレーナー喫茶』というお客さんを担当ウマ娘に見立ててお世話するというコンセプト喫茶がありまして、現トレーナーの方々が結構そっちの方に参加され

ているんですよね。

なので今回は職員企画ブースは無く、わたくしはこうやって屋台が立ち並んで賑やかな様子を眺めながら、休憩時間が訪れるのを今か今かと待っている訳でございます。

だって、どの喫茶も楽しそうなんですもの。

けど流石に全部回る時間的余裕は無いしなあ……。

せいぜい2〜3店ほど見て回るのが精一杯でしょう。

何故わたくしは忍法影分身の術が使えないのか。今回は特に悔やまれます。

とはいえ無理なものは無理ですので、ここは涙を飲んで出向くお店を選出いたしましよう。

というわけで白衣のポツケから取り出だしたるは8面ダイス。たまにブルライコンビとボードゲームしたりもするので多面ダイスは手持ちがちよいとあります。

ではでは、さっくり決めてさっくり向かいましょう。何が出るかな、何が出るかなと。

お、この目が出た時は……。

・
・
・
・
・

「まいど！ お、センセやないかお疲れさん。どや、ウチの店で茶しばいて行かへんか？

サービスしたるでー」

制服姿にエプロンを付けたタマモつちがわたくしに呼び込みを掛けてきました。あらシンプルですけどハートに来る組み合わせ。家庭的なタマモつちにとても良くお似合いです。

入口の看板には毛筆で雄々しく『方言喫茶』と書かれています。

はい、こちらが今回最初のターゲットでございます。

「ん。そのために、来た」

「ほんまか！ わざわざ来てくれるなんてメツチャ嬉しいなあ。イナリい！ ユキノお！ 特別ゲストが来てくれはったで！」

部屋の中に向かってそうタマモつちが叫ぶと、中から出て来たのは二人のウマ娘。

「なんでい藪から棒に……ってスノウ先生じゃねえかい！」

「じゃじゃっ!? ほんとうにスノウ先生じゃないですか ほにほにスノウ先生でねが！ ようこそいらっしゃいました よくおでんしたなっす」

大きなツインテールを揺らしたやや乱暴とも取れなくもない江戸っ子口調のウマ娘イナリワン、ワンチャンと、わたくしなんかよりよっぽど妖精の名が相応しそうなユキノちゃんが顔を覗かせました。

こちらの二人もエプロン姿がぶりちーでございますね。

ここはどうやら文字通り、方言が強めの娘で構成されている喫茶のようですね。特にユキノちゃんは普段は標準語に寄せて話しているでしょうに、今日はコンセプト重視の

為か方言強めです。なのでルビ振るときましよう。

というかですよ、歓迎ムードなのはとてもとても有り難いのですが……ちよつと歓迎度合いが強くないですか？

「そんな、テンション、上げる、ほどの事？」

なんぼなんでもはしやぎ過ぎだと思うんだ先生。

「センセ、自分が雪妖精って言われとるの知つとるか？ センセのいる所には幸運がやつて来るーとかつてジンクスもあるらしいで。つまりや、センセがここにいるつて事はウチらの喫茶店が優勝したも同然や！」

「いやいや、いやいやいや」

なるほどそういう理由ね。何してくれてるんだ噂。

お前の出処は完全に締めたはずだろう。何を未だに独り歩きし続けてるんだよ。もう止まらないやつじゃんかこれ。

……もういいや、周りが飽きるまで辛抱しよう。人の噂も七十五日って言いますし。

「それではんだば、こちらの席におかけくださいこつちやの席さ来てけれ先生。おすすめのラ・フランスジュース、是非飲んでつてくなんしえね」

ユキノちゃんがテーブルから椅子をどかして車椅子が収まるスペースを作ってくれます。そしてラ・フランスのジュースとか中々レアな用意してきましたね。

「あつたけえ甘酒もあるぜ。ゆつくりしていきな先生よ」

「いやいや、ここはミックスジュースやろ。甘くて美味いでセンセ」

間髪入れずワンチャンとタマモつちも飲み物を勧めてきます。ふむ、そろそろホツトな飲み物も美味しい時期ですしそれも素敵ですね。そしてミックスジュース……そちらも甘美な響き。悩ましいな。

「……」

……ん？ 何ですかこの間は？

「抹茶あんサンドクッキーかあねが？ 先生」

「東京ば○奈の限定チョコバナナ味、あるぜっ」

「センセは堂○ロール、食うたことあるか？ クリームたっぷり美味しいでー」

今度は3人ほぼ同時に食べ物勧めてきました。またどれもこれも魅惑のお菓子じゃないですか。スノウちゃん迷っちゃう。

「……」

ですから何なんですか？ この間は。

何でちよつとピリついた空気が流れるんです？

「先生はわだすあたしと張り合えるほどの岩手通だですべ。だであればれば岩手の食食べいもんが先生にはいいと思いいますよがべじゃ」

「いやいや、今あたしらがいるココは東京だぜ？　なら先生にや東京の美味しいモンをもっと知ってもらおう、ってえのが筋つてもんじやあねえか？」

「センセはウチのたこ焼きのファンや。つまり大阪の味が身体によい馴染むっちゅーわけや。やったらここはウチが……」

「……」

えつとね、先生的にはどの地方にもその土地ならではの魅力があつてそれぞれがオンリーワンだから優先度を付けるようなものじやないと思うの。

だからそんなバチバチするようなものじや無いと思うの。

「先生をお世話するのは(わだすだ)(あたしだ)(ウチや)!!」

何でバトル勃発しちやつてるのよ!?

やめて！　わたくしの為になら争わないで！（棒読み）

やいのやいのと騒ぎ立てるお三方。

ああああすみません煩くしてしまつてすみません。

ほら、あまり騒ぐと他のお客様のご迷惑に……。

「関西弁の子つて良いよなあ。タマモクロス、可愛いなあ」

「いやいや、江戸っ子べらんめえ口調のイナリワンも捨て難い。粋だねえ」

「ユキノビジンさん、何言つてるか良く分からないけどチョー可愛いーっ！」

あらま大好評。いやそうではなく。

誰かこの場を取めて下さい。わたくしには無理っぽいのでスローイングスプーンさせていただきたい所存。

が、結局お客の皆さんは微笑ましそうに眺めるだけで全く收拾がつかなかったので、ラ・フランスジュースと東京○な奈、○島ロールの3つを頼んで手打ちとさせていただきました。

ちよいとわたくしのウマボデイに大食いスキルは付属していないようなので全て頼むのはちよつと無理い。

さ、方言喫茶のSNS投稿にウマイねを付けて次行きましよう次。

てなわけでダイスロール。

……あらつ、ド本命が出ちゃった。

・ ・ ・ ・ ・

「おや、これはこれはティーターニアのお出ました。ようこそ、我らが女王よ」
「格を、上げないで」

女王にすんなし。妖精で呼ばれることですらおこがましいつてのに。

出会い頭にわたくしを女王呼ばわりしたのはティエムオペラオー、ラオーちゃん。ええ、やって来たのはこのイベントの発端ともなりました執事喫茶です。

うわあい原作体験だあー。

「はっはっは、そう照れることはないさスノウ姫。本来ならボク自ら第4幕のオベイロ
ンが如くエスコートを申し出たいところなんだけれども生憎と手が塞がってしまった
いてね。ルドルフ会長もすっかり囲まれてしまっているようだ……フジ寮長、あなたは
どうだい？」

「ああ、ちょうど手が空いたところさ。私に任せてくれて構わないよオペラオー」

さらりと女王から姫に変わっちゃってるし。格を下げるとは言いましたけどそれ
もまだ高いんですよ。てか妖精から離れようぜ。

それはさておき、確かにとんでもない大盛況でラオーちゃんも給仕に接客にと大忙し
の模様です。更にはお店の外には入店待ちの行列がずらりと出来あがっている状況。

本来であればわたくしもこの列の最後尾に並ぶべきなのでしょうが、そうしていると
列に並んでいるだけで休憩が終わってしまいますので、関係者特権のプライオリティチ
ケットをいただいております。並んでる人達ごめんね、その分早めに切り上げますので
ご容赦くださいませ。

で、どうやら正にひと段落ついた様子なのがこちらの艶やかな青鹿毛を持ち栗東寮長
も務めるイケウマ娘、フジキセキ。フッキーです。

「すまないね姫。あとのことは彼女にお任せしよう。ゆつくり楽しんでいってくださいま

え」

そう言ってラオーちゃんはカメラを構えている集団の元へ行ってしまった。大人気ですね、無理もないですけど。

「ふふっ、ではお手をどうぞ。スノウ姫」

そう言ってわたくしの手を取るフツキー。笑顔が素敵。しかもこんな自然に紳士的対応されちゃったりしたら惚れてまうやろ。うわあ、フツキーのお手々柔らかいなりい。

っていうか姫扱い、継承されるんですか？

「ちよっと、あの姫って呼ばれてる子なんなの？」

「あのオペラオー様から一目置かれてるなんて……」

「フジキセキさんと手を、手をつ！」

「うらやましい……うらやましいっ。けど、あの子もなんか可愛くない？」

入店待ちの子たちから聞こえてくる怨嗟の声。

まあ関係者特権だとはいつても割り込まれたらそりやあ良い顔しないでしよう。

申し訳ないね、サツと入ってサツと出てくから勘弁しておくんなまし。

「あはは、注目の的だね姫。みんながこつちを見てるよ」

「いやこれは、妬みの、類だと、思うけど」

明らかに負のオーラが立ち上ってますって。

ほんのり違うオーラを出してる子もいるっぽいけども。

「だとしても、そこまで酷いことを考える子はいないさ。とはいえ、このままでは少々騒がし過ぎるかもね……ちよつと失礼」

そう言つてわたくしから手を離し、入口前の彼女達へと向かつていくフツキー。

いや、注意とかしなくて良いんですよ？ 誰だつてちゃんと順番を守つて並んでいたところを割り込まれたりすれば面白くないと思うのは当然なんですし。

んー、ダイスの導きとはいえやっぱ止めとけば良かったかな？

「失礼、お嬢様達。彼女はちよつと特別なお客様でね。君たちと同じようにちゃんともてなしてあげたいんだ。申し訳無いんだけど、もう少しだけ待つて貰えるかな？」

「はひっ!? ふ、ふふふふフジキセキさまっ！ 待ちます待ちます待ちますとも渋谷ハチ公像のように微動だにせず静かにお待ちしておりますっ！」

なんか同志デジたんっぽい反応してる子がおるなあ。

「ありがとうお嬢様。じゃあこれは待たせてしまうお詫びだ」

そう言いながらフツキー、片手をくるんと翻すとその手の中にはいつの間にか小さなバラが一輪。そしてそれを最前列のお嬢様に手渡します。両手で、彼女の手を包むようにしながら。

「?!
!!!
!!!」

おお、宣言通り声を上げずしかも動かない。ファンの鑑よ。

「みんなにもプレゼントするよ。どうかもうしばらく待つてね、お嬢様達」

そう言つてフツキー、同じように再度片手をくるんとしてはバラを出し、行列を成しているお嬢様方一人ひとりに手渡していきます。

手渡される端から微動だにしなくなつていくお嬢様たち。うわあ、すげえ。

「待たせたね姫。さ、席まで案内するよ」

「流石だね」

そしてさりと再びわたくしの手を取りエスコートの続きをしてくれます。

この通常運転イケウマ娘め。何故そんなムーヴを当たり前のように行えるんだ。

「こちらのお席へどうぞ姫。お飲み物はいかがなさいますか?」

「ん……ダージリン、ストレートで」

普段はコーヒー派ですけど折角なので雰囲気に合わせて紅茶にしておきましょう。

とはいえわたくしバ鹿舌なので産地による味の違いとか分からないんですけども、とりあえずメジャーなダージリンとか言つときやええやる。

「畏まりました。今から最高の一杯をご用意してくるよ。どうかしばしお待ち下さい、姫」

そのまま引いていたわたくしの手を持ったまま、その場に跪くフツキー。そしてわたくしの手を顔を近づけ……。

——チュツ

わたくしの手の手甲に軽く唇を落とす、更にウインクして小さく手を振り去っていくフツキー。周囲の他の席から立ち上る黄色い悲鳴。

……えー……まっであたまがはたらかない。

順を追って状況整理しないと。

まず、フツキーにお手々繋がれたでしょ？

フツキーがみんなにお花あげたでしょ？

席に着いたでしょ？

紅茶頼んだでしょ？

フツキーが跪いたでしょ？

わたくしの手を顔を近づけるでしょ？

んでもって、お手々に、チュツって……。

……もう、いきなりこういう事されると心の準備が出来ていないのでわたくしも正気保つのきつつついですけどー。

素数を数えて落ち着かなきゃ。にー、よーん、ろーく……。

・ ・ ・ ・ ・
……ハッ。

あ、ありのまま今、起こった事を話すぜ！

わたくしは紅茶を頼んだと思っただらいつの間にかカップが空になっていた……な、何を言ってるのか分から（略）

正気どころか意識を保ててなかつたです。

うん、これは破壊力高すぎてヤバいわ。人気が高いのも領けますわ。

時間は……それなりに経ってるし。もう少しちゃんどみんなの格好良く働いている姿を見ていたくはありましたが、あまり長居し過ぎてしまつては無言で待機しているお嬢様ーズにも申し訳無いのでそろそろお暇させていただきましょう。

「お会計、よろしく」

軽く片手を上げて近くを通りかかったウェイターのウマ娘ちゃん様にそう声を掛けたその時、ざあつと店内に吹き抜ける一陣の風。

「私が対応しよう。私達のもてなしは堪能してもらえましたか？　メルテッドスノウ先生」

気が付けば目の前にいたのは我らが生徒会長、ルドりんです。

今の風はルドりんが走って起こしたのか……マジで見えなかつたんですけど、よく

こんな入り組んだ狭いスペースでここまで駆け抜けられるなあ。ウェイターの娘もすごくびつくりしちやつてるじゃないですか。

とうか会計ごときでそんな駿足披露してどうするんですか……幸いにも周りのお嬢様方からのウケは良いみたいですけど。

「ん。良い時間を、過ごこさせて、もらった。ありがとう」

「それは何より」

ちよつと滞在時間の大半の記憶がありませんけど。

そんな会話をしながら精算を済ませます。

え、数百円しか払ってないよ？ 桁2つくらい間違えてませんか？

これだけの体験をさせて頂いて万札を出せないのは却って辛いんですけど。

「メルテッドスノウ先生はこの後は？」

「ん、もう少し、他のお店、見るつもり」

「そうですか。では最後に……オペラオー、フジ。ちよつと良いかな」

「何だい？……ああ、もちろんさ！」

「私も今行くよ」

ルドりんがラオーちゃん、フッキーを呼び、駆け付けて来るお二人。

わたくしが退店しようとしているのを見て何かを察したようです。

そして3人一列横並びになったかと思えば。

「二では、お気をつけて行ってらっしゃいませ、姫二」

最後に微笑みながら礼をしてお見送りをしてくれるお三方。

ぐっほあああ!! キラツキラしてる! 背景キラツキラしてる!

物理的に何か飛んでるんじゃないかってくらいキラツキラしてる!!

これはSRなのかい、SSRなのかい、どっちなんだい!?

えすえすあーーる! やー! ばわあーー!!!

「最後まで、姫なのね」

ふう、なんとか致命傷で済んだぜ。

端からそれを見ていたお嬢様方もだいたいが致命傷だぜ。

さて、思ったよりまだ時間に余裕がありますね。もう2店くらいは回れそう。

んじやま再び運命のダイスロール。ころんつとな。

ほほう、こいつはまた……。

——後編へ続く

Case 24 : 養護教諭の感謝祭 (秋) —後編—

——ジュウ~~~~パチパチッ

「ハウデイ！ スノウテイーチャー。私達の喫茶にウエルカムデース！」

「ん、おいつす先生。肉、食つてくか？ A4ランク牛、美味えぞ」

「…… (もぐもぐ)」

執事喫茶を出てわたくしが運命のダイスに導かれるまま次にやって来たのは、屋上でバーベキューをしているタイキシヤトル、ゴールドシップ、ナリタブライアンの3名です。

ゴルシちゃんやんが串に肉を刺し、タイキさんがひたすらにそれを焼き、出来上がった先からブライヤんがそれを胃の中に納めていくという食の一方通行が発生しております。

喫茶店という定義を根本から見直す必要のあるここはその名もそのまま『BBQ喫茶』。何よそれ。

お客さんは……誰もいないですね。流石にこの理解不能な状況に順応できるような逸般人はいなかったみたいで。

「牛以外のが良いか？ ワニかダチョウ、アライグマならあつぞ」

「YEAH！ バーベキューは肉こそが正義デス！ 肉！ 肉！ ダイエットコーク飲んで肉デース!!」

「……（もぐもぐもぐ）」

バーベキューという行為自体を楽しんでいるタイキさん、只々肉が食えるから参加したのであろうブライヤン、理不尽の中に不条理をぶつこんでカオスにすることに全力を費やすゴルシちゃん。この3人が奇跡的に噛み合っこの恐ろしい現場を作り出してあります。

もうツツコミが追い付く気が全くいたしません。

一応学園関係者には事前に出店リストや注意点などについて会議で情報共有がありましたのでこのお店の存在自体はもちろん知っていたのですが、実際に目の当たりにするとかなり衝撃が大きいですね。

そして衝撃ついでにもう一つの問題点が。

「……聞いてた、話だと、ホットプレート、使っって、事だっただけど？」

そう。BBQ喫茶を運営するにあたって、頭を抱えた運営委員のグルーヴちゃんが苦渋の決断で出した絶対条件である『火気厳禁&雨天中止』が申し渡されているはずなんです。ですので電気ホットプレートの使用しか許可されてなかったはずなのですが

……。

「んなモンでこーんな分厚い肉が焼けつかよ。つば炭火よ、炭火」

「YES! これこそが本場のスタイルデース! 豪快に、盛大に! ただひたすらにビッグな肉を焼き続けるのがアメリカンなBBQナノデース!」

「……(もぐもぐもぐもぐ)」

会場中央にはめっちゃデカいバーベキューコンロが鎮座ましましており、そこから熱による陽炎と焼ける食材の香りと煙が立ち上っております。

そのコンロの前に、厚さ5cmは余裕でありそうなステーキ肉を掲げながらニヒルに笑うゴルシちゃん。まあ確かにこのサイズのお肉をホットプレートで焼けてるのは酷な話ですね。

そしてタイキさんの言い分も理解は出来ます。BBQってアメリカではホームパーティー兼お祭りな側面があるので、BBQの規模の大ききで近所付き合いのヒエラルキーが決まるとかそんな話を聞きかじったことがあるような気がします。知らんけど。という訳で言いたいことは分かります。だけどね。

「どアウト」

屋上で炭を使うな阿呆。

いくら屋外だからって言っても火を使って良いわけじゃないんだぞ。とてもじゃないが学園祭の類で許される範疇を超え過ぎだ。

というわけで緊急コール発動。ぴっぽっぱ。

『はい、運営委員会です』

「ゴルシが、屋上で、炭火を」

『すうううぐ行くつすううう!!』

よし、報告完了。個人的にはこの状況を楽しみたい気持ちはありますが、職員としては見過ごせねえんですよ。火の用心つてのは過剰なくらいが丁度良いので。

「あー！ 先生なにチクってんだよー」

「デスデスー！ 横暴デースー！」

「……（もぐもぐもぐもぐもぐもぐ）」

ぶーたれるゴルシちゃん&タイキさん。

ゴルシちゃんには普段お世話になっていますが、かと言ってそれが見過ごす理由にはなりません。駄目なものは駄目なんよ。

そしてブライヤン、少しは会話しような？

「いいえ、メルテッドスノウ先生は教員として正しい行いをしていますよ、ゴールドシツプさん、タイキシャトルさん？」

「Oh」

たづな^{ラスボス}さん登場。行動早いなー。何で一緒に来てる運営委員のバンブーちゃんの息が

上がってるのにこの人は一切呼吸が乱れてないんだらう。ふしぎ。

B B Q 喫茶、ルール違反により競走中止。順当。

.....

「あ、スノウ先生。ようこそいらつしやいました」

「カフェさん、来たよ」

「はい。ありがとうございます。お席は余裕がありますので、どうぞこちらへ」

てなわけでB B Q 喫茶は営業停止処分となりましたのでネクスト。有り難いことにド本命その2、マンハッタンカフェさんが運営するメイド喫茶です。

「メイド、いいね。似合ってる。カフェさんの、お店の、雰囲気にもよく合ってる」

「ふふ、ありがとうございます先生。今メニューをお持ちしますね」

「ん」

実は何を隠そうこのわたくし、前世は生粋のメイドスキ。更に出来るだけメイド本来の『働く女性』モチーフの色が強ければ強いほど萌えるダメ人間でした。

ですのでロングスカートで長袖、ひらひら成分少な目のヴィクトリアンスタイルなメイド服に身を包むマンハッタンカフェちゃんにはもはや畏敬の念しか生まれません。よくぞ実現してくれた！ カフェちゃんありがとう！ 本当にあります！！

贅沢を言えば頭に付けてるのがフリルカチューシャじゃなくて髪をまとめ上げて

キャップとか被っていたらなおポイントは高かったんですが、これはこれで。こおれはこれでえ!!

「ほらよ、メニユーだ。さっさと決めろ」

そんな脳内でまた新たな祭が生まれようとし始めていたその時。席に着いたわたくしにメニユー表を渡してくれたのは鹿毛の中に逆さ涙型の星があるイケウマ娘のシリウスシンボリさん。

おや彼女がここにいるのはちよつと意外。性格的には執事喫茶とかの方が似合いそうな感じですよ。

ですけどね、普段は粗野でまわりの娘達からも不良的存在に見られがちな彼女が奉仕精神の塊とも言えるメイド服に身を包む……ナイスギャップデース!

!!
ロングスカートに長袖、フリルカチューシャを纏ったシリうち。たまんねえなあオイ

おつとつと完全におっさん思考ですないけないいけない。

「……シリウス、シンボリさん?」

「なんだよ」

「なぜ、メイドに?」

そんなナイスギャップはともありがたいんですが、いやほんと何故こちらに?

貴方ならさつきも思いましたが執事喫茶の方に参加したりすればエース級の活躍が出来そうですのに。

「ハッ、アイツの土俵の上で仲良しこよしなんざまつびらだ。こようやって違う店で勝つてみせた方があの皇帝サマに一泡吹かせられるつてもんだらう?」

うーわーあー萌え殺す気かこの駄メイドめ!! ルドリんに対抗意識を燃やして執事喫茶と似たような、けど同じではないメイド喫茶を選んで正々堂々と勝負を持ちかけるとか理由が尊すぎるんだよ完全に解釈一致だよ!!

「そか。じゃあ、カフェセレクト、セットで」

とりあえずは売上に貢献しておきましょう。

言うまでもないかも知れませんが、カフェちゃんの淹れてくれるコーヒーはとてもとても美味しいのです。

その日の気候や相手の好みに合わせた最高の一杯を用意してくれますし、それにベストマッチしたお菓子も選んでくれますので、こちらから色々注文つけるより完全に彼女にお任せしちゃった方がコスパが良いのです。

「そんなのあったか? ……向こうでカフェが親指立ててるから大丈夫か。了解、じゃなかった」

そう言うとか何を思い立ったのか背筋をピンと伸ばし、手をおへその辺りで前に交差さ

せませす。指先まで真つ直ぐな綺麗な待機姿勢です。そして。

「畏まりましたお嬢様。少々お待ち下さい」

スツ……という擬音が聞こえてきそうなくらいにスマートな一礼。

ギャップの振り幅が閾値を超えました。たすけて。みんながわたくしを萌え殺そうとしてくるの。

わたくしがすっかり彼女の優雅な所作に見惚れていると、その様子に満足したのかいつもの雰囲気に戻りました。

「癪だが、皇帝サマの実家とこで本物は見たことあるからな。こうすりゃあいんだろう?」
いたずらが成功したと言わんばかりにニヤリと笑うシリッチ。

「お見事」

いや……本当にお見事。一瞬ですが本職の方と見紛う程でした。いくらお手本を見たことがあるとはいえ器用な娘じゃあ。駄メイド発言は撤回です。

わたくしの返答に満足したのか、メニユー表をひらひらと翻してバックヤードに引っ込んでいきました。

全く、誰も彼も心臓に悪い言動をしてくるわあ。

・
・
・
・

「お、お待たせいたしました、マカロンとコーヒーのセットでございます」

しばらく店内の様子を眺めていると先程の注文の品がやってきたようです。

運んできてくれたのはまるで絹糸のように柔らかくしなやかな鹿毛のロングヘア、メジロ家を示すエメラルドグリーンを金ぶちで飾ったリボンを左耳につけた、女王の名を継がんとするウマ娘。メジロドーベル、ベルりんでございました。

「ありがとう、ドーベルさん」

そして当然ですが彼女もメイド姿です。

彼女の勝負服に比べれば決して露出度は高くありませんが、着慣れない格好でかつあまり得意とは言えない接客をすることもあるのでしよう、顔が赤いです。

それでも必死にやり切ろうとするその気概、感服です。とてもとても素晴らしいです。

「似合ってるね、メイド。かわいい」

「ちよつ、結構恥ずかしいんだからあまり言わないで」

ますます顔を赤くし、尻尾も激しく左右に振られています。

だーって似合い過ぎですって！

まるで没落した実家の財政を立て直すために有力貴族のメイドとして奉公に出たものの、慣れない仕事や意地悪な先輩メイドにしごかれ、辛い毎日ながらも持ち前の負けん気で乗り切る下級貴族令嬢ヒロインの如くです。

そのこの貴族のご令嬢は新衣装の方のベルりんで、よく似てゐることだ。たまに入れ替わったりして仲良くなつちやつたりして。完全に名作劇場の予感。

「かわいい」

「っ！」

軽く俯いて羞恥に耐えるベルりん。

ですからそういうところが可愛いんですってば。

「かわいい。ちよーかわいい」

「~~~~!! も、もう行くから! ~ごゆっくり!」

流石に堪えきれなくなつたのでしよう、足早に奥へ引つ込んでいくベルりん。ありや、ごめんよ。ちよつとからかいすぎましたかね。

早速運ばれてきたコーヒーを一口。

ほほお……程良い酸味と切れ味の良い苦み、その後に訪れる口腔内に広がるフルーティさ。相変わらず良い仕事をしてますねえ。お任せして正解。大正解。

「先生。スノウ先生」

カフェちゃんが声をかけてきました。あれ、もしかしてベルりん遊び過ぎました?

おいたが過ぎましたか? 出禁ですか!?

……よし、コーヒーの話をして誤魔化そう!

「カフェさん、今日の、コーヒーも、美味しい。ありがとう」

「こちらこそありがとうございます。で、それとは別にちよつとご相談が」

あ、出禁じゃなかった。スノウちゃん早とちり。

まあ実際にコーヒーは美味しいからヨシとして、ご相談とは？

「見ての通り、そこまでお客さんが入ってないんですようちの喫茶。せつかくファンの皆さんに美味しいコーヒーを召し上がっていただけのチャンスなのでどうかしたいんですが。多分萌え萌え？ とかやればもつと人が来てくれるとは思うんですけど、私達3人共そうだったのは出来そうになくて。何かもつと他にアピールする良い方法は無いでしょうか？」

ふむ、お店のテコ入れですか。

おうけいおうけい、このメイドスキーが心から満足するおもてなしを受けたのです、出来るだけ恩返しの意味も込めて考えさせていただきましょう。

メイド喫茶というものはおおよそ3つのスタイルに大きく分けられます。

一つ目は『カフェスタイル』。店員はメイドの格好をしているだけの普通の喫茶店。クラシカルな雰囲気を楽しむタイプです。

二つ目は『エンタメスタイル』。客をご主人様に見立てるロールプレイやオムライスにハートを書いたりチエキを撮ったりと、そういうアトラクションとして楽しむタイ

プ。

最後が『ガールズバースタイル』。メイドとひたすらお喋りを楽しむスタイルですね。お目当ての娘がいたりするとじっくり話が出来るのがとても良いタイプです。

エンタメとガールズバースタイルの複合型などもあるので細分化するとキリがありませんが、おおよそこの3つに集約してきます。

で、カフェちゃんの営んでいるお店はもちろんカフェスタイルです。

カフェちゃんはコーヒーに重きを置いたシックな雰囲気です。

シリッチは今の凛とした態度の方が似合っています。下手に客に媚び過ぎるのは逆効果ですし、そもそも本人が耐えられそうに無い。

ベルリンに至っては致命的です。対男性コミュ力が絶望的に低いことが災いします。

更に言えば、ここはトレセン学園であってアキバではありません。萌えを求めて集まる場ではないので、ニーズに合わないことをしても却って客足は遠のいてしまうでしょう。

つまり今この場においてはハートを込めてキュンするようなタイプのメイド喫茶を営むことは全てにおいてマイナスです。今のようひたすら給仕に徹する方が心情的にもやりやすいだろうし、そちらの方が間違い無く3人のスタイルに嵌っております。

というかわたくしはそういう『客をもてなしこそすれ媚びることはない』というのが

好きですので、是非このままでいて欲しいのです。完全に個人的意見です。萌えキュンしたいなら電気街に行け。

ですので基本路線は今のままで問題無いでしょう。何か上手い宣伝方法があればそれだけで十分集客は狙えます。

しかし上手い宣伝方法か……何かあるかな？

「そんなの簡単だろ。目立つ看板を置きやいいのさ」

「目立つ看板、ですか……」

会話に混じってきたシリっちが唐突にそんなことを言いました。

まあ案としては悪くないです。けど今すぐ用意出来る、かつこの場の雰囲気崩さないような目立つ看板って何があるんだろう……。カフェちゃんも考え込んでますが思いつかないようです。

「ところで先生。まだ時間の余裕はあるか？」

「まあ、小一時間、ほどなら」

「ずずいっとこちらに寄ってくるシリっち。近い、近いの。」

「よし。なあ先生、私らはこの喫茶店を盛り上げたい。けど今のままじゃ上手くいかない。超困ってるわけだ。困ってる生徒を先生が見過ごしたりしないかな？ 協力してくれるよなあ？」

「な、何をする、の?」

無言でニイツと嗤う彼女からは嫌な予感しかしないのですけど!

「ねえねえ、あの入口のメイドさん、動かないけど本物かな?」

「え、何あの椅子に座ってる……お人形さん? すつごく可愛くない?」

「きや、動いた生きてる……人形じゃない! 見た事無い子だけど誰だろ?」

「レースとか出てないのかな……儂げな感じが、イイ……」

……ええ、聡明な皆さんはもうお気付きでしょう。

すぐ用意出来て目立つ看板。すなわちメイド服を着せられたわたくしです。

喫茶の入口でちよつと立派な背もたれ付きの大きめな椅子に座らされ、フリップを持たされて遠くの空を見つめているような状態のわたくしです。

シリつちからは『出来るだけ動くな。たまに首と目は動かして良い』とかいう訳の分からぬ指示を受けたんですが、こういうことか。妖精の次は人形扱いか。

メイドはね、好きですよ確かに。けどね、わたくし自らメイドになるのは……何か違う、違うでしょう!?

「ごめんね先生、手伝ってもらっちゃって」

平静を取り戻して戻ってきたベルりん。

「ん。まあ、構わない。ちよつと、恥ずかしい、けど」

「ふふつ、可愛いわよ先生」

「ぬう」

さつきの意趣返しか。

「ふふふ、あそうだ。今後の参考にしたいからちよつとスケッチさせて。やつぱりメイド服って実際に誰かが着てるのを見た方が描きやすくて」

「」

おもむろにスケブをどこからともなく取り出し、こちらを観察しながらペンを走らせていくベルりん。ああつ、生き生きとした表情で一心不乱にスケッチしてるベルりんが可愛い。お目々がキラツキラしてる尊い。恥ずかしいけど今のベルりんに水を差したくない。

「良いわよ、先生。その物憂げな表情、儂げな姿、そしてミスマツチな手持ち看板。良い意味で非現実的でもとも筆が進むわ。……訳ありメイドの少女と新人庭師の男の子のお話……なんてのもアリね」

物憂げじゃなくて白目剥きそうなんですけども。というか何かの物語が創造されようとしているんですけども。どぼ先生？

シリっちは声を殺して腹抱えて笑っていやがる。

カフェちゃんはなんか生暖かい目で見てる。

くそう……これで結果が出なかつたら辛すぎるぞわたくし。

と思っていたのですが……結果としてそれなりに繁盛しました。

そして休憩時間終了ギリギリまで手伝っていたせいで元の服に着替える暇も無く、その日が終わるまでメイド姿で救護テントで待機する羽目となり、みんなから『妖精メイド』の称号をいただきました。ピチユるぞ。

・
・
・
・
・

後日。厳正なる集計の結果、見事優勝を攫ったグループは王者の『執事喫茶』……ではなく、誰もが予想すらしていなかったダークホース。

マーベラスサンデー、ネオユニヴァース、シーキングザパールが率いる『ギャラクシー喫茶』でした。名前からどんなことをしていたのか全く想像出来ない……。

そのとき。遠いどこかで。

「あーあ、やっぱり集めちゃったか」

「これで全てのかけらが揃ってしまいましたね。本当、やはりとか何というか」

「いや、むしろ予想より悪化している。節操が無いな彼女は」

彼女らは、動き出した。

「……ここまでね。これ以上はもう見過ごせません」

Case EX3 : 登場していない人物でもない紹介

■ ナイスネイチヤ号

引退理由：脚部不安

■ タマモクロス号

死因：腸捻転★（享年19歳）

■ オグリキヤツプ号

現役中：繋靱帯炎

引退後：喉嚢炎からの頸動脈破裂★

死因：右後肢脛骨骨折からの安楽死（享年25歳）

■ スーパークーク号

引退理由：繋靱帯炎

■ ナリタブライアン号

引退理由：屈腱炎

死因：疝痛・腸閉塞・胃破裂★（享年8歳）

■ ビワハヤヒデ号

引退理由：屈腱炎

■アグネスタキオン号

引退理由：屈腱炎

死因：急性心不全（享年11歳）

■マンハツタンカフェ号

引退理由：屈腱炎の疑い

死因：腹腔内腫瘍★（享年17歳）

■ユキノビジン号

引退理由：脚部骨折

■サクラバクシンオー号

死因：心不全（享年22歳）

■アドマイヤベガ号

引退理由：繋靱帯炎

死因：疝痛・偶発性胃破裂★（享年8歳）

■ミホノブルボン号

引退理由：跛行・骨膜炎・脚部骨折★

■ライスシャワー号

引退理由：脚部開放脱臼・粉碎骨折

死因：同上による安楽死（享年6歳）

■ ツインターボ号

現役中：鼻出血

死因：心不全（享年11歳）

■ マチカネタンホイザ号

死因：疝痛★（享年24歳）

■ トウカイテイオー号

現役中：3度目の脚部骨折★

引退理由：4度目の脚部骨折

死因：心不全（享年25歳）

■ シンボリドルフ号

引退理由：繋靱帯炎

■ エアシャカール号

死因：脚部骨折からの安楽死（享年6歳）

■ ゴールドシチー号

死因：脚部骨折からの安楽死（享年7歳）

■ヒシアマゾン号

引退理由：浅屈腱炎

■グラスワンダー号

引退理由：脚部骨折

■エルコンドルパサー号

死因：腸捻転★（享年7歳）

■アイネスフウジン号

引退理由：屈腱炎

死因：腸捻転★（享年17歳）

■アストンマーチャン号

引退理由：X大腸炎★、急性心不全

死因：同上（享年4歳）

■メジロマックイーン号

引退理由：繋靭帯炎

死因：心不全（享年19歳）

■メジロブライト号

引退理由：屈腱炎

死因：心臓発作（享年10歳）

■メジロアルダン号

引退理由：屈腱炎

死因：心臓発作（享年17歳）

■メジロライアン号

引退理由：屈腱炎

■メジロパーマー号

引退理由：屈腱炎

死因：心臓発作（享年25歳）

■マヤノトツプガン号

引退理由：浅屈腱炎

■スイープトウシヨウ号

死因：腸捻転★（享年19歳）

■ビコーペガサス号

死因：敗血症（享年28歳）

■マチカネフクキタル号

引退理由：浅屈腱炎

■ナリタトップロード号

死因：心不全（享年9歳）

■テイエムオペラオー号

死因：心臓麻痺（享年22歳）

■ケイエスミラクル号

引退理由：脚部粉碎骨折

死因：同上からの安楽死（享年4歳）

■ダイワスカーレット号

引退理由：屈腱炎

■ウオツカ号

引退理由：鼻出血

死因：蹄葉炎からの安楽死（享年15歳）

■スペシャルウィーク号

死因：放牧中の左腰強打（享年23歳）

■ナリタタイシン号

引退理由：屈腱炎

■ウイニンググチケット号

引退理由：屈腱炎

■ フジキセキ号

引退理由：屈腱炎

死因：頸椎損傷（享年22歳）

Case 25 : 養護教諭のご破算

はいっどーもーもーもーもー!!

おはようございますこんにちははあるいはこんばんは。

わたくし、ウマ娘のメルテッドスノウと申します。

えー只今わたくし……なんかよく分からないところにおります。周りが雲っぽいよ
うな、霧というか靄がかっているような？

寒さは無く、ほんのりと暖かい風が頬を撫でます。

音も遠くから風の音？ がする以外はこれと言って特に聞こえず。

全体的に明るいですけど霞以外は何も見えない、そんな状態です。

んんん……マジでどこだここ？

うーん、記憶がやや曖昧ですね、ちよつとさつきまで何してたか思い返してみましょ
う。

えつと確か……。

「薬のアレルギーはありますか？」

「いいえ」

紅葉も色付き、寒さを覚える今日この頃。

わたくし、定期的な身体検査を受けるためにGWに入院した病院へとやってきております。

そして現在、ドクターから問診を受けているところでございます。

「今まで大きな手術を受けたことは？」

「前回のを、含めて、3度、いえ4度ほど」

前回の手術は2回分として報告すべきですね。幼少期に事故で1回、去年に鼻血ブーで1回、今年に胃と腸の2回で計4回。……そう考えると割と手術受けてるなあわたくし。

わたくしとのやりとりを肅々と手元のタブレットで入力していくドクター。大病院はすごいですね、問診も電子化出来てるんだ。

「……はい、ありがとうございます」

一通り入力完了したのでしよう。しばらく画面を見ていたドクターはわたくしの方を見て結果を告げます。

「検査の結果、少々心疾患の可能性が見えます。お時間があれば明日、再度精密検査を行うことが出来ますがどうしますか？」

わたくしにそう告げるドクター。前回主治医を務めてくれた方ですね。

ふむ、心疾患か……。まあ割かし色んな娘から貰った覚えはありますので、ここらで一丁しつかり面倒見てもらうのはアリでしょう。

ちよいとじつくり再検査、よろしくお願いしまああす！

「分かりました。お願いします」

「はい。じゃあ再検査は……。この時間大丈夫ですか？ はい、はい……。では本日の検査はこれで終了です。お疲れ様でした」

そう言つてドクターはわたくしのカルテに『診察終了』のチェックを付けました。どうせですのでしつかり調べてもらつて、しつかり処置していただきましょう。わたくし、こう見えてもまだ死ぬ気はございませんので。

さて、これで今日のお勤めは完了ですね。また明日来ることにはなりましたが、早めに処置出来そうで良かった良かった。

うし、それじゃお会計して帰りましょうかー。

2階の外来診察室からエレベーターで1階の総合受付へと移動すべく、エレベーターホールで箱の到着を待つわたくし。

今日の晩御飯は何にしようかなーと考え始めたその時です。

——ドクンツ!!

不意に最大限の動きをしたかと思いきや、身体に極大のアラートを告げてくる鼓動。同時に訪れる胸の痛みと、急激に力を無くしていく身体。

っ！ 来たっ！ 本当に心臓が止まりに来たっ！

このタイミングで来るのか!? とお思いでしたがむしろ好都合。病院内なら周りの対応が早いはずっ！

迷わずわたくしは急いで首の防犯ブザーの紐に指を引っ掛けて引き抜きます。

・ビビビビビビビビビビビビビビビビビビビビビビ!!

いつぞやのナンパ師どもを撃退したときと同じく鳴り響くアラーム。

院内ですからすぐに誰かが気づいてくれるはず。

そしてこんなこともあろうかと、既にわたくしの車椅子には自前でAEDを積んでいまず。これで近くに備え付けのAEDが無くても安心です。

というわけで後はお任せします医療従事者の方々。

そうしてひと仕事を終えたわたくしの手が力無く落ちようとした時、指に絡まったままのブザーの紐が車椅子の操作レバーに引っ掛かりました。

え。

不意にわたくし意思とは無関係にバックで大きな弧を描くように暴走する車椅子。

ちよっ、待ってっ、止ま、れっつば……!!

このままじゃ気付いてくれた人も迂闊に手を出せないじゃないか。

しかし身体は言うことを聞かず、何とか紐を外すように試みますが軽く身じろぎをするので精一杯。実質、今出来るのは祈ることだけです。

そんなわたくしの思いが通じたか、車椅子は暴走を止めることになりました。タイヤが近くの階段を踏み外して落下するという結末をもって。

おいうそだろ。

少しの浮遊感、霞んでぶれる背景、そして。

——ゴッ!!

鈍い音と共にわたくしの意識は暗転した。

……うむ、思い出した。倒れたのかわたくし。

んじゃここは、夢の世界？

そういえばわたくし、この場に立って歩いてるわ。

の割には意識ハッキリしてるなー、明晰夢ってやつなのかしら。

うーん、以前に保健室で倒れた時は昔の出来事を思い返してたりしましたが、今回は……ホント何だこれ？

当たり前ですけどこんなどこに来たことのある記憶なんてありませんし。

……もしかして、これ『死後の世界』ってやつかな？
だとしたら……そっか。いよいよ死んじやったか。

やっと、死ねたか。

いえいえわたくし、死ぬつもりなんてありませんでしたとも。

転生生活を存分に満喫し、画面の向こう側にしか存在していなかったウマ娘ちゃん様達が明るい未来を目指して駆け抜けてゆく様を、ほんのり関わりながら見守っていくまでは。

まあ、今はこうしてその願いはほぼ果たされているわけでした。そうなると、わたくしが『わたくし』に戻る以前、『私』だった時の想いが強くなってくるわけでした。

そう、『わたくし』はまだ死ねないって思ってたけど、『私』はそうじゃなかった。私は、死にたかった。

だから、ウマ娘達を救いたいというわたくしの想いを叶えつつ、私の想いを叶えるためにみんなの因果を片っ端から集めまくった。

発動前のいくつかの因果を解消出来たりもしたけど、おかげで更に強い因果を見つけ受けることも出来た。

そう、私がやってきた事はウマ娘達の救済であると同時に、消極的な自殺でもあったのだ。

別に二重人格だったとかそういうわけじゃない。私もわたくしも同じもの。けど異なる考えが混在して葛藤するなんて誰でも当たり前のことじゃない？

まあシンプルに言えば、私は死にたくなかったけど死にたかったってだけ。

死なないように努力はするけど、それでも駄目ならすんなり死ぬつもりだった。

私はお父さんに会いたかった。

私はお母さんに会いたかった。

また二人に、あの手で頭を撫でて欲しかった。

ただ、それだけだったんだ。

けど、死後の世界ってこんな白くて何も無いところなんだな。

転生した時は物心付いたら既に今の自分だったし、こういう場所を通った覚えも無いし。

そういや仏教とかだと死んでから三途の川まで800里くらい山道を歩くんだっけ。山も道も無いけど、約3200kmか……目印無しで歩くのきつつそうだなあ。

あてもなく適当にふらふらと彷徨っていると、目の前に薄ぼんやりと何かが見えてきた。

丸いテーブルが置かれており、その周りに何人かが腰掛けているようだ。誰だろう。「お、来たな。こっちこっち」

腰掛けていた内の1人、赤い髪を靡かせた浅黒い肌の女性が手招きをする。すごく気安く声をかけてきたけど知り合いじゃない。こんな綺麗な人に会ってたら忘れてない。

「さあ、あなたもこちらに来てお座りなさい、メルテッドスノウさん」

「まさか本当にこうなるとはな……。しかもこちらが想定した以上の因果を集めた上で。どういう覚悟をしているんだお前は」

青いふんわりとしたロングヘアの微笑んでる優しそうな女性と、黒いショートヘアのまるで軍人さんのような鋭い目付きをした女性も話しかけてくる。最初の女性と合わせて3人共ウマ娘ちゃん様のようにだけど、やはり会った覚えは無い。

「ああ、会った覚えが無いのは当然さ、初対面だからね。初めまして子羊ちゃん。俺はダーレーアラビアン。こっちの二人はゴドルフィンバルブとバイアリーターク。よく三女神なんて呼ばれてるよ」

……ええええええええええええ。

なんか言葉にしなかったはずの言葉が通じたってこと以上にトンでもない情報が追加されたんですけどお!!?

え、じゃあこの褐色美人が、学園にも像がある三女神の1柱!?

そして脇に控えている方々が残りの二柱!?

えええ、マツジでえ……。恐れ多すぎてスノウちゃんブレインが処理し切れないんですけど。

「まず、ここは死後の世界ではない。その少し手前、こちらとあちらを隔てる境界線のよ
うなものだ。そういうものだ」と理解しろ」

バイアリーターク様がそう話し出しました。

「わたしたちはあなたとお会いする為にここに赴きました。そちらのお二人に頼まれま
してご同席させていただきます」

ゴドルフィンバルブ様がこちらを向いて……。いや、視線は私の後ろに注がれている。

まるで私の後ろに他の人がいるかのように。

「メルちゃん」

「メル」

そして直後に背後から聞こえてきた、私を呼ぶ声。

……幻聴じゃ、無いよね？

どんなに再び私を呼んでもらうことを望んでいても決して叶わなかった、忘れもしな
い声。

会えなくなっってから何年も経つのに、記憶の中のそれと全く変わらない声。

ゆっくりと、ゆっくりと振り返る。

そこに居たのは、たとえ忘れようとしても決して忘れることの出来ない、そんな二人の姿だった。

「立派になったわね、メルちゃん」

「全く心配ばかりかけさせて。仕方無いな、メルは」

二人は私にそんな声を掛けてくる。

嘘だろ。絶対会えないって思っていたのに。

「お……お母、さん。お父さん……」

そこにいたのは、紛うことなく私の両親だった。

どんなに切望しても会うことなど叶わないはずの二人の姿だった。

記憶の中にいる、大事な二人の姿そのままだった。

歪む視界。私の双眸から滲み出て来る、涙という水分。

とつくに諦めていた。万が一という可能性すら烏滸がましいと思っていた。思っていたのに。

「うあ……会いた、かった……会いたかった！ お父さん！ お母さん！」

ずっと、ずっと会いたかった。

例え夢だったとしても、ただただ、抱き締めて欲しかった存在。私の、お父さんと、お

母さん。その二人が今、目の前にいる。

我慢なんて出来るわけが無かった。

お母さんに抱き着く。

お母さんの手が、私の頭に添えられる。

お母さんの大きくて柔らかくてあつたかい手。

私が大好きな、優しい手。

この手に再び触れてもらうことを、一体どれだけ渴望しただろう。

ああお母さん、どうかその手でまた私を撫でて。

今度は私もお母さん達と一緒に連れてって。

そうしたら、もう何も怖くないから。

そうやって、お母さんの手がゆつくりと……。

拳を握り、もう片方の手も拳となって私の両こめかみにあてがわれる。

……え？

「お母さん？ おかあーだだだだだだだだだだだだだだだだだだ！」

そのお母さんの手が、容赦なくわたくしの両こめかみをひねりを加えながら圧迫してゆく。

いわゆる、ウメボシ。

「メルちゃん？ お母さん言ったわよね？ 能力を使うのは本当にどうしようもない時だけにしなさいって。なのにあんなポンポンポンポン使って……。私の大事な大事なメルちゃんを傷付けるなんて、たとえメルちゃんでも許しませんからね！」

「あだだだ痛い痛い痛い、お母さんごめん、その節は本当に申し訳無いといぎぎぎぎぎぎぎぎ！ お、お父さん、助けて！」

表情は柔らかに微笑んだまま、グリーングリーンと的確にダメージを加えてくるマザーズダブルナツクル。あ、これガチで怒ってる時のヤツだヤベエ。

ってかお母さんのコレ本当に痛いんだって！ 早くも私のHPゲージ残り僅かだつて！ パパンお助けー！

「うん、すまんメル。お母さんには逆らえない。そしてお父さんもお母さんと同じ気持ちだ。甘んじて受けなさい」

しかし助けは無かった。ああ無常。

「そんな、痛つたただただだだだだだだ割れる割れる割れちやう中身出ちやううううう!!」

軽くミシミシ言っていないか私の頭蓋!?

ぐああああ、耐圧限界、理論値を突破。圧潰まで、5、4、3……あ、止めてくれた。「もう……無茶ばつかりして。本当はお母さんだつてこうやつてすんなり抱きしめられたのに」

解放された頭蓋の痛みの後に感じた、私の身体を包む柔らかな感触。

お母さんに抱き締められている。背中まで回された手が力強く私を引き寄せる。

急に優しくされたことで一瞬固まってしまったが、気が付けば私も負けじと同じようにお母さんを抱き締めていた。

あつたかい、柔らかい、いい匂い。

「ごめ、なさい、お母さん。お父さん。でも、本当に、会いたかった」

「嬉しいわ、メルちゃん。お母さんも会いたかった」

「お父さんも会いたかったぞ」

私達2人を更になら抱きしめるお父さん。

ああ、やっぱり私はこの2人が大好きだ。

しばらくそのまま一つの塊となった私達。

「けど、それとこれとは話が別です。お母さんとの約束、2つとも破るなんて。お母さん許せないわ」

ややあつて、2人は私から離れる。

ぶんすかと怒るお母さん。やだ、私の母可愛すぎ……。

「だからお母さん、メルちゃんには罰を与えます。本当に許せないんだから」

「う、お手柔らかに」

罰かあ……出来ればさっきのウメボシはご遠慮願いたい。

もう少しで目玉ポーンしちゃうレベルの攻撃でしたのでアレ。

「ダメです容赦しません」

あはは、容赦無しかあ。

ウメボシ以上ってなるといよいよもって切腹くらいしかないな。

「というわけでメルちゃんへの罰は……能力の没収です！」

……えっ。

「能力と、今まで集めた因果まとめて全部没収です。ついでにメルちゃん自身の足と肺の怪我也没収です」

えっ。

「いやあ、実はキミの中にあつた心臓の因果を意図的にちよつと解放して仮死状態になつたところをここに呼ぼうとしたんだけどさ……」

人差し指でポリポリと頬をかくダーレーアラビアン様。

「お前が当初こちらが予想していた以上の因果を抱えてしまったせいで予測が狂ってしまった。まさか最後に受けたあの因果が絡んで同時に発動しようとするとは。結果的にここに呼ぶことは出来たが」

「今、あなたは意識不明の状態でここに来る前にいた病院に入院しています。幸いにも最後の因果は発動し切る前に対処することが出来ましたが……危うく意識が戻っても体を動かすことはおろか、喋ることも出来ない状態になるところでした。これはわたしたちの不幸です。ごめんなさい」

バイアリーターク様とゴドルフィンバルブ様が言葉繋げる。

あー、まあ言われてみれば後ろ向きで階段から落ちるって結構危ないか。

「本当はあんまりこういうことしちゃいけないんだけどさ、お詫びも兼ねて俺たちの権能で君の中に蓄積されている因果と併せて、傷病も全て取り除かせてもらおうよ。にしても、随分無茶したみたいだね。本当にいつ破裂してもおかしくなかったよ？ その足」

「外の神から付与された能力なので難しいかも知れませんが、その転嫁能力をあなたから切り離します。あなたは数多のウマ娘の為にその身を犠牲にして救いをもたらしてくれました。なら今度はあなた自身を救ってあげませんと。あなただつて前世はともかく、今はウマ娘なんですから」

すげえ、神様ってすげえ。

そんなことも出来るんだパねえ。

すごすぎて語彙が足らない。

っていうか、え、私の足、パーンしないで済むの？

それどころか、足治るの？

……また歩けるようになる、の？

「お前のその異能の能力だが、転生特典とやらなのだろう？ 確かに個人が扱うには過

ぎた力だが、それでも自らの意志で使うのであれば我々三女神としても傍観するつもりだった。が……こいつに誘導されて使用させられたというのであればこちらにも責任がある」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

そう言うバイアリーターク様が横に移した目線の先には、一体いつからそこにいたのでしょう、超々ロングヘアの女性が、首から『私はスノウちゃんが多くの因果を抱える原因を作りました』と書かれたプラカードを下げて正座していました。目から光を失ったまま謝罪の言葉を呪詛のように呟き続けています。よく見るとお顔がフクちゃんに似ているような。

なんかデジャヴ感あるけど……もしかしてこの人がシラオキ様!?

ってか使用させられた、って……何の話でしょう？

「けど一番の理由はキミのお母さんに強く頼まれちゃったからかな、『うちの娘を助けろ！』って。シラオキの首根っこを掴んで俺たちのところへ駆け込んで来た時はびっくりしたよ。女神相手に殴り込みをかけるなんてとんでもない度胸だね」

「あら、いつの時代でも母は強し、ですよ。うふふふ」

何てことしてるんだ母上ええええええ！？

苦笑いを浮かべるダーレーアラビアン様に対し、にこやかに微笑み返すお母さん。

いや……でも、ずっと見守ってくれていたんだ。

いつもいつも、私のことを見てくれていたんだ。

「それじゃあ改めてお母さんと約束。今度こそ守らないと本当に許さないんだから。……メルちゃん、どうか、ちゃんと幸せになりなさい。笑って、泣いて、怒って、愛して、愛されて、生きて、生き抜きなさい。今のあなたにはそれが出来るわ。だって、お母さんとお父さんの大事な娘なんですから」

「ほら、聞こえるだろうメル？ お前のことを待っている人たちの声が」

お父さんはそう言って後ろの何も無い空間へと視線を移します。

相変わらずの白い霧がかかっているだけの何も見えない場所。

しかし、遠くから聞こえる風のような音に紛れて、小さく、しかしはつきりと、聞き

覚えのある声が聞こえてきました。

『スノウ先生、目を開けてよ。お願いだからさ』

——ネイチヤさん。

『センセ、早よ起き。たこ焼き冷めてまうで』

——タママっち。

『先生、お寝坊さん？ わたしと同じだね！』

——ウララン。

『あんたには借りがある。返させろ』

——ブライヤん。

『スノウ先生、まだそちらに行くのは早いですよ』

——カフエちゃん。

『いい加減起きなさいスノウ先生……貴方まで星にならないで』

——アヤベさん。

『頼む……帰って来てくれ、メルテッドスノウ先生』

——ルドりん。

『あなたとはまだゲームの決着がついていません。再戦を願いますメルテッドスノウ先生』

——ブルるん。

『同志先生ええええええええええ!!!』

——デジたん。

『早く目覚めなさい。メジロは……わたくしはまだあなたから受けた恩を返せていませんわ』

——パクパクさん。

『親より先に逝くんじゃねえバ鹿モン。……戻つて来い』

——施設長^{オヤジ}つ。

『おら、こんだけ呼ばれてつぞ。どうすんだ?』

——ゴルシちゃん。

他にもたくさん聞こえる、私を呼ぶ声達。

ああ、そっか。

私がいみんなを好きみたいに、みんなも私を好きでいてくれたのか。

私という存在を認めてくれていたのか。

心の何処かで未だにアニメの中の事だと思っていたのか、それとも死ぬ前提で動いていたからなのか分からないけど、私はそんな簡単な事にも気付けなかったんだなあ。

「お母さん」

「なあに、メルちゃん?」

「ありがとう。私、みんなのそこに行くよ」

慈しみに溢れた笑みを浮かべたお母さんの手が、私の頭に添えられる。

お母さんの大きくて柔らかくてあったかい手。

私が大好きな、優しい手。

その手が、私の頭をゆつくり優しく撫でた。

続いてお父さんもわしわしと私を撫でた。お父さんの手は大きくてあつたかいけどちよつとゴツゴツしてるし力が強いからお母さんより好きじゃない。

嘘だ。お母さんと同じくらい大好きだった。

「行つてらっしゃい。お父さんとお母さんは、いつでもメルちゃんのことを見守つてますからね」

「元気でな、メル」

「うん、行つてきます」

——メルテッドスノウに、永久に続く幸福を——
——メルテッドスノウに、長きに亘る栄光を——

——メルテッドスノウに、彩に溢れた未来を——

「「「「「スノウ先生!!」」」」」

中々焦点が合わない視界で見えてきたのは半年前にもお世話になった天井と、わたくしの周囲を囲むみんなの姿。

視線は……動く。

首は……動く。

手は……動く。

起き上が……れる。

足に意識を向ければ、ぴくりと反応する足の指。

深く深呼吸をする。胸に痛みは無い。

まいったなあ。

夢だけど、夢じゃなかった。

——ぱたたっ

両の目から涙が溢れ、流れ落ちる。

ありがとう。

ありがとう、お父さん、お母さん。

——ぱたっ、たたたっ

涙が止めどなく溢れては流れ続ける。

「う……ああつ……あああああああ……!!」

ありがとう。

ありがとう、みんな。

私と出会ってくれて、ありがとう。

私を愛してくれて、ありがとう。

両親にも会えたり、死ぬ理由無くなったりしたなあ。

んじゃ……約束だし、頑張って生きますかな。

Case 26 : 養護教諭がいなくなる日

「駿川です。生徒会に確認して頂きたい書類をお持ちしました」

「ここ最近寒い日が続いていたが、ようやく陽射しの中に柔らかな春の気配が見え隠れしてきたトレセン学園。」

バレンタインという学園内が浮足立つイベントも終わり、来る入学式と春の感謝祭に向けてにわかには忙しくなり始めたここ生徒会に、ノックの音と共にたづなさんの声がドア越しに聞こえた。

「どうぞ、お入りください」

「失礼します」

エアグルーヴが入室を促すと、手に書類を抱えたたづなさんがやって来た。

「こちらになります。いつものと、こちらが連絡事項です」

「ありがとうございます」

そう言っただづなさんは執務机で紅茶を嗜んでいたこの私、シンボリルドルフに書類束を差し出した。礼を述べつつ私は書類を受け取る。

いつもの……この時期から挙がり始める感謝祭に関する要望書に軽く目を通し、机の

脇に置いた。

そして最後の1枚、連絡事項は……。

「そうか、いよいよメルテッドスノウ先生が……」

「ええ……もう、彼女のことを養護教諭とは呼べなくなってしまうんですね」

少し寂しそうに微笑むたづなさん。

ちようど3年。彼女が養護教諭として学園に貢献してくれた時間だ。

余りにも短い期間だったことに私は僅かな驚きを覚えた。

「……ありがとうございますたづなさん。生徒達への周知はこちらで受け持ちましょう」

「宜しくお願い致します。では、失礼しました」

さて、どうやったら生徒達の混乱を少なく通達出来るか。

中々の難題に少しばかり思案しつつ、私は紅茶を一口飲んだ。

「ケエエエエエエーッ?!? スノウ先生が辞めるデスウーッ?!?」

エルが驚嘆の声を上げます。……もう、近くであまり大きな声を出して欲しく無いんですけど。

「ちよつ、声が大きいって。かも知れないってだけだし」

「一体どういう事なんですか?」

今日のダンスレッスンを終えてそろそろチームのところへトレーニングに行こうかと私、グラスワンダーがエルと2人でレッスン部屋を出ようとした時、いきなり駆け込んできたセイウンスカイさんからそんな驚きの情報もたらされました。

エルのように大声をあげるわけではありませんが寝耳に水なのは私も同じです。私はセイウンスカイさんに話の続きを促します。

「いやさあ、さっきたづなさんが生徒会室に入ってしまったのをたまたま見かけてさ。何だろうなーって興味本位で聞き耳立ててたら、たづなさんの声で『もう養護教諭とは呼べなくなってしまう』って言うのが聞こえて」

その時の状況を話すセイウンスカイさん。

「それ、かも知れないじゃないですか!? イケマセン、これはみんなに伝えないとイケマセエエエエン!」

慌ただしく立ち上がったかと思うと、脇目も振らず大声を上げたエルはそう言って教室を出ていってしまいました。流石は彼女もウマ娘、あつという間にいなくなっていました。

「あ、ちよつとエル! ……行っちゃいましたか」

まずは当事者本人に事の真偽を確かめる方が先だと思うのですけれど……。

そのエルの行動が、学園のほとんどのウマ娘達を混乱の渦に陥れた大騒動の始まりだったとは、その時はもちろん私が気づく筈も無かったのです。

「えーっ！ スノウ先生が先生を辞めるの!? ヤダヤダ、ターボそんなのやーだー！」

「またまた、エイプリルフルにはまだ早いぞ。そんな嘘でこのネイチャさんを騙そうったって……嘘だよな?」

「何かあったのでしょうか。原因不明ですね」

「むむむむーん、これは事件の予感……!! 犯人はこの中にいるっ!」

「なわけないでしょ。ちよつとどういふことなのか、みんな保健室に聞きに行ってみよっか」

「『賛成』」

「それは……困る。スノウ先生がいなくなると、もうあの大きなポテチを貰えなくなる」「自分は食いモンの心配かつ!」

「でも、理由が分かりませぬねえ。何故なんでしょう」

「ハッ、おおかたタマ公の相手をするのが疲れたとかなんじやねえのかい?」

「なんやと? それを言うなら狐なのか犬なのかよう分からんウマ娘に愛想尽かしたんかも知れんなあ」

「あ?」

「お?」

「こらつ、2人共喧嘩はメツ、ですよ! それよりその噂が本当なのか先生に聞いてみませんと」

・

「えええええーっ! 何で、どうしてーっ!?!」

「何か事情があるのではなくて? 例えば……例えば、えーと……」

「わたし、先生大好きだよ! キングちゃんと同じくらい大好きだよ! キングちゃんとずっと一緒にいたいって思うのと同じくらい、先生と離れ離れになるのは嫌だよ!」

「この子はさらつとこういう事を……// き、気になるのなら実際どうなのか本人に確認してみればいいでしょう?」

「そっか! じゃあ、先生のとこに行こう!」

「ちよつ、ウララさん手を引つ張らないでー!」

・

「えええつ、ほ、ほんとに!? 先週一緒に遊んだ時にはそんなこと全然言つてなかったの

に……」

「……」

「や、やっぱりライスが悪い子だからなんにも教えてくれなかったのかな……ううん、勝手な想像で落ち込んじゃ駄目って先生も言ってたでしょ、負けるなライス、がんばるぞ、

おー」

「……」

「でも、だとすると先生どうしちゃったんだろう……。ブルボンさんは何か聞いてました？ ……ブルボンさん？ ぶ、ブルボンさーん!？」

「……」

．．．．．

「……ふーん、辞めるんだ、あの先生」

「うううう。そ、お、お、た、あ、あ、あ、あ、あ、あ!!」

「まさか。彼女にとっても我々にとってもメリツトが無い。デマだろう。デマ、だよな？」

「興味無い。あたしは帰る」

「タイシン、帰り道はそちらではないぞ？」

「……」

「みんななまてきまきになんかいこおおお!!」
 「……そうだな。既に行くつもりだった奴もいるようだしな」
 「っ／＼／」

「じゃじゃじゃじゃ!!」 またまたそんなことあるわけないじゃないですか
 「ユキノ、方言強く出過ぎ」

「あわわ、すみませんシチーさん。すんげえ驚いてしまつて」
 「まあ気持ちには分かるけどさ。でも、へえ……アタシに黙っていなくなるうとしてたなんて、いい度胸してんじゃんスノウ先生」

「し、シチーさん顔が怖いべ……でもそんなシチーさんも美しいべ……」
 ・ ・ ・ ・

「ハア!? スノウ先生が辞めるって何なのよ!？」

「おいトレーナー! どういうことだよ!」
 「マジでどういふことなんだ!？」

「あ、トレーナーも聞いてなかつたんだ……あれ、マックイーンは驚かないの?」

「ええテイオー。先生とは懇意にさせて頂いておりますので聞き及んでおりましたから」

「え、それってどういうこと」

「たまたたた大変です学園の一大事です!! 皆さん、先生のとこに……あれ、ゴールドシップさんは?」

「『こうしちやいらねえ! ちよいと日本アルプス原産の極上のウニ採ってくるわ』って言っついていなくなつたわよスベちゃん」

「えええ……」

・ ・ ・ ・ ・

「へ? ああ、存じてましたよ」

「流石デジタル君……というか、君の割には落ち着いてるねえ。普段ならこんな話を聞こうものなら髪を振り乱して巨大化して口から火を吹きながら理事長室に突入していきそうなものなのに」

「タキオンさんの中のあたしってどうなってるんですか……。まあおめでたいことなので後でお祝いしようかとは思ってはいましたけど」

「辞めることが、おめでたい? ……ああ、そういうことですか」

「はい。というわけでカフェさん、何か先生の欲しいものってご存知ですか?」

「コーヒーですね」

「あ、あながち間違いいはないのですが……ああつ、でも即答できるカフェさんが尊いで

しゅう……」

「あつ、アヤベさん、アヤベさん！」

「……なに。今忙しいから後にして欲しいのだけど」

「スノウ先生が辞めるって噂、聞きました？ 今学園中がもの凄くもの凄くことになつててー！」

「ええ。今からそれを問い詰めに行くところよ」

「アヤベさんも学園辞めちゃうんですか!？」

「……どうしてそうなるの」

「え、だって、アヤベさんと先生ってそういうご関係なんでしょう？」

「……寝惚けたことを言うのはこの口かしら？」

「い、いひやい、いひやいれふよアヤフエふあん！」

……うっし、今日の書類仕事完了。

すっかり冷めてしまったコーヒーを一息に飲み干し、軽く伸びをするわたくしメルテッドスノウでございます。

いやあ、あの時は大騒ぎでしたねえ。

あれからどうなったかかいつまんでご説明しておきましょう。

どうやらわたくし、目覚める直前に軽く発光していたらしいんですね。

周りなんじやこりやあ!?! って思った矢先にいきなりわたくしが目を覚ますわ、かと思つたら大声上げて泣きじゃくるわでそりやあもうお見舞いに来ていたみんなは訳も分からず大パニックでございました。

更には歩けるようになってるわ呼吸は正常になつてゐるわで病院側も大パニック。検査とりハビリに軽く追われましたとも。

そう、歩けたんですよりハる前から。まるで初めから怪我なんてしていなかつたかのように。これにはわたくしも驚愕。さすが女神パウワー。

おかげで年単位を覚悟していたリハビリも確認のための2、3日で終わつてしまいました。あの時のリハ技師さんの何とも言えない表情はしばらく忘れられそうにありません。

ドクターがもの凄おーりく学会発表しましたがつてましたけど、こんな再現性も発展性も無い事例はただのオカルトなので止めといてもらいました。

まだ車椅子を全く使わない生活には慣れません、徐々に馴染んでいくことでしよう。

そしてチート能力のほうですが、確かに使えなくなつてしまつたようです。

一度、擦り傷があつたウララン相手にこつそり試してみたんですが駄目でした。

けどチート使つてる時とは違つた妙な感覚はあるんですよ……何だろ。後日要検証ですね。

手軽にウマ娘ちゃん様達から曇り原因を取り除けなくなつてしまつたのは悔やまれますが……いや手軽にとか言つちや駄目だな、またお母さんに怒られる。

もし仮に能力が残つていても今のわたくしは以前ほど使用することは無かつたと思うので、結果的に無くなつて良かつたのでしよう。

一応筋を通すためにメジロのご当主様にはもう治せなくなつてしまつたことと、致し方ありませんが契約キャンセルでも構わないことを伝えたんですが、『貴方はメジロを恩知らずの一族にしたいのですね?』とか言いながらもんの凄い圧をかけられました。怖かつたです（小並感）。

向こうが望んだものはわたくし側からは既に支払つており、その後の治癒行為が出来るかどうかは関係無いだろうというところで、そのまま引き続き対価をいただけることになりました。

おかげで今まで密かに進めていた計画がポシヤらずに済んだので地味に助かりました。あのお方には本当に頭が上がリませんね。

と、そうやって慌ただしいながらも平穩とした日々を取り戻したという事でございま

す。

どれ、ひと仕事終わったらしいいつものグラウンドを眺めるお仕事の方をしましょうかね。今日はどんな娘が頑張って未来を目指して研鑽を積んでいるんでしょうねぐふふふ。

……あれ、なんかいつもより外を走ってる娘の姿がやけに少ない気がしますぞ？

そう思った時、だんだんこちらに近づいてくる駈歩の音。

おっと、何事でしょう……つてかなんか結構な大人数が来てる音だぞ？ しかも駈歩どころか襲歩じゃないか、おい軽く地響きしてるぞ？ えつ、どんだけ来てんの？

そしてその勢いのまま、ドバゴシャアツ！ と過去イチやばい音を上げて開けられるドア。おい大丈夫かドア。

「メルテッドスノウ先生っ！」「」

聞こえてきた足音の通り、たくさんのウマ娘ちゃん様達が一斉に保健室へ駆け込んできました。

お、おおう。どうしたみんな。そんなに大勢で……お部屋のウマ娘ちゃん密度が加速度的に上がっていきます。密です。だんだんと超至近距離で囲まれていきます。ひゃあ。部屋に満ち満ちていくウマ娘ちゃん様、ウマ娘ちゃん様、ウマ娘ちゃん様。ひゃああ。通勤ラッシュの電車じゃあるまいし何でこんなに近くにたくさんの娘たちが待つ

て待って折角健康になった心臓がまた止まっちゃうやばいから。うひゃあああ。

「ん、みんなどうしたの？ 急患？」

ひっひっふー。ひっひっふー。

何とか頑張つて平静を保ちます。

こんなみんなで作ってくるような事態なんて……おいおいまさか集団食中毒とかでも発生しましたか!?

「先生、養護教諭辞めちゃうつて本当!?!」

誰かがそんなことを聞いてきます。

……耳が早くないっすかね。まだ一部の関係者にしかリークしてない情報なのに。

「ありや、情報早いね」

「じ、じゃあ……」

「うん、本当だよ」

まあ、知られてしまったからには仕方ない。

本当はギリギリまで隠しておいてみんなを驚かせようとしていたのですけど。事実であることを告げると、ざわついていたみんながシンと静まり返ります。

……おや？

「……やだ……」

「ん？」

「嫌だ！ 先生がいなくなるのは嫌！ お願い先生、学園、辞めないで!!」

今にも泣きそうな声で訴えてくるウマ娘ちゃん。

周囲からも嗚咽まじりに辞めないでという声が聞こえてきます。

……んんん？ 何か空気がおかしいぞ？

「ん？ 学園は辞めないよ？」

「……ええ？」

「え？」

再び静寂に包まれる保健室。

何？ どういうこと？

「つと……養護教諭、辞めちゃうんだよね？」

「ん。辞めるよ」

「じゃあ、学園は……」

「辞めないよ」

「え？」

「え？」

……あ、ようやく理解。

みんなはわたくしが『養護教諭を辞める』って話を『学園を退職する』って話だと勘違いしちゃったのか。

やだなあ、こんな最高に素敵な職場を辞める訳が無いじゃない。

適当にゆるっとお仕事してるだけでコーヒーを嗜みながらウマ娘ちゃん様達と触れ合える上でお賃金がいただける職場なんて他にあるとは思えませんし。

「え、つと……どういふこと先生？」

まあ『養護教諭を辞める』ってことはバレてしまったので、どうせですからこの場で完全ネタバラシしてしましましょうか。

わたくしは机の引き出し、その一番下の段から封筒に仕舞っていた、仰々しい字が書かれたB4サイズの厚紙を取り出してみんなに見せます。

「ふっふっふ。じゃじゃーん」

「なに、それ？」

「医師免許」

「へ？」

いやあ、前々から地味にストレスだったんですよね、怪我したりした娘をチートを使わずにちゃんと治してあげられないのって。

一般的な中高校ならまだしも、国内屈指のアスリート養成校に専門医が常駐してない

Epilogue :

春。

ここ府中では桜が満開です。

今年も夢と希望に胸を膨らませた多くのウマ娘たちが、トレセン学園に入学します。

ある者は、己が強さを証明するために。

またある者は、競い合えるライバルの存在を求めて。

はたまたある者は、誰かの想いに応えるために。

色々なウマ娘が様々な想いを胸に戦いの舞台へと身を投じる、その登竜門へとやってきたのです。

そして私、キタサンブラックもそんな多くのウマ娘のうちの1人でした。

どうにか無事に入学試験を突破し、いよいよ今日からこの学園でトウインクルシリーズを目指して学んでいくことになりました。

そう、今日という日から私達の輝かしい未来が……。

「だから言ったじゃない！ 大事な日の前は早く寝なさいって！」

「だってだって！ 緊張してなかなか眠れなくて！」

……始まらないかも知れない。

今日という日が楽しみすぎて、全然眠れなかった。

おかげで当然寝坊した。ごめん。ほんつとごめんダイヤちゃん。

入学初日から遅刻はちよつとシャレにならない。

私と私の大親友であるダイヤちゃん……サトノダイヤモンドの2人はまだ見えぬ校門を目指して敷地周りの歩道を怒られない程度のスピードで走っています。

というかトレセン学園って何でこんなに大きいの！ 右手に敷地を眺めながら結構長いこと走ってるんですけど!?

心の中でそんな悪態をつきながら、なおかつこんな事態に陥っているのが自業自得であることを反省しながら適性を軽く超える距離を走り続けること数分。そうして何とか。

「ま、間に、合った……」

「結構、ギリギリ、だったね……」

肩で息をする私達。どうにか予鈴が鳴る前に校門へ辿り着くことが出来ました。

少し呼吸を落ち着けて顔を上げれば、その先に見えるのは立派な校舎。

感謝祭とか他にも色んなことがあったりする度に訪れていた場所だけど、今日からは違う意味を持つ校舎。

……遂にここまで来たんだ。

「……いよいよだね。ダイヤちゃん」

「うん。一緒にがんばろ。キタちゃん」

真つ直ぐ伸びる道の先に見える学び舎を見つめ、私達は決意を新たにします。

そう、今日から私達もここトレセン学園の一員となるんです。

ここで研鑽を積んで、絶対にあの憧れの人達の背中に追いついてみせる。

私と、ダイヤちゃんの2人で。そして、憧れのその先へ……!

「ほら、早く教室行こ、キタちゃん」

「待ってってうわあっ!」

慌てて再び駆け出した結果、校門のレール部分に躓いて盛大に転んでしまった。痛たたた……。

どうも本格化を迎えて身体が急成長したせいかな、まだ色々と感覚が追い付いてないみたい。

「大丈夫、キタちゃん!」

「う、うん……痛っ、膝擦りむいちゃった」

左脚の膝頭が擦り切れ、じわじわと赤い領域が広がっていく。やってしまった。前途多難だなあ、私の未来……。

「……ん？ どうしたの？ 怪我しちやったの？ 大丈夫？」

膝を抱えてその場に蹲ってしまっていた時です。校舎と反対側……私達が今入つて来た校門の方からふいに声を掛けられました。

振り返るとそこにいたのは、1人のウマ娘。

群青色のショートヘアの毛先は灰色に透けてグラデーションがかつていて、透けた陽光で輝いています。右耳には鮮やかなライムグリーン色のシユシユ。

どこまでも透き通るアクアマリン色の瞳は、その色の名が示すように広く広く海のように全てを包み込む優しさを湛えているかのようです。

そしてその身を包む白衣が、まるで羽衣のように彼女から醸し出される清明さを彩っています。

きれい。

現実でありながら非現実的な雰囲気を匂わせるそのウマ娘は、恐らく飲むつもりであつたのだろう、水のペットボトルを片手に持ちながらそう聞いてきました。

彼女はゆっくり歩いて私に近寄ります。そして私のそばにしゃがんで傷の様子を診察し始めました。

「あ……」

この人は。

「ちよつと痛いかもだけど、ごめんね」

そういうと彼女はポケットからハンカチを取り出し、更にパキツと音を立てて開封したペットボトルから中に入っていた水でハンカチを濡らしていきます。

そのハンカチでちよんちよんと傷口を軽く拭いて、どこから出てきたのか絆創膏をぺたり。

「いたいのでいたいのとんでいけ。はい、処置完了。いくらウマ娘の身体が頑丈だと言っても気を付けてね、キタサンブラックさん」

そう言つて微笑みながら私の頭に手を乗せて、軽く撫でられました。

柔らかくてあつたかくて、優しい手。

やっぱり、この人は。

あの時もこうやつて私を撫でて励ましてくれたこの人は。

諦めずに信じ続ける強さを私に教えてくれた、この人は……！！

「はいっ！ ありがとうございます、スノウちゃん先生っ!!」

私達の輝かしい未来が、やっぱり、今日から始まるのかも知れない。

走れないT S 転生ウマ娘は養護教諭としてほんのり関わりたい：完
走れなかったT S 転生ウマ娘は保健医としてほんのり関わり続ける：完

おまけ

Bonus 01 : 保健医のハロウィン

あれ、これカメラ入ってる？ 映ってる？

あーあーあー、テストテスト。

うっし。

はいっどーもーもーもーもー!!

お久しぶりです。お久しぶりです？

今年からめでたく保健医として働かせて頂いております、メルテッドスノウです。

わたくしの身体が車椅子要らずになってから早半年以上が経過し、わたくしも今まで以上にアグレッシブに活動することが出来るようになりまして。

気が付けばわたくしの渾名も『トレセン学園の雪妖精』から『白衣を纏ったヤベー奴2号』に変わっております。

ついに脱・妖精です！ 長かったぜ。

けど何だその不名誉で不思議な新しい渾名は!?

……え、1号は誰かと？ 言う必要ありますかそれ？

とまあ、そんなこんなで今年もイベント盛りだくさんで時間はあつという間に流れて既に季節はすっかり秋。

来月頭にはファン感謝祭を控えた状態で、学園内にもわかに活気づいてきております。

今回も色々なウマ娘ちゃん様達から『ウチの出し物に遊びに来て!』とお呼ばれたりもするんですが、今はそれより先に済ませておかなければいけないイベントがあります。

そう、それは10月の最終日を彩る欧米由来のお祭り、すなわちハロウィンでございます!

アニメ内ではテイマク、そしてキタサトが魂抜けるほどぷりちーな仮装を披露してくれ、アプリのほうでも数々のイベント、新衣装、サポカイラストを生み出してくれた、水着やクリスマスに並ぶほどの愛すべき催し、Halloweenでございます!!

今日は近くの商店街で行われているイベントに参加してこようと思っております。

アーケード街が全体的にオレンジと黒に彩られ、至る所にカボチャやおぼけやらが配置されたりハロウィンにちなんだお菓子や雑貨やらが並べられたりと、かなり気合の入ったイベントとして毎年開催されているんですよ。

更に仮装しているお客には屋台のゲーム1回無料やお菓子袋進呈などの特典もあつ

たりと、見てるだけはもちろん参加するのも楽しい素敵イベントなのですよ。

この界限ではそこそこ有名な催しらしく、CATVの取材なんかも来てたりするよう
で。

今までは足が動かせなかった都合上、移動や着替えなどで手間がかかるために見送っていた仮装ですが、無事完治した今回からは是非とも参加したい。そんな気持ちで2か月前からハロウィン用の衣裳を設計・作成しておりました。

じっくり時間をかけて作ったので満足のいく出来栄えです。

後日のファン感謝祭でも着回せるし、来年以降も使えるでしょう。

せっかくのイベント事ですので誰かを誘って一緒に行くことも考えたのですが、今回は衣装の都合上喋ることが一切出来なくなってしまうので、同行者を退屈させてしまうだろうということでソロ活動です。

どんな衣裳か、ですか？ それはまあ後ほどのお楽しみということで。

さて、自分語りはこの辺りで良いでしょうか。

そろそろ衣裳を着て商店街へ向かうことといたしましょう。

そうだ、ウマッターのほうでも投稿しておきましょう。

地図アプリでざっくりと商店街をマーキングしてー、

画面をスクショしてウマッターに画像添付してー、

『○○商店街でハロウィンなう』

つと。

うっしこれで準備完了！ 無限の彼方へさあイクゾー！（デッデッデデデ）

「ね、ねえダイヤちゃん、この服、ちよつと今の私には幼すぎないかな……？」

「そんなことないよキタちゃん！ すごく似合ってる！ 素敵！」

こんにちは、キタサンブラックです！

今年から私とダイヤちゃんはトレセン学園に入学し、日々精進しています。

無事に私は憧れのテイオーさんと同じチームスピカに、ダイヤちゃんは代々サトノ家が懇意にしているというチームカペラに所属することになりました。

そして数ヶ月前に、なんとメイクデビューまで果たすことが出来たんです！

また一步、テイオーさんに近付くことが出来たみたいでとっても嬉しいです。

今後も勝ち続けていけるよう、益々頑張っていかなくっちゃ。

さて、今日はそんなトレーニングを積み重ねる毎日からちよつとだけお休みし、私とダイヤちゃんは商店街のハロウィンイベントに遊びに行くことにしました。

で、どうせだったら昔みたいに仮装して行こうってことになったんですが……ここでダイヤちゃんが『折角だから昔のと同じデザインにしよう』と言い出して、小学生の頃

にお揃いで作った魔女の衣装を今の体型に合わせて仕立て直したものを用意してくれました。

……うん、あの時も思ってたけどダイヤちゃんすごく良く似合ってる。可愛い。いや決してダイヤちゃんが幼いって意味じゃなくて。

けど私はちよつぱり自信が無くて躊躇しちゃったんですけど、ダイヤちゃんが似合ってるって言うってくれるならまあそれでいいかと思いき直して、二人で手を繋いで商店街へ向かうことにしました。

うふふ、楽しみだなあ。

私は昔からこういうイベントとかお祭りとかが大好きだから、今日はいっぱいはいしゃいしゃいそう。

よーし、今日は目一杯遊ぶぞー！

・
・
・
・
・

商店街の入口まで来たときに、その商店街から出てくる二人組を見かけました。

赤ずきんの格好をしたテイオーさんと魔女風のマックイーンさんです。

「あ、テイオーさん、マックイーンさん」

大きく手を振ると、こちらに気付いて向かって来てくれました。

「あら、お二人とも。ハッピーハロウィン、ですわ」

マックイーンさんは私達と同じ魔女の仮装ですが、全体的にシックで落ち着いたデザインの衣装は本当に魔女みたいでとても良く似合っています。

テイオーさんの赤ずきんも、テイオーさんが生来持ち合わせている明るさ快活さとマッチしていてすごく素敵です。

「ハッピーハロウィンです、お二方」

ダイヤちゃんがそう二人に挨拶をします。

同じチームなので私は二人にしよっちゅう会っています、ダイヤちゃんはそうでも無いのでこの4人で揃うのはちょっと珍しいかも。

「そっちはお揃いで魔女かな？ 前に見た時も今もすっごく可愛いよ！ そっちから来たってことは……そっか、これから二人は会うのか、アレに」

「ですわね……」

「アレ、ですか？」

テイオーさんが私達の仮装を褒めてくれたのは嬉しかったのですが、その後にくせリフト、マックイーンさんの困ったような引き攣るような笑顔に疑問が浮かびます。

「まあさ、スノウ先生も来てるんだよココ」

テイオーさんがそう続けます。

「本当ですか！ へえ、どんな恰好してるんだろ、会うのが楽しみです！」

スノウちゃん先生も商店街に来てるんですね！

きつとあの先生のことだから何かの仮装をしているに違いないと思います。

あの先生からも私と同じ、お祭り好きのオーラを感じるので絶対に間違いありません。

「ええと……何と言いますか……」

マックイーンさんが言い淀みます。

何かあまり良くない事でもあるのでしょうか。でも否定的というより、単純にどう触れたら良いのか対処に困るといふような印象です。

「にしし、会えば分かると思うけど……スゴイよ」

にやりとした表情を浮かべながらそうテイオーさんは言います。

な、何だろう。そんな意味深な表情をされると不安になっちゃいます。

「すいっつー」

「まあ、百聞は一見に如かずと申します。わたくし達から言うより実際にお会いした方が良いでしょう」

「だね。まあ二人とも楽しんできなよ。あ、ちよつと奥のお店で今年もジャンボタピオカチャレンジやってたから行ってみるといいよ。そんじやまったねー」

そう言い残してお二人は学園の方へと行ってしまいました。

マックイーンさんの何だか思わせ振りの捨てゼリフに訝しんでいます。

「……とりあえず、紹介されたタピオカのお店に行ってみようか、キタちゃん？」

「そ、そだね。行く、ダイヤちゃん」

気にはなりますがそれはそれとして、折角のダイヤちゃんのお出掛けだしちゃんと楽しまなきゃ。

スノウちゃん先生の事は心に留めておくとして、お勧めされたお店に行ってみよう。

ジャンボタピオカチャレンジって何だろう、すっごい楽しそう！

「ってテイオーさんが言ってたから来てみたけど……」

「お店、完売で閉店しちゃってるね」

というわけで紹介されたお店に来てみたんだけど、残念ながらお店には『完売』の張り紙が。

ここでは両手を使わないと持てないようなサイズのタピオカミルクティーを1分で飲み切ったら無料になる、という催しをやっていたらしいんですが、想定していた以上に早く無くなってしまったとのこと。

「ごめんなさいね、さっき丁度売り切れちゃって。……なんかジャンボタピオカミルクティーをまるで排水溝に流すかのような音を立てて何本も飲み干す芦毛のウマ娘さん

がいてね……普通の分の在庫まで無くなっちゃって。知り合いのウマ娘にもこんなに飲む娘は居なかったけど、やっぱりトレセン学園の生徒さんってすごいのね」

店員さんも信じられないものを見た、といったように話してくれました。

お店、完全に赤字だと思っうんですけど恨み言の一つも言わないで感心したように語ってくれます。

「いやいや、いくらトレセン学園でもそんなに飲める人は……2, 3人くらいしか居ませんから！」

「全く居ないって言えないところが学園の怖いところだよね……」

少なくとも同じチームのスペさんとかなら余裕で実行出来そうだし。

もし飲み物がはちみーだったらテイオーさんも出来ちやいそうだし。

申し訳無さそうに『またいつか来てね』とおまけのクツキーをくれた店員さんに別れを告げて二人で他のお店を覗きながら歩いていると。

「おっ、キタ、ダイヤか。また随分と可愛らしい魔女に会っちゃったねえ」

「あ、イナリさん、それにタマモさん！」

「まいど、お二人さん」

声を掛けてきてくれたのは少し小柄な二人のウマ娘、イナリワンさんとタマモクロスさんでした。

「お二人は身体中に包帯を……ミイラの恰好ですか？」

全体的に紫をあしらった衣装に、身体の至る所に包帯を巻き付けています。

メイクで少し肌の色も青白くしているみたい。

すごいなあ。ハロウィンらしくホラー感も出てる。包帯も所々千切れてて古くなつたもののように見せてる。細かいなあ。

「せや。迫り来るミイラを銃で退治する『ミイラハント』つちゅーお化け屋敷を手伝つとつてな。休憩と宣伝を兼ねて歩き回つとるとこや」

タマモさんはそう言つて、両腕をぐわーつと広げて今にも襲つてきそうなポーズを取ります。

へえ、そんなイベントもやってるんですね。面白そう！

「なるほど、楽しそうですね！ あたしもやってみたいです！」

「おつ、流石はキタ。祭りの何たるかを分かつてるじゃねえか。同じ阿呆なら踊らにや損つてな。クリーク、こつちの二人が……つてクリークはどこいったんでい？」

どうやらお二人以外にもクリークさんが一緒にいたみたいです。

タマモさん達が周りをキョロキョロしはじめます。

「んん!? さつきまで一緒におつたのに……つておつた！」

「うふふ、捕まえちゃいましたよー」

「……………!!」

タマモさんが指差した先には、タマモさん達と同じく包帯を身体中に巻き付けたスパークリークさんが、道行く男の子を正面から抱き締めていました。

つてうわつ、クリークさんの格好つて……肩とかお腹とか色んなとこの肌が露出して……タマモさん達と同じように包帯だらけの格好だけど、あれは怖いっていうか、むしろ扇情的というか……。

抱き締められている男の子はクリークさんの、その、とても立派な胸部に顔を埋めさせられて逃げられないように押さえつけられています。

離れようと藻掻いていますが、ウマ娘であるクリークさんには敵わず抜け出せずにいるようです。

「い、いけねえ！ アイツ通りすがりの子供を捕まえてやがるぞー！」

「あかん！ このままじゃあの子の中の何かが破壊されてまう！ こらクリーク！ 何しとんねん離したりいやー！」

「え、宣伝ですよ。ゲームでミイラに捕まるとこうなっちゃいますよー、つて。ね？」

そういつてクリークさんは捕まえた子を解放します。

が、男の子は心ここにあらずといった様子です。

「……………ぽんぽん」

男の子はしばらく赤い顔のままぼーとした表情でクリークさんと目を合わせていたと思ったら、彼の口からは実年齢とは思えない言葉が出て来ました。

「……あかん。手遅れやった」

「一般人にはもう少し加減してやってくんなクリークよ」

呆れたようにそう零すタマモさんとイナリさん。

まるで『またやったな』と言わんばかりですけど、クリークさんつてよくこんな事してるんですか……？

「あ、あははは……」

「何か、すごいことになってるね……」

クリークさんには気を付けよう。

私もダイヤちゃんもそう思った瞬間でした。

・ ・ ・ ・ ・

「お、そういうやお二人さんはもうスノウセンセには会ったんか？」

それからしばらくして、どうにか正気に戻った男の子と別れてしばらくお三方と一緒に商店街を歩いていたところ、タマモさんがふいにそう切り出してきました。

「い、いえ、まだですけど」

「会うてみ。すごいで、センスの仮装」

実に面白いものを見た、といった表情でタマモさんは微笑みます。

テイオーさん達といい、タマモさん達といい、こうやって話題に挙げてくるってことはそれだけ印象に残るような何かをしてるってことなんだろうなあスノウちゃん先生……。

「さつきテイオーさん達からもそう言われたんですけど、そんなにすごいですか？」
「ああ、ありやすごかった。一体普段どんなことを考えてりやあんな仮装をするって発想に至れるんだろうな」

イナリさんも遠い目をして思い返しているようです。
嘲りなどは無く、素直に感心しているみたいですね。

「そんなに……？」

「うふふ、先生のウマッターを見てみて下さい。そこに答えがありますよ」

最後にそんなセリフでクリークさんが締め括ります。

だから、何でそんな思わせ振りの風に言うんですか!?

・
・
・
・
・

「……って言われてスノウ先生のウマッター見てみたけど……」

「書かれていたのは『ハロウィンなう』って眩きと地図だけだったね」

お化け屋敷に戻っていったお三方と別れた後、スノウちゃん先生のウマッターを覗い

てみたんですけど、そこにあつたのは短い一言と商店街の中央の広場あたりにマーキングされた地図のスクリーンショットだけでした。

多分このマーキングが付けられている所にいる、ってことなんだろうけど……。

「とりあえずあの地図が示してる場所に来てみたけど、特におかしなところは……ダイヤちゃん、私疲れてるのかな。広場の真ん中に地図にあつたのと同じマーキングがいるんだけど」

「キタちゃん、大丈夫。私にも見えてる。大きなマーキングが子供達に囲まれてる」

スノウちゃん先生を探そうと広場を見渡した瞬間、そこに見えたのは先程先生のウマッターで見た地図に描かれていたマーキング。

ただしサイズはやたら大きい。それこそ人が入つてると思われる程に。

というかそのマーキングから足が生えていました。

私とダイヤちゃんが呆気に取られていると、たくさんの子供達に囲まれて蠢いていたマーキングと視線が合ったような気がしました。

マーキングと視線が合うってどういうことなんだろう。

するとそれは激しく身体を揺らしながらダバダバとこちらに向かって走ってきました。

う、動きが気持ち悪い！

「うわ、こっつち来た！ こ、怖い怖い！ 何何何!？」

ダイヤちゃんと肩を抱き合つて怯える私達の目の前に急ブレーキで立ち止まるものの、相変わらずボヨンボヨンと身体を揺らし続けているマーキング。

一体私達が何をしたの、と思つていた時。

ピロリン♪ と私のウマホから着信音が。

LANEに着信があつたみたいです。

恐る恐るマーキングから視線を外してウマホを見ると、相手はスノウちゃん先生から。

『二人も来てたんだ。ハッピーハロウィン』

「…………え!？」

眼の前にはゆらゆらと揺れてる大きなマーキングしかない。

私とダイヤちゃんは何度もウマホ画面とマーキングを交互に見ます。

まさか。まさかまさか。

「…………もしかして、スノウちゃん先生?」

首肯するかのように前後に揺れるマーキング。

えええ、ええええええ。

この、眼の前にいる摩訶不思議物体が、スノウちゃん先生なの？

本当に……？

「ど、どうして先程から喋らずにボディランゲージを……？」

ダイヤちゃんがそう尋ねると、またしてもLANEに着信が。
『着ぐるみは喋っちゃダメ。中の人などいない』

「いやいやいやいや」

ツッコミどころしか無い。

けど、とりあえず。

「ハロウィン何も関係なくないですかそれ!？」

Bonus 02 : 保健医と普通のウマ娘たち

「第1回チキチキ普通のウマ娘選手権ー!」

「……何ですかこれ」

ぶんぶんはろーぱかちゅーぶ。メルテッドスノウです。

いえ、別に配信とかはしてないですけど。

白衣を纏ったやべー奴1号に声を掛けられて彼女の研究室へとやってきたのですが、そこには数名のウマ娘ちゃん様達が既におり、わたくしが部屋に入ったと同時に呼び出した本人が大声でそんなことを言い出しました。

同室の一角でコーヒーを傾けていたカフェちゃんもいきなりの宣言に突っ込まざるを得なかったようです。

さてさて、呆気にと取られているわたくしと数名のウマ娘ちゃん様達。

そんなわたくし達の様子など気にせず、呼び出した張本人であるアグネスタキオンは話を続けます。

「これから行うのは、普段から『普通のウマ娘』を公言している者達を競い合わせて、一体誰が本当に『普通のウマ娘』なのかを導き出すという実験さ」

「はあ……また妙な事を……」

すっかり呆れ声のカフエちゃん。

ため息のつき方に年季が入ってます。心中お察しします。

「いえーいどんどんぱふー!」

「え、つと……これから何をするんですか?」

「あたしもよく分かんないんだこれが」

「あの一、早く帰って数学の課題片付けたいんですけどー」

そしてわたくしと同様、ここに集められたであろうウマ娘ちゃん様達。

順にマチカネタンホイザ、サクラチヨノオー、ナイスネイチャ、ヒシミラクルの4名です。

カネタン、チヨちゃん、ネイチャさん、ヒシミー……そういやみんなどつかで『普通のウマ娘』って自称してたっけ。

「私は最高のウマ娘というものを証明しようとしている。ウマ娘という存在が一体どこまで速く、強くなれるのかをね。であるならば、ゼロベースとなるような基準点はあつた方が相対的に今の自分がどの程度の実力を持つているのかを測りやすくなるだろう? その基準点として機能し得る『普通』というものを明確にしておきたいのさ」

「意外とそれなりに筋が通ってる理由でしたね」

カフエちゃんがそう零しました。

うん、わたくしもそう思う。相対座標より絶対座標のほうが継続的なデータ収集には便利だろうし。

それは分かるんだけども。

「何でわたしも呼ばれたの？」

わたくし、自分が普通だなんて言ったこと無いし。

「ああそれはねえ、我々学園生は経緯はどうあれ、この学園に入学した時点である程度の特別性があると思う訳だよ。中央トレセン学園……その門は開かれているとはいえ決して広くは無い。むしろ狭き門と言って差し支えは無いだろう」

タキちゃんは部屋の中を歩きながら語り始めます。

我々の周囲を回るように歩いて、ふいにこちらを向いて立ち止まり、両手をばつと広げます。

「そこに入学出来た一握りの中だけで普通を競うなんて滑稽なことだと思わないかい？

そこで学園生という括りから外れたウマ娘を混ぜることでより普通というものに対する解像度を高めようというわけさ」

ほう、さすがヤベー奴1号。着眼点が良いな。

どうやらわたくし達の中から『普通』と呼べるウマ娘を選ぶというのは第2目標のよ

うですね。

第1目標はわたくしと他の娘達のデータから三角測量の要領で『真なる普通』の位置を導き出そうとしているみたいです。

そこでデータが似通いそうな4人以外の一石としてわたくしが投じられたと、そういうわけですね。

「あの一、ちよーつといいでしょうか」

「何だい？」

そんな考察をしていると、ヒシミーが小さく挙手をして発言します。

「さもわたしたちが参加するような流れで話が進んでますけど、普通に嫌なんですけど？ わたし達には特にメリットも無さそうですし」

明確に拒否の姿勢を示しているヒシミー。

うわーどうしよつかなーといった感じのネイチャさん。

未だによく分かっていなそうなチヨちゃん。

何故かやる気に満ちてて乗り気のカネタン。

「もちろん君達にもお礼はするさ。この私謹製の3倍濃縮ロイヤルビタージュースを」
「いらぬです」

即答う！

嫌か。ロイヤルビターはダメか。……まあ普通は嫌か。

「ふむ、そうか。まあ無理にとは言わないよ。不参加ならばそう申し出てくれたまえ」
盛大にゴネたり脅してきたりすることもなく、あっさりと引き下がるタキちゃん。

何を言われても絶対断つてやるとでも言わんばかりだったヒシミーも、その引き際に呆気にとられます。

「へ、いいの？ それじゃあたしはパス」

「ああ残念だ。ベスト普通ニストに選ばれたウマ娘にはこのJ O J O苑のギフトカードを進呈しようと思っていたんだが。ああとても残念だが致し方無いな」

そう言つて白衣の萌え袖からタキちゃんが見せびらかしたのは複数枚のギフトカード。うわお、結構な枚数があるみたい。多少大食い程度のウマ娘なら十分満足出来る量が食べられそうな程。

「さーみんな！ 彼女に私達の普通っぷりを見せつけてやりましょう！ がんばろー！！」

「手のひらドリルかな」

くるとタキちゃん側からみんな側に向き直り、えいえいおーと腕を振り上げるヒシミー。

そのあまりにも鮮やかすぎる手のひら返しにツツコミを入れるネイチヤさん。

こちらもまた流麗で鋭い返し。さすネイ。
さて、それはそれとして。

「ときに、タキさんや」

「何だい、スノさんや」

まるで熟年夫婦を思い起こさせるような自然なやりとり。

まあちよいちよいタキちゃんとは治験やら何やらでよく絡んでるのでこういうった冗談にもすんなり乗っかってくれるんだけども。

「わたしはその報酬を魅力だと感じてない。わたしがパスするとは思わないの?」

美味しいものは好きですけど、わたくしの興味を引くものとしては弱い。そんなことはタキちゃんも分かっているはずだ。

こちららヤベー奴2号の名を頂いちやってるんだ、ちよつとやそつとの報酬で動くと思うなよ!

さあ、このわたくしがこの場に留まることにメリットを感じるようなものをタキちゃんに用意出来るのかなあ!?

「何を言っているんだい。貴方にはこの状況が既に報酬となり得ているじゃないか」
タキちゃんの言葉に目をぱちくりしてしまったわたくし。

……ふむ。つまり。

『このイベントに参加させてやるから無報酬で参加しろ』って意味だな？

「ほう、ほほう。それは……悪くないね」

思わず口角が上がってしまう。

まあ確かに、こんな面白イベントに参加しない訳がないなわたくし。

もし『じゃあいいですうー』とか言われてしまったら泣いて縋ってでも参加させてもらいたくなってしまう。

何だよ、タキちゃん分かってんじやん。

いいじやん。いーじやんスゲーじやん。

「だろっ？」

「ふっふっふ……」

どんなイベントになるだろうと想いを馳せてみれば自然と笑みが溢れてきた。

正面から顔を突き合わせたタキちゃんもここまでがシナリオ通りなのだろう、一緒に笑い合う。

「うわあ、白衣のヤベー奴達が向かい合って笑ってる……」

「全く、スノウ先生つたら……」

「えっと、結局は何をするんですか？」

多分全身全霊で茶番を、かな。

「第4問。持続可能な開発もくh」

——びこん。

チヨちゃんが手元のボタンを素早く押しして回答権を得る。

「SDGs！」

「ブブー。ちよつと掛かってしまったねえ。続きを頼むよカフエ」

「はい。持続可能な開発目標のことをSDGsと言うが、これは何の略でしょう？」

「ぐぬぬ、普通に分からない……！」

グーにした手をこめかみに添えて首を傾げて考え込むネイチャさん。

表情以外は『どどどどどーすんの？』のポーズになつてて可愛い。

他の娘達も険しい顔をしているようです。

数秒待つてみたが誰も押す気配が無いな。

ふむ、じゃあ頂いちゃおうかな。ぽちつと。

——びこん。

「Sustainable Development Goals」

「正解。流石だねえ」

まあ何をしてくるかと問われれば、クイズ大会っぽい何かというのが答えですかね。アプリでの夏合宿の賢さトレーニング、そのままですね。

タキちゃん曰く、知力測定らしいです。

ってかいつの間にかカフエちゃんが助手ポジでシレッといるんですけど、それで良かったのかカフエちゃんよ？

今のところ4問出題され、その全てをわたくしが正解してしまっている。うーん。

「これ、わたしが言うのも何だけどちよつと不公平では？」

片や中高レベルの学生、片や医大卒レベルの教員。

一応、伊達や酔狂で教員やってないぞわたくし？

それなりに賢いのですよ？

「ふむ、もう少し難易度を落としてみようか」

カフエちゃんところによごによ話をして出題順を調整するタキちゃん。

さあて、次々、次の問題はー？

「では第5問。有馬記念とアイビスサマーダッシュ、ひいらぎ賞の3つの距離を足すと何mか？」

おおつ、これは確かに学園生なら答えておきたい問題。レース毎の特徴に関する記憶

力と瞬間的な計算力が求められる良い問題だ。

「ええつと、えつと、有馬が2500mで、アイビスは……あれ、1000だっけ、1200だっけ？」

「ひいらぎ賞って、なんだっけ……？」

またしても数秒待ってみるが、みんな中々ボタンを押さない。

どれ……3、2、1、はい時間切れ。

——びん。

「はいスノウ先生」

「5100」

有馬はすぐ分かるだろう。中山、芝2500mだ。

アイビスも直線番長として有名、新潟の芝1000m。

やっかいなのはひいらぎ賞。中山の芝1600mなのだが前の2つのレースが重賞なのに対してこっちはPre-OP。かつ似たような植物の名前が付いたレースも多くてややこしい。

「お見事。正解」

ま、いくら保健医とはいえトレセン学園の教員の端くれ。各レースの基礎情報くらいはすんなり出なくては会話について行けないですね。

「うええ、勝てませんー！ 先生強すぎるー！」

カネタンが頭を抱えてぶんぶん振る。

うーむ……今の問題はだいぶ生徒側が有利だったんだけどなあ。

「ふむ、ある程度は先生の独壇場になるだろうと踏んではいたがこれでは偏りが過ぎるねえ……。ではサービス問題としようか。これは何度でも答えられるよ」

こうなることは予想出来ていたようで、タキちゃんとかフェちゃんは目を合わせて頷き合うだけで次の問題を調整した。

何度でも答えられる、つまり正解が複数あるのか。

よっしゃばつちこーい！

「第6問。スノウ先生の良いところを述べよ」

「ぶっほ」

思わず吹き出ししまったじゃないか！

なんじゃその問題は!?

——ぴこん。

「はい、ネイチャ君」

「優しいところー！」

「正解」

すかさず回答するネイチヤさん。
いや待て、なんだその正解は!?

——ぴこん。

「タンホイザ君」

「はい! 可愛いところ!」

「正解」

「つちよ」

間髪入れずボタンを押ししたカネタン。

つてああああああやめてええええええええええ!

恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい!

——ぴこん。

「チヨノオー君」

「はい、えつと、生徒一人一人をしつかり見てくれているところ」

「正解」

——ぴこん。

「えー、結構みんなを驚かすのが好きなお茶目なところ?」

「ミラクル君、正解」

「待って、お願い待って」

全員で畳み掛けてくるなああああああああああ！

待てこら、何でみんなボタン連打しまくってるんだ!!

——ぴこん。

「コーヒー好きのところ」

「正解」

「カフエさん!?!」

さらっと回答者側に来てるんじゃないよカフエちゃん!!

・
・
・
・

「……というわけで知力面はスノウ先生がトップだったので今度は体力面を……と
思っ
て、他の4人に適性があった芝中距離2200mで模擬レースをもらったのだが
……今度は逆にスノウ先生が全く勝負にならなかったので追加の対決方法を用意して
みたよ」

現役アスリートにウマ娘とはいえ一般人なわたくしが敵う訳が無いでしょうが。
わたくしがようやく第2コーナーを抜けようとする頃にはみんなゴールしてた。

うへあ、やつぱすつげえなあ。オラわくわくすつぞ。

そんな風によそ見してたら躓いて転んでしまったけども。

スピード出てないし、芝だから大して痛くもなかったけども。

なんかゴールしたはずのネイチャさんがトップスピードのまま駆けつけてきてくれたけども。

ありがとうねネイチャさん。でも病弱設定は過去のものだからそんなに心配しなくても大丈夫だよ？

「先生に何か得意な運動はあるかと聞いてみたんだが……というか聞いてから車椅子生活だった先生に聞くことでは無いと思っただが、意外なことに先生は水泳なら出来るらしい。ということとで端から端まで、50mのタイムを測定させてもらうよ」

というわけで追加の体力測定として水泳が行われようとしています。

全員スクール水着に着替えてプールサイドに並んでおります。

泳がなくてもいいのにタキカフェまで律儀に水着姿とは。

あ、わたくしもプール作業することがたまにあるので競泳用水着を持っています。

いくらロリ体型とはいえ成人女性としてスクール水着を着るわけにはいかないのですね。

今までのわたくしならば『あああ水着のウマ娘ちゃん様達がこんな間近にやべえええ

ええ』とか思ったりしちやったりしますがわたくしも成長したもので、この場では平静を装えるようになりましたとも。

後々ひとりになった時にまとめて悶えることが出来るようになりましたとも。

多分今夜は寝ねーな。

「はい！」

元気に手を挙げるヒシミー。

「何だねミラクル君」

「どうしてわたしは縛られてるんでしょうか！」

彼女のウエストにはロープがぐるぐると巻かれています。

そしてその一端をタキちゃんが掴んでいました。

「そりゃあ逃げてもらっては困るからね」

「いやーだー！ 泳ぐのだけはいいやーあー！！」

「観念したまえ」

この場から走って逃げようとするが、ロープが張って逃げる事が出来ない。

そーういやヒシミーってプール苦手なんだったつけ。

まあ、得手不得手は誰にでもあるよね。

「ところで先生。先生ホントに泳げるの？ 長いことまともに運動してなかったんじゃ

ない？」

ふとわたくしに向かつてネイチャさんがそう訪ねてくる。

先刻までの模擬レースを鑑みればそう思うのは当然でございませう。

今ではすっかり普通に歩いたり走ったり出来るようになったとはいえ、何年も車椅子生活だったのもまた事実ですからね。

けどまあ心配ゴム用、もといご無用。

「ん。泳ぎだけは何とか。まあ見せて」

というわけでした。

とふんと静かに上がる水柱。

水の中って静かでないなあー。

「……」

「……」

「……」

「……浮かんでこない？」

「せ、先生、先生……っ!?!」

水中からでも聞こえてくるみんなの声。

なんか誰かが飛び込んだ音も聞こえたけど、もうわたくしはスタート地点そにはいない

ですぞ。

「ふあ」

というわけで、無事50mを泳ぎ切ってゴールから水上に顔を出すわたくし。

「「「うえええつつつ?!?!?」」」

「ふー……なんか潜水だけは昔から出来るんだよね」

何だろうね、昔死にかけたときに無酸素でしばらく水に沈んでたせいなのか、呼吸無しでの水中活動があまり苦じゃ無いのよね。

スノウアザラシの異名がこんなところで伏線になるとは。

「「「心つつつ臓に悪い!!!」」」

・
・
・
・

「結果発表おおおー!!!」

タキちゃんの研究室に戻ってきたわたくし達を出迎えたのは、部屋を揺るがさんばかりの非常に大きな声。

彼女は……ジャングルポケットちゃんだったかな？ てか今までいなかっただよね？

え、この為だけに来たの？

「ポツケ君ありがとう。そしてお疲れ様」

「……おい、まさかこんな事の為だけに俺を呼んだのか？　嘗めてんのか？　嘗めてるな？　おう表出ろ」

タキちゃんに詰め寄り、ちゅーしちやいそうな距離まで顔を近づけてメンチを切るポツケちゃん。

つてか本当にこの為だけに呼んだのかよ。怒られても文句言えないぞ。

「まあまあまあ。これはお礼だよ、取っておいてくれたまえ」

しかしタキちゃんは一向に意に介さずポツケちゃんに何かの紙切れを手渡します。

「あ、!?　こんな紙切れで俺が、おれが……おいこれ、銀座千〇屋のパフェ無料券じゃねえか!　……つち、こ、今回だけだからな。……やたつ、パツフェフェエ〜♪」

さも仕方なさそうにこの場から退室してつたポツケちゃん。

けど最後のほうで嬉しそうな声が聞こえたぞ。ええんかそれで。

「ポツケさん、ちよろ……」

カフェちゃん、言ってるやるなよ。

わたくしも思ってたけども。

「さて、知力と体力を測らせてもらい他にも各種要素を加味して順位付けをしたんだが……ベスト普通ニストは真ん中の順位、即ち3位の相手に与えられる」

「あ、そ、そっか。一番を目指すやつじゃなかったわ」

「すっかり忘れてました……」

「そういうやそんな趣旨だったね。」

「みんなとわちやわちやしてるの楽しすぎて忘れてた。」

「というわけで発表するよ。チキチキ第一回普通のウマ娘選手権、その勝者となるベスト普通ニストは……」

横に並んだわたくし達をゆっくりと眺め、発表をもったいつけるタキちゃん。

さて、一体誰が今回の戦いを制したのでしょうか。

「ごくり。」

誰かの唾を飲む音が聞こえます。そして。

「スノウ先生だったよ」

「「「異議あり!!!」」」

「おおおおい!」

「わたくしも自分が普通だとは思ってないけども全員声を揃えて言う事無くない!？」

「ってかカフエちゃんまで!？」

「いやあ、よく考えれば……トウインクルシリーズに出走してる時点で『普通』じゃないんだよねえ」

「「「今更過ぎる!!!」」」

ほんつつと今更過ぎるわ。

いやあ、序盤に言った通りの盛大な茶番だったわ。

Bonus 03 : 保健医のクリスマス

「ああ、ごめんね。その日は先約があるんだ」

スノウ先生はそう言って、私からの誘いを申し訳無さそうに断りました。

こんにちは！ みんなのウマドル、スマートファルコンだよっ☆

ファル子はいま、12月24日にばかチューブでクリスマス配信をするために学園の色んな人にゲスト出演のお願いをして回っているところなの。

何人かの娘にOKをもらって次は誰を誘おうかとした時に、ふいにメルテッドスノウ先生にも出演してもらえないかな、って思いついたんだよね。

トウインクル・シリーズに出走しているわけではないスノウ先生は、学園関係者とはいえ一般ウマ娘。本来であれば当然ながらメディアに取り上げられたりもしないはずなんだけど……そんな先生が実はひっそりとネット上で話題の人物になってたりするの。

その理由の一つが去年の秋の感謝祭。カフェ・ロワイヤル喫茶対抗戦で私達が歌って踊っている一方で、先生はマンハッタンカフェさんのメイド喫茶を手伝っていたらしいんだけど、その時にお披露目したメイド服姿がSNS上でプチバズったの。

私も後から動画で見たんだけど、あれは反則級の可愛さだと思う。

あまり普段からオシャレしないスノウ先生がメイド服っていう可愛い格好をしてるっただけでもレアなのに、動画なのに全然動かないなどか思ったらたまに小首を傾げたりするんだからファル子でもキュン☆ ってしちゃった。

他にも時々他の娘のウマッターやウマスタに見切れてたり、月刊トウインクルで『美人過ぎる学園スタッフ』として紹介されたこともあったりして、先生は知る人ぞ知る的な存在になってたんだ。

で、そんな先生にもファル子の配信に参加してもらおうと思っただけで、先生は悔やむように断りの返事を返したの。

正直断られたのは残念だけど、先約があるなら仕方無いよね。

あれ？ けど、クリスマスに先約があるってことは……もしかしてもしかして、彼氏さんとクリスマスデートとかだったり!?

そ、そうだよ。先生も大人の女性なんだし、お付き合いしてる人がいたっておかしくないよねっ！

けど、先生に彼氏かあ……どんな人なんだろう。やっぱりすごくカッコイイ人だったりするのかなあ……。

見てみたい。あの先生を射止めた人がどんな素敵な人なのか、気になって夜しか眠れ

ないよっ！

……というわけでクリスマスイヴの今日。

こっそりとスノウ先生を尾行するために放課後から職員寮近くの草むらで身を隠して待機しているみんなのウマドル、ファル子だよっ☆

その美貌と振る舞いからかつては『学園の雪妖精』と呼ばれた、学園一の人気ウマ娘と言つても過言じゃないスノウ先生。

もしあの先生が逃げ脚質のレースイマ娘であつたなら、きつとファル子は絶対にどんな手を使つても逃げ切りシスターズのメンバーに加入してもらつてたと思うよ。

そんなスノウ先生に、私からのお誘いより優先したい相手がいるなんて……。

「あの、ファルコンさん。これは一体」

これはスクープもスクープ、大スクープだよっ！ 間違い無く学園中を揺るがすほどの一大スクープの予感しかしないよっ！

一体どんな人ならあの先生のお眼鏡に適うんだろう……もしかしたら逆に、先生を脅して無理矢理付き合っていたりするんじゃないだろうか。

「何故私達は草むらに隠れているんでしょうか？」

もしスノウ先生に酷いことするような相手なら、それこそみんなの力を借りてでもス

ノウ先生を守らなきや。

それがひいては逃げシスのため、即ち私の為になることなんだから、こうやってスノウ先生を見守るのは必然的なことなんだから！

お願い！ 全宇宙のファンみんな、私に力を貸して！

「あの、特に私がいる必要性が無いのであれば18分27秒後に自主トレーニングを行う予定ですので退席したいのですけれど」

「駄目だよっ！ フラツシユさんは気にならないのっ!? あのスノウ先生が、あのスノウ先生がクリスマススイヴに会いたい相手の事がっ！ これは全てにおいて最優先される調査なんだよっ!!」

草むらに潜んでいたらフラツシユさんに見つかっちゃったから、咄嗟に彼女を引き込んで一緒に隠れてスノウ先生を待つことにしたの。

こうなったらフラツシユさんも道連れだよ。

「それは……いえ、プライベートな事ですのであまり必要以上に干渉するのはどうかともうっ、こんな時まで優等生っぷりを発揮しなくていいのに。」

そんな話をしていたら、ちょうど寮からスノウ先生が出て来た。

流石にいつもの白衣は着てないけど、あまり余所行きの格好には見えない。というか普段着っぽい。メイクとかもいつも通りに見える。

これって……飾らないで会えるような気心の知れた相手って事？ そんな深い仲になっっている相手って事？ ありのままを見せられる、一緒にいて心安らげるような相手って事なのお!?

「ほら、先生が出て来たよ！ 行くよフラッシュさん。せめて相手を一目拝んでおかないや気が済まないんだから！」

「……はあ。このまま貴女を放っておくのも心配ですし、お付き合いしましょう」

・ ・ ・ ・ ・

「てつきり駅に向かうんだろうと思うってたけど、商店街に来たね先生」

やつほー！ フラッシュさんと一緒に建物の影に隠れたりしながらスノウ先生の後をこっそりつけているみんなのウマドル、ファル子だよっ☆

ほんの二か月前まではハロウィンでカボチャ色に染まっていた商店街は、今は赤白緑のクリスマスカラーで賑わっててすっごく素敵☆

イルミネーションでキラキラしてる街を行き交う人達みんなが幸せそうに歩いている。うんうん、やつぱりクリスマスはこうでなくっちゃ！

デート場所に向かう為に電車に乗ったりするのだろうかと思ってたんだけど、先生はそちらには行かないで商店街へ入って行ったの。

「何か買いい物をしてから行くということなんでしよう。恐らく、相手へのプレゼントと

か

言われてみれば先生はほぼ手ぶらの軽装。

クリスマスとのデート相手にプレゼントを贈らない訳が無いし、ここで用意してから会いに行くんだろうな。

「なるほど、さすがフラッシュユさん。あ、ケーキ屋さんに入っただけだね」

「事前準備を怠らない先生の事です、恐らく予約していたケーキを受け取りに来た、といった所ではないでしょうか」

ちやんとクリスマスケーキを用意して行くつもりなんだ。

あれ？ ということはどこかのお店でディナーって可能性が薄くなる。外食するんならデザートでケーキまで食べたりしそっだし。

ケーキを自分で買っていくなんて、それって自宅で食べたりすることだよ。つまり……。

「ってことは、どこかにお出かけするんじゃないかってお、おとお家デートってこと!? ふ、二人つきりでゆっくり過ごして夜遅くなったらそのままお、お泊りなんかしちゃったりなんかして……はわわわわわ」

さすがスノウ先生！ ファル子にできない事を平然とやってのけるツ。

そこにシビれる！ あこがれるウ！

「少し落ち着いてくださいファルコンさん……あ、出て来ましたよ」

「そうよ、落ち着くのがファル子。落ち着いて冷静に先生を観察するの。」

「そして将来の為に大人の女性の振る舞いをお勉強しておくんだからっ。」

「……何かキャリアークートを引いてますね、先生」

「フラッシュさんが言う通り、先生はアウトドアで使うような大きなキャリアークートを引き連れてお店を出て来た。」

「よく見ればカートにはケーキの箱や、クリスマスではお馴染みの赤いブーツに詰められたお菓子とかがたくさん積まれている。」

「あつ、あれたまに見かける先生の私物のカートだね。お店に預けてたのかな。そんなにいっぱいケーキ買ったんだ」

「何故あんな量を。先生はそこまで健康家では無かったと記憶していますが……お相手がそうなのでしょうか」

「先生と彼氏さん二人で食べるにはちよつと、いや少し……いやかなり多い気もするけど。」

「あ、今度はお弁当屋さんに入ってしまったよ」

「そのまま先生を追いかけたら、今度は美味しそうな匂いを漂わせているお弁当屋さんへと、先生はカートを引き連れてままた入ってしまった。」

「ふむ、状況から推測するならばオードブルなどの料理を頼んでいたと考えるのが自然な気がします」

フラッシュさんがそう呟いた。

もしお家デートだとするなら、ケーキ以外のお料理も必要だよね確かに。

「さすがフラッシュさん、きつとそうかも。あ、出てきた」

こちらもあらかじめ注文していたんだろうな、先生はすぐに出て来た。

キャリーカートを2台、連結させた状態で。

「……キャリーカート、増えていますね。後ろに連結してますね」

「えええ、カートに満載のケーキに続いて料理まで……どれだけ食べる彼氏さんなの」

荷台からはフラッシュさんが予想していたオードブルの他にも、チキンの丸焼きやら

パーティーサイズのオムライスやらが見えている。

「あの量を平らげられる人物……オグリキャップさんやスペシャルウィークさんのよう

な人なんでしょうか」

まあ、確かにあの二人だったらあのくらいの量なら食べ切れてしまいそうだけど。い

くら何でも普通のヒトがそんなに食べられる訳が無いじゃない。

「いやいや、そんなウマ娘みたいなヒトがいるわけが、いる、わけ……」

「どうしました、ファルコンさん？」

……つまり、普通のヒトじゃない？

先生のお相手なんだから当然男性だと思った。男性のウマ娘なんていないから、当然ヒトだと思った。

けどあの料理たちは、どう考えても先生と普通のヒトが食べ切れる量じゃない。それこそさつき話したようなウマ娘でもない限り。

「もしかして、先生のお相手つてウマ娘なんじゃ……？」

「ふむ、ふむふむ、なるほど。仮説としては案外悪くありませんね。可能性としては無くはないかと」

フラツシユさんが顎に手を当てて考え込む仕事を取ります。

けど、私の心の中はそんな冷静に考え込めるような状態じゃないよっ……！

「じゃ、じゃっじゃじゃじゃ」

「ファルコンさん、ユキノビジンさんの方言みたいになってますよ」

「じゃじゃ、じゃあ、スノウ先生つて、ウマ娘同士でのお付き合いを……そんなことつて、そんなことつて……あわわわわ」

えっ、えっ。

そんな、先生、だって、先生はウマ娘で、相手がウマ娘だとするなら、どっちも、女の子なのに、女の子同士が、女の子同士でえ……っ！

「特段珍しいことでも無いのでは？ 同性間の恋愛など昨今では当たり前にあることかと」

「ひきゆつ！ ふあ、ファル子には、まだその話はちよーつと早過ぎる、かなあ……？」
何でフラッシュさんはそんな平然としていられるのっ!?

先生つ、大人の女性とは思ったけど私には少しデーブ過ぎるよっ！

「この程度の仮説で狼狽しないで欲しいのですが。ほらほらファルコンさん、先生がまた違うお店に入っていききましたよ」

「ひ、ひううう……」

あたしだけにちゆううして、ずきゅんどきゅんで、ばきゅんぶきゅんで、こんな○○○は初めてでえーっ!!

「そろそろ帰って来てくださいファルコンさん。どれだけ恋愛耐性無いんですか全く。さて、今先生が入っていったのは……玩具店？」

「ひゃあああ……え？ おもちゃ屋さん？」

お、落ち着いて私。せめて先生のお相手を確認するまでは頑張つて私。負けるな私。

ふーっ……ふーっ……よし、お、落ち着いた。と思う。

で、何だっけ？ おもちゃ屋さん？ え、何で？

「すぐにお店から出てきましたが、またカートが増えていますね。こちらにも大量に積ん

「ですすね」

「え、どういうこと？ あんな大量のおもちやを一体……う？」

先生は先程に引き続き、更に後ろに3台目のカートを連結してお店を出て来た。またしても荷物を満載にして。

スノウ先生を先頭に、ケーキ、料理、おもちやが満載のカートが連なって列を成している。

あれ、本当にどういうこと？

訳が分からなくなってしまうた私は答えを求めるようにフラッシュユさんを見る。

彼女は眉間に皺を寄せ、なんとも難しそうな表情だ。

「……これは、いやまさか……もしかしたらフアルコンさんには少々刺激が強過ぎる話かも知れませんね」

「え？」

な、何か分かったのフラッシュユさん？

真剣な表情のフラッシュユさんが私の正面に向き合う。

そして静かな声で彼女は話を続ける。

「いいですかフアルコンさん。私の推測ではありますが……先生にお相手がいるとした場合に考えられる可能性は3パターンです」

そう言いながら彼女は右手の人差し指を真っ直ぐ立てる。

「ひとつ、先生がお付き合っている相手は大量のおもちやを喜ぶような低年齢である可能性」

「?!」

ふえっ?! 禁断の年の差カップル!?

目を見開き、口も開け放ってしまっている私を無視して、続けて中指を立てるフラツシユさん。

「ふたつ、先生がお付き合っている相手に低年齢の連れ子がいる可能性。バツイチ子持ちか、最悪、家庭を持っている相手との浮気かも知れません」

「?!?!」

いっつ?! ドロドロの昼ドラ展開!?

全身ガクガクと震え出している私をそのままに、フラツシユさんは言葉を続ける。

そしてゆっくりと薬指を立てながら、

「みつつ、相手もしくは先生が子供を妊娠している可能性。『未来の私達の子供へのプレゼント』という形で」

「?!?!?!」

待って待って待ってフラツシユさん、私の処理が追い付かない! てことは先生のお

相手は大食いでウマ娘で小さい子でヒトツマで妊娠してるの!? 頭の中でぐるぐる回ってもう訳が分からないよおーっ!?

「……とまあ、いずれも確率としては0.003%にも満たないような非常に低いもので、まずあり得ない話なのですが」

私が両手で頭を抑えて思考停止に陥りかけた直前、フラッシュさんは声のトーンをいつもの調子に戻してそう続けた。

……あれ、今あり得ない話って言った?

「…………え。……び、びっくりしたあ…………え、もしかして冗談、だったりする?」

「ええ、ほんのジョークです。先生の人となりを見れば99.99%あり得ません」

ふふつと口元を抑えながら微笑むフラッシュさん。

わ、分かりづらい! フラッシュさんの冗談が分かりづらいよ! すごい真に迫った言い方するからほほほ信じちゃったよ!

でも冗談で良かったよホントに。

「そ、そうだよね。あの先生に限ってそんなことがある訳が…………ない、よね?」

「無いと断言できません。確かに先生の言動は突拍子も無かったりすることがままありますが、大きく常識を外れたり他人に迷惑を掛けたりするといった選択を取るような先生ではありません。それにこれらの仮説では大量の料理の必要性にも無理が生じます」

「だ、だよね……あ、先生が今度は写真屋さんに入ってた」

「私達が建物の影でわーきゃーしている間に、スノウ先生は次のお店へと入っていた。

うん、おもちゃ屋の時点で分からなくなってたけどいよいよもって完全に分からなくなりました。

これもしかして、スノウ先生はとづくに私達に気付いてて、私達が先生に弄ばれてる可能性があるんじゃないかな……？」

「3つのキャリーカートを引いている姿はまるで列車ですね。もしくは犬ぞりのような……ああ、何となく先生の目的が分かったような気がします」

合点がいったというように手をポンと叩くフラッシュユさん。

すっかり混乱してしまった私と違って、フラッシュユさんは今までのピースが全て繋がったらしい。

「え、フラッシュユさんは先生のお相手が誰かが分かったの？」

「はい。というかそもそももの大前提が異なっていると考えるのが自然です」

「へ？」

大前提が異なる？

え……つと。大前提なんだから、私達がどうして今こんな事をしてるかって事まで遡って……え、待って。もしかしてだけど……。

何かをひらめきそうになったその時、写真屋さんから誰かが出てくるのが見えた。

「あ、誰か出てきた……太ったサンタのおじさんが出て来たけど……あの人、カートを引いてるから多分スノウ先生、だよな？ 見た目がぜんぜん違うけど」

出てきたのは上下に加えて帽子まで赤と白で彩られた厚手の服に身を包んだ人だ。恰幅も良くて、立派な白い顎髭もたくわえている。

まさしく『これがサンタだ！』とでも言わんばかりの見た目だけど、帽子からはウマ耳が、後ろ腰からは尻尾が顔を出している。

どちらもさつきまで追いかけていた先生のそれと同じ色だった。

「ええ、間違い無く先生ご本人の仮装でしょう。そしてここまで来れば、もうファルコンさんにも答えがお分かりでしょう？」

うん、流石にね。

マヤノちゃんじゃなくても分かっちゃった。

「うん、そうだね。これは」

「恋人とデートなんかじゃない」

答え合わせをするように、私とフラッシュユさんで声を揃えて言葉を発した。

なんかもう、隠れて尾行する意味無さそうだね。

ウイーウイツシユアめりくりー！！！！

肉襦袢&サンタ衣裳&髭でどこからどうみても完璧にサンタのおじさんなメルテツ
ドスノウです。

さつてさつてわたくし、もう間もなくとある場所で行われるクリスマスパーティーに
向けて準備を行っている最中でございます。

まー、とある場所なんでもつたいぶつても仕方ないのでさらつと白状しますが、
施設長オヤジが運営している、わたくしにとつて実家とも言える児童養護施設のことござい
ます。

あの施設長オヤジの野郎がわたくしからの寄付金は絶対に受け取らないマンと化してし
まっているので、対抗手段の一つとして毎年この日にはパーティー料理とプレゼントを
現物支給してやっておるのですよ。

当日に食べなきやいけないような料理を大量に持つていけば、いくら施設長オヤジでも突つ
返して無駄にするようなことは出来ませんからねイツヒツヒ。

普段から子供達ジャリども全員に施設の手伝いさせてんだからこの日くらい羽目を外させてや
んなさいよ施設長オヤジ。

……いや、決してわたくしが住んでた当時に施設長オヤジが頑張つて作つてくれた、高野豆
腐をチキンコンソメで戻したものを生姜ニンニク醤油で味付けして作つた唐揚げもど

きとか、ホットケーキを何枚か重ねて生クリームを塗りたくっただけのケーキもどきとかが嫌いだったわけではないんですけども。むしろあれはあれで結構好きだったりしてたんですけども。

更には言えば本当に料理が無駄になっちゃいけないので、ちゃんと施設長には事前確認は取ってるんですけども。

毎度毎度、盛大にため息は吐かれますがなんやかんやで受け取ってくれております。感謝だけ、施設長オヤジい。

さて最後に酒屋に行つてシャン〇リーとかのジュース類もいっぱい買つておかねば。スノウトレイン4両目を連結せねば。

今日という日に備えて事前にキャリーカートを各店に置かせてもらつておいて良かった良かった。

写真屋なら貸衣装もあるだろうと思つて前もつて問い合わせた良かつた良かつた。

ふはははは、さあ待つてろ施設の子供達ジャリどもよ！ 悪わり子ごはいねがー！！
「スノウ先生っ！」

ん、誰ぞ？ というか姿形がほとんど原型の無い今のわたくしをわたくしだと認識出来るだなんて……おやまあ、ファル子ちゃんとフラッシーではないですか。ホントよく

わたくしだと分かりましたね。

「先生、お荷物いっぱいだけどこに行くの？」

「ファル子ちゃんがそう尋ねます。」

「そーいや『先約がある』とは言ったけど詳細は教えてなかったっけ。」

「昔育った施設へ、ね。料理とプレゼントの差し入れに」

「そっか……そっか。やっぱりスノウ先生は凄いなあ」

「え、何が？」

「ファル子ちゃんが何かを納得したようにぼそつと呟きました。」

「スノウ先生、良ければお手伝い致しますようか？」

「フラッシュが私の後ろの3両の貨車たちを見ながらそう提案してきます。」

「まあ量が量なので確かに少々重かったりはしますが、わたくしだって腐ってもウマ娘。」

「そんなに苦ではない程度の重さです。」

「ありがたいけど、ファルコンさん達もこれから配信するんじゃないかな？ そっちは大丈夫なの？」

「はい。」

「ファル子ちゃんのクリスマス配信、出来れば参加したかった。椅子に腰掛けて寛ぎつつワイングラスでシャ○メリーをくゆらせながら、聖夜に楽しく仲睦まじくキャツキャウフフするウマ娘ちゃん様達を眺めていたいウマ生だった。」

「大丈夫だよっ！ ずっとは手伝えないけど途中までなら」

「今、他のメンバーに少々遅れる旨の連絡を入れました。せめて荷運びだけでもお手伝いさせて下さい」

まあ、そこまで言ってくれるんなら無碍には出来ないな。

純粹に助かるし有り難いことこの上ない。

もうっ、二人ともやつさすいーなあー！

「ん、それは助かる。んじゃ折角だしこれを進呈」

というわけで、先程おもちや屋の店主から貰ったトナカイの角カチューシャが荷台に積んでありましたのでそれを二人に渡しました。

うはは楽しみにしておれ子供達よ。ジャリども 今年サンタと共に可憐なトナカイが付いてくるぞー！

あ、でもその前に角を付けた二人の姿が似合すぎて可愛すぎてわたくしが天に召されそう。

「じゃ、二人ともよろしくね。それと」

聖なる夜に尊みを分け与えてくれた心優しき二人のウマ娘に心ばかりの感謝を込めて。

「メリークリスマス」